

学修要項 1976

早稲田大学理工学部

教 旨

早稲田大学は学問の独立を全うし、学問の活用を効し、模範国民を
造就するを以て建学の本旨と為す。

早稲田大学は学問の独立を本旨と為すを以て、之か自由討究を主と
し、常に独創の研鑽に力め以て世界の学問に裨補せん事を期す。

早稲田大学は学問の活用を本旨と為すを以て、学理を学理として研
究すると共に、之を實際に應用するの道を講し以て時世の進運に資せ
んことを期す。

早稲田大学は模範国民の造就を本旨と為すを以て、個性を尊重し、
身家を發達し、国家社会を利濟し、併せて広く世界に活動す可き人格
を養成せん事を期す。

学 修 要 項

昭和 51 年度

昭和51年度 大 学 暦

区 分		期 日		
入 学 式	学 部	4 月 1 日 (木)		
	大 学 院	4 月 2 日 (金)		
前 期	授 業 開 始	学 部	4 月 2 日 (金)	十 六 週
		大 学 院	4 月 3 日 (土)	
	授 業 終 了	7 月 21 日 (水)		
	夏 季 休 業	自 7 月 22 日 (木)	至 9 月 14 日 (火)	
後 期	授 業 開 始	9 月 16 日 (木)		十 七 週
	創 立 記 念 日	10 月 21 日 (木)		
	冬 季 休 業	自 12 月 13 日 (月)	至(52年)1 月 8 日 (土)	
	授 業 終 了	(52年)2 月 9 日 (水)		
学部卒業式，専攻科修了式および大学院学位授与式		(52年)3 月 25 日 (金)		
授 業 期 間		33 週		
<p>【備 考】 1. 体育祭を10月20日(水)に行なう予定。</p>				

目 次

教 旨

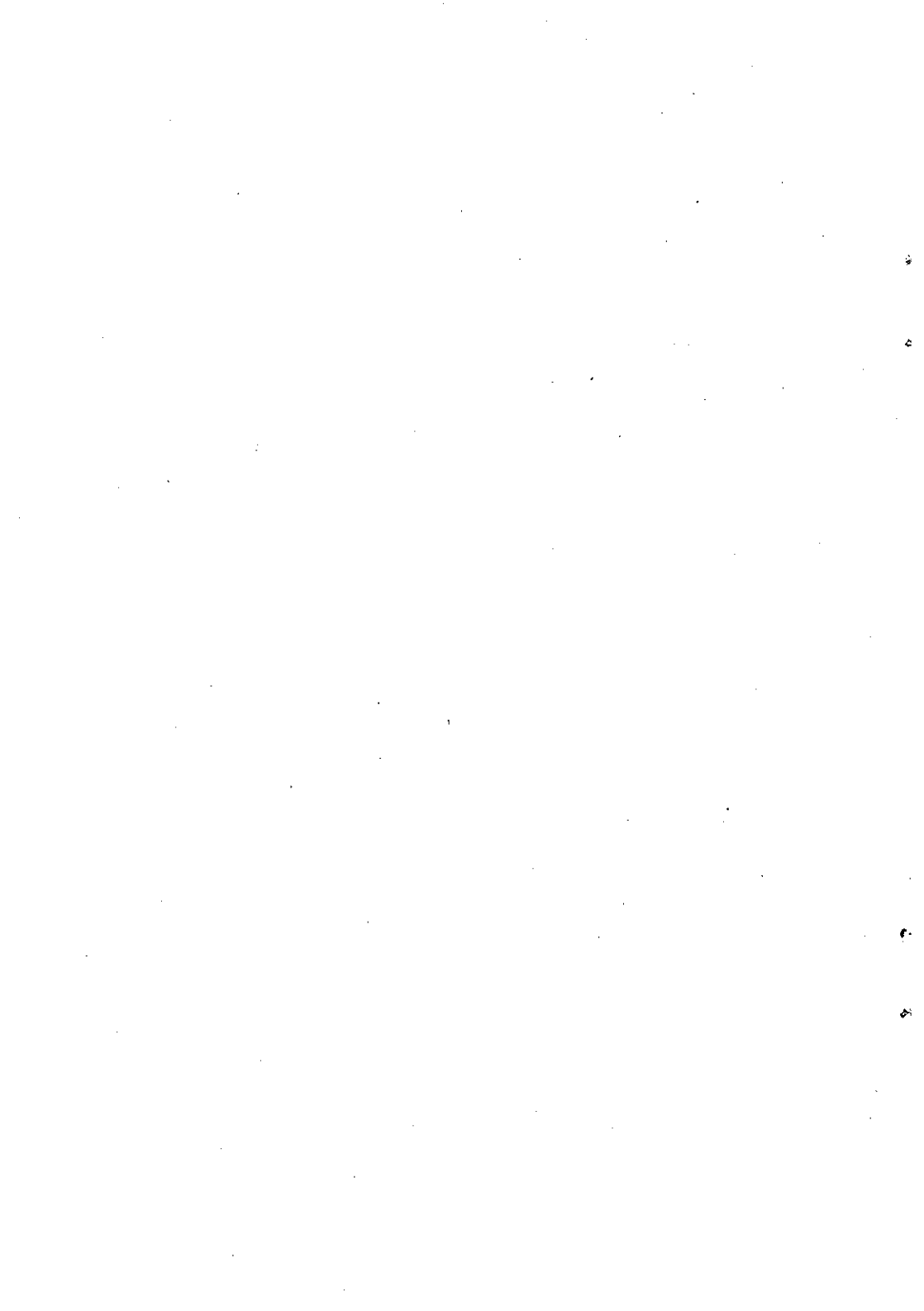
昭和51年度大学暦

I 理工学部沿革と概要	1
II 理工学部学修要項	7
1 教育課程	7
2 単 位 制	7
3 学 士 号	8
4 学生番号	9
5 学科目選択要領	9
(1) 学科目の選択・届出	9
(2) 一般教育科目	11
(3) 外国語科目	13
(4) 専門教育科目	14
(5) 随意科目	15
(6) 保健体育科目	15
6 学科目履修規程	15
(1) 履修順序規程	15
(2) 選択科目履修規程	16
(3) 他学部聴講について	16
7 学科目配当および各学科別学修案内	17
(1) 一般教育科目学科配当表	17
(2) 外国語科目学科配当表	19
(3) 保健体育科目学科配当表	21
(4) 基礎共通科目学科配当表	22
(5) 共通専門科目学科配当表	23
(6) 各学科別専門教育科目学科配当表および学修案内	24
機械工学科	24

電気工学科	31
資源工学科	37
建築学科	42
応用化学科	47
金属工学科	53
電子通信学科	56
工業経営学科	61
土木工学科	64
応用物理学科	68
数学科	71
物理学科	74
化学科	76
(7) 学科目配当の変更	78
8 クラスの編成	78
9 教員免許状の取得方法	78
10 成績の判定	90
11 9月卒業	90
12 復学・再入学・編入学者等の履修方法	90
13 聴講生・委託学生・外国学生	92
III 教員研究内容紹介, 各実験室案内	93
IV 学部学科目内容	117
学科目分類	118
一般教育科目・外国語・保健体育科目	119
数学・物理学・化学系科目	144
電子工学・電気工学・電子通信学系科目	189
機械工学・金属工学・資源工学・工業経営学系科目	211
建築学・土木工学系科目	256
V 学生生活	277
1 「学生の手帖」について	277
2 クラス担任制度	277

3	奨学金制度	277
4	各種証明書類の交付	277
5	学生相談センター分室	278
6	各種願・届	278
7	学費の納入と抹籍	281
8	掲 示	282
9	事務所の事務取扱時間等	282
10	理工学図書室・学部学生読書室	283
11	語学演習室	288
12	教室の使用について	293
13	学生の研究活動について	293
14	学生の課外活動について	293
15	安全管理	294
16	大学院への進学	296
17	早稲田大学学則（抜萃）	297
18	理工学図書室利用内規	300
19	理工学部学友会会則について	302

理工学部校舎配置図



I

理工学部の沿革と概要



I 理工学部の沿革と概要

早稲田大学が理工系の人材を養成する必要を痛感して、私学にとって不可能と思われていた理工科の新設を決定したのは明治41年2月で、日本の私立大学の理工科としては最も古い歴史をほこっている。明治45年第1回卒業生37人を世に送って以来、今日までに3万を越える人びとが学窓を巣立ち社会の多方面の分野で活躍している。

以下は理工学部60余年の点描である。

沿 革

- 明治15年10月 (1882) 東京専門学校創設，大隈英麿校長就任。
20年9月 (1887) 大隈英麿辞任，前島密校長就任。
23年7月 (1890) 前島密辞任，鳩山和夫校長就任。
35年10月 (1902) 早稲田大学開校。(大学部，専門部，高等予科，研究科)
40年4月 (1907) 大隈重信総長，高田早苗学長就任。
41年2月 (1908) 理工科を新設し，機械，採鉱，電気，土木，建築，応用化学の6学科を漸次設置するに決す。
4月 先ず機械，電気の2学科の予科開設。
9月 阪田貞一理工科々長就任。
42年2月 (1909) 前記の6学科設置の計画に冶金学科を加えて7学科とす。
4月 採鉱，建築両学科の予科開設。
9月 機械，電気両学科の本科授業開始。
43年9月 (1910) 採鉱，建築両学科の本科授業開始。
44年5月 (1911) 早稲田工手学校開設。
45年5月 (1912) 恩賜記念館竣工。
大正4年8月 (1915) 高田早苗辞任，天野為之学長就任。
5年4月 (1916) 応用化学科予科開設。
9月 阪田貞一理工科々長辞任，浅野応輔就任。
6年2月 (1917) 採鉱学科を採鉱冶金学科と改称。
8月 天野為之学長辞任。
9月 応用化学本科の授業開始。
7年10月 (1918) 平沼淑郎学長就任。
9年4月 (1920) 新大学令による大学となり，理工科を理工学部と改称。浅野科長が学部長となる。

- 大正10年10月 (1921) 平沼学長辞任、塩沢昌貞学長就任、浅野学部長辞任、山本忠興理
工学部長就任。
- 11年1月 (1922) 大隈重信薨去。
- 12年5月 (1923) 学長制廃止、高田早苗総長就任。
- 昭和2年10月 (1927) 大隈記念大講堂落成。
- 3年4月 (1928) 早稲田高等工学校設置。
10月 演劇博物館開館。
- 6年6月 (1931) 高田総長辞任、田中穂積総長就任。
- 13年4月 (1938) 応用金属学科開設、鋳物研究所開設。
- 14年4月 (1939) 専門部工科開設。
- 15年4月 (1940) 理工学部研究所設置。(昭和18年改組、理工学研究所となる)
- 16年4月 (1941) 電気工学科の第2分科が電気通信学科として独立。
- 17年10月 (1942) 応用化学科に石油分科新設。(昭和18.4.石油工学科として独立、
昭和21.4.燃料化学科と改称)
- 18年4月 (1943) 工業経営学科及び土木工学科設置。
10月 山本学部長辞任、内藤多伸理工学部長就任。
- 19年9月 (1944) 田中総長逝去、中野登美雄総長就任。
- 21年1月 (1946) 中野総長辞任、林葵末夫総長事務取扱に就任。
4月 早稲田工業学校開校。(工手学校は24.3.廃校)
6月 島田孝一総長就任。
10月 内藤学部長辞任、山本研一理工学部長就任。
- 23年4月 (1948) 早稲田工業学校を新制工業高等学校に改組。
- 24年4月 (1949) 新制早稲田大学開設(11学部)
第一理工学部には機械、電気、鉱山、建築、応用化学、金属、電
気通信、工業経営、土木、応用物理、数学の11学科、
第二理工学部には、機械、電気、建築、土木の4学科を設置。
山本研一第一理工学部長、堤秀夫第二理工学部長就任。
10月 堤秀夫第一理工学部長、帆足竹治第二理工学部長就任。
- 26年4月 (1951) 新制早稲田大学大学院6研究科設置。(修士課程)
工学研究科には機械工学、電気工学、建設工学、鉱山及金属工
学、応用化学の5専攻を設く。
10月 専門部及び高等工学校廃止。
伊原貞敏第一理工学部長就任、帆足第二理工学長再任。
- 28年4月 (1953) 大学院6研究科に博士課程を設置。
- 昭和29年4月 (1954) 工学研究科修士課程に応用物理学専攻を増設。
9月 島田総長辞任、大浜信泉総長就任。

- 青木楠男第一理工学部長，木村幸一郎第二理工学部長就任。
- 31年 2月 (1956) 生産研究所設置。(50年4月システム科学研究所と改称)
 9月 高木純一第一理工学部長，広田友義第二理工学部長就任。
- 32年10月 (1957) 早稲田大学創立75周年。
- 33年 4月 (1958) 理工学部創立50周年。
 9月 大浜信泉総長再任，高木純一第一理工学部長，広田友義第二理工学部長再任。
- 35年 9月 (1960) 難波正人第一理工学部長，鶴田明第二理工学部長就任。
- 36年 4月 (1961) 鉱山学科を資源工学科と名称変更，大学院研究科を数学専攻設置に伴ない理工学研究科と名称変更。
- 37年 9月 (1962) 大浜信泉総長再任，難波正人第一理工学部長，鶴田明第二理工学部長再任。
 10月 早稲田大学創立80周年。
- 38年 9月 (1963) 理工学部新校舎第一期工事完成。
- 39年 4月 (1964) 産業技術専修学校開設，木村幸一郎校長就任。
- 39年 9月 難波正人第一理工学部長(兼第二理工学部長)再任。
- 40年 3月 (1965) 理工学部新校舎第二期工事完成。
 4月 物理学科開設。
- 41年 5月 (1966) 大浜信泉総長辞任，阿部賢一総長代行就任。
 9月 阿部賢一総長就任，難波正人第一理工学部長(兼第二理工学部長)再任。
- 42年 3月 (1967) 理工学部新校舎第三期工事完成。(昭和42.4.理工学部全学科の移転を完了)
 4月 稲田重男産専校長就任。
 10月 村井資長理工学部長就任。
- 43年 4月 (1968) 第二理工学部廃止，第一理工学部を理工学部と名称変更，工業高等学校廃止。
 6月 阿部賢一総長辞任，時子山常三郎総長就任。
 9月 村井資長理工学部長再任。
- 44年 7月 (1969) 村井資長学部長辞任，吉阪隆正理工学部長就任。
- 45年 9月 (1970) 吉阪隆正理工学部長再任。
 10月 時子山常三郎総長退任，村井資長総長就任。
- 46年 4月 (1971) 電気通信学科を電子通信学科と名称変更。
- 47年 9月 (1972) 平嶋政治理工学部長就任。
- 48年 4月 (1973) 化学科開設。
- 49年 9月 (1974) 平嶋政治理工学部長再任

概 要

現在、理工学部には、機械工学科、電気工学科、資源工学科、建築学科、応用化学科、金属工学科、電子通信学科、工業経営学科、土木工学科、応用物理学科、数学科、物理学科および化学科の13学科が設置され、教職員約800、学生約7,000を擁している。

次に各学科の内容を簡単に説明する。

機械工学科はすべての工業にまたがる機械の基礎について学ぶ学科である。深い専門的知識と技術を持ち、解析能力にすぐれた人材を育成するため、学部と大学院との有機的結合を活用した新しい多数指導方式で教育される。高学年では8コースに分かれて専門分野を履修する。(産業数学、機械設計、流体工学、熱工学、材料加工、機械工作、溶接工学、制御工学) (入学定員440名)

電気工学科は広範囲にわたる電気工学の関連分野を3つのコースに分けて教育している。まずエネルギー工学コースでは、エネルギー変換論、制御理論の基礎に立って、電気エネルギーの発生、変換、制御に関する学問技術を学ぶ。システム工学コースでは、システム理論、情報理論の知識をもとに、電力システムをはじめとし、いろいろなシステムの設計、運用に関する問題を学ぶ。エレクトロニクスコースでは、物性物理、物性化学を基礎として、固体電子素子その他の新しい電気材料の電気物性とその応用に関する学問を学ぶ。学生はいずれかのコースに所属するが、これら3つの分野は互いに密接に関連しているから、いずれのコースの科目も自由に選択できるなど、各自の特質に合った学習計画がたえられるよう、配慮がなされている。(入学定員 各コース80名)

資源工学科は、金属鉱物・非金属鉱物・岩石・石炭・石油・天然ガス・熱源・水その他を大自然の中から有効に見つけ出し、経済的かつ安全に開発し、さらに各産業分野の原料として適切な形に仕上げてゆく技術について専攻する学科である。技術の内容が広汎なため、当学科に配置された専門科目は極めて多岐にわたっている。そこで高学年においては、1) 資源の探査および開発、2) 開発された素材の原料化の2系列のうち、いずれかに配当された学科目を、各自の志望により重点的に履修することになっている。(入学定員60名)

建築学科には大別して、建築工学と建築計画の2部門がある。建築工学の部門は、主として構造・材料・設備・施工など、科学を技術化してゆく過程で追求される諸学科目を含み、建築計画の部門には技術を社会化する過程で追求してゆく学科目、たとえば建築計画・都市計画・建築史・建築造形などがある。そしてそれらの学科目を総合的に形として具体化してゆく科目が設計製図である。(入学定員180名)

応用化学科は無機化学、有機化学、物理化学などの基礎科目より始まり、次に各工業化学ならびに化学工学とこれに関連する科目、さらに化学工場の操作、設計、企画、管理等

に関する科目等広い分野の教育を行なって化学工業の研究者と技術者とを養成することを目標とする。又その教育方針として特に実験と演習とを重視している。(入学定員 140 名)

金属工学科はすべての工業の基礎である「金属材料全般」について学ぶ学科である。従って学科の内容は、(1)製鉄製鋼などの金属製錬、(2)塑性加工、鑄造、表面処理などの金属の加工、および(3)強度材料、耐食耐熱材料、電子材料など合金材料の3分野にまたがり、各々基礎的には物理化学、金属物理、金属組織学、金属材料力学などの基礎理論について十分な知識をもつ技術者、研究者の養成を目標としている。なお学問の性質上、実験実習および卒業論文をとくに重視している。(入学定員 90 名)

電子通信学科はエレクトロニクスを主体とした学問技術を専攻する学科で、電子工学課程と情報工学課程に分れており、前者はエレクトロニクスの応用に関する分野(電子装置、自動制御、工業計測など)、後者は情報の伝達と処理に関する分野(電気通信、放送、音響、情報処理など)を主として専攻する。(入学定員 120 名)

工業経営学科においては、学生が理工学の知識を学び科学的な考察力を養うとともに、経済的観念、人間関係の理解を身につけ、経営管理技術の理論と実際を修得して、新しい生産技術者あるいは管理技術者としての基礎的な能力をもつと同時に将来産業社会における指導者としての器量を備えた人物になることを目標としている。(入学定員 150 名)

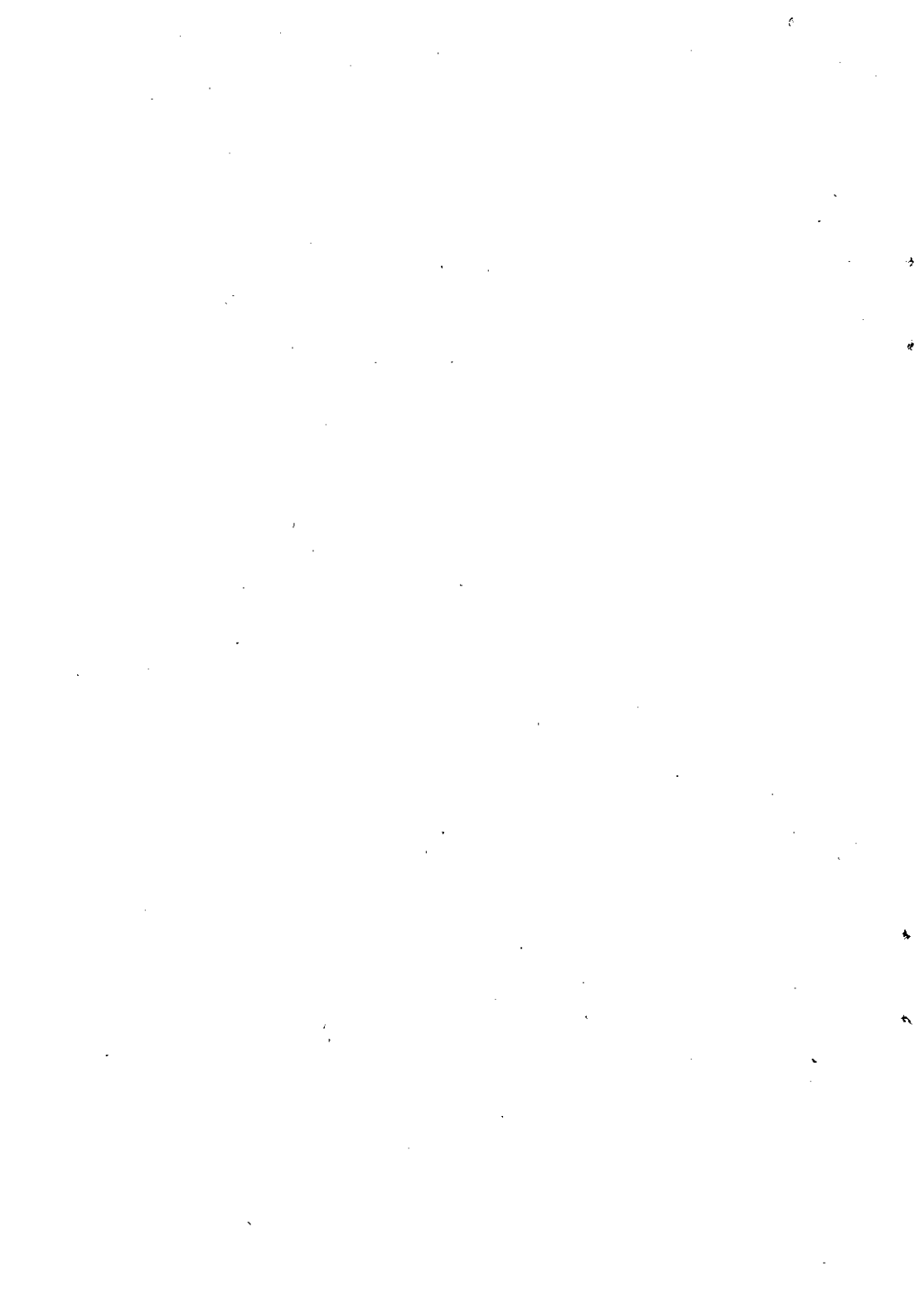
土木工学科は、国土の開発あるいは環境の整備など社会生活の向上をはかるために、必要な施設の計画と設計・施工に必要な学問を習得するところで、その具体的分野は都市計画から道路、鉄道、河川、港湾、橋梁、発電および上水道、下水道に至る広い分野にわたっている。土木工学科はこれら土木工学を修得し、建設事業に参画できる勇気と知性ならびに人間性に富む青年を要求する。(入学定員 100 名)

応用物理学科は、主要な現代物理学を基礎として、物性工学、光工学、計測工学など、その応用に関する学問を修得し、新しく分化発展をとげつつある現今の科学・技術の諸分野で、既成の専門分野の概念にとらわられることなく活躍する人材を養成することを目的とした学科である。(入学定員 90 名)

数学科は現代数学の各分野にわたって学習し、純粋数学・応用数学における研究者、技術者を養成する。とくに卒業生の多くがコンピューター関係の研究、応用方面に進む現状に因應するため、コンピューターサイエンス、数理統計、O.R.などの教科にも力をいれている。(入学定員 70 名)

物理学科は、科学技術発展の基礎になっている現代物理学、とくに原子核物理および物性物理の基礎についての学習を主とする。原子核物理では、理論および実験の両面で、今後の発展に備えた新鮮な内容をもたせ、物性物理では既存の学問ばかりでなく現在発展中の領域、たとえば生物物理なども含ませている。(入学定員 30 名)

化学科は物質の世界を原子分子の立場から探究し、工学技術の基礎である現代化学を学習することを目的とする。とくに最近著しい発展を見せている反応有機化学、構造化学および量子化学の学習を特色とする。(入学定員 30 名)



II

理工学部学修要項

→

→

→

→

Ⅱ 理工学部学修要項

1 教育課程

理工学部の授業科目は、一般教育科目・外国語科目・専門教育科目及び保健体育科目の4部門に大別され、さらにそれぞれ次のように分れている。

一般教育科目	人文科学系列・社会科学系列・自然科学系列（基礎教育科目を含む）
外国語科目	第一外国語・第二外国語・随意科目
専門教育科目	専門必修科目・専門選択科目・共通科目・随意科目・教職課程科目
保健体育科目	講義・実技

2 単 位 制

新制大学では、単位制が採用されている。単位制とは、授業科目のひとつひとつについて、一定の基準にしたがってこれを履修し、所定の試験に合格することによってその授業科目に与えられている単位を取得し、その単位が一定の教に達することによって学士号が与えられる（卒業）制度である。

各授業科目に対する単位数は、1単位の履修時間を教室内外を合せて45時間とし、次の基準によって計算される。（大学設置基準）

- イ 講義については、教室内外における1時間の講義に対して教室外における2時間の準備のための学修を必要とするものとし、毎週1時間15週の講義をもって1単位とする。ただし、教室外の準備のための学修が基準どおりできない事情があるときまたは教育効果を考慮して必要があるときは、1時間半または2時間の講義に対してそれぞれ教室外における1時間半または1時間の準備のための学修を必要とするものとし、毎週1時間半または2時間15週の講義をもって1単位とすることができる。
- ロ 演習については、教室内外における2時間の演習に対して教室外における1時間の準備のための学修を必要とするものとし、毎週2時間15週の演習をもって1単位とする。ただし、授業科目の種類によっては、教室外の準備のための学修が基準どおりできない事情があるときまたは教育効果を考慮して必要があるときは、1時間の演習に対して教室外における2時間の準備のための学修を必要とするものとし、毎週1時間15週の演習をもって1単位とすることができる。
- ハ 化学実験、機械実験、教育実習、農場実習、工作実習、機械製図および体育実技等の授業については、学修は、すべて実験室、実習場等で行なわれるものとし、毎週3時間15週の実験または実習をもって1単位とする。

、本学部の学年は、前期・後期の2期に分れ、それぞれ15週ずつ計30週からなっており、学科目の授業期間は、イ)前・後期を通じて行なわれるもの、ロ)前期のみ行なわれるもの、ハ)後期のみ行なわれるものに分れる。各学科目の授業期間・週時間・単位数は、別掲の学科目配当表のとおりである。

3 学 士 号

本学部では、4年以上在学し、所定の146単位を取得した者を卒業とし、学士の称号を与える。所定の単位の内容および学士号の種類は下表のとおりである。

学士号に必要な所定単位表

部 門 学 科	一 般 教 育 目 科			外 国 語 科 目			専 門 教 育 目 科			保 健 体 育 目 科			合 計	学 士 号
	人文 社会	自然	計	第一 外語	第二 外語	計	必修	選択	計	講義	実技	計		
機械工学科	24	24	48	6	8	14	64	16	80	2	2	4	146	工学士
電気工学科	24	24	48	6	8	14	40	40	80	2	2	4	146	工学士
資源工学科	24	24	48	6	8	14	38	42	80	2	2	4	146	工学士
建築学科	24	24	48	6	8	14	40	40	80	2	2	4	146	工学士
応用化学科	24	24	48	6	8	14	64	16	80	2	2	4	146	工学士
金属工学科	24	24	48	6	8	14	33	47	80	2	2	4	146	工学士
電子通信 学	24	24	48	6	8	14	56	24	80	2	2	4	146	工学士
工業経営 学	24	24	48	6	8	14	48	32	80	2	2	4	146	工学士
土木工学科	24	24	48	6	8	14	51	29	80	2	2	4	146	工学士
応用物理 学	24	24	48	6	8	14	32	48	80	2	2	4	146	工学士
数 学 科	24	24	48	6	8	14	10	70	80	2	2	4	146	理学士
物理学科	24	24	48	6	8	14	34	46	80	2	2	4	146	理学士
化 学 科	24	24	48	6	8	14	37	43	80	2	2	4	146	理学士

(備考) 随意科目及び教職課程科目は、学士号に必要な単位に算入されない。

4 学 生 番 号

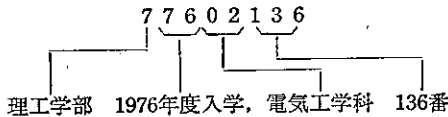
本学部では、学生個人について入学のとき学生番号を定めて整理をしている。この学生番号は、本学部にて在学する期間を通じて変わらない。

学生番号は、8桁から成っている。初めの1桁は学部名、次の2桁は入学年度、次の2桁は所属学科（下記学科番号参照）、最後の3桁は所属学科内における学生の番号を示す。

学科番号

01— 機械工学科	06— 金属工学科	11— 数 学 科
02— 電気工学科	07— 電子通信学科	12— 物 理 学 科
03— 資源工学科	08— 工業経営学科	13— 化 学 科
04— 建築学科	09— 土木工学科	
05— 応用化学科	10— 応用物理学科	

(例)



なお、再入学者および編入者等は下3桁の番号を右表のとおり区分する。

種 別	コード
再 入 学	600
転 入 科	700
学 士 編 入	800
委託・聴講生	900

5 学 科 目 選 択 要 領

(1) 学科目の選択・届出

選択・届出 学生は、毎学年の始めにその年度に履修しようとする学科目を選択し、指定された期間内に「学科目選択届」を提出・登録し、承認を受けなければならない。

選択届の手続は、入学式後の1週間であるが、学科によって、何年度生は、何日と指定して手続をさせる。

学科目の選択に当っては、学修要項・講義概要を熟読し、各自の好み、時間の余裕などを考えあわせ、クラス担任教員と相談し、その指導を受けて適切な選択を行なう必要がある。

なお、他学部の科目を聴講したい場合には、理工学部事務所に備えてある用紙に記入して、理工学部の承認印を受けて、聴講する学部の事務所へ提出すること。

無登録科目の聴講禁止 選択した科目以外の科目の受講は認めない。無登録科目を聴講・受験しても単位は与えられない。

登録後の変更禁止 登録した科目の変更・取消は、いっさい認めないから、登録は必ず

本人が行ない、慎重を期すること。

学科・年度別科目履修標準 次の表は、各学科別に各年度において履修すべき単位の標準を示したものである。この表中、専門選択科目については、その配当箇所にも*印を付し、合計欄にその最低所要単位数を示してあるから、第1・2～4年度の間に各学科の指導により、各年度に配当されている科目の中から適宜選択すればよい。

年度	部門	学 科	機	電	資	建	応	金	通	工	土	応	数	物	化	
			械	気	源	築	化	属	信	経	木	物	学	理	学	
第 一 年 度	一 般	人文・社会 (総合科目)	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
		自然(基礎)	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24
	外 国 語	第 一	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
		第 二	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
	専 門	必 修	8	6	6	4	10	4	3	3	4	4	8	4	8	
		選 択	*	*	*	*			*	*	*					
	体 育	講 義	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
		実 技	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	小 計			51	49	49	47	53	47	46	46	47	47	51	47	51
	第 二 年 度	一 般	人文・社会	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
自 然																
外 国 語		第 一	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
		第 二	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
専 門		必 修	24	24	26	18	31	22	24	28	27	14	0	14	15	
		選 択	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
体 育		実 技	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
小 計			39	39	41	33	46	37	39	43	42	29	15	29	30	
第 三 年 度	一 般	人文・社会	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	
	専 門	必 修	20	6	1	10	22	3	22	14	18	4	0	8	8	
		選 択	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	
	小 計			28	14	9	18	30	11	30	22	26	12	8	16	16

第四年度	専門	必修	12	4	5	8	1	4	7	3	2	10	2	8	6
		選択	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
	小計		12	4	5	8	1	4	7	3	2	10	2	8	6
合計	計		130	106	104	106	130	99	122	114	117	98	74	100	103
	*印計		16	40	42	40	16	47	24	32	29	48	70	46	43
	総計		146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146

(2) 一般教育科目

一般教育科目は新制大学の最も特徴的な教育目標となっているもので、専門教科の基礎となる多角的知識と理解力を身につけることを主眼とする。

これは人文科学・社会科学系列および自然科学系列（基礎教育科目を含む）の二つに分けられている。

人文科学・社会科学系列

イ 人文科学・社会科学系科目は、下の表に配置されている科目のなかから、自己の選択にもとづいて、第1, 2, 3年度においてそれぞれ8単位、合計24単位を履修しなければならない。

ロ ただし、第1年度においては、総合科目A～Eのうち、いずれか一つを選択しなければならない。（4単位）総合科目の主旨、内容については118頁参照）

ハ さらに選択した総合科目に付置されている『特論』のうち一つを選択しなければならない。例えば、総合科目Bを選択したときは同系列の付置小クラス「特論B－（1～8）」のいずれかを選択する。なお、「特論」のガイダンスおよび選択は、学年始に行なう。

ニ 総合科目の選択にあたっては系列を異にする「特論」の選択は許さない。

例えば、総合科目B「変革期としての現代」とC「日本経済の現状と課題」の特論C－（1～8）のうちの一科目との組み合わせを選ぶことは許さない。

系列 学年度	人 文 科 学 ・ 社 会 科 学
1	総合科目A「アジアの中の日本」 特 論A（1～8） 総合科目B「変革期としての現代」 特 論B（1～8） 総合科目C「日本経済の現状と課題」 特 論C（1～8）

	総合科目D「文学と政治」 特 論D(1~8) 総合科目E「日本文化論」 特 論E(1~8)		
2	哲 学 論 理 学 文 学 論 表 現 法(日本語)	心 理 学 歴 史 学 人 文 地 理 学 現 代 思 想 文 化 人 類 学	法 学 A 法 学 B 政 治 学 経 済 学 経 営 学 社 会 学 統 計 学
3	日 本 美 術 史 東 洋 美 術 史 西 洋 美 術 史 技 術 史 日 本 文 化 史 日 本 思 想 史 音 楽 論 現 代 宗 教 論 現 代 マ ス コ ミ 論	現 代 組 織 論 社 会 心 理 学 社 会 思 想 都 市 地 域 計 画 論 現 代 都 市 問 題 中 国 研 究 東 南 ア ジ ア 研 究 人 間 工 学 研 究 行 動 の 科 学	産 業 構 造 論 日 本 経 済 論 雇 用 ・ 労 働 問 題 国 際 経 済 論 マーケティング 産 業 心 理 学 産 業 社 会 学 商 法
	アメリカ文化論(原書)イギリス() ドイツ文学論() <small>(講読) 社会史研究()</small> ドイツ演劇研究() 英米哲学研究() 比較文化論() フランス文化論() イギリス文化論() ドイツ文化論() ロシア文化論()		

自然科学系列

本学部においては、理学・工学の基礎となる科目を設置している。これらの科目には科目番号(学科配当表参照)の前にCが付してある。(CはCoreとCommonの意である)これを基礎教育科目と共通科目(専門教育科目……後述)の二つに分けられる。

〔基礎教育科目〕 第1年度に配当されている数学A(4単位)、数学B(8単位)、物理学A(4単位)、物理実験(2単位)、化学A(4単位)、化学実験(2単位)の計6科目24単位が、これにあたり、全学生必修である。

随意科目

早稲田大学各学部に通用の科目として、電子計算に関する科目「コンピュータ」が設置

されている。この科目の受講手続については、追って本部から発表する。なお、受講者から年間10,000円の実験実習料を徴収する。

(3) 外国語科目

外国語科目は第一外国語・第二外国語および随意科目の三つに分けられる。

第一外国語 英語がこれにあたり、全学生必修である。第1年度にA・B4単位を、第2年度にC2単位、計6単位を履修しなければならない。

第二外国語 ドイツ語・フランス語・ロシア語・イタリア語・デンマーク語・ポルトガル語・スペイン語・中国語・朝鮮語の中から一カ国語を選び、第1年度にI-A・B4単位を、第2年度にII-A・B4単位計8単位を履修しなければならない。ただしこのうち、イタリア語・デンマーク語・ポルトガル語・朝鮮語については、語学教育研究所で開講している特殊語学講座、スペイン語・中国語については他学部の科目を聴講することになるが、当学部の授業時間割との関係で履修しにくい場合もおきうる。そのためこれらの外国語を履修したい者は、第一志望として上述の外国語の選択をすると同時に、第二志望として独・仏・露語のうちいづれか一カ国語を選択しておくこと。

第二外国語の選択は、入学の当初に届出をしなければならない。

第二外国語を2カ国語履修したい場合は、最初に届出た外国語を1・2年度で履修した後、第3・4年度において他の外国語を履修すること。この場合、後で履修する外国語は随意科目として取扱われる。

ドイツ語、フランス語およびロシア語は、初級、中級、上級の3級を設ける。早稲田大学高等学院卒業生および他の高等学校卒業生でドイツ語又はフランス語を6単位以上履修して来たものは第1年度において中級に入れ、他は初級に入れる。中級に入るべきものが初級に入る事は許されない。各高等学校からの調査書(報告書)によって入学者の組分けを行なうが、なお、誤りを避ける意味で入学生各人からも届出させる。第2年度においてはそれぞれ上級、中級に進ませるが、成績の如何によってはこの限りでない。

外国学生のために、当学部では日本語を第二外国語として単位を取得できるようにしてある。

EEコースについて

本EEコース(EEとは English through English の略)は今までに諸君が習得した、ともすれば読書力中心の英語力を、同時に聴取力、表現力でもあるようにするためのものである。

教授内容は他の英語コースとさほど変わらなく挨拶英語、旅行者英語を連想させる、いわゆる英語会話ではない。なぜならば、知的意見の理解(読書も含めて)、交換こそ語学学習の最終目標と考えるものだからである。英語で授業を受けることで、使用頻度の高いものから、既習の文型、表現が知らず識らずのうちに反覆練習されている、ということに

なる。将来英語で知的な内容を議論するための日本人に必要な「コツ」までも教えてみたい。このコースにおいては学生は時間数の半分を外国人教員から、他の半分を日本人教員から習うことになる。こうして身についた表現力は、将来留学生試験、本大学国際部での受講などに有利な知的、心理的条件を生み出すと同時に、読書、英文文献の通読などにおいても、正確さと速度を増すであろう。

なお、本コースははまだ実験コースのためクラス数が少ないので、応募者が定員を超える場合にはなんらかの公平な方法で受講者を定めたい。

随意科目 第一外国語・第二外国語は、第1・2年度で履修するが、このほかに第3年度には、随意科目として、英会話・独会話・仏会話・露会話・上級英語・上級独語・上級仏語・上級露語が配置され、希望者は履修出来るようになっている。なお、これらの科目については、第3年度の配当ではあるが、第1～4年度の間随時履修してもよいことになっている。

(4) 専門教育科目

専門教育科目は、共通科目・必修科目および選択科目に分れる。

共通科目 一般教育科目（自然科学系…P12）の項で述べたように、本学部においては、理学・工学の基礎となる科目として、基礎教育科目のほかに、共通科目（専門教育科目）を設置している。

この共通科目は、第1年度に配当されている図学、第2年度以上に配当されている数学、物理学、化学および各学科に共通な工学の諸学科目（別掲学科配当表参照…P22）で、各学科によって必修・選択または配当年度が異なっている。（各学科別学科目配当表参照）

共通科目の数学、物理学、化学は、基礎教育科目の各学科目を基本として進められ、その延長関係にある。

専門必修科目 この科目は、いわば各学科の卒業生として特色づけるものであるから、学生は、所属学科配当の科目を、配当年度に従って履修（4年間に10～64単位……学科によって異なる）しなければならない。なお、科目名の次に番号（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）等を付してある科目、および特に履修順序の指定されている科目は、最初に履修すべき科目の単位を取得していなければ、次の科目を履修することは出来ない。

専門選択科目 この科目は、学生各人の志望によって選択履修出来るものであって、1～4年度の間、各年度に配当されている学科目の中から合計16～70単位（学科によって異なる……学士号の項P8参照）以上を選択履修しなければならない。なお、勉学に余裕のある者はこの科目を出来るだけ多く履修することが望ましい。また、所属学科以外の配当科目を選択することも出来る。

(5) 随意科目

一般教育科目・外国語科目及び専門教育科目には、必修科目、選択科目のほかに随意科目が配当されている場合がある。この随意科目は、合格点を取れば単位が与えられ、成績も記入されるが、卒業資格の146単位には算入されない。これらの科目は単位の取扱い方の違いだけで、履修に際しての届出は他の科目と同じである。

(6) 保健体育科目

1. 大学において学士の称号を得るためには、各自所属の学部における学科目の単位のほかに保健体育4単位（講義2単位、実技2単位）を必要とする。
2. 保健体育は次のように履修しなければならない。

第1年度において	講義 2単位（前期、後期に各1単位）	実技 1単位
第2年度において	実技 1単位	

3. 講義は体育理論講座と保健衛生講座があり

体育理論講座（理論と略称）……	このグループから 前期か後期に1科目	どちらを先に履修しても よい
保健衛生講座（保健と略称）……	このグループから 前期か後期に1科目	

上記のように履修すること。

4. 実技は

年間授業	年間実技年間を通じて実施するもの	大きく2つに分 けられる
集中形態 授業	シーズン実技……夏季または冬季に実施するもの 夏期実技……夏季休業中に学内で実施するもの 併合実技……年間授業と学外での合宿授業を併合し たもの	

以上のうちから1年間に1科目、次年度に1科目を選び、履修しなければならない。

集中形態授業の群からは、1科目（1単位）しか履修できないから

集中形態授業の群から1科目（1単位）取得した者は、残りの1単位は年間
実技から履修しなければならない。

なお、年間授業、集中授業といえども同じ科目を重ねて選択履修することはできない。
詳細については体育局から保健体育履修要項が交付されるから、それを参照されたい。

6 学科目履修規程

(1) 履修順序規程

イ 外国語科目 第二外国語

第二外国語ⅠのA・B共不合格の場合は、第二外国語Ⅱの履修を許可しない。

□ 基礎教育科目（数学、物理学、化学）

指定された科目を履修するためには、基礎教育科目の中のその学科が定めた科目に合格していなければならない。

ハ 専門必修科目

科目名の次に番号（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ等）を付してあるもの、および特に履修順序の指定されている科目は必ず順序に従って履修し、合格しなければならない。

ニ 卒業論文、卒業計画

卒業論文または卒業計画および之に準ずるものに着手するためには、原則として次の条件を満足していなければならない。

- (a) 一般教育科目は、人文・社会系列で16単位以上、自然科学系列(基礎教育)で24単位以上合格していること。
- (b) 専門科目に関しては、各学科の指導による。
- (c) 外国語科目の英語A・B・Cおよび第二外国語（Ⅰ）・（Ⅱ）に合格していること。
- (d) 保健体育科目に合格していること。

(2) 選択科目履修規程

選択履修の決定した選択科目は、必修科目扱いとすることがある。

(注) 必修科目は合格しなければ卒業することができない。

(3) 他学部聴講について

卒業に必要な専門選択科目のうち、在学中に他学部聴講できる科目の単位は、建築、応物、物理についてはそれぞれ12単位、その他の学科はそれぞれ4単位とする。

7 学科目配当および各学科別学修案内

この表中の番号は117頁の説明を参照のこと、なお学科目内容説明はこの番号順に配列してある。

(1) 一般教育科目学科配当表

		番号	学科目名	毎週授業時数								単位数	
				第1年度		第2年度		第3年度		第4年度			
				前	後	前	後	前	後	前	後		
人	第	人文科学・社会科学共通	001	総合科目A 「アジアの中の日本」	2	2							4
			002	特論A(1～8)	2	2							4
			003	総合科目B 「変革期としての現代」	2	2							4
			004	特論B(1～8)	2	2							4
			005	総合科目C 「日本経済の現状と課題」	2	2							4
			006	特論C(1～8)	2	2							4
			007	総合科目D 「文学と政治」	2	2							4
			008	特論D(1～8)	2	2							4
			009	総合科目E 「日本文化論」	2	2							4
			010	特論E(1～8)	2	2							4
文	科	人文科学系列	011	哲学			2	2					4
			012	論理学			2	2					4
			013	文法			2	2					4
			014	表現法(日本語)			2	2					4
		人文・社会科学共通	015	心理学			2	2					4
			016	歴史学			2	2					4
			017	人文地理学			2	2					4
			018	現代思想			2	2					4
			019	文化人類学			2	2					4
		学	年	社	020	法学A			2	2			

学 社 会 科 学	度	会 科 学 系 列	021	法	学	B	2	2				4		
			022	政	治	学	2	2				4		
			023	経	济	学	2	2				4		
			024	経	营	学	2	2				4		
			025	社	会	学	2	2				4		
			026	統	計	学	2	2				4		
	第 三 年	人 文 科 学 系 列	031	日	本	美	術	史		2	2		4	
			032	東	洋	美	術	史		2	2		4	
			033	西	洋	美	術	史		2	2		4	
			034	技	術	史	史			2	2		4	
			035	日	本	文	化	史		2	2		4	
			036	日	本	思	想	史		2	2		4	
			037	音	楽	論	論			2	2		4	
			038	現	代	宗	教	論		2	2		4	
			058	ア	メ	リ	カ	文	化	論	2	2		4
			059	英	米	哲	学	研	究	2	2		4	
			060	イ	ギ	リ	ス	文	化	論	2	2		4
			061	イ	ギ	リ	ス	社	会	史	2	2		4
			062	比	較	文	化	論	2	2			4	
			063	ド	イ	ツ	文	化	論	2	2		4	
	064	ド	イ	ツ	文	学	論	2	2		4			
	065	ド	イ	ツ	演	劇	研	究	2	2		4		
	066	フ	ラ	ン	ス	文	化	論	2	2		4		
	067	ロ	シ	ア	文	化	論	2	2		4			
	年 度	人 文 ・ 社 会 共 通	039	現	代	マ	ス	コ	ミ	論		2	2	4
			040	現	代	組	織	論		2	2		4	
041			社	会	心	理	学		2	2		4		
042			社	会	思	想			2	2		4		
043			都	市	地	域	計	画	論		2	2	4	
044			現	代	都	市	問	題	研	究	2	2	4	
045			中	国	研	究			2	2		4		
046			東	南	ア	ジ	ア	研	究	2	2	4		
047			人	間	工	学	研	究	2	2	4			
048			行	動	の	科	学		2	2		4		
学 科			社 会 科	049	産	業	構	造	論		2	2	4	
	050	日		本	経	济	論		2	2	4			
	051	雇		用	・	労	働	問	題	2	2	4		

系	学系列	052	国際経済論					2	2			4	
		053	マーケティング					2	2			4	
		054	産業心理学					2	2			4	
		055	産業社会学					2	2			4	
		056	商学					2	2			4	
	列	外国学生のみ	068A	総合科目F	2	2							4
			068B	日本の歴史	2	2							4
			068C	日本の文学			2	2					4
		068D	日本の美術			2	2					4	
		社会科学	069A	日本の社会構造	2	2							4
			069B	日本経済構造論	2	2							4
	069C		日本経済の発展			2	2					4	
自然科学系列	基礎教育科目	C102A	数学A	2	2							4	
		C102B	数学B	4	4							8	
		C170A	物理学	2	2							4	
		C172	物理実験	3	3							2	
		C231A	化学A	2	2							4	
		C232	化学実験	3	3							2	
随意科目			コンピュータ	2	2							4	

(2) 外国語科目学科配当表

区別	番号	学科目名	毎週授業時数								単位数
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度		
			前	後	前	後	前	後	前	後	
第1外国語(必修)	080 A	英語 A	2	2							2
	080 B	英語 B	2	2							2
	081 C	英語 C			2	2					2
	082 A	独語 (I) A	2	2							2
	082 B	独語 (I) B	2	2							2
	083 A	独語 (II) A			2	2					2
	083 B	独語 (II) B			2	2					2

第二外国語 (一カ国語選択必修)

084 A	仏語 (I) A	2	2					2
084 B	仏語 (I) B	2	2					2
085 A	仏語 (II) A			2	2			2
085 B	仏語 (II) B			2	2			2
086 A	露語 (I) A	2	2					2
086 B	露語 (I) B	2	2					2
087 A	露語 (II) A			2	2			2
087 B	露語 (II) B			2	2			2
070 A	スペイン語 (I) A	2	2					2
070 B	スペイン語 (I) B	2	2					2
071 A	スペイン語 (II) A			2	2			2
071 B	スペイン語 (II) B			2	2			2
※072 A	イタリア語 (I) A	2	2					2
※072 B	イタリア語 (I) B	2	2					2
※073 A	イタリア語 (II) A			2	2			2
※073 B	イタリア語 (II) B			2	2			2
※074 A	デンマーク語 (I) A	2	2					2
※074 B	デンマーク語 (I) B	2	2					2
※075 A	デンマーク語 (II) A			2	2			2
※075 B	デンマーク語 (II) B			2	2			2
※076 A	ポルトガル語 (I) A	2	2					2
※076 B	ポルトガル語 (I) B	2	2					2
※077 A	ポルトガル語 (II) A			2	2			2
※077 B	ポルトガル語 (II) B			2	2			2
078 A	中国語 (I) A	2	2					2
078 B	中国語 (I) B	2	2					2
079 A	中国語 (II) A			2	2			2
079 B	中国語 (II) B			2	2			2
088 A	朝鮮語 (I) A	2	2					4
088 B	朝鮮語 (II) B	2	2					4
089 A	朝鮮語 (I) A			2	2			4
089 B	朝鮮語 (II) B			2	2			4
091	日本語 (外国学生のみ)	4	4	4	4			8

※印 語学教育研究所で開講する科目 (語研発行の語学講座案内を参照のこと)

随 意 科 目	092 A	英 会	話				2	2			2
	092 B	米 会	話				2	2			2
	092 C	独 会	話			{	2	0			1
	092 D	仏 会	話			{	2	0			1
	092 E	露 会	話			{	2	0			1
	093 A	上 級 英	語				2	2			2
	093 B	上 級 独	語				2	2			2
	093 C	上 級 仏	語				2	2			2
	093 D	上 級 露	語				2	2			2
	093 E	工 業 英	語				2	2			2

(3) 保健体育科目学科配当表

区 別	番 号	学 科 目 名	毎 週 授 業 時 数								単 位 数	
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度			
			前	後	前	後	前	後	前	後		
必 修	095	体 育 講 義	1	1								2
	096	体 育 実 技	2	2	2	2						2

(4) 基礎共通科目学科配当表

番 号	学 科 目 名	第 1 年 度		第 2 年 度		第 3 年 度		単 位 数
		前	後	前	後	前	後	
C 101	図 学	2	2					4
C 102 A	※数 学A	2	2					4
C 102 B	※数 学B	4	4					8
C 102 C	数 学C			2	2			4
C 102 D	数 学D			2	2			4
C 102 E	数 学E			2	2			4
C 170 A	※物 理 学A	2	2					4
C 170 B	物 理 学B			2	2			4
C 170 C	物 理 学C			2	2			4
C 170 D	物 理 学D			2	2			4
C 170 E	物 理 学E			2	2			4
C 170 F	物 理 学F			2	0			2
C 170 G	物 理 学G			2	0			2
C 170 H	物 理 学H					2	2	4
C 172	※物 理 実 験	3	3					2
C 231 A	※化 学A	2	2					4
C 231 B	化 学B			2	2			4
C 231 C	化 学C			2	2			4
C 231 D	化 学D					2	2	4
C 232	※化 学 実 験	3	3					2

(注) ※印科目は基礎教育科目を示し、第1年度全学生必修（一般教育科目学科配当表参照）

その他の科目の必修・選択は各学科によって異なる。（各学科の学科配当表参照）

(5) 共通専門科目学科配当表

番 号	学 科 目 名	前	後	単 位 数	番 号	学 科 目 名	前	後	単 位 数
C 132	数 理 統 計 学	2	2	4	C 444B	基 礎 製 図B	4	0	1
C 138	オペレーション ズ・リサーチ	2	2	4	C 173	工 学 基 礎 実 験	4	4	2
C 142	電 子 計 算 法	2	0	2	C 419	工 業 熱 力 学	2	0	2
C 204	原 子 力 工 学	2	0	2	C 243	化 学 分 析 実 験	4	4	2
C 205	計 測 工 学	2	0	2	C 358	電 気 実 験	4	4	2
C 302A	電 気 工 学 A	2	2	4	C 381	電 子 実 験	4	4	2
C 302B	電 気 工 学 B	2	2	4	C 238	物 理 化 学 実 験	4	4	2
C 302C	電 気 工 学 C	0	2	2	C 469	機 械 実 験・実 習	4	4	2
C 403B	自 動 制 御 B	2	0	2	C 792	測 量 実 習	4	4	2
C 437B	材 料 力 学 B	2	0	2	C 641	発 明 お よ び 特 許	2	0	2
C 449A	機 械 工 学 A	2	2	4	C 196	生 物 学	2	2	4
C 449B	機 械 工 学 B	2	2	4	C 647	水 質 汚 濁 概 論	2	0	2
C 603	管 理 工 学	2	0	2	C 645	産 業 公 害	2	0	2
C 609	熱 管 理	2	0	2					
C 701	建 築 工 学	2	0	2					
C 444A	基 礎 製 図 A	4	4	2					

(注) 必修・選択・配当学年など、履修方法は各学科によって異なる。(各学科の学科配当表参照)

(6) 各学科別専門教育科目学科配当表および学修案内

機 械 工 学 科

今日は科学の一大飛躍期にある。科学の新分野は続々と発見され、その新分野もかつてない速度で生産の場に登場してくる。機械工学も、科学の応用分野である工学の主要な担い手として、旧套を脱し広汎・多岐な面で発展しつつある。

さて工学・技術を科学に対比させてみると、単にその応用というばかりでなく、きわめて顕著な特質を有することがわかる。すなわち、思索の結果としてもたらされた頭脳裏の想像を、実在の形象に移すことが工学・技術の使命である。新鮮であり柔軟である現象を、確実であり経済価値のある形象、すなわち機械を創作し、あるいは運営することが、機械工学の目的である。したがって科学的認識にもとづく体験と実践によって、上記の形象能力を昂揚するのが、機械工学科の主たる教育精神である。

一般教育は社会・人文・自然・語学など、人間形成に欠くべからざる教養を与え、人間の豊かさを示すであろう。これを基礎において機械工学科4カ年の課程では、社会生活の要諦を会得し、市民としての自覚をもち、創造力を養ない、形象能力を培うため、つぎの諸段階を設けている。推理・解析の文法としての数学およびその規範としての諸力学は工学基礎科目として、一般教育に接続する。これらはエンジニアリング・サイエンスとして、将来いかなる専門分野に進むものにも基礎となるから、必修科目となっている。さらに工学の汎さ・深さを示す道標として、各種の応用専攻学を選択科目として設けてある。機械工学科にはつぎの8コースがおかれている。

- | | | |
|-------------|-------------|-------------|
| (1) 産業数学コース | (2) 機械設計コース | (3) 流体工学コース |
| (4) 熱工学コース | (5) 材料加工コース | (6) 機械工作コース |
| (7) 溶接工学コース | (8) 制御工学コース | |

したがって学生は各自の個性と志望とによって、選択科目を選び、課程を修了しなければならない。ただし機械工学はもとより、工学全般にわたる視野を常に確保すべく努め、調和と柔軟性に富む学力を育成することが必要である。そのための指針を述べれば、つぎのとおりである。

各種の応用専攻学は、各個、孤立したのではなく、それら専攻学の間には密接な関連性があるから、学習に際しては常に視野を広くもち、当面する科目のみではなく、他のいかなる専攻学に関連性があるかに思いを致し、すでに履修した必修科目の内容を、ここに反芻すべきである。たとえば機械の創作設計を志すものは、理論追求により、その機械の性能の最善を期することが第一であるが、なお、その生産性をも勘察する余裕をもたねばならない。逆に生産分野を志すものは、製作加工の基礎となる理論と方法に関する専攻学をゆるがせにすることはできない。同時にまた、管理の数学・工程・組織・生産管理・生産価格・労務管理などを理解することが必要である。

かくして諸君は、自信のある一般教養と専門知識・技術の体得者となることができる。

各コースの内容

① 産業数学コース

機械工学の一般的な基礎知識の上に应用数学、力学、統計の準備を十分に行ない、工学・工業の実務に数理を生かせる人材を養成する。

工学がせまい視野に限られず、産業全般の動きとつながって来つつある今日の情勢に処すべく、管理数学への関心を持ちつつ応用統計教育をも強力に推進する。

関連する選択科目

Ⅲ年度：数学1，数学2，数学3，オペレーションズ・リサーチ，解析力学，制御理論，制御工学，計測工学，電子計算法

Ⅳ年度：線形計画法，ゲームの理論，非線形力学

② 機械設計コース

解析力にすぐれた設計技術者・研究者の育成に目標を置く。すなわち主として材料力学・機械力学の適当な運用，および調和ある機械構成に対する総合能力を有する人材の養成を主眼とする。

重視する選択科目

Ⅱ年度：工学系の解析設計演習（Ⅰ）

Ⅲ年度：弾性学，塑性学，材料の強度，振動学，工学系の解析設計演習（Ⅱ）

Ⅳ年度：構造の力学，数値制御工学

③ 流体工学コース

機械工学をはじめ多くの関連領域における諸問題に，流体工学・流体機械上の立場から対処する。現状においては，高速流動，非定常流動，流体が原因となる振動・騒音の問題，流体機械を含む管路システムのダイナミックスおよび以上を基礎とした流体機械，装置への応用や設計を扱う。

関連する選択科目

Ⅱ年度：工学系の解析設計演習（Ⅰ）

Ⅲ，Ⅳ年度：流体工学，流体機械，工学系の解析設計演習（Ⅱ），制御理論，制御工学，振動学

大学院流体工学専攻進学希望者は，これらの関連科目を履修しておくことが望ましい。

④ 熱工学コース

卒業論文・計画において下記の諸問題を取りあつかう。

(i) 熱機関（内燃機関，蒸気・ガスタービン），自動車工学，冷凍機などの熱機械，ボイラなどの熱装置などに関する実験研究

(ii) 伝熱，燃焼，振動など上記機械設備に関連ある基礎的現象の研究

(iii) 熱機関、熱機械、自動車などの設計研究

コースとして選択するべき科目は特に指定しないが、熱工学に関連のある選択科目は

Ⅲ年度：熱力学、移動速度論、機関の力学、装置工学、計測工学、内燃機関

Ⅳ年度：内燃機関設計、ボイラ、蒸気・ガスタービン、自動車工学

大学院の熱工学専修におかれた科目の Pre-requirement に指定される科目

熱力学、移動速度論および機関の力学

⑤ 材料加工コース

生産技術の中、塑性工学に関連する分野の解析・実験研究を行なう。

関連する選択科目

Ⅱ年度：工学系の解析設計演習（Ⅰ）、生産工学

Ⅲ年度：工学系の解析設計演習（Ⅱ）、材料の強度、材料の構造、塑性学

Ⅳ年度：塑性工学、表面工学、溶接工学、工作機械

⑥ 機械工作コース

機械工作およびそれにとまらう治工具、精密測定などの生産工学に関する基礎的知識を与えると同時に、現場の生産技術に関する教育を行ない、さらに進んで切削理論、歯車理論、工作機械などについての専門知識を授けて、生産作業に従事しようとする技術者を養成する。

修得することの望ましい関連選択科目

Ⅲ年度：生産工学

Ⅳ年度：溶接工学、工作機械、治工具、数値制御工学

大学院の機械工作専修に進もうとする者はつぎの科目を修得しておくのがよい。

弾性学、塑性学、振動学

⑦ 溶接工学コース

機械工学における生産技術関係の一環として、とくに機械の設計の合理化のために溶接基礎現象（アーク現象、固相接合現象、溶接冶金）、溶接構造設計（溶接応力、継手強度、構造物強度）、および溶接技術（溶接施工法、新溶接法）に関する分野を担当する。当分野は、総合技術であるから一般的基礎知識が必要で、その上に生産工学方面および実験工学関係の科目を選択することが望ましい。

関連する選択科目

Ⅱ年度：計測工学、材料の構造、材料の強度、塑性工学、移動速度論

大学院の溶接工学専修へ進むものはつぎの科目を修得することを望む。

計測工学、材料の強度、材料の構造、移動速度論、弾性学、塑性学、溶接工学、機械構造溶接設計

⑧ 制御工学コース

制御工学はエネルギー変換の工学に対して情報の工学である。また従来細分化されてきた諸工学の総合工学でもある。

関連する選択科目

Ⅱ年度：工学系の解析設計演習（Ⅰ）*

Ⅲ年度：工学系の解析設計演習（Ⅱ）*

計測工学*

制御理論*

制御工学*

振動学

Ⅳ年度：自動化システム

電子実験

数値制御工学

移動速度論

流体機械

装置工学

非線形力学

大学院の計測制御工学専修へ進学希望のものは*印科目を修得していることが望ましい。

機械工学科 専門教育科目学科配当表

(Ⅰ) 専門必修科目

番号	学科目名	担当者	毎週授業時数								単位	
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度			
			前	後	前	後	前	後	前	後		
438A	機械工学の基礎A	奥村, 森田	2	2								4
438B	機械工学の基礎B	阿部, 中沢 松浦	2	2								4
437	材料の力学	林, 林(洋) 奥村, 山根 吉永, 山本 加賀			2	2						4
420	工業熱学	齊藤, 小泉 永田			2	2						4
411A	流体の力学	田島, 川瀬 大田			2	2						4
476	機械材料	中根, 井口 稲田, 中沢			2	2						4
C 444A	基礎製図A	川喜田, 本 荘, 岡沢			4	4						2
150	工業数学	高橋, 田島 木下			2	2						4
C 173	工学基礎実験	山根, 大田 吉永, 林(洋) 広田, 久村			4	4						2
C 302A	電気工学A	高橋, 町山					2	2				4
445	機械設計	和田, 本荘					2	2				4
447	設計実習	和田, 三好 岡沢					4	4				2

467	機械工学実験・習 実	松浦, 他				4	4			2	
468	コース別実験・習 実	全教員, 他						4	0	1	
C 358	電気実験	山崎, 他						4	0	1	
470	ゼミナール	全教員, 他				4	4			8	
471	卒業論文・計画	全教員, 他								10	
専門必修科目合計			4	4	18	18	16	16	8	0	64

(II) 専門選択科目

番号	学科目名	担当者	毎週授業時数								単 位 数	
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度			
			前	後	前	後	前	後	前	後		
C 101	図学		2	2								4
C 170B	物理学B	小林			2	2						4
C 170C	物理学C						2	2				4
401	工学系の解析設計 演習(I)	高橋, 他			3	3						2
402	工学系の解析設計 演習(II)	高橋, 他					3	3				2
475	生産工学	広瀬, 松浦			2	2						4
C 205	計測工学	土屋					2	0				2
437A	弾性学	林					2	0				2
437B	塑性学	林					0	2				2
474	材料の強度	山根					2	0				2
473	材料の構造	井口					2	0				2
441	振動学	高橋					0	2				2
440	機関の力学	関					2	0				2
422	移動速度論	永田					0	2				2
411B	流体工学	田島, 大田					2	2				4
412	流体機械	町山, 川瀬					2	2				4
421	熱力学	小泉					2	0				2
146	数学 1	下郷					2	2				4
147	数学 2						2	2				4
148	数学 3	岡本					2	2				4
176B	解析力学	辻岡					2	2				4
439	構造の力学	谷							2	0		2
425A	内燃機関	斉藤					0	2				2

	425B	内 燃 機 関 設 計	関						2	0	2				
	266	装 置 工 学	市川				0	2			2				
	425C	熱 機 関	小泉						2	0	2				
	431	自 動 車 工 学	関						0	2	2				
C	381	電 子 実 験	山根						4	0	1				
	505	塑 性 工 学	田中, 本村						2	0	2				
	511	表 面 工 学	広瀬						2	0	2				
	460	溶 接 工 学	中根						2	0	2				
	463	機 械 構 造 溶 接 設 計	内野						2	0	2				
	455A	工 作 機 械	中沢						2	0	2				
	458	精 密 機 械	森田						2	0	2				
	459	治 工 具	古川						2	0	2				
	409	数 値 制 御 工 学	本多						2	0	2				
	404	制 御 理 論	河合				2	0			2				
	404A	制 御 工 学	川瀬, 河合				0	2			2				
	404B	自 動 化 シ ス テ ム	依田						2	0	2				
C	138	オペレーション ズ・リサーチ	坂本						2	2	4				
	144	線 形 計 画 法	小田切						2	0	2				
	145	ゲ ー ム の 理 論	坂本						0	2	2				
	177	非 線 形 力 学	中沢						2	0	2				
C	142	電 子 計 算 法	木下				2	0			2				
C	603	管 理 工 学	古川						2	0	2				
C	645	産 業 公 害	塩沢						2	0	2				
専門選択科目合計							2	2	7	7	33	29	38	6	113

(Ⅲ) 専門随意科目

番 号	学 科 目 名	担 当 者	毎 週 授 業 時 数								単 位 数
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度		
			前	後	前	後	前	後	前	後	
C 204	原 子 力 工 学	藤本							2	0	2
C 701	建 築 工 学	安東							2	0	2
432	航 空 工 学	中口							0	2	2
433	船 舶 工 学	武藤							2	0	2
C 641	発 明 お よ び 特 許	高木							2	0	2
751A	空 気 調 和 設 備 A	井上							2	0	2
751B	空 気 調 和 設 備 B	井上							0	2	2
専門随意科目合計									10	4	14
専門科目総計 (Ⅰ)+(Ⅱ)+(Ⅲ)			6	6	25	25	49	45	56	10	191

[注] 場合によって若干の変更を行なうことがある。

電 気 工 学 科

年を追って飛躍的に発展、拡大を続ける電気工学の諸領域で、絶えず新しい可能性を追求していく者にとって、個別の知識の単なる集積はとうていその原動力とはなりえない。

諸君は4年間の生活を受身の学習に終始することなく、電気工学の背景となっている諸科学との鮮明な関連において、各自の中にそれぞれの電気工学の体系を築きあげる努力をしなければならぬ。どのような電気工学の体系を創造するかは諸君の自由であり、おのずと各人の特質に最も合致したものとなるであろう。一方で余りに広範囲な自由はかえって諸君にとまどいを与えかねない。そこで電気工学科では、電気工学の分野に三つの領域を設定し、諸君の学習の便を図っている。各コースにおける学習の主目標は次のとおりである。

- (a) エネルギー工学コース：電気エネルギーの発生、変換および制御に関する諸問題を、電気磁気学、エネルギー変換論、制御工学、システム工学などを軸として学習する。
- (b) システム工学コース：電力システム、計算機システム、計測システムなどの種々のシステムの設計、運用に関する諸問題を、システム理論、情報理論、計算機理論などを軸として学習する。
- (c) エレクトロニクスコース：電気材料、電子材料および電子物性応用素子の開発、利用に関する諸問題を電気磁気学、物性物理学、物性化学、量子力学などを軸として学習する。

諸君が履修する学科目は便宜上、一般教育科目、専門教育科目などに分類されているが、専門科目の学習にとって、基礎教育科目を含む一般教育科目を単に専門科目を理解する基礎として位置づけることは妥当ではない。専門の学問は、これら一般教育で扱われた諸科学と、各自の中で有機的に総合されて始めて真に創造的なものとなりうるのである。

電気工学科に配当されている専門教育科目のうちから諸君は次の区分にしたがって80単位以上を履習しなくてはならない。

- (1) コース共通専門必修科目 (18単位)。どの領域を学ぶにも必須な数学、物理学および実験などの学科目で、全員が履習しなくてはならない。第4年度では全員が卒業研究をおこなうが、第3年度末までに、別に定める要件をみたしていないと卒業研究に着手することができない。
- (2) コース別専門必修科目 (22単位)。コース毎に、その領域の学習にとって最も重要な学科目が配当されている。各自の所属コースのものを履習しなくてはならない。

以上の合計40単位は定められた通りに全員が履習しなくてはならない。残りの40単位、あるいはそれ以上は、各人の特性、志望によって自由に選択でき、これによって各自の学習の特徴づけがなされるが、履習する学科目の選定にあたっては、次の基準にしたがわねばならない。

- (3) 所属コースのコース別専門選択科目の中から6単位以上を選択する。
 (4) (i)コース共通専門選択科目, (ii)所属コース以外のコースのコース別専門必修および選択科目, (iii)他学科の学科目のうちから(3)との合計が40単位以上になるように選択する。

なお他学科の学科目を選択する際には、クラス担任と相談することが望ましい。

選択科目の構成がとりもなおさず各自の電気工学の体系を特色づける。学科目の選択に際してはクラス担任とよく相談してほしい。別に配布する標準学習プランを参考にすることもよからう。大学院進学を志す者は、それなりの学習の仕方もあるから、早い時期からクラス担任に相談することが望ましい。

また在学中の一定の単位の取得と卒業後の一定年限の実務経験によって電気主任技術者第一種の資格を取得することもできる。

電気工学科 専門教育科目学科配当表

(I) 専門必修科目 (コース共通)

番 号	学 科 目 名	担 当 者	毎 週 授 業 時 数								単 位 数		
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度				
			前	後	前	後	前	後	前	後			
C 102C	数 学C	松本, 鈴木 康原, 大頭 山崎, 田村 白井, 田中 河村, 小林 全教員			2	2							4
C 102D	数 学D				2	2							4
C 170E	物 理 学E				2	2							4
C 173	工 学 基 礎 実 験				4	4							2
358	電 気 工 学 実 験						4	4					2
360	卒 業 研 究											2	
コース共通専門必修科目計					10	10	4	4					18

(II) 専門必修科目 (コース別)

(a) エネルギー工学コース

番号	学科目名	担当者	毎週授業時数								単位数	
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度			
			前	後	前	後	前	後	前	後		
306A	電気磁気学A	矢作	2	2								4
307A	同演習	鈴木	2	2								2
311A	回路理論A	石塚			2	2						4
311I	同演習	松本			2	2						2
337	エネルギー変換工学	小貫			2	2						4
333	制御工学	小林					2	2				4
359A	エネルギー工学実験	石塚, 小貫, 示村, 松本								4	4	2
コース別必修科目計			4	4	6	6	2	2	4	4		22

(b) システム工学コース

番号	学科目名	担当者	毎週授業時数								単位数	
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度			
			前	後	前	後	前	後	前	後		
306B	電気磁気学B	高木	2	2								4
307B	同演習	白井	2	2								2
311B	回路理論B	成田			2	2						4
311II	同演習	成田			2	2						2
334	システム解析	示村			2	2						4
361A	情報工学	白井					2	2				4
359B	システム工学実験	高木, 門倉, 成田, 秋月								4	4	2
コース別必修科目計			4	4	6	6	2	2	4	4		22

(c) エレクトロニクスコース

番号	学科目名	担当者	毎週授業時数								単位数	
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度			
			前	後	前	後	前	後	前	後		
306C	電気磁気学C	木俣, 尾崎	2	2								4
307C	同演習	木俣, 尾崎	2	2								2
311C	回路理論C	秋月			2	2						4
311III	同演習	秋月			2	2						2
310A	電気物性A	鈴木			2	0						2
310B	電気物性B	木俣			0	2						2
325A	電子材料A	鈴木					0	2				2
319	電気材料	三田					0	2				2
359C	物性工学実験	三田, 木俣 矢作, 尾崎							4	4		2
コース別必修科目計			4	4	6	6	0	4	4	4		22
専門必修科目合計(各コース共)												40

(III) 専門選択科目(コース別)

(a) エネルギー工学コース

番号	学科目名	担当者	毎週授業時数								単位数	
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度			
			前	後	前	後	前	後	前	後		
338	電気機器	山崎, 小貫					2	2				4
348	高電圧工学	山崎					2	2				4
319	電気材料	三田					0	2				2
352A	電気応用A	木脇					0	2				2
352B	電気応用B	石塚							2	0		2
343	システム工学	成田							2	2		4
347	原子力発電	野村, 深井							2	2		4
303	電力工学	未定							2	2		4

(b) システム工学コース

番号	学科目名	担当者	毎週授業時数								単位数		
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度				
			前	後	前	後	前	後	前	後			
342	電力系統工学	田村					2	2					4
329A	計算機論	門倉					2	2					4
333	制御工学	小林					2	2					4
361B	情報理論	秋月								2	0		2
343	システム工学	成田								2	2		4

(c) エレクトロニクスコース

番号	学科目名	担当者	毎週授業時数								単位数		
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度				
			前	後	前	後	前	後	前	後			
184	量子力学	鈴木					2	2					4
349	高電界物性	矢作					2	0					2
323	固体電子素子	木俣					2	0					2
346	放射線工学	矢作					0	2					2
325B	電子材料B	三田								2	0		2
350	電子回路設計									2	0		2
コース別専門選択科目計							16	18		16	8		58

(Ⅳ) 専門選択科目(コース共通)

番号	学科目名	担当者	毎週授業時数								単位数		
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度				
			前	後	前	後	前	後	前	後			
C 101	図学		2	2									4

308	電気磁気学特論	白井	2	2					4		
356	製 図	栗田	4	4					2		
C 437B	材 料 力 学B	水野	2	0					2		
C 449A	機 械 工 学A	片山	2	2					4		
C 231B	化 学B		2	2					4		
C 142	電 子 計 算 法		2	0					2		
313	回 路 理 論 特 論	松本			2	2			4		
326B	電 子 工 学	尾崎			2	0			2		
330A	電 子 回 路 A	小林			2	0			2		
330B	電 子 回 路 B	門倉			0	2			2		
331A	電 気 計 測	示村			2	2			4		
141B	数 値 計 算 法	田村			2	2			4		
C 469	製 作 実 習				4	0			1		
C 469	機 械 実 験				0	4			1		
335	数 理 計 画 法						2	2	4		
336	オートメーション工学	中村					2	0	2		
329C	計 算 機 応 用						0	2	2		
329	システムプログラム論	宇都宮					2	2	4		
301	電 気 技 術 史	高木					2	2	4		
354	電 動 力 応 用	石黒, 難波江					2	2	4		
352C	電 気 応 用 C	山口, 倉田					2	0	2		
344	電 気 法 規						2	0	2		
345	電 力 施 設 管 理	井上					0	2	2		
C 381	電 子 実 験						4	0	1		
コース共通専門選択科目 計			2	2	14	10	14	12	18	12	69

(V) 専門随意科目

番 号	学 科 目 名	担 当 者	毎 週 授 業 時 数								単 位 数
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度		
			前	後	前	後	前	後	前	後	
357	工場見学・実習	全教員					◎	◎			2
専門随意科目合計											2
専門科目総計 (I)+(II)+(III)+(IV)+(V)			14	14	42	38	38	42	46	32	169

資 源 工 学 科

近代産業が不可欠とする原材料およびエネルギー資源を主として自然界に求め、われわれの手に確保するとともに、これが有効に活用されるよう需用に適した形にまで仕上げる一連の技術を総合的に探究するのが資源工学の目的である。

文化の歴史をふりかえれば、今日は科学技術の一大飛躍期にあることは誰しも疑う余地がない。資源工学の分野においても、従来その技術を行使する場所は炭鉱・鉱山等の狭い地域に限られていたが、今日ではより広い範囲に拡大され、さらに海洋や極地にも目が注がれる時代となっている。したがって技術の内容においても、従来の鉱山技術の枠を越え、より広いフィールドに適応し得る技術および変貌を続ける社会からの多岐にわたる要請に対応し得る技術の確立と、その素養を備えた人材の育成が必要となった。このような理由で、当学科は昭和36年4月、従来の鉱山学科という名称を現在の形に改め、研究体制と教育内容の改編を行ない、今日に至っている。

学習上の注意

§ 1 冒頭に述べたように、資源工学は一連の関連技術を総合的に探究する工学分野であるから、当学科に配置してある専門科目は極めて多岐にわたっている。これらを全般にわたって履修し、その学理を十分に把握することは現行の年限内ではまず不可能である。そこで高学年における履修系列は、やや色彩の異なる2系列に分けて教育が行なわれている。したがって当科の学生諸君は、各自の個性、学問上の興味、他日身を置かんとする専門職域等に照して、いずれかの系列に配当された学科目を重点的に選択履修した上で学部課程を修了することになる。

§ 2 第1の系列を1類、第2の系列を2類と通称する。

1類……資源を探查し、さらに開発する技術を専攻する。

2類……開発された素材を他の産業分野の原料（材料を含む）として適した状態にするため、その品質を調整する技術を専攻する。

ただし、1類志願者であっても2類の学科目の一部を履修したり、2類志願者が同様他の学科目の一部を履修することは認められている（従来の職域によってはそうすることが好ましい場合もあるのでクラス担任と相談して決めることがよい）。

§ 3 資源工学科の専門科目は科目配当表に示してあるように、(I) 専門必修科目、(II) 1類、2類共通専門選択科目、(III A) 1類専門選択科目、(III B) 2類専門選択科目に類別されている。

(I) は全員が必修すべき学科目であることはいうまでもない。それ以外については§ 1・§ 2の説明にしたがって(II)と(III A)、(II)と(III B)の中から適宜に選択履修すればよい。

上記(I)・(II)・(III A)・(III B)に配当されている諸学科目は、専門の基礎となる

科学・専門の基礎となる工学・専門分野を構成する工学などから成立している。なおこれらのほかに、現場実習を選択することと卒業論文が必修すべき学習事項として課せられている。

§ 4 現場実習は休暇を利用して相当の期間資源開発現場（その他の場所も事情によって認められる）に滞在し、技術と事業の実態を実地に研修することを目的として行なわれる。実習報告書を提出し、報告会の席上で発表の結果単位の取得ができる。さらに詳細については別に内規が設けられている。

§ 5 卒業論文は教員の指導を受けつつ、特定のテーマについて研究を行なうもので、それまでに修得した知識に磨きをかけるとともに、研究の手法を会得するために行なわれる。その成果は論文として提出し、報告会の席上で発表の結果単位が与えられる。

§ 6 科目配当表に掲げた以外、主として低学年時に教員の引率により工場その他の見学会や地質巡検旅行などが実施される。このような機会には、学生諸君は積極的に参加することが望ましい。さらに学生諸君が休暇などを利用して、現場や関連工場を自発的に見学して歩くことは学習上大きなプラスとなるばかりでなく、視野の広い技術者となるために極めて有意義である。

当学科に入学した諸君が、一般教育系諸科目の学習により教養ある社会人としての資格を培い、専門科目の十分な把握により専門技術者としての自信と創造力を備えた人材として学窓を巣立つことを当学科の教員スタッフは心から念願している。クラス担任は勿論のこと、個々の学科目の担任者も、諸君が学問への意欲を抱いて相談を求めていることを待っている。

資源工学科 専門教育科目学科配当表

(I) 専門必修科目

番号	学 科 目 名	担 当 者	毎 週 授 業 時 数								単 位 数	
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度			
			前	後	前	後	前	後	前	後		
529	資源工学概論	全教員	2	2								2
581	地 学	山崎(純)	2	2								4
C 102E	数 学E				2	2						4
C 170B	物 理 学B				2	2						4
C 231B	化 学B				2	2						4
C 243	化学分析実験	原田 中村(忠)			4	4						2
C 173	工学基礎実験	萩原, 房村			4	4						2
C 437B	材料力学B	桜井 原田, 中村 (忠), 大塚, 今井(直)			2	0						2
532	鉱物学・岩石学				2	2						4

541	開発工学概論	房村, 萩原			2	0					2
559	原料工学概論	山崎(豊) 伏見			0	2					2
C 469	機械実験・実習						4	0			1
580	卒業論文								◎	◎	5
専門必修科目合計			4	4	20	18	4	0			38

(II) 1類2類共通専門選択科目

番号	学科目名	担当者	毎週授業時数								単 位 数	
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度			
			前	後	前	後	前	後	前	後		
C 101	図学		2	2								4
C 444A	基礎整図A				4	4						2
C 302B	電気工学B	清水			2	2						4
C 142	電子計算法	武田			2	0						2
533	鉱物学・岩石学実験	大塚 大崎(純)			4	4						2
C 231	化学C	多田					2	2				4
C 419	工業熱力学	永田					2	0				2
411	流体力学	橋本					2	0				2
582A	石油・ガス工学A	山崎(豊)					2	0				2
551I	環境・安全工学(A)	房村					0	2				2
552II	環境・安全工学(B)	橋本					0	2				2
604I	生産管理(I)	森田					0	2				2
550	資源工学実験	山崎(豊), 原田, 萩原 伏見					4	4				2
552	環境安全実験	房村, 森田					0	4				1
C 358	電気実験								0	4		1
604I	生産管理(II)	森田							2	0		2
C 609	熱管理	塩沢							2	0		2
C 449A	機械工学A	片山							2	2		4
C 132	数理統計学	崎野							2	2		4
531	資源経済地理	森田							0	2		2
546	資源工学演習	全教員							3	3		2
C 645	産業公害	塩沢							2	0		2
C 647	水質汚濁概論	伏見, 遠藤							2	0		2
579	現場実習	全教員							◎	◎		2

(Ⅱ) 計	2	2	12	10	12	16	15	13	56
-------	---	---	----	----	----	----	----	----	----

(ⅢA) 1類専門選択科目

番 号	学 科 目 名	担 当 者	毎 週 授 業 時 数								単 位 数		
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度				
			前	後	前	後	前	後	前	後			
534Ⅰ	岩 石 力 学	橋本			0	2							2
534Ⅱ	地 庄・支 保 概 論	橋本					2	0					2
791B	測 量 学	遠藤			2	2							4
C 792	測 量 実 習	森田					4	4					2
574	火 薬 学						2	2					4
535	地 質 学・鉱 床 学	今井, 山崎 (純), 大杉					2	0					2
537	地 質 学・ 鉱 床 学 実 験	今井, 山崎 (純), 石島					4	0					1
542A	開 発 計 画	中井, 萩原					2	2					4
542B	爆 破 工 学	山口					0	2					2
544	開 発 機 械	橋本					2	0					2
547	探 査 工 学	遠藤, 下村					2	2					4
549	運 搬 工 学	山崎(豊)					0	2					2
582C	石 油・ガ ス 工 学 C	山崎(豊)									2	0	2
530	海 洋 資 源	奈須									0	2	2
543	試 錐 工 学	河内									2	0	2
538	地 質 図 学	大杉									2	0	2
(ⅢA) 計					2	4	20	14	6	2			39

(ⅢB) 2類専門選択科目

番 号	学 科 目 名	担 当 者	毎 週 授 業 時 数								単 位 数		
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度				
			前	後	前	後	前	後	前	後			
C 170D	物 理 学D						2	2					4
C 238	物 理 化 学 実 験	大塚, 山崎 (豊), 黒沢					0	4					1
582B	石 油 ・ ガ ス 工 学 B	森田(義)					0	2					2
563	事 前 処 理 工 学	伏見					2	2					4
564	物 理 選 鉱 学	原田					2	0					2
565	浮 遊 選 鉱 学	原田					0	2					2
496	生 産 冶 金 学	中井					0	2					2
C 267	化 学 工 学 I	酒井								0	2		2
560	燃 料 工 学	山崎(豊)								2	0		2
568A	鉱 物 工 学 A	大塚								2	0		2
568B	鉱 物 工 学 B	今井(秀)								2	0		2
(ⅢB) 計							6	14		6	2		25
専門科目総計 (Ⅰ)+(Ⅱ)+(ⅢA) +(ⅢB)			6	6	34	32	42	44		29	15		158

建 築 学 科

建築学科が理工学部開設されたのは明治42年（1909）4月のことである。本学科では建築に関係する工学全般を包含して、建築の計画に関する方法の把握を大きな目標として学科目が設置されているところが特長といえる。

建築の計画系学科目には建築史、建築計画、都市計画などがあり、工学系学科目には主として建築構造、設備、材料、施工などに関連するものが含まれる。

学部においては、建築の学科目全般について学習することが望ましく、その上にたつて専門の分野を定めることが必要であろう。さらに、大学院修士課程に専門的科目が接続されている。

本学科に設置されている学科目を各系列に分類すればつぎのようになる。

系 列	専 門 必 修 科 目		専 門 選 択 科 目		随 意 科 目	
	年		年		年	
一 般	建築学概論	1 前	デ ッ サ ン	1前(後)	建築特論	1前(後)
	建築図法	1	測量および実習	2		
	基本製図	2 前	建築コンピューター計算法	3 後		
	設計製図(I)	2 後				
	設計製図(II)	3				
	構造・設備製図	3				
	建築法規	4 前				
	卒業論文	4 前後				
卒業計画	4 後					
建築史			西洋建築史	2		
			日本建築史	3		
建築計画 都市計画	都市計画(A)	3 前	建築計画(A)	2 前		
	建築設計原論	4 前	建築計画(B)	2 後		
			建築計画(C)	3 前		
			建築計画(D)	3 後		
			都市計画(B)	3 後		
			設計実習(I)	2		
			設計実習(II)	3		
			設計実習(III)	4 前		
			建築造形論	4 前		
			設計製図(III)	4 前		

建築構造	建築構造法(I)	2 前	建築構造法(II)	2 後		
	建築構造力学(I)	2	〃 (III)	3 前		
	建築構造設計概論	3 前	建築構造力学(II)	3		
			建築構造設計(A)	3		
			〃 (B)	3		
			〃 (C)	3 後		
			建築振動学	3 後		
			地震工学	4 前		
			建築構造計画	4 前		
構造実習(A)	2					
〃 (B)	3					
建築設備	環境計画	2 前	設備基礎理論	3 前		
	設備計画	2 後	給排水電気設備	4 前		
			空気調和設備(A)	3 前		
			〃 (B)	3 後		
			広域環境論	3 後		
			設備実習	4 前		
			環境計測	4 前		
			環境工学実習	4 後		
建築材料・施工	建築材料学(I)	2 前	建築材料学(II)	2 後		
	建築施工法(I)	3 前	〃 (III)	3 前		
			建築施工法(II)	3 後		
			〃 (III)	4 前		
			建築材料実験	3 前		
			施工実習	3 後		
			建築生産システム論	3 後		
			建築生産システム演習	4 前		

建築学科 専門教育科目学科配当表

(I) 専門必修科目

番号	学科目名	担当者	毎週授業時数								単位数	
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度			
			前	後	前	後	前	後	前	後		
702	建築学概論	安東	2	0								2
703	建築図法	戸沼	2	4								2
708	建築設計原論	池原						2	0			2
736 I	建築構造法 I	神山			2	0						2
738 I	建築材料学 I	田村			2	0						2
740 I	建築施工法 I	寺井					2	0				2
724 I	建築構造力学(I)	田中			2	2						4
729	建築構造設計概論	谷					2	0				2
748	環境計画	木村			2	0						2
749	設備計画	井上			0	2						2
761A	都市計画(A)	武, 吉阪					2	0				2
762	建築法規	安田							2	0		2
768	卒業論文	全員							5	0		2
769	卒業計画	全員							0	5		2
763 I	基本製図	池原, 神山 田中, 木村 尾島, 風間			10	0						3
763 II	設計製図(I)	吉阪, 安東 渡辺, 穂積 池原			0	10						3
763 III	設計製図(II)	武, 安東 穂積, 池原 川添, 佐々 木, 宮入					4	4				2
763 IV	構造, 設備製図	南, 竹内, 谷, 田 中, 舟橋, 井上 木村, 尾島					4	4				2
専門必修科目合計			4	4	18	14	14	8	9	5		40

(II) 専門選択科目

番号	学科目名	担当者	毎週授業時数								単 位 数		
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度				
			前	後	前	後	前	後	前	後			
C 102E	数 学E	藤沢			2	2							4
793	測量および実習	遠藤			2	4							3
704	デ ッ サ ン	橋本, 三上 根岸	4	4									1
733	建築コンピュータ計算法	桜井					0	2					1
705	西洋建築史	渡辺			2	2							4
706	日本建築史	西					2	2					4
709	建築造形論	穂積							2	0			2
710A	建築計画(A)	武, 吉阪			2	0							2
710B	建築計画(B)	安東			0	2							2
710C	建築計画(C)	武					0	2					2
710D	建築計画(D)	穂積					2	0					2
761B	都市計画(B)	戸沼					0	2					2
763V	設計製図(III)	武, 吉阪, 木村 (伝), 市川(博), 内井, 松下							8	0			2
716I	設計実習(I)	池原, 竹内(成) 東, 森			4	4							2
716II	設計実習(II)	穂積, 畑, 大 矢, 平田					4	4					2
716III	設計実習(III)	安東, 菊竹 大高, 後藤							4	0			1
724II	建築構造力学(II)	竹内					2	2					4
730A	建築構造設計(A)	松井, 藤本					2	2					4
730B	建築構造設計(B)	谷					2	2					4
730C	建築構造設計(C)	南					0	2					2
732	建築構造計画	松井							2	0			2
724III	建築振動学	竹内					0	2					2
724IV	地震工学	南							2	0			2
731A	構造実習(A)	田中, 桜井			2	2							1
732B	構造実習(B)	松井, 谷, 市 川(英)					4	4					2
750A	設備基礎理論	木村					2	0					2
750B	環境計測	尾島							2	0			2
751A	空気調和設備A	井上					2	0					2
751B	空気調和設備B	井上					0	2					2

752	広域環境論	尾島				0	2			2	
754A	設備実習	井上						4	0	1	
754B	環境工学実習	木村						0	4	1	
753	給排水電気設備	中村, 前島						2	0	2	
736II	建築構造法II	神山	0	2						2	
736III	建築構造法III	神山			2	0				2	
738II	建築材料学II	田村	0	2						2	
738III	建築材料学III	田村			2	0				2	
740II	建築施工法II	寺井			0	2				2	
740III	建築施工法III	田村						2	0	2	
741A	建築生産システム論	河盛			0	2				2	
743	建築経済	宮谷						2	0	2	
745	建築材料実験	南, 松井 田村, 神山 田中(義)			4	0				1	
742	施工実習	田村			0	4				1	
741B	建築生産システム演習	小林						3	0	1	
専門選択科目合計			4	4	14	20	30	38	33	4	92

(III) 専門随意科目

番号	学科目名	担当者	毎週授業時数								単位数
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度		
			前	後	前	後	前	後	前	後	
765	建築特論		2	2							2
合計			2	2							2
専門科目総計 (I)+(II)+(III)			10	10	32	34	44	46	42	9	134

応用化学科

応用化学科の卒業生の大部分は工場技術者として生産に携わるか、研究者として研究に従事している。現在の発達した化学工業においては化学技術者は専門分野に関する知識は勿論、多岐に亘る他の工業部門に関する専門知識も身につけておかねばならない。とくに装置工学に携わる者は従来の反応や材料を中心とした工業化学者とかなり異質の知識が要求される。この見地に立って応用化学科では工業化学コース、化学工学コースをもうけ、社会の要請に応じた人材を養成している。

下級年度においては一般的な教養と、将来専門家になるために必要な基礎学の授業を受ける。当応用化学科の特色は2年度後期に演習科目を設けている。これはゼミナール形式により小人数に分れ応用化学科専任教員から直接に指導を受ける。これにより今まで不十分であった下級年度における専門教員との接触を高め、学問ばかりでなく人間的な訓練の場をつくることを目標としている。

3年度より工業化学と化学工学とのコースに分れるが、学科目は多数あってかなりの選択性が与えられている。

科目の履修順序

講義科目の履修順序は科目表にある配当年度の順に従うことを原則とする。

特別の場合のほか各自で余り変えないようにして欲しい。

また実験科目は2年度に化学分析実験および工学基礎実験、3年度前期に物理化学実験、同後期に工業化学実験Ⅰ、化学工学実験Ⅰ、4年度前期に工業化学実験Ⅱ（工業化学コースのみ）、および化学工学実験Ⅱ（化学工学コースのみ）、ならびに、卒業論文の順に配置されているがこれは厳重にこの順序を守って履修しなければならない。もしこの中の一科目が不合格の場合は次の実験科目は履修できない。

また卒業論文に着手するまでには実験科目はすべて完了していること、講義科目も大部分履修済みであることを要する。さらに後者の場合未修得講義科目の数、内容および理由等を考慮して教室会議の判断で卒業論文に着手させないことがある。

応用化学科 専門教育科目学科配当表

(I) 専門必修科目

番号	学科目名	担当者	毎週授業時数								単位数	
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度			
			前	後	前	後	前	後	前	後		
267 I	化学工学I	酒井	0	2								2
235	無機化学	大坪	2	2								4
236 I	有機化学(I)	藤井	2	0								2
236 II	有機化学(II)	藤井, 鈴木	0	2								2
236 III	有機化学(III)	鈴木			2	0						2
237 I	物理化学(I)	土田, 菊地			2	0						2
237 II	物理化学(II)	加藤, 宇佐美			2	0						2
237 III	物理化学(III)	吉田			0	2						2
267 II	化学工学II	豊倉			2	0						2
267 III	化学工学III	平田			2	0						2
240	分析化学	加藤			2	0						2
C 102 E	数学E				2	2						4
C 170 G	物理学G	井口			2	0						2
C 243	化学分析実験	大坪, 加藤 宇佐美			4	4						2
C 173	工学基礎実験	土田, 菊地			4	4						2
C 238	物理化学実験	森田, 宮崎 土田, 菊地					8	0				2
257 I	工業化学実験(I)	長谷川, 佐藤					0	8				2
268 I	化学工学実験(I)	城塚, 平田 豊倉, 酒井					0	8				2
287	卒業論文	全教員										1
専門必修科目合計			4	6	24	12	8	16				41

(II) 専門選択科目(基礎・演習科目)

学生は、演習科目の内より1単位、基礎専門科目の内より6単位を選択しなければならない。

なお、上記以外に基礎専門科目の内より、さらに2単位以上を選択して修得することが望ましい。

番号	学科目名	担当者	毎週授業時数								単 位 数
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度		
			前	後	前	後	前	後	前	後	
演習科目											
235A	無機化学演習	大坪			0	2					1
236A	有機化学演習A	長谷川			0	2					1
236B	有機化学演習B	藤井			0	2					1
236C	有機化学演習C	佐藤			0	2					1
236D	有機化学演習D	篠原			0	2					1
236E	有機化学演習E	菊地			0	2					1
237A	物理化学演習A	宮崎			0	2					1
237B	物理化学演習B	吉田			0	2					1
237C	物理化学演習C	宇佐美			0	2					1
237D	物理化学演習D	土田			0	2					1
267A	化学工学演習A	豊倉			0	2					1
297B	化学工学演習B	平田			0	2					1
267C	化学工学演習C	酒井			0	2					1
基礎専門科目											
263	構造有機化学	鈴木			0	2					2
264	有機反応機構	長谷川, 佐藤			0	2					2
259	配位化合物化学	高橋			0	2					2
255	界面化学	吉田, 加藤			0	2					2
256 I	量子化学(I)	宮崎			0	2					2
274A	プロセス工学A	酒井			0	2					2
274B	プロセス工学B	豊倉			0	2					2
基礎・演習科目合計					0	40					27

(Ⅲ) 専門必修科目 (コース別)

学生は所属するコースの全科目を修得しなければならない。

なお、上記以外に他のコースの講義科目の内より、さらに4単位以上を選択して履修することが望ましい。

番 号	学 科 目 名	担 当 者	毎 週 授 業 時 数								単 位 数	
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度			
			前	後	前	後	前	後	前	後		
工業化学コース												
246A	無機工業化学	大坪, 吉田 加藤			2	0						2
247A	有機工業化学	篠原, 森田 鈴木			4	0						4
257Ⅱ	工業化学実験(Ⅱ)	吉田, 篠原 藤井, 鈴木 宮崎							8	0		2
化学工学コース												
269A	反応工学A	城塚			2	0						2
270A	単位操作A	豊倉, 酒井			2	0						2
270B	単位操作B	平田			2	0						2
268Ⅱ	化学工学実験(Ⅱ)	城塚, 平田 豊倉, 酒井							8	0		2
コース別専門必修科目合計					12	0	16	0	16			

(IV). 専門選択科目(コース別)

学生は所属するコースの科目の内より8単位を選択して修得しなければならない。

なお、上記以外に全科目の内より、さらに4単位以上を選択して修得することが望ま

しい。

番号	学科目名	担当者	毎週授業時数								単 位 数		
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度				
			前	後	前	後	前	後	前	後			
工業化学コース													
258	無機合成化学	加藤					0	2					2
252	鈹物化学	大坪					0	2					2
249	石油化学	森田					0	2					2
253 I	高分子化学I	土田					2	0					2
253 II	高分子化学II	土田					0	2					2
265	電気化学	吉田					2	0					2
250 I	生物化学(I)	鈴木					2	0					2
250 II	生物化学(II)	宇佐美					0	2					2
285	レオロジー	篠原					0	2					2
264 A	有機反応機構演習	佐藤, 多田					2	2					2
256 II	量子化学(II)	宮崎					2	0					2
279	構造化学	伊藤(絃)					2	0					2
化学工学コース													
280	拡散操作	早川					0	2					2
281	機械的操作	豊倉					0	2					2
269 B	反応工学B	城塚					0	2					2
273 A	プロセス設計	和田					0	2					2
283	モデル解析法	平田					2	0					2
283 A	移動速度論	平田					0	2					2
283 B	物性定数推算法	酒井					2	0					2
272	プロセス制御	村上					0	2					2
275	装置構造設計	溝口					0	2					2
コース別専門選択科目合計							16	28					42

(V) 専門選択科目 (各コース共通)

学生は下記科目の内より6単位以上を選択して修得することが望ましい。

番号	学科目名	担当者	毎週授業時数								単 位 数	
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度			
			前	後	前	後	前	後	前	後		
478	工業材料	吉田, 加藤 長谷川					2	0				2
241	機器分析化学	加藤, 宮崎					2	0				2
241A	機器分析法	長谷川					0	2				2
261	触媒化学	森田					2	0				2
C 142	電子計算法	武田							2	0		2
278	光反応化学	長谷川							2	0		2
262	放射化学	藤井							2	0		2
254	高分子化学工業	篠原							2	0		2
251	生物化学工業	宇佐美							2	0		2
284	化学工業論	村井							2	0		2
C 403B	自動制御B	依田							2	0		2
C 205	計測工学	大照, 黒沢							2	0		2
C 204	原子力工学	藤本							2	0		2
C 603	管理工学	中井							2	0		2
607A	品質管理	池沢							2	0		2
C 609	熱管理	塩沢							2	0		2
282	システム工学	城塚							2	0		2
276	粉体工学	酒井							2	0		2
277	プロセス開発	妹尾							2	0		2
289	環境化学	森田, 城塚 宇佐美							2	0		2
各コース共通専門選択科目合計							6	2	32	0		40

(VI) 専門随意科目

286	工場見学・実習					◎	◎					2
専門随意科目合計												2
専門科目総計 (I)+(II)+(III)+(IV)+(V)+(VI)			4	6	24	52	42	46	48	0		168

金 属 工 学 科

すべての工業は設計と材料の組合わせから成立っている。とくに金属があらゆる工業の基本材料であることは周知の事実であり、したがって金属工学は金属を利用する一切の産業に適切な材料を供給する責任をもつ重要な学問分野である。

貴重な天然資源から有効に金属を抽出し、精製し、目的に応じた組成、組織、および形状を与えること、および種々の使用環境下での挙動を研究して、安全かつ効率の良い金属の利用をはかることが金属工学の目的であり、その対象は極めて広い範囲にまたがっている。

本学科の専門課程の講義の特色は、まず比較的少数の必修科目によって各分野に共通する基礎理論を教授した後、さらに専門の理論を習得させるように、「限定選択科目」が設けられていることである。

限定選択科目（選択科目中*印を付したもの）の選択は原則として学生の自由であるが、教員の指導をうけることが望ましい。この科目は一旦選択した以上、必修科目と全く同一に取扱われ、20単位以上合格していなければ卒業することができない。これは自由選択科目と本質的に異なる点である。

卒論着手の基準は下記のとおりである。

卒 論 着 手 の 基 準

下記のいずれの条件をも満足していない場合は原則として卒業論文に着手できない。

1. 学修要項の6, (1), = (P. 16) に記載された条件。
2. 専門必修科目に合格していること
3. *印を付した専門選択科目（限定選択科目）を選択し、合計20単位以上に合格していること。

金属工学科専門教育科目学科配当表

(I) 専門必修科目

番 号	学 科 目 名	担 当 者	毎 週 授 業 時 数								単 位 数
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度		
			前	後	前	後	前	後	前	後	
483	金属工学概論	クラス担任	2	2							4
484	金属物理化学	鹿島, 藤瀬 加藤			2	2					4

487	金属物理学	幸田			2	2					4		
C444A	基礎裂図A	三好			4	4					2		
C173	工学基礎実験	上田, 渡辺			4	4					2		
C238	物理化学実験	鹿島, 藤瀬 加藤			0	4					1		
485 I	金属組織学I	渡辺			2	0					2		
485 II	金属組織学II	吉田			0	2					2		
523	金属材料力学	葉山			2	2					4		
518C	金属学実習	加山, 上田 中井, 中田			0	4					1		
518A	金属学実験A	葉山, 長谷川 雄谷, 堤, 中山					4	4			2		
518B	金属学実験B	川合, 藤瀬 草川, 中井 加藤, 渡辺					4	0			1		
526	卒業論文	全教員									4		
専門必修科目合計					2	2	16	24	8	4	0	0	33

(II) 専門選択科目

番号	学科目名	担当者	毎週授業時数								単位数	
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度			
			前	後	前	後	前	後	前	後		
C102E	数学E				2	2						4
C170B	物理学B				2	2						4
C170D	物理学D				2	2						4
* 486	X線金属学	中山					2	0				2
* 490	冶金熱力学	加藤					2	0				2
* 481 I	鉄冶金学I	草川					2	0				2
* 492 I	冶金学総論	川合					2	0				2
* 498 I	鉄鋼材料学A	長谷川					2	0				2
* 498 II	鉄鋼材料学B	堤					0	2				2
* 499 I	非鉄金属材料学I	雄谷					2	0				2
* 500 I	材料強度学I	中田					0	2				2
* 501	鑄物工学	加山					0	2				2
* 506	金属塑性加工学I	中井					0	2				2
* 493	金属電気化学I	藤瀬					0	2				2
* 494	粉末冶金学	渡辺					0	2				2
* 512 I	金属表面工学A	葉山					2	0				2

*	512II	金属表面工学B	上田				0	2				2
*	479	非金属材料学	鹿島				0	2				2
*	500	転位論	中田				2	0				2
*	504	伝熱工学	田中				0	2				2
	497	液体金属論	加山						2	0		2
	181B	統計力学	斉藤				0	2				2
	524	冶金反応速度論	加藤						2	0		2
	500II	材料強度学II	中田						2	0		2
	481II	鉄冶金学II	草川				0	2				2
	492II	非鉄冶金学	川合				0	2				2
	499II	非鉄金属材料学II	雄谷				0	2				2
	508	熱処理理論	長谷川						2	0		2
	510	金属表面処理	上田						2	0		2
	464	溶接法	中根						2	0		2
	495	原子炉燃料・材料	長谷川						0	2		2
*	516	金属工場設備	窪田						2	0		2
*	507	塑性加工技術開発論	五弓				0	2				2
	515	金属生産管理法	堤						2	0		2
*	482	半導体	岡田						2	0		2
	517	金属の機器分析	鹿島, 中山						2	0		2
	142D	電子計算機の応用	中田						0	2		2
	506I	金属塑性加工学II	中井						2	0		2
	493I	金属電気化学II	藤瀬						2	0		2
専門選択科目合計					6	6	16	28	24	4		84

(III) 専門随意科目

	工場見学実習	全教員					◎	◎				2
専門随意科目合計												2
専門科目総計(I)+(II)+(III)			2	2	22	30	24	32	24	4		119

電子通信学科

電子通信学は、周知のように電気通信・放送など情報の伝達を扱う工学として社会の文化活動に重要な役割を果たして来たが、近時その技術は産業各方面の製造機械・事務機械のみならず情報システムの中核技術として盛んに応用されるようになって来た。このように広い応用面のある電子通信学の分野を重点的に履修するために、当学科においては第3年と第4年とを二課程に分け、主として情報工学を履修する情報工学課程と、主として電子工学を履修する電子工学課程とを設け、学生にそのいずれかを選択させて学習に便ならしめている。

従来この学科を卒業したものは通信工業および電子工業技術者として、電気通信機器・電子機器などの生産に従事するもの、電信・電話・放送など電気通信関係の事業に従事するもの、および通信工学・電子工学関係の研究に従事するものが多かったが、エレクトロニクスの分野が産業各方面に応用されるに従い、鉄鋼・造船・化学・航空など通信関係以外の各工業における技術者や研究者として活躍する卒業生も次第に多くなって来た。

また近年は情報産業の発達にともない、この方面への進出も顕著になって来た。

当学科では、その尖端的な学術の理解および開発・応用のためには数学・物理・化学の十分な素養が是非とも必要であることにかんがみ、これらの基礎的な科目を極めて重視している。したがって、基礎教育科目として設置されているこれらの科目の上に、さらに専門基礎科目としての数学・物理・化学の履習を課している。学生諸君がこれらの素養を十分に身につけた上で、はじめて他の専門科目の履習が期待できるのである。

当学科の必修科目は、前述の3科目の他に、電子通信学の基盤をなす電気理論の大系、すなわち電磁気学、回路理論、電子装置、電子回路、電気計測、確率過程、信号理論などの諸分野に関する講義ならびに演習・実験をこれにあてている。これらは、今日における情報工学、電子工学の理解応用の基本であるだけでなく、将来の発展のための基礎でもある。

電子通信学の主体は、第3年、第4年に設けられている各専門科目に盛られている。これは一般に選択科目として設置される。しかし、情報工学課程を履修する学生に対し音響工学、情報回路、系統工学、通信方式A・B、交換工学、アンテナ電波伝搬、マイクロ波工学、情報理論のうち10単位分の講義を必修科目とし、また、電子工学課程を履修する学生に対しては電子装置B、電子計測、電子機器、電子物性工学、電子部品、電子材料、医用電子工学、生物工学制御理論のうちの10単位分の講義を必修科目として選択履修することを要求している。これらは、それぞれの課程の課程専門必修科目であるが、他の課程の学生は相互に他課程の課程専門必修科目を専門選択科目として履修することができるようになっている。そのほか、両課程に共通な専門選択科目として物理数学、関数解析、位相幾何、情報処理ソフトウェア、制御工学、回路理論C、電磁気学C、電子回路B、情報

処理システム，オペレーションズ・リサーチなどに関する講義が設置されている。

これらの専門科目の講義に対応して，第3年において両課程に共通に電子通信基礎実験を，第4年において情報工学課程の学生には情報工学実験を，電子工学課程の学生には電子工学実験を課す。これらは電子通信学の基本的な実験に始まり，両課程の各分野での高度な実験によって完結する。

さらに，教授・助教授の指導によって，第4年初に研究題目を定めて第4年前期より研究に着手し，その結果を自主的に取りまとめて卒業論文として提出することが要求されている。これは，学生みずからの実験・調査・計算などによる研究実習であり，当学科で学んだすべての学術の総合的な仕上げの意味もっている。

なお，電子通信技術に関連ある他の工学分野の素養も必要であるので，電力工学・機械工学等その必要と思われる諸分野の講義が選択科目として設けられている。また，電子通信学の尖端的な話題に関する特別講義を随意科目として第4年に設け，学内外に活躍される専門家によってざん新な講義が行なわれる。

なお，当学科では別に学外の電子工学・電気通信施設を広く見学することを奨励し，その年度に応じ，随時これを行なわせている。

以上で，当学科で履修する専門科目の概要を説明したが，学生各自は最低所定単位の履修に甘んずることなく，必修科目は勿論，選択科目，随意科目なども十分履修し，専門技術者としての素養を十分に身につけることを切に希望する。

電子通信学科 専門教育科目学科配当表

(I) 専門必修科目

番 号	学 科 目 名	担 当 者	毎 週 授 業 時 数								単 位 数		
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度				
			前	後	前	後	前	後	前	後			
362	電子通信工学入門	大泊	*2	*2									1
142E	電 子 計 算 法	小原	*2	*2									2
C 102C	数 学 C				2	2							4
C 102D	数 学 D				2	2							4
C 170E	物 理 学 E				2	2							4
370A	確 率 過 程	堀内						2	0				2

206C	計測原論	伊藤(毅)			0	2					2
370B	信号理論	堀内					0	2			2
309A	※電磁気学A	香西			4	4					4
309B	※電磁気学B	副島					4	0			2
312A	※回路理論A	内山			4	4					4
312B	※回路理論B	平山					4	0			2
331B	電気計測	田中					2	2			4
315A	※電子回路A	大泊					2	4			4
317A	電子装置A	伊藤(紉)					0	2			2
C 173	工学基礎実験	富永, 大泊 千葉			4	4					2
381	電子通信基礎実験	項目別担当						6	6		4
386	論文	全教員									5
以上共通必修科目合計			4	4	18	20	20	16	0	0	54
382	情報工学実験	項目別担当							6	0	2
328	電子工学実験	〃							6	0	2
以上コース別必修科目合計									6	0	2
専門必修科目各コース毎合計			4	4	18	20	20	16	6	0	56

(II) 専門選択科目

番号	学科目名	担当者	毎週授業時数								単位数	
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度			
			前	後	前	後	前	後	前	後		
C 101	図学		2	2								4
C 170F	物理学F	藤本			2	0						2
C 231D	化学D	井口			2	2						4
C 437B	材料力学B	桜井			2	0						2
C 170H	物理学H	後藤					2	2				4
329B	情報処理シスエム	富永					0	2				2
370C	情報理論	堀内							2	0		2
371	制御理論	堀内							2	0		2
C 449A	機械工学A	片山					2	0				2
340	電気機械	小貫					0	2				2
320	電子材料	清水			0	2		2	0			4
152	物理数学	小寺						2	2			4

314A	情報回路	小原				2	0			2	
343A	系統工学	平山						2	0	2	
312C	回路理論C	平山				0	2			2	
309C	電磁気学C	副島				0	2			2	
316	電子物性工学	伊藤(紉)				2	0			2	
376	電子部品	河村				0	2			2	
315B	電子回路B	富永				0	2			2	
317B	電子装置B	伊藤(紉)						2	0	2	
332	電子計測	田中						2	0	2	
341	電力工学	都築						2	0	2	
372	音響工学	伊藤(毅)				2	2			4	
C 138	オペレーションズ・リサーチ	春日井						2	2	4	
374	マイクロ波工学	香西						0	2	2	
375	電子機器	河村						2	0	2	
125	関数解析	洲ノ内						2	0	2	
115A	位相幾何	野口						0	2	2	
368A	通信方式A	小林						2	0	2	
368B	通信方式B	桑原						0	2	2	
314B	情報処理工学 ソフトウェア	小原						2	0	2	
333A	制御工学	白崎						2	0	2	
368C	交換工学	富永						2	0	2	
363	アンテナ・搬送波工学	副島						2	0	2	
327B	生物工学	戸川						2	0	2	
327A	医用電子工学	内山						0	2	2	
専門選択科目合計			2	2	6	4	14	18	30	10	86

(Ⅲ) 専門随意科目

番 号	学 科 目 名	担 当 者	毎 週 授 業 時 数								単 位 数	
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度			
			前	後	前	後	前	後	前	後		
384	電子通信学特論	特別講義								2	2	4
専門随意科目合計										2	2	4
専門科目総計 (Ⅰ)+(Ⅱ)+(Ⅲ)			6	6	24	24	32	32	34	14	146	

選択の指定 情報工学課程の学生は音響工学，情報回路，系統工学，通信方式A・B，交換工学，アンテナ電波伝搬，マイクロ波工学情報理論のうち10単位以上を選択履修しなければならない。

電子工学課程の学生は電子装置B，電子計測，電子機器，電子物性工学，電子部品，電子材料，医用電子工学，生物工学制御理論のうち10単位以上を選択履修しなければならない。

(注) ※印の科目は，演習時間を含み，正規の単位計算によらない。

*印の科目は，隔週授業を示す。

工業経営学科

工業の発展は高度の科学と工業技術に立脚することは勿論であるが、同時にこれらを生産に活用する生産技術、各種の生産要素、すなわち機械、設備、資材、労働、資本等を合理的に利用する経営と管理の理論と技術の進展に依存するところが極めて大きい。この点に鑑み、本大学理工学部はわが国で最初に工業経営学科を創設したのである。

当学科においては、学生が理工学の知識を学び科学的な考察力を養うとともに、経済的観念、人間関係の理解を身につけ、経営管理技術の理論と實際を修得して、新しい生産技術者あるいは管理技術者としての基礎的な能力をもつと同時に将来産業社会における指導者としての器量を備えた人物になることを目標としている。

工業経営学科 専門教育科目学科配当表

(I) 専門必修科目

番 号	学 科 目 名	担 当 者	毎 週 授 業 時 数								単 位 数	
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度			
			前	後	前	後	前	後	前	後		
C 102C	数 学C				2	2						4
C 102D	数 学D				2	2						4
132A	数 理 統 計 学	藤 沢			2	2						4
138A	オペレーション ズ・リサーチ	春日井					2	2				4
142C I	電子計算演習I	十代田	0	2								1
142C II	電子計算演習II	十代田			3	0						1
634	統計的方法演習	村松, 塩沢 春日井, 池沢 石渡					3	3				2
C 444A	基 礎 製 図A	渡辺, 三好			4	4						2
453	機 械 理 論	川喜田			2	2						4
C 302B	電 気 工 学B	清水					2	2				4
234	化 学 理 論	塩沢			0	2						2
601	工業経営総論	渡辺	2	0								2
625	経営経済学	千賀			2	0						2
622	工場運営演習	春日井 十代田 石渡, 古谷野							3	0		1

604	生産管理学	村松				2	0			2	
636	作業測定実験	横溝		0	4					1	
637	管理工学実験	坪内, 石館, 横溝, 十代田, 池沢, 石渡, 前田				4	4			2	
618	工業心理学	田崎		2	0					2	
629	簿記及び 原価計算演習	中村		2	2					2	
642	卒業研究(論文)	全教員								2	
専門必修科目合計			0	4	21	20	13	11	3	0	48

(II) 専門選択科目

番号	学科目名	担当者	毎週授業時数								単 位 数	
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度			
			前	後	前	後	前	後	前	後		
131	実験計画法	池沢								2	2	4
C 403B	自動制御B	依田								2	0	2
C 205	計測工学	大照, 黒沢								2	0	2
477	工業材料	小川			0	2						2
C 449B	機械工学B	片山, 東					2	2				4
454	製作技術	古川					2	2				4
C 302C	電気工学C	坪内					0	2				2
246	無機工業化学	石館					2	0				2
247	有機工業化学	篠原							2	2		4
C 267A	化学工学A	平田							2	0		2
C 267B	化学工学B	酒井							0	2		2
448	設計演習	古川							2	0		1
C 469	機械実験・実習						4	4				2
C 358	電気実験								0	4		1
257	工業化学実験	石館, 塩沢					4	4				2
268	化学工学実験	石館, 横溝, 塩沢							0	4		1
602	工業概論	石館	2	0								2
626	生産経済学	千賀					0	2				2
631A	事例研究(A)	上田							2	0		1
631B	事例研究(B)	徳江							0	2		1
632	作業研究	横溝			2	0						2

	614	人 間 工 学	坪内					2	0					2		
	615	工 場 計 画	中井					2	0					2		
	639	運 搬 工 学	中井					0	2					2		
	616	設 備 管 理	石館					0	2					2		
	605	マ ネ ジ メ ン ト ・ シ ス テ ム	村松					0	2					2		
	607B	品 質 管 理	池沢					2	0					2		
	608	資 材 管 理	南川							2	0			2		
C	609	熟 管 理	塩沢							2	0			2		
	635	デ ー タ ・ プ ロ セ シ ン グ	中川							0	2			2		
	638	運 搬 実 験	中井, 渡辺 石館, 宮内							4	0			1		
	619	労 務 管 理	尾関					2	2					4		
	620	安 全 ・ 衛 生	安井							2	0			2		
	645	産 業 公 害	塩沢					2	0					2		
	621	産 業 ・ 労 働 法 規	岡田, 佐川							2	2			4		
	628	会 計 学	佐藤					2	0					2		
	611	財 務 管 理	尾関							2	2			4		
	612	市 場 調 査	石渡							2	0			2		
	613	マ ー ケ テ ィ ン グ	千賀					2	2					4		
専 門 選 択 科 目 合 計								2	0	2	2	28	26	30	22	88

(III) 専 門 随 意 科 目

	640	職 業 指 導	横溝, 宮本									2	2	4		
	646	工 場 見 学 ・ 実 習	全 教 員			◎	◎							2		
専 門 随 意 科 目 合 計												2	2	6		
専 門 科 目 総 計 (I)+(II)+(III)								2	4	23	22	41	37	35	24	142

履 修 上 の 注 意

工業経営学科では、一般教育科目中第2年度に設置してある経済学（4単位）を必修として指定してある。

電子計算演習Ⅱは、同Ⅰの単位を取得していなければ、履修することは出来ない。

卒業研究（論文）に着手するためには、各科共通の条件を満足するとともに、当科で別に指定する専門必修科目にも合格していなければならない。この指定科目は年度初めにクラス担任より指示する。

土 木 工 学 科

土木工学は Civil Engineering の語が示すように元来は人間の生活向上のための工学の総体であったが、その中から機械、電気、建築等の工学がそれぞれ独立分離したので、これらの工学に含まれないしかも非常に公共性の強い分野の工学がおのずから総合されて、土木工学として進歩発展して来た。今日國土を対象としてその改造利用を計る建設事業の学問と技術はほとんど土木工学の範囲に入ると云えよう。

土木工学科において学修する科目には、理工学部全学生に共通な一般教育科目、外国語、体育と工学上の基礎科目および土木工学科独自の設置科目がある。土木工学科の設置科目は建設事業に関する土木専門の科目と、それを修得するための基礎となる科目および補助となる科目とがある。各科目は学生の理解力に応じ、あるいは理論と応用の順に従い、学部の4カ年に配当されている。また科目には土木工学科のすべての学生が学修すべき必修科目と学生各自の選択によって学修する選択科目の別がある。

すなわち工学的に共通な基礎科目と土木全専門に共通する基礎科目が専門必修科目であり、補助的な科目と土木各専門別の科目が選択科目になっている。土木分野の基礎科目のうち、とくに基礎的で重要な材料力学、応用力学、水理学、測量学には講義の他に演習あるいは実験が設けてあり、その理解を助けるようにしている。また構造、コンクリート、土質工学は種々の土木構造物の設計・施工上重要な科目でそれぞれ実験が併設されている。土木の専門別科目はこれを一応系列別に見ると、交通工学系列には道路、鉄道、交通計画、橋梁が属し、都市工学系列には都市計画、上下水道が入り、水工学系列には河川、港湾、水力がある。また施工学系列としては施工法、建設機械などである。これら専門別科目は土木分野の特殊性からみてなるべく多く履修しておくことが望ましい。

以上の科目のほか、必修科目として卒業論文または計画がある。これは修得した学識の整理と応用を目的とし、学生が教員の指導のもとで研究または計画・設計を行うもので、主として4年度の後期に行なわれる。

さて土木工学科を卒業し、社会人として活用する方面を大別すると四つになる。すなわち大学あるいは研究所において土木工学の研究に従事するもの、官庁、一般会社で建設事業の監督あるいは企画に当るもの、コンサルタンツまたは設計事務所等で設計または工事の監理に当るもの、建設会社に入って工事の施行に携わるものなどである。学生は各自の将来の使命を考え、希望する専門科目を選択するわけであるが、土木工学の特殊性を考え、なるべく多くの専門科目を履修することを奨励する。そして社会人としての立派な教養を持つと同時に出来るだけひろく土木工学に対する理解と認識とを深めるように心がけるべきである。

土木工学科 専門教育科目学科配当表

(I) 専門必修科目

番 号	学 科 目 名	担 当 者	毎 週 授 業 時 数								単 位 数	
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度			
			前	後	前	後	前	後	前	後		
C 437A	材 料 力 学	宮原	2	2								4
C 102E	数 学E	藤沢			2	2						4
C 170C	物 理 学C				2	2						4
C 173	工 学 基 礎 実 験	後藤, 森			4	4						2
791A	測 量 学	佐島			2	2						4
C 792	測 量 実 習	佐島, 鮭川			4	4						2
720	応 用 力 学	村上			2	2						4
775	コンクリート工学	神山					2	2				4
777	水 理 学	鮭川			2	2						4
770	土 質 工 学	後藤					2	2				4
727	構 造 工 学	平嶋, 堀井					2	2				4
774	材 料 実 験	宮原			0	4						1
776	コンクリート実験	神山					4	0				1
734	構 造 実 験	村上, 平嶋 堀井, 宮原					0	4				1
772	土 質 実 験	後藤, 森					4	0				1
779	水 理 実 験	米元, 遠藤 鮭川					0	4				1
794	図学及土木製図	後藤, 本間			4	4						2
795 I	設 計 製 図(I)	堀井, 神山					4	4				2
795 II	設 計 製 図(II)	堀井							4	0		1
796	卒業論文又は計画	全教員										1
専門必修科目合計			2	2	22	26	18	18	4	0		51

(II) 専門選択科目

番号	学科目名	担当者	毎週授業時数								単 位 数		
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度				
			前	後	前	後	前	後	前	後			
C 205	計測工学	大照, 黒沢					2	0					2
C 449B	機械工学B	片山							2	0			2
C 320C	電気工学C	坪内							0	2			2
C 701	建築工学	安東							2	0			2
C 603	管理工学	古川							2	0			2
C 132	数理統計学	小林					2	0					2
722	材料力学演習	宮原	2	2									2
721	応用力学演習	村上			2	2							2
778	水理学演習	米元, 遠藤			2	2							2
797	応用水理学	鮭川					2	2					4
773	土木材料学	柳田			2	0							2
149	応用数学	平嶋					2	2					4
789	地震学概論	笠原							2	0			2
783C	衛生工学実験	遠藤							4	0			1
C 647	水質汚濁概論	伏見, 遠藤							2	0			2
C 645	産業公害	塩沢							2	0			2
786	a 橋梁工学 道路工学 鉄道工学	堀井 森 棚橋					0	2	2	0			4
787			0	2	2	0		4					
788			2	2			4						
760	b 交通計画 土木法規 都市計画 上下水道	菊田 大塚 大塚 遠藤							2	0			2
785								2	0		2		
761			0	2	2	0		4					
783A			0	2	2	0		4					
780	c 水力工学 河川工学 港湾工学	鮭川 米元 佐島					0	2	2	0			4
781			0	2	2	0		4					
782			0	2	2	0		4					
784	d 施工法 土木地質学 建設機械	角田 田中(治) 伊丹					2	2					4
771							2	0		2			
790							2	0		2			
専門選択科目合計			2	2	6	4	10	18	40	4			77

(Ⅲ) 専門随意科目

番 号	学 科 目 名	担 当 者	毎 週 授 業 時 数								単 位 数		
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度				
			前	後	前	後	前	後	前	後			
142B	電 子 計 算 法	宮原			2	0							2
専門随意科目合計					2	0							2
専門科目総計 (Ⅰ)+(Ⅱ)+(Ⅲ)			4	4	30	30	28	36	44	4			130

[注意] 専門選択科目は27単位以上を修得しなければならない。但しその中には a, b, c, d の各系列からの④単位以上 (従って a, b, c, d で合計 16 単位以上) を含むこと。

実験科目の実施要領

構造実験、コンクリート実験、土質実験および水理実験の実施は次の要領による。構造実験とコンクリート実験、土質実験と水理実験はそれぞれ同一時間帯に併記されているが、学生数を2組に分け、1週毎に交替する。従って1人の学生にとって、同一実験科目は隔週に実施する。

「火薬取扱い保安責任者」の資格を取得しようとする者は、資源工学科に設置されている火薬学の単位を取得することにより、学科試験免除の特典が与えられる。

応用物理学科

応用物理学科では、基礎物理学、主要な現代物理学を基礎として物性工学および計測工学の学問を身につけ、将来技術者または研究者として、その習得した基礎的な理論および技術を応用し物性工学、計測工学およびそれらに関連のある分野に活躍できる人材を育成することを目的としている。

応用物理学科における学習は、物理学系統の学科目と計測工学系統の学科目が併せて設置されているので学生はそれらを適当に組合わせて選択し履修することができる。また物理学科とは密接な関連があって教育と研究の面で交流がある。学科目配当は次の通りである。なお外国語に習熟することは重要であり、ロシア語の必要性も増している。

興味のある学生は理工学部の共通科目や他学科の専門科目、あるいは他学部の専門科目を履修してもよい。これらの科目の取得した単位数のうち、理工学部に設置された科目については24単位まで、他学部の科目については12単位までを、卒業のために必要とする専門科目の総単位数80のうちに算入する。以上をこえる単位は随意科目の取得単位として扱う。

応用物理学科 専門教育科目学科配当表

(I) 専門必修科目

番号	学科目名	担当者	毎週授業時数								単 位 数	
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度			
			前	後	前	後	前	後	前	後		
157	物理学概論	大槻	2	0								2
156A	数学概論I	飯野, 堤	0	2								2
103	数学演習	飯野, 堤			2	2						2
179	理論物理学通論	並木			2	2						4
180A	統計力学A	加藤, 斎藤			0	2						2
C 173	工学基礎実験	大頭, 広田 千葉,			4	4						2
C 170B	物理学B	大井, 鈴木			2	2						4
183	電磁気学	鈴木, 大井					2	2				4
219II	応用物理学実験(B)	全教員							4	4		2
220	卒業研究	全教員										6
専門必修科目合計			2	2	10	12	2	2	4	4		30

(II) 専門選択科目

番号	学科目名	担当者	毎週授業時数								単位数		
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度				
			前	後	前	後	前	後	前	後			
156B	数学概論Ⅱ	飯野			2	2							4
311	回路理論	久村			2	2							4
151A	物理数学A	堤			2	2							4
215 I	物理学演習	加藤, 大井, 斉藤, 大塚, 鈴木			4	4							4
188A	物性物理学A	市ノ川, 大照, 中村					2	2					4
216	応用物理学演習	鈴木, 小林(寛)					4	4					4
219 I	応用物理学実験A	中村, 大井, 市ノ川, 小林(謙), 大照, 小林(寛), 中村					8	8					4
200	連続体の物理学	千葉齋藤					2	2					4
326A	電子工学	小林(寛)					2	2					4
151B	物理数学B	堤					2	2					4
184A	量子力学A	並木					2	2					4
198	光学	大頭, 広田					2	2					4
189	結晶物理学	小林(謙)					2	0					2
217	物理実験学	小林(謙), 植松, 上江洲					2	2					4
403C	自動制御	久村					2	2					4
206A	計測原論A	中村					2	2					4
206B	計測原論B	大照					2	2					4
136	応用確率過程	佐藤					2	0					2
329B	電子計算機	小原					0	2					2
213	真空技術	富永					0	2					2
180B	統計力学B	斉藤, 加藤					2	2					4
188B	物性物理学B	大槻							0	2			2
186A	原子核A	山田							2	2			4
190	電波物性論	西岡							2	0			2
178	非線形問題	高木							2	0			2
199	応用光学	大頭, 広田, 小林(謙)							2	2			4
204	原子力工学	喜多尾							0	2			2
186B	原子核実験学	道家							2	0			2
151C	物理数学C	飯野							2	2			4

370C	情報理論	堀内					2	0	2	
209	特殊計測	桜井					2	0	2	
191	分子構造論	石黒					2	0	2	
専門選択科目合計				10	10	38	38	18	10	104

(III) 専門随意科目

番号	学科目名	担当者	毎週授業時数								単位数	
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度			
			前	後	前	後	前	後	前	後		
C 142	電子計算法	武田								2	0	2
専門科目総計 (I)+(II)+(III)			2	2	20	22	40	40	22	12	138	

数 学 科

数学は現在日々に発展し科学技術だけではなく社会全般に大きな影響を与えている。

「数学科は、現代数学の多くの領域にわたる研究者を教授陣としてもち、数学のいろいろな分野を志望する学生に対しても、それぞれの専門の研究者による適切な指導が与えられるようにと工夫されている。学科目の編成についても、純粋数学と応用数学との両方にわたってバランスのとれた配列をしていて、数学の広範な領域で卒業生が活躍できるように変化に富んでいる。

学科目の選択にあたっては、必修科目を第1年度の2科目だけとし、各自の志望する方面の勉強を十分に行なうことができるようにした。しかしながら学部を設置された科目の内容は、ほとんどがそれらの領域の初歩的な知識に関するものであって、その段階では無関係に思える数個の学科目も、先に進むと見通しよく統合されたり、たがいに関連しあったりするので、学部の段階では、学科目の履習に際してなるべく多方面にわたる学科目をえらぶことが望ましい。

第1年度の必修2科目はとくに現代数学の基礎となる概念や理論を、高度な予備知識がなくても十分理解できるようにとくにいていねいに講義することになっている。

第2年度の選択9科目は、とくに基礎となる科目である。卒業に必要な条件として9科目中6科目以上習得しなければならない。第3、4年度の科目は全部選択科目であるが、とくに第4年度の卒業研究として、153番の並列する20研究のうち、どれかひとつを選んで履習し卒業論文を作成することが必要である。第3年度の後期と第4年度の前期の数学演習（セミナー）は卒業研究の準備のためにもうけられたもので、その中からひとつずつを選んで履習しなければならない。

理工学部の共通科目および他学科の専門科目を余裕のある学生は履修してもよい。これらの科目の取得した単位数のうち、8単位までは、卒業のために必要とする専門科目の総単位数80の中に算入する。8単位を超える単位は卒業のための必要単位数の中には算入せず、随意科目の取得単位扱いとする。ただし、理工学部の共通科目のうち、数学C、D、Eおよび数理統計学の取得単位数は随意科目扱いとする。

数学科 専門教育科目学科学科目配当表

(I) 専門必修科目

番 号	学 科 目 名	担 当 者	毎 週 授 業 時 数								単 位 数	
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度			
			前	後	前	後	前	後	前	後		
107 I	数 学 概 論 A	清水	2	2								4
107 II	数 学 概 論 B	中島	2	2								4
153	数 学 研 究	全教員										2
専門必修科目合計			4	4								10

(II) 専門選択科目

番 号	学 科 目 名	担 当 者	毎 週 授 業 時 数								単 位 数	
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度			
			前	後	前	後	前	後	前	後		
109	一 般 代 数 学	足立			2	2						4
112	位 相 空 間	福山			2	2						4
114 I	幾 何 学	小島(順) 清水			2	2						4
121 I	関 数 論 I	田中			2	2						4
116	解 析 学	入江			2	2						4
123	実 関 数 論	小島(清)			2	2						4
130	関数方程式概論	室谷			2	2						4
132B I	数 理 統 計 学 I	草間			2	2						4
142A	電 子 計 算 法	小島(博)			2	2						4
108 I	代 数 学 I	木下					2	2				4
110	代 数 幾 何	有馬					2	2				4
117	多 様 体	清水					2	2				4
115	位 相 幾 何 学	野口					2	2				4
119 I	数 学 基 礎 論 I	福山					2	2				4
121 II	関 数 論 II	垣田					2	2				4
127	常微分方程式	杉山					2	2				4
129 I	偏微分方程式 I	入江, 垣田					2	2				4

176A	解析力学					2	2				4
126 I	関数解析I	洲ノ内				2	2				4
122	積分論	小島(清)				2	2				4
132 B II	数理統計学II	草間				2	2				4
138 B	オペレーションズ ・リサーチ	五百井				2	2				4
141A	数値計算法	中島, 室谷				2	2				4
153A	代数演習I	有馬, 木下				0	4				2
153A	幾何演習I	小島(順), 野口				0	4				2
153A	関数解析演習I	垣田, 小島(清)				0	4				2
153A	解析演習I	室谷, 杉山				0	4				2
153A	数理統計演習I	草間				0	4				2
153A	数学基礎論演習I	広瀬				0	4				2
108 II	代数学II	寺田						2	2		4
111	整数論	足立						2	2		4
113	微分幾何学	立花						2	2		4
114 II	幾何学特論							2	2		4
119 II	数学基礎論II	広瀬						2	2		4
124	応用関数論	西本						2	2		4
129 II	偏微分方程式II	垣田						2	2		4
126 II	関数解析II	網屋						2	2		4
134	確率論	郡						2	2		4
133	応用統計学	高橋						2	2		4
143	情報科学概論	藤野						2	2		4
154	数理経済学							2	2		4
417	空気力学	岡本						2	2		4
120	数値解析	中島, 室谷						2	2		4
140	最適値問題	示村						2	2		4
153A	代数演習II	寺田, 足立						4	0		2
153A	幾何演習II	清水						4	0		2
153A	関数解析演習II	入江, 洲之内						4	0		2
153A	解析演習II	中島, 田中						4	0		2
153A	数理統計演習II	郡						4	0		2
153A	数学基礎論演習II	福山						4	0		2
専門選択科目合計					18	18	28	52	54	30	176
専門科目総計 (I)+(II)			4	4	18	18	28	52	54	30	186

物 理 学 科

物理学科では科学技術発展の基礎になっている現代物理学，とくに原子核物理および物性物理の基礎についての学習を主とする。原子核物理では，理論および実験の両面で，今後の発展に備えた新鮮な内容をもたせ，物性物理では固体物理ばかりでなく現在発展中の領域，たとえば生物物理なども含ませてある。

余裕のある学生は理工学部の共通科目や他学科の専門科目，あるいは他学部の専門科目を履修してもよい。これらの科目の取得した単位数のうち，理工学部に設置された科目については24単位まで，他学部の科目については12単位までを，卒業のために必要とする専門科目の総単位数80のうちに算入する。以上をこえる単位は随意科目の取得単位として扱う。なお，外国語に習熟することは重要であり，最近，ロシア語の必要性も増している。

なお物理学科は応用物理学科と教育，研究の両面にわたり密接な関連がある。

教員免許状に関しては教職課程の項を参照のこと。

物理学科 専門教育科目学科配当表

(I) 専門必修科目

番 号	学 科 目 名	担 当 者	毎 週 授 業 時 数								単 位 数	
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度			
			前	後	前	後	前	後	前	後		
157	物理学概論	大槻	2	0								2
156A	数学概論I	飯野, 堤	0	2								2
C 170B	物理学B	大井, 鈴木			2	2						4
103	数学演習	飯野, 堤			2	2						2
179	理論物理学通論	並木			2	2						4
180A	統計力学A	加藤, 斎藤			0	2						2
218II	物理実験(A)	松原, 上江洲			4	4						2
183	電磁気学	鈴木, 大井					2	2				4
184A	量子力学A	並木					2	2				4
218IV	物理実験(C)	全教員							4	4		2
220	卒業研究	全教員										6
専門必修科目合計			2	2	10	12	4	4	4	4		34

(II) 専門選択科目

番 号	学 科 目 名	担 当 者	毎 週 授 業 時 数								単 位 数		
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度				
			前	後	前	後	前	後	前	後			
156B	数 学 概 論II	飯野			2	2							4
311	回 路 理 論	久村			2	2							4
151A	物 理 数 学A	堤			2	2							4
215 I	物 理 学 演 習A	加藤, 大井 齊藤, 大場 鈴木			4	4							4
151B	物 理 数 学B	堤					2	2					4
198	光 学	広田, 大頭					2	2					4
326A	電 子 工 学	小林(寛)					2	2					4
206A	計 測 原 論A	中村					2	2					4
217	物 理 実 験 学	小林(謙), 植松 上江洲					2	2					4
189	結 晶 物 理 学	小林(謙)					2	0					2
136	応 用 確 率 過 程	佐藤					2	0					2
180B	統 計 力 学B	斎藤, 加藤					2	2					4
206B	計 測 原 論B	大照					2	2					4
188A	物 性 物 理 学A	市ノ川, 大照 中村					2	2					4
215II	物 理 学 演 習B	大場, 小林(寛) 中村, 鈴木					4	4					4
218III	物 理 実 験B	大井, 植松, 大井 浅井, 近					8	8					4
200	連 続 体 の 物 理	斎藤					2	2					4
186A	原 子 核A	山田							2	2			4
184B	量 子 力 学B	大場							2	0			2
188B	物 性 物 理 学B	大槻							0	2			2
186B	原 子 核B	府川							0	2			2
186B	原 子 核 実 験 学	道家							2	0			2
151C	物 理 数 学C	飯野							2	2			4
204	原 子 力 工 学	喜多尾							0	2			2
201	地球及天体物理学	藤本							2	0			2
196	生 物 物 理 学	斎藤, 鈴木 浅井							2	2			4
191	分 子 構 造 論	石黒							2	0			2
専門選択科目合計					10	10	34	30	14	12			90
専門科目総計 (I)+(II)			2	2	20	22	38	34	18	16			124

化 学 科

化学科は物質の世界を原子分子の立場から探究し、工学技術の基礎である現代化学を学習することを目的とする。とくに、最近著しい発展を見せている光化学、構造化学および量子化学の学習を特色とする。

なお、化学科は応用化学科と教育、研究の両面において協力関係にある。

教員免許状に関しては教職課程の項を参照のこと。

化学科 専門教育科目学科配当表

(I) 専門必修科目

番 号	学 科 目 名	担 当 者	毎 週 授 業 時 数								単 位 数	
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度			
			前	後	前	後	前	後	前	後		
235	無 機 化 学	大坪	2	2								4
236A	有 機 化 学A	新田	2	2								4
237A	物 理 化 学A	鈴木			2	0						2
240	分 析 化 学	加藤			2	0						2
C 102E	数 学E				2	2						4
C 170B	物 理 学B				2	2						4
C 173	工 学 基 礎 実 験	井口, 伊藤 (礼)			4	0						1
256A	量 子 化 学A	井口					2	2				4
244	無機分析化学実験	高宮, 関根			4	4						2
236	有 機 化 学 実 験	多田, 新田					0	6				2
	物 理 化 学 実 験	高橋, 伊藤					6	0				2
	卒 業 論 文	全教員										6
			4	4	16	8	8	8				37

(II) 専門選択科目

番 号	学 科 目 名	担 当 者	毎 週 授 業 時 数								単 位 数	
			第1年度		第2年度		第3年度		第4年度			
			前	後	前	後	前	後	前	後		
636B	有 機 化 学B	多田, 新田			2	2						4
259	配位化合物化学	高橋			0	2						2
264	有 機 反 応 機 構	長谷川, 佐藤			0	2						2

245	無機高分子化学	関根						2	0	2	
191	分子構造論	石黒						2	0	2	
181A	統計力学	落合	0	2						2	
241B	機器分析	高宮, 新田 伊藤(紘)					2	0		2	
279A	構造化学A	伊藤(紘)	0	2						2	
279B	構造化学B	高橋					2	2		4	
256II	量子化学II	宮崎					2	0		2	
236B	物理化学B	上田	0	2						2	
256B	量子化学B	伊藤					0	2		2	
179	理論物理学通論	並木	2	2						4	
184A	量子力学A	並木						2	2	4	
188A	物性物理学A	市ノ川					2	2		4	
151B	物理数学B	堤						2	2	4	
269A	反応工学A	城塚						2	0	2	
267III	化学工学III	平田	2	0						2	
265	電気化学	吉田					2	0		2	
261	触媒化学	森田						2	0	2	
284	化学工業論	村井						2	0	2	
252	鉱物化学	大坪					0	2		2	
258	無機合成化学	加藤					0	2		2	
249	石油化学	森田					0	2		2	
253I	高分子化学I	土田					2	0		2	
253II	高分子化学II	土田					0	2		2	
250I	生物化学I	鈴木					2	0		2	
250II	生物化学II	宇佐美					0	2		2	
285	レオロジー	篠原					0	2		2	
249A	無機工業化学	大坪, 吉田 加藤					2	0		2	
247A	有機工業化学	篠原, 森田 鈴木					4	0		4	
262	放射化学	藤井						2	0	2	
278	光反応化学	長谷川						2	0	2	
264A	有機反応機構演習	佐藤, 多田					2	2		2	
専門選択科目合計					6	14	22	20	18	4	82
専門科目総計 (I)+(II)			4	4	22	22	30	28	18	4	119

(7) 学科目配当の変更

本年度入学者は、本学修要項の学科目配当表によって履修することを原則とするが、科学技術の進歩に伴なって、緊急に学科目の新設、改廃などを必要とする場合は、この学科目配当表を変更し、直ちに実施することがある。

8 クラスの編成

第1年度の一般教育科目、外国語科目および図学（共通科目）の授業のためのクラスは、学科別によらず、第二外国語によって編成される。これらのクラスは各学科の学生がまじって編成され、学科の別は考慮されない。第1年度において、指定された曜日に配当されている専門科目は学科別のクラス編成によって授業が行なわれる。

第2年度以降においても一般教育科目、外国語科目、基礎共通科目は学科別によらないクラス編成、専門科目は学科別により授業が行なわれている。

9 教員免許状の取得方法

中学校・高等学校の教員となるためには、教員免許状を取得しなければならない。そのためには、卒業に必要な単位のはかに、「教科に関する専門科目」および「教職に関する専門科目」の履修、その他の条件が必要である。これらの条件をみだす為には、第1年度から計画をたて、所要科目を履修するようにしなければならない。なお、教員免許状取得についてのくわしい点は、教育学部の「教職課程要項」を熟読し、不明の点は教職事務担当者に問合せること。

(1) 本学部で取得できる教員免許状の種類

中学校教諭1級普通免許状	教科……数学・理科・職業
高等学校教諭2級普通免許状	教科……数学・理科・工業

(2) 各学科で取得できる免許状

免許状授与の所要資格を得させる為の課程をおく学科	免許状の種類		備 考
	中学1級	高校2級	
数 学 科	数 学	数 学	(注) 1. 左に示した学科は免許状の教科の専門科目が比較的多く含まれている学科で、必ずしも当該免許教科を取得するために設置されていない。不足の専門科目は他学部又は他学科の聴講によって補うことができる。 2. 左以外の学科においても免許状を取得できる場合がある
資 源 工 学 科	理 科	理 科	
応 用 化 学 科	理 科	理 科	
金 属 工 学 科	理 科	理 科	
応 用 物 理 学 科	理 科	理 科	
工 業 経 営 学 科	職 業	工 業	
化 学 科	理 科	理 科	
物 理 学 科	数学・理科	数学・理科	

(3) 免許状授与の課程をおく学科の「教科に関する専門科目」の該当科目一覧表

[中学校教諭1級普通免許状]

免許教科 理科

資源工学科

教科に関する専門科目	該 当 科 目 単 位 数 ()		
物 理 学 (実験を含む)	物理学B(4)	物理学D(4)	材料力学 B(4)
	流体力学(2)	岩石力学(2)	工学基礎実験(2)
	電気実験(1)	機械実験(1)	資源工学実験(2)
化 学 (実験を含む)	化学 B(4)	化学 C(4)	工業熱力学(2)
	化学工学 I(2)	化学分析実験(2)	物理化学実験(1)
生 物 学 (実験を含む)			
地 学 (実験を含む)	地 学(4)	鉱物学・岩石学(4)	地質学・鉱床学(2)
	地質図学(2)	鉱物学・岩石学実験(2)	地質学・(1)
	鉱物工学A(2)	鉱物工学B(2)	鉱床学実験
上記科目の 関連科目	電気工学B(4)	機械工学A(4)	地圧支保概論(2)
	開発機械(2)	爆破工学(2)	運搬工学(2)
	開発計画(4)	開発工学概論(2)	物理選鉱学(2)
	浮遊選鉱学(2)	燃料工学(2)	生産冶金学(2)

産 業 公 害(2)	水 質 汚 濁 概 論(2)	火 薬 学(4)
事 前 処 理 工 学(4)	原 料 工 学 概 論(2)	

(高等学校教諭 2級普通許状)

免許教科 理科

資源工学科

教科に関する 専門科目	該 当 科 目 単 位 数 ()		
物 理 学	物 理 学B(4) 流 体 力 学(2)	物 理 学D(4) 岩 石 力 学(2)	材 料 力 学B(4)
化 学	化 学B(4) 化 学 工 学I(2)	化 学C(4)	工 業 熱 力 学(2)
生 物 学			
地 学	地 学(4) 地 質 図 学(2)	鉱 物 学・岩 石 学(4) 鉱 物 工 学A(2)	地 質 学・鉱 床 学(2) 鉱 物 工 学B(2)
物理学実験・ 化学実験・生 物学実験・地 学実験	工学基礎実験(2) 物理化学実験(1) 鉱 物 学・(2) 岩 石 学 実 験	電 気 実 験(1) 化 学 分 析 実 験(2) 地 質 学・(1) 鉱 床 学 実 験	機 械 実 験(1) 資 源 工 学 実 験(2)
上記科目の 関連科目	電 気 工 学B(4) 開 発 機 械(2) 開 発 計 画(4) 物 理 選 鉱 学(2) 生 産 冶 金 学(2) 火 薬 学(4)	機 械 工 学A(4) 爆 破 工 学(2) 開 発 工 学 概 論(2) 浮 遊 選 鉱 学(2) 産 業 公 害(2) 事 前 処 理 工 学(4)	地 圧 支 保 概 論(2) 運 搬 工 学(2) 原 料 工 学 概 論(2) 燃 料 工 学(2) 水 質 汚 濁 概 論(2)

〔中学校教諭 1 級普通免許状〕

免許教科 理科

応用化学科

教科に関する 専門科目	該 当 科 目 単 位 数 ()		
物 理 学 (実験を含む)	物 理 学G(2)	工 学 基 礎 実 験(2)	
化 学 (実験を含む)	化 学 工 学 I(2) 有 機 化 学 (II)(2) 物 理 化 学 (II)(2) 化 学 工 学 III(2) 物 理 化 学 実 験(2) 構 造 有 機 化 学(2) 界 面 化 学(2) 有 機 工 業 化 学(4) 無 機 合 成 化 学(2) 高 分 子 化 学 (I)(2) 生 物 化 学 (I)(2) 構 造 化 学(2) 機 器 分 析 法 A(2) 放 射 化 学(2) 生 物 化 学 工 業(2)	無 機 化 学(4) 有 機 化 学 (III)(2) 物 理 化 学 (III)(2) 分 析 化 学(2) 工 業 化 学 実 験 (I)(2) 有 機 反 応 機 構(2) 量 子 化 学 (I)(2) 工 業 化 学 実 験 (II)(2) 鉱 物 化 学(2) 高 分 子 化 学 (II)(2) 生 物 化 学 (II)(2) 反 応 工 学 B(2) 機 器 分 析 法 B(2) 触 媒 化 学(2) 環 境 化 学(2)	有 機 化 学 (I)(2) 物 理 化 学 (I)(2) 化 学 工 学 II(2) 化 学 分 析 実 験(2) 化 学 工 学 実 験 (I)(2) 配 位 化 合 物 化 学(2) 無 機 工 業 化 学(2) 化 学 工 学 実 験 (II)(2) 石 油 化 学(2) 電 気 化 学(2) 量 子 化 学 (II)(2) 工 業 材 料(4) 光 反 応 化 学(2) 高 分 子 化 学 工 業(2)
生 物 学 (実験を含む)			
地 学 (実験を含む)			
上 記 科 目 の 関 連 科 目			

(高等学校教諭 2 級普通免許状)

免許教科 理科

応用化学科

教科に関する 専門科目	該 当 科 目 単 位 数 ()		
物 理 学	物 理 学G(2)		
	化 学 工 学 I(2) 有 機 化 学 (II)(2) 物 理 化 学 (II)(2) 化 学 工 学 III(2)	無 機 化 学(4) 有 機 化 学 (III)(2) 物 理 化 学 (III)(2) 分 析 化 学(2)	有 機 化 学 (I)(2) 物 理 化 学 (I)(2) 化 学 工 学 II(2) 構 造 有 機 化 学(2)

化 学	有機反応機構(2) 量子化学(I)(2) 無機合成化学(2) 高分子化学(I)(2) 生物化学(I)(2) 構造化学(2) 機器分析法A(2) 放射化学(2) 生物化学工業(2)	配位化合物化学(2) 無機工業化学(2) 鉱物化学(2) 高分子化学(II)(2) 生物化学(II)(2) 反応工学B(2) 機器分析法B(2) 触媒化学(2) 環境化学(2)	界面化学(2) 有機工業化学(4) 石油化学(2) 電気化学(2) 量子化学(II)(2) 工業材料(2) 光反応化学(2) 高分子化学工業(2)
生 物 学			
地 学			
「物理実験・ 化学実験 生物学実験・ 地学実験」	化学分析実験(2) 化学工学実験(I)(2) 工学基礎実験(2)	物理化学実験(2) 工業化学実験(II)(2)	工業化学実験(I)(2) 化学工学実験(II)(2)
上記科目の 関連科目			

〔中学校教諭1級普通免許状〕

免許教科 理科

金属工学科

教科に関する 専門科目	該 当 科 目 単 位 数 ()		
物 理 学 (実験を含む)	物理学B(4) X線金属学(2) 材料強度学II(2) 半 導 体(2)	物理学D(4) 金属材料力学(4) 金属学実験A(2) 伝熱工学(2)	金属物理学(4) 材料強度学I(2) 工学基礎実験(2)
化 学 (実験を含む)	鉄鋼材料学A(2) 非鉄金属材料I(2) 冶金熱力学(2) 冶金反応速度論(2) 産業公害(2)	鉄鋼材料学B(2) 非鉄金属材料II(2) 金属組織学I(2) 物理化学実験(1) 水質汚濁概論(2)	金属電気化学I(2) 金属物理化学(4) 金属組織学II(2) 金属学実験B(1)
生 物 学 (実験を含む)			
地 学 (実験を含む)			

上記科目の 関連科目	鉄冶金学Ⅰ(2)	鉄冶金学Ⅱ(2)	冶金学総論(2)
	非鉄冶金学(2)	鋳物工学(2)	塑性加工学Ⅰ(2)
	粉末冶金学(2)	金属学実習(1)	金属表面工学A(2)
	金属表面工学B(2)	液体金属論(2)	熱処理理論(2)
	金属表面処理(2)	原子炉燃料・材料(2)	非金属材料学(2)
	金属の機器分析(2)		

(高等学校教諭 2級普通免許状)

免許教科 理科

金属工学科

教科に関する 専門科目	該 当 科 目 単 位 数 ()		
物 理 学	物理学B(4) X線金属学(2) 材料強度学Ⅱ(2)	物理学D(4) 金属材料力学(4) 伝熱工学(2)	金属物理学(4) 材料強度学Ⅰ(2) 半 導 体(2)
化 学	金属電気化学Ⅰ(2) 非鉄金属材料Ⅰ(2) 冶金熱力学(2) 冶金反応速度論(2)	鉄鋼材料学A(2) 非鉄金属材料Ⅱ(2) 金属組織学Ⅰ(2) 産 業 公 害(2)	鉄鋼材料学B(2) 金属物理化学(4) 金属組織学Ⅱ(2) 水質汚濁概論(2)
生 物 学			
地 学			
「物理実験・ 化学実験 生物学実験・ 地学実験」	工学基礎実験(2) 金属学実験B(1)	物理化学実験(1)	金属学実験A(2)
上記科目の 関連科目	鉄冶金学Ⅰ(2) 非鉄冶金学(2) 粉末冶金学(3) 金属表面工学B(2) 金属の機器分析(2) 金属表面処理(2)	鉄冶金学Ⅱ(2) 鋳物工学(2) 金属学実習(1) 液体金属論(2) 原子炉燃料・材料(2)	冶金学総論(2) 塑性加工学Ⅰ(2) 金属表面工学A(2) 熱 処 理 論(2) 非金属材料学(2)

[中学校教諭 1級普通免許状]

免許教科 職業

工業経営学科

教科に関する 専門科目	該 当 科 目 単 位 数 ()	
産業概説	工業概論(2)	
職業指導	職業指導(4)	
農業・工業・ 商業・水産	経営経済学(2) 簿記及原価計算演習(2) 市場調査(2) 商業科目を除く全科目	産業労働法規(4) マーケティング(4) 会計学(2)
「農業実習・ 工業実習・ 商業実習・ 水産実習・ 商船実習」	管理工学実験(2) レイアウト運搬実験(1)	作業測定実験(1) 工場運営実習(1)
上記科目の 関連科目		

(高等学校教諭 2級普通免許状)

免許教科 工業

工業経営学科

教科に関する 専門科目	該 当 科 目 単 位 数 ()	
工業の 関係科目	経営経済学, 産業労働法規, 簿記及原価計算演習, マーケティング, 市場調査, 会計学の商業科目を除く全科目	
職業指導	職業指導(4)	
上記科目の 関連科目		

[中学校教諭 1級普通免許状]

免許教科 理科

応用物理学科

教科に関する 専門科目	該 当 科 目 単 位 数 ()		
	物理学概論(2)	物理学B(4)	理論物理学通論(4)
	物理学演習(4)	応用物理学演習(4)	電磁気学(4)

物理学 (実験を含む)	回路理論(4) 物理学実験学(4) 工学基礎実験(2)	連続体の物理(4) 計測原論A(4) 応用物理学実験(A)(4)	電子工学(4) 計測原論B(4) 応用物理学実験(B)(2)
化学 (実験を含む)	統計力学(A)(2) 物性物理学(A)(4) 電波物性論(2)	統計力学(B)(4) 物性物理学(B)(2)	量子力学(A)(4) 真空技術(2)
生物学 (実験を含む)	分子構造論(2)		
地学 (実験を含む)	結晶物理学(2) 原子核実験学(2)	原子力工学(2)	原子核A(4)
上記科目の 関連科目			

(高等学校教諭 2級普通免許状)

免許教科 理科

応用物理学科

教科に関する 専門科目	該 当 科 目 単 位 数 ()		
物理学	物理学概論(2) 物理学演習(4) 回路理論(4) 物理学実験学(4)	物理学B(4) 応用物理学演習(4) 連続体の物理(4) 計測原論(A)(4)	理論物理学通論(4) 電磁気学(4) 電子工学(4) 計測原論(B)(4)
化学	統計力学(A)(2) 物性物理学(A)(4) 電波物性論(2)	統計力学(B)(4) 物性物理学(B)(2)	量子力学(A)(4) 真空技術(2)
生物学	分子構造論(2)		
地学	結晶物理学(2) 原子核実験学(2)	原子力工学(2)	原子核A(4)
物理実験・ 化学実験 生物学実験・ 地学実験	工学基礎実験(2)	応用物理学実験(A)(4)	応用物理学実験(B)(2)
上記科目の 関連科目			

[中学校教諭 1 級普通免許状]

免許教科 数学

数学科

教科に関する 専門科目	該 当 科 目 単 位 数 ()		
代 数 学	一般代数学(4) 代 数 学Ⅱ(4) 代 数 演 習Ⅱ(2)	代 数 学Ⅰ(4) 整 数 論(4)	代 数 幾 何(4) 代 数 演 習Ⅰ(2)
幾 何 学	位 相 空 間(4) 位 相 幾 何 学(4) 幾 何 演 習Ⅰ(2)	幾 何 学(4) 微 分 幾 何 学(4) 幾 何 演 習Ⅱ(2)	多 様 体(4) 幾 何 学 特 論(4)
解 析 学	関 数 論Ⅰ(4) 関 数 論Ⅱ(4) 関 数 解 析Ⅰ(4) 応 用 関 数 論(4) 数 値 解 析(4) 関 数 解 析 演 習Ⅰ(2)	解 析 学(4) 常 微 分 方 程 式(4) 積 分 論(4) 偏 微 分 方 程 式Ⅱ(4) 解 析 演 習Ⅰ(2) 関 数 解 析 演 習Ⅱ(2)	実 関 数 論(4) 偏 微 分 方 程 式Ⅰ(4) 数 値 計 算 法(4) 関 数 解 析Ⅱ(4) 解 析 演 習Ⅱ(2)
統 計 学	数 理 統 計 学Ⅰ(4) 応 用 統 計 学(4)	数 理 統 計 学Ⅱ(4) 数 理 統 計 演 習Ⅰ(2)	確 率 論(4) 数 理 統 計 演 習Ⅱ(2)
測 量			
上 記 科 目 の 関 連 科 目	電 子 計 算 法(4) オ ー ー レ ー ー サ ー ー シ ー ー テ ー ー 空 気 力 学(4)	数 学 基 礎 論Ⅰ(4) 情 報 科 学 概 論(4) 最 適 値 問 題(4)	数 学 基 礎 論Ⅱ(4) 数 理 經 済 学(4) 解 析 力 学(4)

(高等学校教諭 2 級普通免許状)

免許教科 数学

数学科

教科に関する 専門科目	該 当 科 目 単 位 数 ()		
代 数 学	一般代数学(4) 代 数 学Ⅱ(4) 代 数 演 習Ⅱ(2)	代 数 学Ⅰ(4) 整 数 論(4)	代 数 幾 何(4) 代 数 演 習Ⅰ(2)
幾 何 学	位 相 空 間(4) 位 相 幾 何 学(4) 幾 何 演 習Ⅰ(2)	幾 何 学(4) 微 分 幾 何 学(4) 幾 何 演 習Ⅱ(2)	多 様 体(4) 幾 何 学 特 論(4)
	関 数 論Ⅰ(4) 関 数 論Ⅱ(4)	解 析 学(4) 常 微 分 方 程 式(4)	実 関 数 論(4) 偏 微 分 方 程 式Ⅰ(4)

解析学	関数解析Ⅰ(4) 応用関数論(4) 数値解析(4) 関数解析演習Ⅱ(2)	積分論(4) 偏微分方程式Ⅱ(4) 解析演習Ⅰ(2) 関数解析演習Ⅱ(2)	数値計算法(4) 関数解析Ⅱ(4) 解析演習Ⅱ(2)
統計学 測 量	数理統計学Ⅰ(4) 応用統計学(4)	数理統計学Ⅱ(4) 数理統計演習Ⅰ(2)	確率論(4) 数理統計演習Ⅱ(2)
上記科目の 関連科目	電子計算法(4) オペレーションズ オリサーチ(4) 空気力学(4)	数学基礎論Ⅰ(4) 情報科学概論(4) 最適値問題(4)	数学基礎論Ⅱ(4) 数理経済学(4) 解析力学(4)

〔中学校教諭1級普通免許状〕

免許教科 数学

物理学科

教科に関する 専門科目	該 当 科 目 単 位 数 ()		
代 数 学	数学概論Ⅰ(2)	物理数学A(4)	
幾 何 学	光 学(4)	物理数学C(4)	
解 析 学	物理数学B(4)	数学演習(2)	数学概論Ⅱ(4)
統 計 学	応用確率過程(2)		
測 量			
上記科目の 関連科目			

(高等学校教諭2級普通免許状)

免許教科 数学

物理学科

教科に関する 専門科目	該 当 科 目 単 位 数 ()		
代 数 学	数学概論Ⅰ(2)	物理数学A(4)	
幾 何 学	光 学(4)	物理数学C(4)	
解 析 学	物理数学B(2)	数学演習(4)	数学概論Ⅱ(4)
統 計 学 測 量	応用確率過程(2)		
上記科目の 関連科目			

[中学校教諭1級普通免許状]

免許教科 理科

物理学科

教科に関する 専門科目	該 当 科 目 単 位 数 ()		
物 理 学 (実験を含む)	物 理 学B(4)	理論物理学通論(4)	物理学演習(A)(4)
	物理学演習(B)(4)	電 磁 気 学(4)	連続体の物理(4)
	回路理論(4)	電 子 工 学(4)	物理実験学(4)
	計測原論A(4)	計 測 原 論B(4)	物理実験(A)(2)
	物理実験(B)(4)	物 理 実 験(C)(2)	
化 学 (実験を含む)	統計力学A(2)	統計力学B(4)	量子力学A(4)
	量子力学B(2)	物性物理学A(4)	物性物理学B(2)
生 物 学 (実験を含む)	生 物 物 理(4)	分子構造論(2)	
地 学 (実験を含む)	地球および天体物理学(2)	原 子 核A(4)	原 子 核B(4)
	結晶物理学(2)	原子力工学(2)	原子核実験学(2)
上記科目の 関連科目			

(高等学校教諭2級普通免許状)

免許教科 理科

物理学科

教科に関する 専門科目	該 当 科 目 単 位 数 ()		
物 理 学	物 理 学B(4)	理論物理学通論(4)	物理学演習(A)(4)
	物理学演習(B)(4)	電 磁 気 学(4)	回路理論(4)
	連続体の物理(4)	電 子 工 学(4)	物理実験学(4)
	計測原論A(4)	計 測 原 論B(4)	
化 学	統計力学A(2)	統計力学B(4)	量子力学A(4)
	量子力学B(2)	物性物理学A(4)	物性物理学B(2)
生 物 学	生 物 物 理(4)	分子構造論(2)	
地 学	地球および天体物理学(2)	原 子 核A(4)	原 子 核B(2)
	結晶物理学(2)	原子力工学(2)	原子核実験学(2)
物理実験・ 化学実験 生物学実験・ 地学実験	物 理 実 験(A)(2)	物 理 実 験(B)(4)	物 理 実 験(C)(2)
上記科目の 関連科目			

[中学校教諭1級普通免許状]

免許教科 理科

化学科

教科に関する 専門科目	該 当 科 目 単 位 数 ()		
物 理 学 (実験を含む)	物 理 学B(4) 理論物理学通論(4)	量 子 力 学A(4) 工 学 基 礎 実 験(1)	物 性 物 理 学A(4)
化 学 (実験を含む)	有 機 化 学B(4) 分 析 化 学(2) 量 子 化 学B(2) 量 子 化 学II(2) 高 分 子 化 学(I)(2) 石 油 化 学(2)	物 理 化 学A(2) 統 計 力 学(2) 配 位 化 合 物 化 学(2) 電 気 化 学(2) 高 分 子 化 学(II)(2) 物 理 化 学 実 験(2)	物 理 化 学B(2) 量 子 化 学A(4) 構 造 化 学A(2) 触 媒 化 学(2) 無 機 合 成 化 学(2) 無 機 高 分 子 化 学(2)
地 学 (実験を含む)	無機分析化学実験(2)		
生 物 学 (実験を含む)	有 機 化 学 実 験(2) 分 子 構 造 論(2)	構 造 化 学A(2)	構 造 化 学B(4)
上 記 科 目 の 関 連 科 目			

[高等学校教諭2級普通免許状]

免許教科 理科

化学科

教科に関する 専門科目	該 当 科 目 単 位 数 ()		
物 理 学	物 理 学B(4) 理論物理学通論(4)	量 子 力 学A(4)	物 性 物 理 学A(4)
化 学	有 機 化 学B(4) 分 析 化 学(2) 量 子 化 学B(2) 量 子 化 学II(2) 高 分 子 化 学(I)(2) 石 油 化 学(2)	物 理 化 学A(2) 統 計 力 学(2) 配 位 化 合 物 化 学(2) 電 気 化 学(2) 高 分 子 化 学(II)(2) 無 機 高 分 子 化 学(2)	物 理 化 学B(2) 量 子 化 学A(4) 構 造 化 学(2) 触 媒 化 学(2) 無 機 合 成 化 学(2)
生 物 学	構 造 化 学A(2)	構 造 化 学B(4)	分 子 構 造 論(2)
地 学			
物 理 実 験・ 化 学 実 験 生 物 学 実 験・ 地 学 実 験	有 機 化 学 実 験(2) 無 機 分 析 化 学 実 験(2)	物 理 化 学 実 験(2)	工 学 基 礎 実 験(1)
上 記 科 目 の 関 連 科 目			

10 成績の判定

本学部の成績は、A・B・C・D・Fをもって表示し、A～Dを合格、Fを不合格とする。なお、外部に提出する成績証明書には、当分の間、優・良・可の表示を使用する。A・B・C・D・Fおよび優・良・可を点数と比較すると次のとおりである。

点 数	100～90	89～80	79～70	69～60	59以下
表示方式 (成績原簿)	A	B	C	D	F
(成績証明書)	優		良	可	
備 考	合 格				不 合 格

11 9月卒業について

修業年限（4年）内に、一部の科目について単位未取得のため卒業出来なかった者が次の基準に該当した場合は、次年度（5年度以降）の前期末終了後（9月15日付）に卒業することができる。

- イ すでに履修した科目につき、未受験または不合格のため卒業できなかった者が、次の年度の前期中当該科目を履修した上で試験に合格したとき。但し、16単位をもって限度とする。
- ロ 履修しなかった科目につき、次年度の前期末に履修の上、試験に合格したとき。ただし、前期で講義の終了する科目に限る。
- ハ 卒業論文の未提出または不合格の理由により卒業出来なかった者が、次年度の前期末に論文を提出し、合格したとき。

12 復学・再入学・編入学生の履修方法

(1) 復 学

- イ 復学者の学科目履修上の学年度（以下学習年度という）は、休学時の学年度とする。

この場合、学年の途中で休学したときも、その年度の就学期間は在学年数に算入しない。したがって、その学年全期間休学したものとみなす。

- ロ 復学者は、復学時の学習年度に在籍する学生と同じ教育課程を履修する。

(例 51年度入学者がその年度休学して、52年度に復学したときは、52年度の教育課程を適用する。)

- ハ 復学者について、入学時と復学時の教育課程に相違のある場合、既履修学科目の単位の認定および復学後履修する学科目の指定は、所属する学科の主任および一般教育の主任が、これを行なう。

(2) 編入(学士編入を含む)

- イ 編入学者は、編入時の学習年度に在籍する学生と同じ教育課程を履修する。

(例 51年度3年編入者には、49年度教育課程を適用する。)

- ロ 編入学者の既履修学科目についての単位の認定および入学後履修する学科目の指定は、所属する学科の主任および一般教育の主任がこれを行ない、保健体育科目に関して必要のある場合は、これを体育局長に依頼する。

(注) 保健体育科目の履修については体育局発行の「編入者の保健体育履修について」を熟読の上、下記の書類を体育局に提出し、以後の保健体育履修についての指示をうけること。

a 学外からの編入者は、単位取得の認定に必要な成績証明書(または卒業証明書)と編入届。

b 学内より転部、転科者は、編入、転科届のみ。

(3) 再入学

- イ 再入学者の学習年度は退学時の学習年度とする。

ただし、退学した年度に学科目を履修し学年末試験を受験した者については、その次の学習年次とする。

- ロ 再入学者は、再入学時の学習年度に在籍する学生と同じ教育課程を履修する。

(例 48年度入学し2年で退学、51年度2年に再入学した者には、50年度の教育課程を適用する。)

- ハ 再入学者について、入学時と再入学時の教育課程に相違のある場合、既履修学科目の単位の認定および再入学後履修する学科目の指定は、所属する学科の主任および一般教育の主任がこれを行なう。

13 聴講生・委託学生・外国学生

(1) 選考・入学

本学には上記の学生の制度がある。委託学生及び聴講生の入学は、学期の始めに限って選考のうえ許可される。但し委託学生は事情により、学期の途中においても入学を許可されることがある。聴講生の場合には専門科目についてのみ聴講出来る。なお委託学生又は聴講生に対する入学の許可は、その年度限りであって、引続き聴講したい希望の者は改めて願出が必要がある。

外国学生は、外国において通常の課程による12年以上の学校教育を修了した者又はこれに準ずる者で、特別の選考を経て入学又は編入学を許可される。

(2) 科目の履修

委託学生、聴講生の受講は聴講料の最高限度に相当する単位数（29単位）を限度とする。

聴講生の受講できる科目は、専門の講義科目に限るものとするが、実験科目についても施設の許す範囲でこれを許可する。

外国学生は、学修の必要に応じて、一般に配置された科目の一部に代え又はこれに加えて特別の科目を履修しなければならない場合がある。

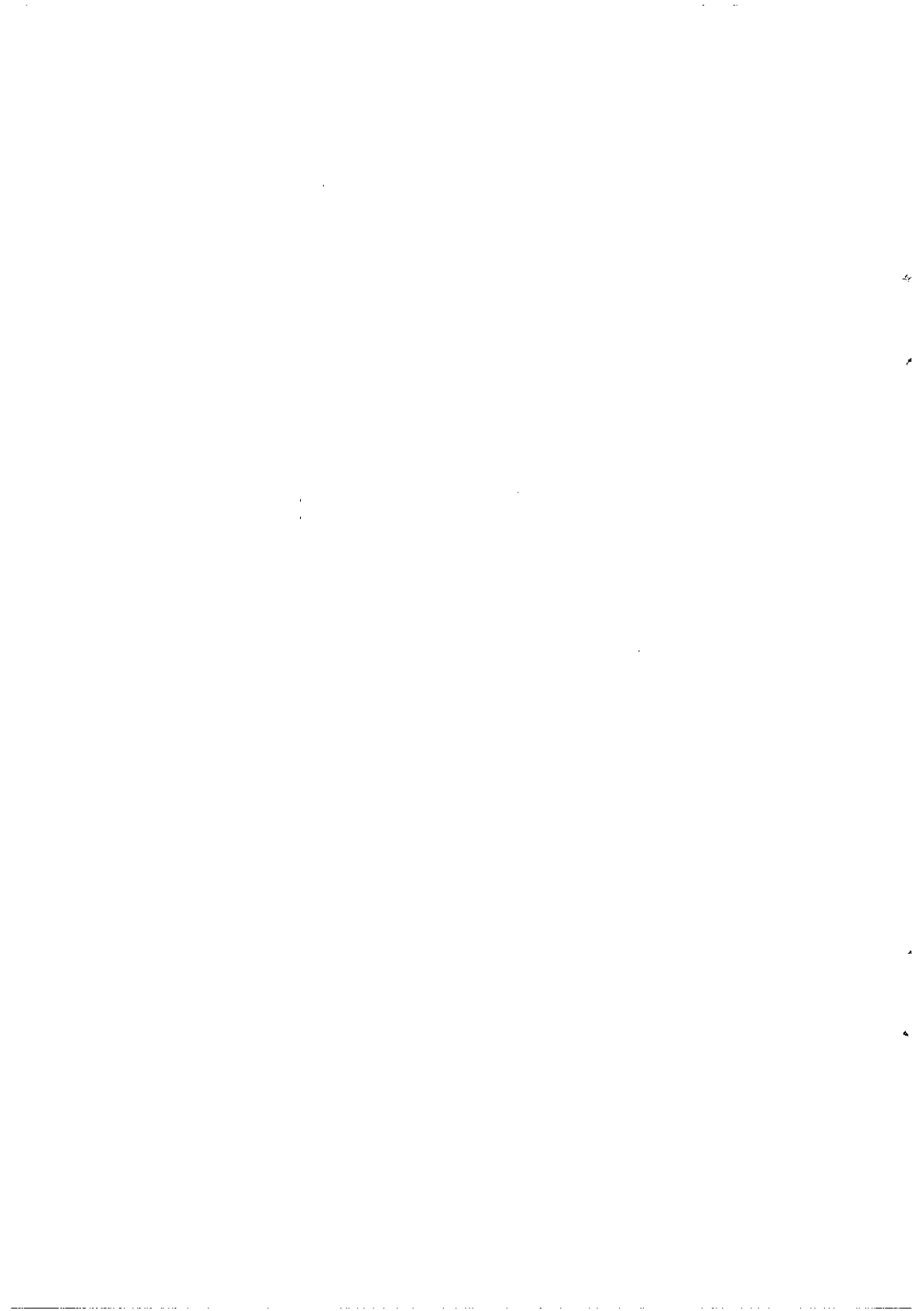
(3) 委託学生・聴講生の学費

	委託学生 (一般)		聴講生 (本学卒業生)	
入 学 金	12 単 位 まで	30,000円	12 単 位 まで	15,000円
	13 単 位 以 上	50,000円	13 単 位 以 上	25,000円
聴 講 料	1 単 位 に つ き	10,700円	同	左
	最 高 額	320,000円	同	左
選 考 料		8,000円	同	左

※ 実験・実習科目を受講する場合は、上記のほか実験実習料を徴収する。

III

教員研究内容紹介
各 実 験 室 案 内



機 械 工 学 科

教 授 稲 田 重 男：工作機械，機械工作，特に金属切削理論に関する研究。動力伝動装置，特に巻掛け伝動装置の伝動特性に関する研究。

教 授 井 口 信 洋：変態超塑性。鋼溶接構造設計。義足の強度と構造。

教 授 奥 村 敦 史：マトリクス解法の構造物振動問題への応用に関する研究，構造減衰に関する基礎的研究。

教 授 加 藤 一 郎：2足歩行機械の開発。制御義足の研究。両側人間型人工の手の研究。筋電義手の研究。硬さ感覚の研究。皮膚感覚と電気刺激。

教 授 小 泉 睦 男：電気増熱火炎と高温燃焼ガスの挙動。燃焼室のモデル化と相致条件。燃焼振動。減圧沸騰による液体の微粒化。都市排棄物の資源化。

教 授 斎 藤 孟：内燃機関の燃焼と排気。自動車の排出ガスとその清浄化。

教 授 関 敏 郎：①静かなるディーゼル機関を求めて（ピストンスラップ騒音の抑制）。②クランク軸系の振れ，曲げ連成振動の抑制防止対策の研究。③高負荷高速度ディーゼル機関の性能向上（ガスケット特性改善による出力向上）。

教 授 高 橋 利 衛：Hierchical System Identification.

教 授 田 島 清 瀨：高圧力比下における弁前後の流れと振動および騒音との関係，高速液体流発生装置の解発とその応用，ポンプのキャビテーション試験方法。

教 授 土 屋 喜 一：流体制御素子の基礎研究。人工呼吸器，心臓マッサージ，人工心臓など医工学に関する研究。生物制御に関する研究。うず流量計に関する研究。

教 授 中 根 金 作：アーク溶接部の凝固過程に関する研究。スポット溶接現象に関する研究。電磁圧接に関する研究。

教 授 林 郁 彦：金属材料の粒内不均一変形と強度。せんい強化複合材料の変形と強度。衝撃変形と強度。

教 授 広 瀬 正 吉：ショットピーニングによる金属の疲れ強さ向上。粒子吹付による金属の削食および変形加工に関する研究。

教 授 松 浦 佑 次：高静水圧押し出しによる組合せ材，ぜい性材の塑性変形機構の解析。特殊鋼の冷間型鍛造における断熱変形機構と特性。

教 授 森 田 鈞：時計用歯車の研究。内接歯車ポンプの歯形の研究。遊星歯車

装置の研究。歯車のトルク変動に関する研究。

教授 山根雅巳：高温雰囲気中における高速疲労及び気柱の振動に関する研究。
海洋機器の研究開発。

教授 和田稲苗：弾性流体潤滑，乱流流体潤滑，流体潤滑の近接問題などの理論および実験に関する研究ならびに機械設計に関する諸問題。

教授 大田英輔：高速圧縮性流体中の衝撃波や各種の波動，高速気流によって生じる管路の振動・騒音，ねじ圧縮機をもちいた冷凍機の性能などの研究。

教授 川瀬武彦：流体機械を含んだシステムの非定常現象に関する研究，混相流に関する研究。

教授 河合素直：熱プロセスのシステム・ダイナミクスに関する研究。フィン表面における相変化をとまなう熱伝達に関する研究。

助教授 本村 貢：塑性工学における力学特性・変形特性などの解析および実験に関する研究。形材加工の塑性変形機構と塑性変形を伴なう潤滑機構の研究。

助教授 林 洋次：非ニュートン流体や粘弾性流体による潤滑問題などの理論および実験に関する研究。潤滑問題における有限要素法の研究。

助教授 永田勝也：燃焼における大気汚染物質の発生機構とその抑制対策。

専任講師 中沢 弘：切削過程・工作機械構造物の動特性，NC工作機械精度，仕上面あらさを向上させる工具，切断加工，通電加熱切削などの研究。

電気工学科

教授 秋月影雄：確率的なシステムの制御理論および不規則データ処理。リレー系などの非線形システムの解析。大気などの環境汚染制御。

教授 石塚喜雄：電気鉄道の運転理論に関する電磁力的研究，同新駆動装置の開発とその回路論的アプローチ。

教授 尾崎 肇：層状構造物質の超伝導。非晶質半導体の電氣的光学的性質。半導体の電子音波相互作用。

教授 小貫 天：サイリスタ応用回路。パワートランジスタによる電動機制御，リニアモータ。磁気浮上。超電導機器。小型モータ。電動機の騒音。

教授 門倉敏夫：デジタル計算機の論理設計，マイクロプログラミング及びこ

れに必要なソフトウェアの開発。

教授 木俣守彦：固体の表面状態，Dielectric Relaxation Case 半導体，不安定性の研究及びその応用。

教授 小林精次：制御工学における主として理論的な側面の研究。特に最適制御理論，あいまいさを含むシステムの制御問題などの研究。

教授 示村悦二郎：最適制御理論の研究。主として，分布定数系，大規模系の最適制御問題および線形系のフィードバック制御理論。

教授 白井克彦：音声について，発話機構，音声認識，合成，話者認識など。自然言語処理。確率的な要素を含む非線形システムの解析，モデル化。

教授 高木純一：生体システム，社会システムに対する工学的研究，特に適応，試行錯誤などの自己制御システムとしての挙動の研究。

教授 田村康男：電力システムの計画と運用。系統ダイナミクスの解明。最適化問題。コンピューター応用。エネルギー問題。燃料電池をもつ配電系統の設計。

教授 成田誠之助：電力システムの階層制御システムに関する研究。計算機制御システムの冗長設計に関する研究。

教授 三田洋二：セラミック電気材料の試作研究。

教授 山崎秀夫：気体に高電圧が印加された際に生じる放電機構であるコロナ，スパーク，アークの研究と高電圧機器に応用することによる改良と新機種の開発。

教授 矢作吉之助：電気絶縁材料の電気伝導と絶縁破壊の機構を主として電気物理学の立場から実験的に又理論的に解明しようとする研究。

助教授 栗田忠四郎：熱電気工学の研究。熱電気現象の歴史および基礎理論から応用に至る熱電気に関連するすべての問題についての研究。特に接触に関する研究。

助教授 松本隆：電気回路網の解析及び合成。特に非線形回路網の状態空間における解析及び合成，線形回路網の周波領域における解析および合成。電気回路網におけるパラメータ最適問題。

助教授 鈴木克生：固体中での低温における輸送現象の研究。

資源工学科

教授 今井直哉：わが国における接触交代鉤床の研究。鉤石中の微小鉤物のEPXMA および微小焦点X線回折装置による研究。

教授 大塚良平：工業原料鉱物の鉱物化学的および熱的研究。水熱条件下における鉱物の挙動の研究および合成。

教授 萩原義一：大型露天採掘の生産と保安に関する研究，骨材とセメントの化学的鉱物学的反応の研究，未利用骨材の適性利用に関する研究。

教授 原田種臣：硫化鉄鉱の選鉱と利用技術。製鉄原料処理の最適化。未利用資源の原料化および資源リサイクル。

教授 橋本文作：構造物とくに坑内構造周辺の地圧問題。岩石の脆性破壊とくに熱破壊，坑内通気と空気調和。

教授 房村信雄：鉱山保安。ガス・炭じん爆発防止。可燃性ガスの拡散，大気中の浮遊粒子状物質の物性と挙動。熔融金属から発生するフュームの研究。

教授 伏見弘：粘土鉱物による重金属イオンの除去。重質油中含有重金属類の除去と再生。ガソリン省力化の研究。廃棄物含有成分の有効利用研究。地熱開発。

教授 森田豊夫：各種環境下に働く個人および集団に対しての肉体的精神的作業強度と作業意欲の研究。

教授 山崎豊彦：地下深部油層の流動性，貯留特性に関する研究。油層の回収率向上に関する研究。オイルサンドより原油を回収する方法と回収油の特徴。

教授 山崎純夫：堆積岩の構造地質学的研究。各地質時代の堆積岩に含有される炭質物の石炭組織学的研究。

建築学科

教授 安東勝男：建築設計計画。都市の再開発。教育施設。オーディトリウム施設。

教授 井上宇市：空気調和の室内環境，機器に関するシミュレーション。地域冷暖房システムの経済性，病院のバイオクリーン方式。

教授 池原義郎：建築設計。人間一空間系の研究。ガウディ，シュタイナー等を中心とする作家論及建築論。

教授 尾島俊雄：都市環境の定量化。主としてエネルギーと熱汚染から都市の計画法を研究。人工環境空間の設計や地域供給処理施設の設計よりアプローチ。

教授 神山幸弘：建築物の構成方法に対し，要素の分割，組立，性能，生産性，工業化に関連する研究。

教授 竹内盛雄：建物の地震応答に関する研究。構造物への入力地震波に関する研究。

教授 武基雄：都市計画における視覚的側面としての、都市環境の類同性、快適性及び景観に関する研究。

教授 谷資信：建築構造学。耐震要素の配置に関する研究。鉄筋コンクリート耐震要素の崩壊過程を含む復元力特性に関する研究。

教授 田中弥寿雄：曲面構造の静的・動的性状の研究。鉄筋コンクリートおよび鉄骨鉄筋コンクリート柱の性状の研究。

教授 田村恭：建築材料の性能評価。新材料の開発システム・建築生産システムの研究。現場作業の合理化。機械化施工の研究。海洋構造物の建設技術。

教授 穂積信夫：建築計画。1950年以後のアメリカにおける、第2世代および第3世代の建築設計方法論の研究。

教授 松井源吾：建物に対する動風圧の実測と解析。壁つき架構の解法と光弾性実験。中空スラブ、合成梁、冷却塔等の応力と耐力。曲線梁の配置計画。架構の経済設計。

教授 南和夫：地盤・基礎・建物を連成振動系としたモデルを用い、電子計算機を利用して、建築物の地震時応答を研究し現在の耐震計算法の改良を計る。

教授 吉阪隆正：建築の設計や都市乃至地域計画として住ということを中心に研究。物的なすがた・かたちのなりたちについて有形学を追及。

教授 渡辺保忠：建築生産史、東西比較住居史がライフワーク。実作研究として現在、高幡山金剛寺五重塔の設計とその基礎的資料の研究に従事。

助教授 戸沼幸市：都市計画、大勢の人間が集って都市が出来たが、集り過ぎて問題が生じた。過密の構造を探り出し、そこにかかわる不具合を除きたい。

応用化学科

教授 宇佐美昭次：酵素の固定化とその連続反応、独立栄養性細菌の産業への新しい利用。有機酸の代謝機構と発酵生産。炭化水素を原料とするSCPの生産。

教授 大坪義雄：DTA、X線による無機化合物の結晶転移にかんする研究。

教授 加藤忠蔵：無機高分子の相転移、化学処理、構造変化の基礎研究とセラミックス材料、電子材料、触媒などへの応用研究。無機有機複合材料の研究。

- 教授 佐藤 匡：光，金属，電気などを用いた新しい有機合成反応の開発。
- 教授 篠原 功：導電性ポリマー，静帯電現象に関する研究。オリゴマー，医療材料に関する研究。
- 教授 城塚 正：超高温反応と装置設計法の研究。光反応装置設計法の研究。水質保全のための高度分離技術の開発。水素燃料システムの開発。
- 教授 鈴木 晴 男：炭水化物（デンプン，糖類など）その他の生体物質およびそれらの誘導体の食品工業的および生化学的利用に関する基礎的研究そのほか。
- 教授 土田 英俊：高分子金属錯体とその触媒機能追求。酸素錯体，エネルギー変換用ポリマーシステム，生体に関連する機能高分子などの分子設計と合成化学的な開発の研究。
- 教授 豊倉 賢：液相からの固化現象（結晶化，凝集物生成），これらの装置・操作の設計法およびそれを含む化学プロセス設計に関する研究。
- 教授 長谷川 肇：不飽和化合物へのHClの付加反応。ミセル系に於ける有機化学反応。金属錯体を利用した反応。エーテルとアセチレン系化合物との光反応。
- 教授 平田 彰：物質移動機構の解明・高度分離技術の開発。活性汚泥による廃水処理プロセスの研究。重質油のガス化・廃プラスチックの再資源化の研究。
- 教授 藤井 修 治：含酸素芳香族および脂肪族化合物の合成と反応。酸化還元樹脂および遷移金属を触媒としたレドックス反応。ゼオライト触媒の研究。
- 教授 宮崎 智 雄：半経験的分子軌道法による，電子状態の計算，振動スペクトルの解析。
- 教授 村井 資 長
- 教授 森田義郎・助教授 菊地英一：重油の接触ガス化脱硫。NO_xの接触除去。遷移金属触媒によるナフサ類のガス化，COの水素化，N-パラフィンの異性化。C₄炭化水素の接触酸化。酸・塩基系触媒の接触機構。
- 教授 吉田 忠：燃料電池その他に関連するエレクトロキャタリスト，プリント配線基板用無電解メッキ，イオン性高分子の界面挙動が主要研究テーマ。
- 助教授 酒井 清 孝：人工腎臓および溶血に関連した医用化学の研究。液中燃焼装置に関する基礎および応用研究。火炎の吹き消え限界に関する実験的および理論的研究。

金属工学科

- 教授 上田 重 朋：金属の腐食とくに応力腐食とその防止。耐摩耗性向上を目的とする表面硬化。アルミニウム合金の表面処理とくに硬質アルマイトの特性。
- 教授 雄谷 重 夫：非鉄金属、主として銅、アルミニウムおよびその合金の溶解、
鋳造および凝固機構、さらにそれらと材料の加工性との関連についての研究。
- 教授 川合 幸 晴：銅硫酸化焙焼の原理の究明。銅合金製造工場の酸洗廃液無害
化の研究。分光光度法による B_0 の定量。
- 教授 鹿島 次 郎：鋳型および鋳型材料の研究。金属の機器分析の研究。
- 教授 加山 延 太 郎：鋳鉄の溶解と凝固。溶融金属の流動性。
- 教授 加藤 栄 一：金属製錬における化学反応の熱力学的ならびに反応速度論的
研究。鉄鋼の凝固時における気泡の生成機構の研究。
- 教授 草川 隆 次：鋼の脱酸の研究。鋼の凝固機構と非金属介在物、機械的性質
の関係。鉄鋼製錬時における脱硫の研究。鋳鉄の接種。鋳鉄の黒鉛球状化機構。
- 教授 堤 信 久：ねずみ鋳鉄、可鍛鋳鉄、球状黒鉛鋳鉄の凝固時および固相に
おける黒鉛化現象。種々の鋳型における鋳鉄の表面組織とその成因。可鍛鋳鉄の脆性の
研究。
- 教授 中 井 弘：各種金属の初期硫化腐食現象。各種金属の酸化一硫化混合腐
食挙動。低合金鋼の温間加工。
- 教授 中田 栄 一：繊維強化複合材の製造、高マンガン鋼の加工硬化、金属ウィ
スカの中性子照射効果、電算機による金属組織の定量化。ホログラフイーによる金属組
織の定量化。
- 教授 中山 忠 行：金属材料の高温酸化挙動。特に酸化被膜の構造。塑性、形態
などに及ぼす、主として金属学的因子の影響について構造化学的に解明し、耐酸化性との
関連性を検討している。
- 教授 長谷川 正義：(1)微量の銅による鋼の焼戻脆性。(2)オーステナイト・ステン
レス鋼の水素脆化。(3)噴射介在物の分散による鋼の強化。(4)高速炉用ステンレス鋼の中
性子損傷と液体 Na による腐食。
- 教授 葉山 房 夫：金属材料の摩擦摩耗。焼結合金摩擦材料。鋳鉄の組織と被削
性。固体潤滑剤と金属の複合材料。
- 教授 藤瀬 直 正：チタンの腐食に及ぼす水素の影響、ジルコニウムの腐食に及

ぼす水素の影響，連続線条材の対極を使用しない電解方式などの研究である。

電子通信学科

教授 伊藤 毅：音響工学の研究。

教授 伊藤 糾次：電子材料（シリコン及び化合物本導体のエピタキシャル成長）。電子物性（イオン注入及びチャネルリング）。新しいエレクトロニクス。

教授 内山 明彦：医学用テレメータの開発，心臓制御装置の研究，医学情報（筋電および腸管音）の解析，計算機用入出力装置の開発。

教授 小原 啓義：情報処理及び人工知能に関する研究，複合計算機システム，データ構造，学習問題，パターン認識，脳波の発生など。

教授 香西 寛：(1)マイクロ波多端子並に可変ハイブリッド回路の研究 (2)マイクロ波アップコンバータ(3)マイクロ波技術の光波への拡張に関する研究。

教授 河村 秀平：音声パターンの認識および合成。カラテレビジョン受像機に関する研究。SWR計（UHF）の試作研究。

教授 清水 司：光領域を含む電磁波と物質の相互作用に関する研究，とくに磁性と量子現象とその応用，ホログラム，光素子と回路など光電子工学の研究。

教授 副島 光積：電磁気学の理論的研究と実験的検討。VLFからマイクロ波を経てサブミリメートル波，光波に至るまでの，アンテナ，伝送路，素子等の研究。

教授 田中 末雄：（電子回路）パターン認識機械，デジタル・フィルタ，定電圧電源，（DC～DC コンバータ）電子計測）音声波形分析，高周波電力測定。

教授 平山 博：回路網理論のトポロジカルな研究を行い更に通信網のトラフィック制御に適用して，網のシステム設計理論を確立する目的で研究している。

教授 堀内 和夫：情報・制御理論，回路とシステム理論，電磁波理論。特に，非線形システム解析・不均一分布定数回路構成・時変回路解析・電磁波伝播論。

教授 富永 英義：データ通信，画像通信，電話交換網および電子計算機システム，等における情報システムの構成の研究，情報回路網の研究。

助教授 大泊 巖：半導体単結晶への重イオン照射効果（イオン注入，照射損傷など），および重イオンを用いる物性測定に関する研究。

工業経営学科

教授 石 館 達 二：設備管理，とくに設備保全システムの設計および評価についての研究。エンジニアリング・エコノミーに関する研究。

教授 石 渡 徳 彌：需要予測，とくに経済時系列における各変動の調整と検出の問題。計量モデルの精度向上，ならびに企業モデルの体系化に関する研究。

教授 池 澤 辰 夫：1 直交実験のわりつけ 2 抜取検査設計 3 信頼性工学 4 管理図法

教授 尾 関 守：省力化に伴う経済性工学に関する研究，並びに生産性と人件費管理に関する研究。

教授 春 日 井 博：在庫（資材・部品，仕掛品，製品）管理システムデザイン。物流多段階システムデザイン。広域地域開発システムデザイン。

教授 塩 沢 清 茂：窒素酸化物の環境中における変化の研究。大気汚染の予測。排煙脱硫の研究。産業排水の化学的処理について。熱集中化方式の研究。

教授 千 賀 正 雄：マーケティング，マネージメントの研究（生産者の立場から）。ソシアルマーケティングの研究。

教授 十代田 三知男：予測・生産・在庫システムの特性および設計に関する研究。システム解析手法の開発。統計量の分布に関する数値計算法の開発。

教授 坪 内 和 夫：人間・機械システムの設計。

教授 中 井 重 行：工場計画理論の体系化。これを中心として，工場計画のための技術の開発（特に，空間設定について）。マテリアルマネジメントの研究。

教授 古 川 光：グループ・テクノロジーにおける部品分類法の研究。産業用ロボットのグリップ方法の研究およびグripper設計基準に関する研究。

教授 村 松 林 太 郎：生産方式の設計。予測，在庫を含んだ生産計画，日程計画の生産管理システムの研究。

教授 横 溝 克 己：①人間性を重視した作業編成，作業速度，消費エネルギー，操作パネルの設計など②作業環境③身体障害者の作業機能測定と適職選定。

教授 渡 邊 眞 一：工場を物的静態システムとして捉え管理システムとの係合いならびに人間関係を中心に考慮した，工場の設計および建設計画に関する研究。

土木工学科

教授 遠藤 郁夫：都市上下水道施設の計画，設計，水処理および水質汚濁機構などに関する研究を行なう。

教授 神山 一：コンクリートの性質の基礎的研究。鉄筋コンクリートおよびプレストレストコンクリート構造物の終極状態設計。

教授 後藤 正司：土の動的性質。主働および受働状態における土中土圧。土の塑性に関する基礎的研究。

教授 佐島 秀夫：矢板岸壁およびセル岸壁の安定。

教授 平嶋 政治：薄肉断面形状のはり，柱を研究対象とし特に載荷により断面形状が変化するときの曲げ振れ，安定，振動問題の解析が当面の課題である。

教授 堀井 健一郎：橋梁設計の合理化に関する研究。特に道路橋の設計活荷重の設定に関する問題。橋梁の耐荷性能の評価に関する諸問題。

教授 村上 博智：シールドセグメントリングの合理的設計法の研究。地中構造物に作用する荷重の評価に関する研究。

教授 森 麟：土質安定の分野の研究。道路舗装，路床の力学的性状についての研究。シールド掘削による地盤の動きについての研究。

教授 米元 卓介：水の挙動に関する研究及び降水と河水との関係（流出問題）を研究する。洪水の現象，その災害防除，水資源の存在とその利用。

教授 銚川 登：フィルダムの浸透流。貯水池の堆砂現象。蛇行河道内の河床変動。河口閉塞現象。海岸侵食の土砂収支の研究。

教授 宮原 玄：上・下部構造の相互作用の解析法に関する研究。「地盤は Winkler 仮定に従い，構造は微小変位理論の範囲で挙動する。」としている。

応用物理学科

教授 飯野 理一：非線形関数解析と非線形偏微分方程式論，とくに写像度の理論とその応用。

教授 市ノ川 竹男：透過型電子顕微鏡と走査型電子顕微鏡の高分解能化と物性への応用。低速，高速電子およびイオン等の固体との相互作用とスペクトロスコピー。

教授 上田 隆三：固体物理学。薄膜及び表面の物理学及び工学。

教授 大照 完：ストカスティック計算機の試作と応用。電算機による画像の

自動処理システムの研究。磁気バブルを用いた光学スキャナーの開発。

教授 大頭 仁：コヒーレント光による眼光学の研究。生理光学。視覚障害者
用人工眼の研究。ホログラフィの応用。光ファイバーと光ICの研究。

教授 加藤 綱 一：電子プラズマの非線形振動。プラズマ乱流。非可逆過程の統
計力学。

教授 小林 謙 三：間接型強誘電体の相転移現象の起因に関する理論的、実験的
研究。結晶の格子歪、電気光学効果、旋光性の精密測定。ミラー型電顕の結晶学的应用
の研究。

教授 小林 寛：磁気バブルドメイン技術の研究。画像情報処理のための新し
いハードウェアの開発研究。

教授 斎藤 信 彦：非線形系（主として格子力学，化学反応）の不安定性とエル
ゴード性。蛋白質分子の静的及び動的性質。その他統計物理，生物物理の諸問題。

教授 中村 堅 一：像情報の表示媒体および記録媒体の研究。像情報の表示方式
および記録方式の研究。

教授 広田 晴 男：大口径写真レンズの研究。水中探視鏡の研究。非金属多層膜
干渉フィルターの研究。球レンズ系の研究。

教授 久村 富 持：パルス型操作部をもつ制御系の最適問題。分布定数系の状態
推定と制御問題。交通制御などの実際の問題への制御理論の応用。

教授 千葉 明 夫：巨大分子の分子鎖，及びその集合形態，及び形態転移の研究。
巨大分子の物理的特性の発現と分子形態との関係についての研究。

助教授 堤 正 義：非線形偏微分方程式及び非線形作用素論の研究・散乱理論の
研究。

数 学 科

教授 有 馬 哲：代数幾何学。

教授 入 江 昭 二：線型偏微分方程式の一般理論，双曲型方程式の初期値—境界
値混合問題。

教授 垣 田 高 夫：線型および非線型偏微分方程式を附随する境界条件，初期条
件のもとに扱い，解の存在，正則性，挙動を調べることに目標を置いている。

教授 木下素夫：代数学，代数学の解析学への応用の研究。

教授 草間時武：数理統計学，特に統計的決定関数論，十分統計量の研究等。

教授 杉山昌平：微分・積分方程式とその応用。最適化問題（非線形計画法，変分学，最適制御。ダイナミックプログラミング）。数値解析。

教授 洲之内治男：関数解析とその応用。

教授 田中忠治：有理型函数の値分布理論。

教授 寺田文行：トポロジー，特にカタストロフィー理論とその応用。コンピュータ・サイエンス，特に言語理論と回路理論。数学教育。

教授 野口 広：幾何学全般につき関心をもっているが，最近では写像の特異点の理論，力学系の理論を研究している。

教授 広瀬 健：(1) 数学基礎論，とくに帰納的関数の理論の研究。(2) 計算機科学，とくにソフトウェアの研究。

助教授 足立恒雄：ガロア体の構成。類数の評価。

助教授 小島 順：微分位相幾何学。多様体上の解析学とくに力学系の理論。

助教授 清水義之：リー群上の調和解析。とくに，半単純リー群の表現論と対称空間上の調和解析。

助教授 室谷義昭：数値解析。

助教授 福山 克：Recursion theory—とくに hierarchy theory と順序数や集合上へ拡張された generalized recursion theory—の研究。

物 理 学 科

教授 浅井 博：筋肉収縮の分子機構。原生動物の行動と運動性。情報伝達素子としての生体膜および人工膜の機能と構造。新しい測定手段の開発。

教授 植松 健一：合金，金属間化合物，酸化物などの磁性。これらの薄膜を通しての物性にも興味をもつ。実験手段は磁気共鳴，磁気光学など。応用の基礎に関心あり。

教授 大井喜久夫：強誘電体の誘電異常と電子構造，光電導，光起電圧効果との関連の研究。スピニエコー法による相転移の機構の研究。

教授 大槻 義彦：核物性，電子線物性の理論的研究。チャンネリングにおける非弾性散乱，荷電変換，とくに表面効果を取り入れた研究。

教授 木名 瀬 亘：強誘電体の相転移機構。分子論的立場からの誘電体の理論的研究。半導体の電導機構。

教授 近 桂 一 郎：化合物の磁性，とくに磁氣的性質と誘電的性質の相関する現象および高圧力下における磁気緩和現象の研究。鉱物化学，とくに遷移金属を含むイオン結晶の結晶化学的研究。

教授 鈴木 英 雄：動物の光感覚および植物の光走性・光屈性・光形態形成・光周性などの光信号受容反応について，その初期過程の分子的機構を研究する。

教授 並木 美 喜 雄：素粒子構造模型と素粒子反応理論。多粒子系問題。応用数学。

教授 松 原 普：

助教授 大場 一 郎：高エネルギー物理。素粒子の高エネルギー反応に関する理論的研究。

助教授 上江洲 由 晃：結晶晶物理学。X線結晶構造解析，X線分光，結晶光学を用いた固体の相転移現象の実験的研究。

化 学 科

教授 伊 藤 礼 吉：半経験的分子軌道法と分子科学の諸問題。水素結合系における量子化学的な諸問題（陽子転移およびトンネル効果など）。

教授 井 口 馨：分子結晶内の励起子および電気伝導。原子分子の電子状態および衝突の問題。溶媒和電子の挙動の研究。

教授 高 橋 博 彰：赤外線吸収，ラマン効果，誘電分散による生体物質，液晶，強誘電体の分子構造，分子内および分子間ポテンシャルの研究。

教授 関 根 吉 郎：Si, P 等の第2周期元素を含む高分子化合物の合成。天然及び合成高分子化合物の熱分解により生ずるガスの検討。

教授 高 宮 信 夫：有機触媒化学反応を主体として行っている。固体酸，固体塩基，有機ポリマーなどを触媒とし，アルキル化，不均化，脱水反応など。

教授 多 田 愈：1 光化学反応による有機化合物の合成とその反応機構。

2 有機金属化合物を用いる合成反応及びその反応機構。

助教授 伊藤 紘一：主として分光学的手段による生体高分子とその関連物質の立体構造の解明およびそれらの水溶液の誘電緩和過程の解析による動的構造の研究。

助教授 新田 信：有機光反応および熱反応。原子価異性の問題、有機化合物の合成と反応機構の解明。

共通専門

教授 川上新太：専ら実用的な図学。

一般教育

教授 今西基茂：変形文法理論の応用としての英語教育。

教授 笠間啓治：1) ロシア語教授法、2) ロシア語変形文法と機械処理、3) ロシア詩法、4) プーシキン詩、5) 日露比較文化。

教授 勝村 茂：政治学、政治意識と政治行動の実証的研究わが国地域政治の構造と機能。

教授 河原 宏：政治思想、特に1930年代以降の思想的傾向と諸政策の展開について。

教授 桜井成夫：フランス写実小説をテーマにし、特にモーパッサンの「人と作品」及びその現代的意義の研究。語学教師としては絶えず流動する言語現象の把握。

教授 助広 剛：ドイツ現代詩。なかんずくシュテファン・ゲオルゲ（1869—1933）の人と作品研究。

教授 鈴木康司：脱アメリカ的なサンタヤナと徹底的プラグマティスト・デューイ、一は詩人哲学者、他は極めて散文的の哲学者。対照的な両者を掘下げる。

教授 高野良二：現代イギリス文学における伝統の問題。ここ数年は、特に自然観と風刺精神について。

教授 高木 実：ドイツ語学、文学。ドイツ中世叙事文学、現代ドイツ語の統辞論的研究。

教授 森 常治：比較文学専攻。主著書：現代批評の構造（思潮社）、日本の幽霊の解放（晶文社）。共著：英米文学シムポジウム第一巻（学生社）等。

教授 和田 禎一：経済理論と現実分析への応用。産業組織論。

助教授 菊地 靖：フィリピンを中心とした東南アジアにおける族制問題の比較研究。

共通実験室第一課

材料実験室

材料実験室は59号館東側1, 2階からなり, 収容学生人員約220名, 床面積約1650m², 技術職員12名が実験指導にあっている。

この実験室では機械・建築・金属・土木系に共通する各種材料に関する学部の教育実験, 卒論実験および大学院の研究実験が行なわれている。履修学科および科目は次の通りである。

機械工学科	3年	467	機械工学実験実習
機械工学科	4年	468	コース別実験実習
電気工学科	3年	C469	機械実験
資源工学科	3年	C469	機械実験実習
建築学科	3年	745	建築材料実験
金属工学科	3年	518A	金属学実験A
工業経営学科	3年	C469	機械実験実習
土木工学科	2年	774	材料実験
土木工学科	3年	776	コンクリート実験
機械工学科	4年	471	卒業論文
建築学科	4年	768	卒業論文
金属工学科	4年	526	卒業論文
土木工学科	4年	796	卒業論文

上記実験は年間を通じて行なわれるものと前期, 後期のいずれかに実施されるものがある。また夜間には産業技術専修学校の材料実験にも使用されている。

次に設備の概要を紹介すると,

万能試験機(電子管自動平衡式, アムスラ形)容量200tから1tまでのもの約15台, 圧縮試験機3台, ねじり試験機3台, 疲れ試験機3台, モルタル試験機2台, オートグラフ, 各種硬さ試験機等の各種試験機, 光弾性実験装置, 振動試験機, X線回折装置, X線応力測定装置, 金属顕微鏡, 電子顕微鏡, 非破壊試験機関係等が設置されているほか, 建築・土木材料関係の実験装置および試験機器が設備されている。

測定器類はひずみ測定器, 伸び計, 変位計, および各種変換器, シンクロスコープ, X-Yレコーダ, アンプ類, 各種記録計等の測定機器が用意されている。

流体実験室

流体実験室は58号館東側1, 2階からなり, 収容学生人員約110名, 床面積約1377m², 技術職員6名が実験の指導にあっている。

この実験室では流体工学, および水理に関する学部の教育実験, 卒論実験, 大学院の研

究実験等が行なわれている。履修学科および科目は次の通りである。

機械工学科 3年	467	機械工学実験実習
機械工学科 4年	468	コース別実験実習
電気工学科 3年	C469	機械実験
資源工学科 3年	C469	機械実験実習
工業経営学科 3年	C469	機械実験実習
土木工学科 3年	779	水理実験
機械工学科 4年	471	卒業論文
土木工学科 4年	796	卒業論文

実験は年間を通じて行なわれるものと、前期、後期のいずれかに実施されるものがある。実験室設備の概要は次の通りである。

実験室中央部地下に貯水槽（巾5m、長25m、深4m）があり、ここから屋上に設けられたオーバフロータンクに揚水（2台のポンプで最大6.4m³/min.）し、一定圧力の水を内径200、150mm等の配管によって各実験装置に供給している。圧力や流量に応じて他のポンプも使用できる。水量測定のために数個の量水槽（8m³他）を備えている、空気源装置として2台の圧縮機が設置されており、7kg/cm²および30kg/cm²の圧縮空気を実験室各部に送っている。主要な実験装置として、鋼板製水路3台（巾0.9m、高1m、長10m、他）水位可変水槽（内径1.5m、水位-10mまで可変）水理実験用開水路（巾1m、深0.6m、長15m）、傾斜水路、波水路、造波水槽、管摩擦等実験装置、各種ポンプ、水車2台、送風機および実験用風路、風洞2基（吹出口700mm角、風速50m/s他）、混相流実験装置、ショックチューブ2基（100mm角、長8m、他）、高速液流発生装置、油圧装置等がある。そしてこれらの流体に関する実験に必要な計測器類を用意してある。

熱工学実験室

熱工学実験室は58号館西側1階2階からなり、収容学生人員約90名、床面積約1060m²、技術職員6名が実験指導にあたっている。

この実験室では、機械、資源、工経、電気系に共通する、熱工学に関する学部の実験、卒業論文、および大学院の研究実験が行なわれている。履修学科および科目は次の通りである。

機械工学科 3年	467	機械工学実験実習
機械工学科 4年	468	コース別実験実習
電気工学科 3年	C469	機械実験
資源工学科 3年	C469	機械実験実習
工業経営学科 3年	C469	機械実験実習
機械工学科 4年	471	卒業論文

上記実験は年間を通じて行なわれるものと、前期、後期のいずれかに実施されるものと

がある。次に実験室設備の概要を紹介すると、1階実験室を3分し、北側個室7室には1部の室を除いてそれぞれガソリンエンジン、ディーゼルエンジンのテストベンチがあり、エンジンの大きさに見合った動力計、その他テスト用機器が備えられている。吹抜け中央部には水素を燃料としたエンジン、冷凍機、熱交換器、スチームタービン、小型のプロパン燃焼装置などが設備され、南側には高圧ボイラ、小型蒸気発生機、その他プロパン、灯油、重油、水素等の各燃焼装置が設備されている。また2階には分析、伝熱の他に設計室があり、燃料の性状、分析、伝熱の実験、熱コースに関係した設計ができる。教育実験では、ボイラ、スチームタービン、内燃機関、冷凍機、熱交換器、温度の測定、排ガス分析、燃料の性状などの実験が実施され、卒論実験では最近公害に関係した各熱設備における燃焼排ガス分析が多くとり上げられている傾向にある。

制御工学実験室

制御工学実験室は58号館1階117室および150室の1部からなり、収容学生人員約20名、床面積約200m²、技術職員1名が実験指導にあっている。

当実験室では、計測制御（プロセス制御関係）に関する教育実験、機械工学科制御コースの卒論実験および大学院の研究実験が行なわれている。履修学科および科目は次の通りである。

機 械 工 学 科 3 年	4 6 7	機械工学実験実習
機 械 工 学 科 4 年	4 6 8	コース別実験実習
資 源 工 学 科 3 年	C 4 6 9	機械実験実習
工 業 経 営 学 科 3 年	C 4 6 9	機械実験実習
機 械 工 学 科 4 年	4 7 1	卒業論文

実験は年間を通じて行なわれるものと前期、後期のいずれかに実施されるものがある。実験室設備の概要は次の通りである。

流量、液位、温度、濃度、調速の各制御実験装置、操作部、調節器、検出、伝送機器実験装置、シンクロおよびブリッチ形サーボ実験装置、油圧動力装置、空気圧式および電気式アナログ計算機などが設備され、それらの実験に必要な計測器（X—Y—Tレコーダ、シンクロ、メモリスコープ、各種変換器、記録計）があり、その他一般計測用測定器類が設備されている。

土質実験室

土質実験室（61号館、地階）は収容学生人員50名、床面積238m²、技術職員2名が実験の指導にあっている。

この実験室は、土木工学科の実験室で、土質工学に関する各種の実験、研究を行っており、土木工学科3年の土質実験および卒論実験、大学院（土質および道路工学専修）の研究実験に使用している。

共通実験室第二課

工作実験室

工作実験室は59号館西側1, 2階からなり, 収容学生人員約200名, 床面積約1600m², 技術職員約30名が実験・実習の指導および理工学部各研究室の卒論実験・試作など機械工作に関する業務を行なっている。

この実験室では, 機械工学科3年の機械工学実験・実習(467)をはじめ, 電気工学科3年, 工業経営学科3年の機械実験・実習(C469), 金属工学科2年の金属学実習(518), 機械工学科4年のコース別実験・実習(468)が行なわれる。上記の実験は年間を通じて行なわれるものと, 前期, 後期のいずれかに実施されるものがある。また夜間には産業技術専修学校の製作実習にも使用されている。

なお, 上記の実験・実習の時間以外は, 常時100名以上の4年生および修士の学生がそれぞれの卒業論文・実験のための試作を行っており, あたかも生産工場のようなものである。

設備の概要

1/2 ton 低周波溶解炉および铸造設備	一式
熱処理炉	約15台
工作機械	約120台
精密測定機	約40台
木工機械	約15台
プレス・圧延機械	約10台
自動・手動溶接機	約20台
電気計測機	約20台
表面処理設備	一式

上記設備中には, 光学式治具中ぐり盤(三井精機6番), 光学式治具横中ぐり盤(DIXI), 万能測定顕微鏡(ツアイスUMM)など貴重なものも数多くあり, とくにNCフライス盤が設備され, 自動プログラミングが可能なることから, 教育, 研究面での近代化に役立っている。

工業経営学科実験室

工業経営学科実験室(51号館, 1階)は収容学生人員180名, 床面積456m², 技術職員2名が実験の指導にあっている。この実験室は, 工業経営学科の実験室で, 2年の作業測定実験, 3年の管理工学実験, 4年のレイアウト運搬実験, 工場運営演習および卒論実験, 大学院の研究実験等に使用している。

共通実験室第三課

電気工学実験室

電気工学実験室は61号館1階と、高電圧実験室(62号館1階)とから成り、収容人員約150名、床面積1330m²、技術職員16名が実験の指導にあっている。

この実験室では電気工学実験(358)(電気工学科3年)、エネルギー工学実験(359A)・システム工学実験(359B)・物性工学実験(359C)(電気工学科4年)をはじめ、電気実験(C358)(機械工学科4年、資源工学科3年、工業経営学科4年)が行なわれる。上記実験は前期・後期それぞれ10項目の課題が実施され、実験設備は1項目の課題につき3セットずつ設置されている。そのほか卒業論文実験や、夜間には産業技術専修学校電気科の電気実験にも使用されている。

設備の概要は次の通りである。

電 源	3相交流	200V	600A
	〃	100V	600A
	直 流	100V	500A

実 験 設 備

標準測定器として、精密級直流電位差計、標準電池、標準抵抗をはじめ標準電圧・電流発生器、デジタル電圧計、標準電力変換器ならびに0.2級の標準電力計・電圧計・電流計などが設置され、各種測定器、計器類の精度管理を行なっている。

実験装置は直流発電機・電動機、同期発電機、正弦波発電機、誘導電動機等の回転電気機械。変圧器、SCRインバータ・コンバータ等の静止機器。模擬送電線装置、アナログコンピュータ、光度計。また高電圧実験室には350kV高電圧試験装置、50kV高電圧試験装置、1000kV衝撃電圧発生装置などが設置され学生実験、卒業論文実験や研究用にも利用されている。

測定器類は各種電流計・電圧計・電力計、電子電圧計等多数の指示計器、シンクロスコープ、X.Yレコーダ、ペン書き記録計、低周波発振器や万能ブリッジ等の回路定数測定器類、誘電体損測定器、安定化電源などが用意されている。

電子通信実験室

電子通信実験室(61号館4階)は収容人員120名、床面積550m²、技術職員14名が実験の指導にあっている。

この実験室では電子通信基礎実験(381)(電子通信学科3年)、情報工学実験(382)・電子工学実験(328)(電子通信学科4年)をはじめ、電子実験(C381)(機械工学科4年、電気工学科4年)および電気工学実験(358)(電気工学科3年)、応用物理学実験A(219I)(応用物理学科3年)、物理実験B(218III)(物理学科3年)の1部が行なわれる。実験装

置は1項目の課題についてそれぞれ3セットづつ用意されており設備の概要は次の通りである。

実験設備

標準測定装置として、デジタルRLCブリッジ、7桁デジタルボルトメータ、電子電圧計校正装置、高精度ひずみ率計、高精度ユニバーサルカウンタ、周波数シンセサイダ、直流電圧基準などが設置されており、実験装置ならびに実験用各種測定器の精度管理を行っている。

測定器類は多数のオシロスコープ、超低周波からUHFまでの発振器、低周波からVHFまでのインピーダンス測定器、直流ならびに交流用の電子電圧計、デジタルボルトメータ、ユニバーサルカウンタ、各種レコーダ直流安定化電源、計器類のほか、マイクロ波用測定器、トランジスタhパラメータ測定器などが用意されている。

電気工学実験室・電子通信実験室に設備されている各種計器、測定器類は、研究用、卒業論文実験用などに使用できるよう貸出し業務を行っており、また実験室の技術職員が技術的な相談に応じているので、有効に活用されたい。

共通実験室第四課

物理基礎実験室

物理基礎実験室は56号館2階にあり、収容人員240名、床面積約753m²、技術職員8名が実験の指導にあっている。

この実験室では、第1年度全学生が必修する基礎教育科目の物理実験(C172)が行われる。上記実験は、半数の学生がそれぞれ化学実験(C232)と隔週で行い、年間を通して約10項目の課題を実施している。

工学基礎実験室

工学基礎実験室は56号館3階にあり、収容人員240名、床面積約600m²、技術職員10名が実験の指導にあっている。

この実験室では、機械工学科・電気工学科・資源工学科・応用化学科・金属工学科・電子通信学科・土木工学科・応用物理学科・化学科以上9学科2年の工学基礎実験(C173)と物理学科2年の物理実験A(218Ⅱ)が行われる。

実験装置は20数項目の課題別に設置され、それぞれ3セットづつ用意されている。実験は各学科が年間を通して約18項目の課題を選択して実施している。

測量実習室

測量実習室は61号館地階にあり、床面積約187m²、技術職員4名が実習の指導にあっている。

この実習室では、土木工学科2年・資源工学科2年の測量実習(C792)、建築学科2年

の測量および実習(793), および教職課程数学履修者の測量学(791A・B)の実習を行う。実習の場は、実習室・西大久保構内・都立戸山公園および本庄校舎附近等で行われる。

なお、上記の実習以外に、4年生および大学院学生の写真測量による自然環境変化の判読等の卒業論文・研究論文のための計測測量、また、文学部史学専攻における埋蔵文化財の遺跡測量等にも本実習室の設備が利用されている。

共通実験室第五課(化学系)

化学基礎実験室 56号館, 5F501, 床面積475m²と502, 床面積475m²とから成り収容人員約300名, 技術職員8名が実験の指導にあたっている。この実験室では、学科目番号C232の実験について一年生全員が前期、後期にわたってセミマイクロ定性分析, 定量分析, 基礎的な有機実験, 物理化学実験を行っている。又ここに勤務する技術職員の一部は校内から排出する廃水の分析をも担当している。そのほか夜間には産業技術専修学校の化学実験にも使用している。設備の概要は次の通りである。

核磁気共鳴装置	1台	偏光計	5台
分光々度計	7台	PH計	8台
赤外分光々度計	1台	直示天秤	28台
汎用機器分析装置	4台		
ガスクロマトグラフ	2台		

化学分析実験室 56号館4F401床面積, 458m²収容人員160名, 技術職員6名が実験の指導にあたっている。この実験室では、学科目番号C243, 244, 257, の実験について応用化学科, 化学科, 資源工学科, 工業経営学科の2年生と3年生が重量分析, 定量分析, 機器分析などの実験を工業経営学科は前期にその他の学科は前後期にわたって実験を行っている。設備の概要は次の通りである。

原子吸光々度計	2台	PH計	10台
分光々度計	6台	電解装置	5台
赤外分光々度計	2台	炎光光度計	4台
ガスクロマトグラフ	2台		
X線回折装置	1台		
示差熱分析装置	1台		

又、ここに勤務する技術職員は大学の研究室, 実験室より排出する廃水を原子吸光法, その他の機器により定期的に分析している。その他卒業論文実験・理工学研究所よりの依頼分析実験, 並に夜間には産業技術専修学校の化学実験にも使用されている。

物理化学実験室 56号館3F303床面積175m², 304床面積175m², 2F, 207床面積130m², 208床面積130m², 収容人員164名, 技術職員4名が実験の指導にあたっている。この実験室では学科目番号C238, 218Ⅲ, 518A, 219Ⅰ, 257の実験について応用化学科, 応用物理学科, 物理学科, 資源工学科, 工業経営学科の各3年生が21項目の実験を,

： 応用物理学科；物理学科，資源工学科は前後期に，工業経営学科，金属工学科（2年生を含む）は後期に，応用化学科は前期にわたって実験を行っている。設備の概要は次の通りである。

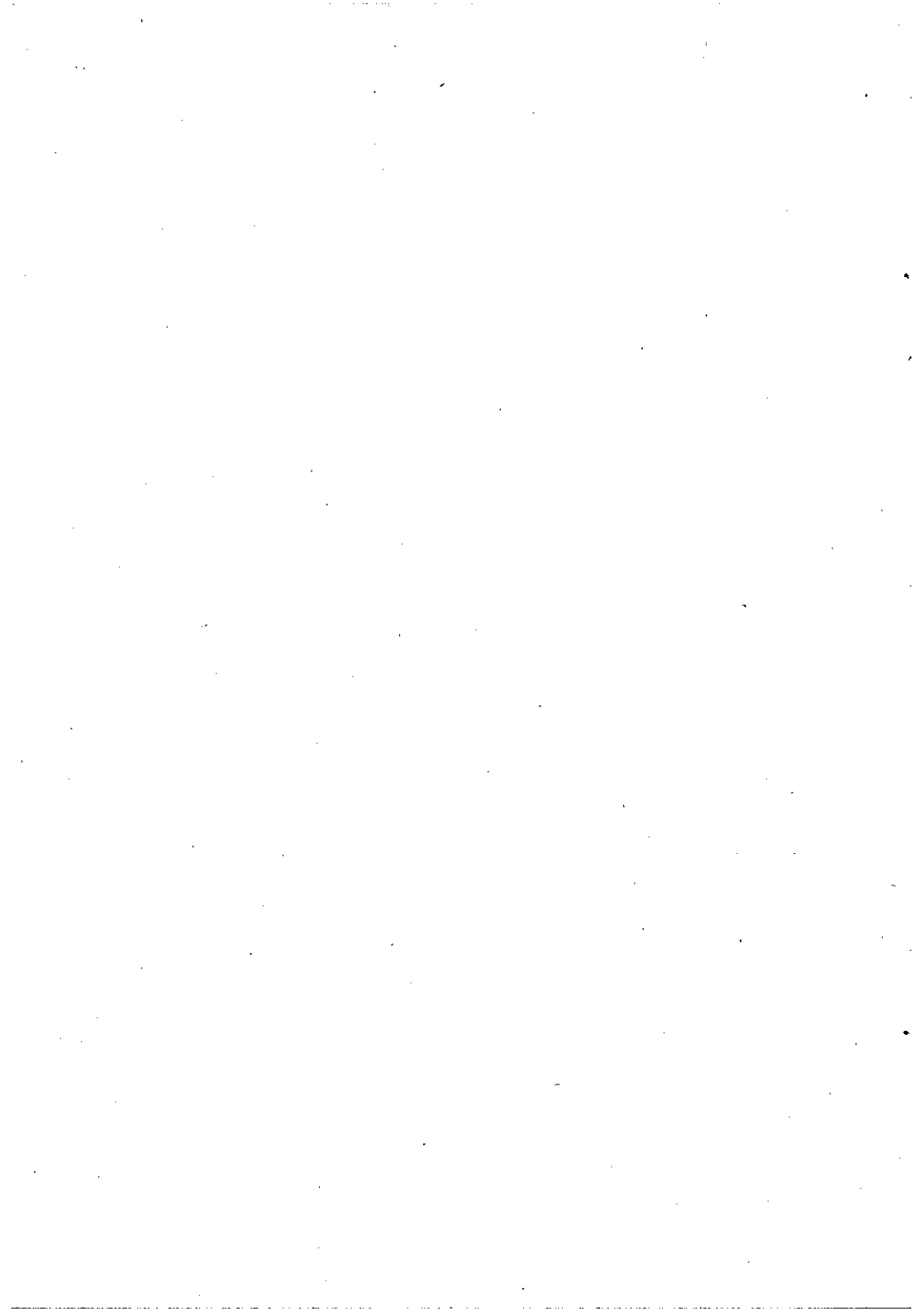
シンクロスコープ	1台	ガスクロマトグラフ	2台
メタロスコープ	4台	マイクロ天秤	1台
内部摩擦測定装置	1台	電子顕微鏡	1台
X線発生装置	2台		
放射線計数器	4台		

工業化学実験室 56号館4F402床面積410m²，収容人員80名，技術職員3名が実験の指導にあっている。この実験室では4年生がそれぞれ後期，前期に行っている。3年生は有機合成実験を，4年生は微生物，電気化学，流通接触反応，有機化合物の電子状態の測定と計算，高分子などの実験を行っている。又化学科3年生の有機化学実験（学科目番号236）も同時に行っている。』

化学工学実験室 60号館1F159，161床面積125m²，収容人員70名，技術職員2名が実験の指導にあっている。ここの実験室では学科目番号268，268Ⅰ，268Ⅱ，の実験を応用化学科の3，4年生と工業経営学科の4年生がそれぞれ後期，前期にわたって51項目の実験を行っている。

金属工学実験室 60号館1F103床面積140m²，104床面積192m²，収容人員100名，技術職員2名が実験の指導にあっている。ここの実験室では金属工学科3年生が学科目番号518Bの金属学実験B（冶金熱力学，冶金学，非鉄冶金学，電気冶金学，粉末冶金学などの冶金の実験を行う。）金属学実験C（金属加工関係の実験を行う。）などの実験を行っている。その他卒業論文実験にも使用している。

資源工学科実験室 61号館B F床面積567m²，収容人員120名，技術職員2名が実験の指導にあっている。ここの実験室では資源工学科第2年度以降の学科目番号532，533B，550，573，570，552（鉱物学，岩石学，開発，選鉱，原料試験，環境安全）の各実験および卒論実験，大学院の研究実験の各一部をおこなっている。



IV

学部科目内容



IV 学部学科目内容

学科目分類

本学部の設置科目には、下記の分類に従って科目番号がつけられている。ここに掲載する科目内容の順序は、学科別等の分類によらず、この科目番号順に掲載されている。

(各科目の番号は、Ⅱ-7学部学科目配当表・Ⅲ-3大学院学科目配当表を参照のこと)

1 科目番号は3桁からなり、次のとおり分類される。

001～099 一般教育・外国語・保健体育科目

101～299 数学・物理学・化学系科目

301～399 電子工学・電気工学・電子通信学系科目

401～699 機械工学・金属工学・資源工学・工業経営学系科目

701～799 建築学・土木工学系科目

2 科目番号の頭にCを付した科目は、基礎教育科目と共通科目である。

科目番号の末尾に付したⅠ・Ⅱ・Ⅲ……は履修順序を、A・B・C……は併列に配当されているが、若干内容を異にした同系統科目をそれぞれ表示している。

3 科目名等記載例

109A	機械工学の基礎A	(機械1)	2-2-4	(教授 森田 鈞 奥村敦史)
↓	↓	↓	↓	↓
科目番号	科目名	配当学科	前期週時数 後期週時数	担当教員名
		配当学年	単位数	

一般教育科目・外国語・保健・体育科目

総合科目講座設置の主旨

この講座は、現代社会における特定の重要な課題を、複数の教員により、様々な学問領域から多角的に究明することによって、異った学問領域相互の関連性を理解させ、現象の総合的把握の能力を養うとともに、創造的思考の養成に役立てようとするものである。

付置小クラス講座について

本年度に設置されている5つの総合科目の講座には、それぞれ「特論」として、セミナー形式の小クラス講座が付置されている。これは前述の総合科目講座が一つのテーマを多角的に検討するのに対し、付置小クラスは、その多角的な理解を系統づけながら特定の一領域について、より深い理解力と思考力を養おうとするものである。総合科目と付置小クラスは、表裏あいまって、人間と社会についての広く且つ深い柔軟な理解力の修得を期待するものである。

001 総合科目A アジアの中の日本 2-2-4

近代及び現代日本の動きを、世界の中に、とりわけ密接な関係にあるアジアの中に位置づけてとらえることは、日本人にとって今後ますます重要な課題となってくるだろう。

この講座では、二つの座標軸を用いて、この課題に接近しようと試みる。一つは近代の歴史と現代というタテ軸に当るもので、ここでは日本とアジアとの関連を時代の流れに即してとらえてゆく。もう一つはヨコ軸に当るもので、日本からみたアジアとアジアからみた日本を統一的に把握したい。この試みの中から世界—アジア—日本を連ねる現在の動向を理解し洞察する能力をえたいと思う。

総論	教授	河原	宏
日中関係の動向	講師	藤井	昇三
日本人のアジア観	教授	河原	宏
日本文学における東洋と西洋	講師	村松	定孝
現代アジアにおける政治的展開と日本	講師	宍戸	寛
国民教育におけるアジアと西洋	講師	土屋	忠雄
アジアの工業化と日本	講師	後藤	乾一
アジアの近代化と日本	講師	判沢	弘
日本、東南アジア関係の動向	教授	増田	与

総合科目A 付置小クラス 2-2-4

002 特 論A～1	講 師	藤 井 昇 三
002 特 論A～2	教 授	河 原 宏
002 特 論A～3	講 師	村 松 定 孝
002 特 論A～4	講 師	星 野 昭 吉
002 特 論A～5	講 師	窪 田 祥 宏
002 特 論A～6	助教授	依 田 憲 家
002 特 論A～7	教 授	中 村 尚 美
002 特 論A～8	教 授	増 田 与

003 総合科目B 変革期としての現代 2-2-4

戦後4分の1世紀たったいま、種々の点で戦後をささえたものの崩壊があきらかになってきた。国際政治は戦後をささえてきたヤルタ体制の崩壊のもとにおおきくゆれ動き、国際経済もまた、戦後をささえてきたブレトン・ウッズ体制の崩壊とともにそのあらたなる秩序の模索をおこないつつある。

また学生運動をふくめたさまざまな社会現象は従来の認識をこえて発展している。

そこでこの変革期における諸現象のうち社会心理的なものを中心として様々な専門の分野から光をあてることによって、変革期としての現代を学生ができるかぎりトータルに理解できるようにするのがこの講座の主旨である。

総 論	助教授	加 藤 諦 三
資本主義社会の現状と展望	助教授	加 藤 諦 三
ホワイトカラーその過去・現在・未来	教 授	寿 里 茂
現代社会の変容と人間	教 授	秋 元 律 郎
現代人と政治参加	教 授	勝 村 茂
現代文学における青春像	講 師	大 河 内 昭 爾
都市化・産業化と環境心理	教 授	相 馬 一 郎
市民運動の抬頭と変容	講 師	浅 沼 和 典
変革期における文化への対応	講 師	山 口 昌 男

総合科目B 付置小クラス 2-2-4

004 特 論B～1	助教授	加 藤 諦 三
004 特 論B～2	講 師	曾 良 中 清 司
004 特 論B～3	講 師	橋 本 梁 司
004 特 論B～4	講 師	崎 谷 哲 夫
004 特 論B～5	講 師	大 河 内 昭 爾
004 特 論B～6	講 師	織 田 正 美
004 特 論B～7	講 師	南 良 郎

005 総合科目C 日本経済の現状と課題 2-2-4

経済発展のそれぞれの段階に応じて、とらるべき一国の経済政策の目標が変遷していくのは当然である。かつて物量的に貧困であった日本の政策目標と価値規準が、経済発展、重化学工業化、そして富への前進におかれたのもけだし当然であった。けれどもこの高度経済成長は、現代的環境のなかで、各種の修正をせまられている。そこで本講座では、日本の高度経済成長のメカニズム、論理、そしてその帰結を吟味し、さらに今日解決をせまられている課題についての考察ならびに提言を行うことを目的としている。

総論	教授	和田 禎一
経済開発と社会開発	講師	伊藤 善市
日本経済と産業構造の変化	教授	田中 駒男
日本経済と外国貿易	教授	田中 喜助
日本経済における労働・雇用問題	講師	孫田 良平
流通機構の現状と問題点	講師	河村 嘉一郎
日本の産業政策	教授	和田 禎一
日本経済の大転換	講師	斉藤 精一郎
日本産業の現状と課題	講師	佐貫 利雄

総合科目C 付置小クラス 2-2-4

006 特論C～1	講師	大田 正樹
006 特論C～2	講師	岩崎 輝行
006 特論C～3	講師	松田 忠三
006 特論C～4	講師	孫田 良平
006 特論C～5	講師	宮下 正芳
006 特論C～6	講師	藤原 昭夫
006 特論C～7	助教授	栗飯原 稔
006 特論C～8	講師	長島 俊男

007 総合科目D 文学と政治 2-2-4

《文学と政治》ないし《政治と文学》は近・現代文学における古くしてまた新たなテーマである。もちろん、両者のいずれに力点をおくとしても、このふたつの、それ自体においては全く異質・相反的な価値領域はそれぞれ自己完結的なもので、その本質においては全くかわりがなく、両者の関係を論考することをせいぜいそれぞれの価値の自律性を確認するにすぎないきわめて不毛な問題設定である、ということもできる。

しかし、詩、特にサンボリスムやリルケなどの詩を除いて、散文作品の世界を中心に考えると、作家の創造行為は現実を捨棄した、全くの真空的な想像力から行れるのではない。現実と作家の創造・空想的な主体との弁証法的な関係のなかで文学的創造は営まれるのである。この点、たとえば、カフカやムシルのような、一見いわゆる現実と隔絶したところに自己の文学空間を創造した作家にあっても、彼らの生きた歴史的現実と創造的主体とのかわりは通奏低音として作品の底に聞きとられる。

まして、現実意識の旺盛なサルトル、ブレヒトのような作家にあっては単に作家の生きる現実というものを突破して、直接・能動的に文学と政治の緊張関係から作品が産みだされるのである。

従って、文学と政治という視点から文学を考察することは——なんといっても、文学作品の価値はその作品に内在する美的価値にあるのだから——文学研究の一方向にすぎないのであるが、特にあらゆるものが政治に浸透されている現代においては、政治に対して拒絶反応を示す立場をも含めて、文学と作家の生き方との根本にかかわるテーマであろう。

この講座では《文学と政治》という観点から重要な作家と作品、文学運動、文学理論を各国文学のなかから取りあげるが、その際《政治》というものをきわめて広義に解釈し、ある場合には《社会》と同義におき、それと作家の主体性との関係を広い射程のなかで考察する。

総論

教授 加藤真二

政治と個人のインテグリティー

—ジョージ・オノエルの場合—

教授 高野良二

アメリカにおける文学と政治

—ノーマン・メイラと黒人文学をめぐる—

講師 藤井カヨ

ルカーチのマルクス主義文学理論

講師 鷺山恭彦

トーマス・マンと政治

教授 加藤真二

革命詩人ベルトルト・ブレヒトの理論と実践

講師 小西悟

アンガー・ジュマンの文学

講師 田島衣子

鲁迅と中国革命

講師 松井博光

現代日本文学における文学と政治

講師 杉野要吉

総合科目D 付置小クラス 2-2-4

008 特論D～1

教授 加藤真二

008 特論D～2

講師 藤井カヨ

008 特論D～3

講師 浦野春樹

008 特論D～4

講師 杉野要吉

008 特論D～5

講師 小西悟

008 特論D～6

講師 田島衣子

008 特 論D～7

講 師 松 井 博 光

008 特 論D～8

教 授 高 野 良 二

009 総合科目 E 日本文化論 2-2-4

われわれは永く豊かな伝統的日本文化の恩恵の下に生活している。同時にわれわれは日本文化を創造的に発展、形成してゆく使命を担っている。この講座の主旨は、日本文化の多面的な内容を総合的に理解しながら、今後に残された課題を明確にしようとするものである。

総 論

助教授 菊 地 靖

日本文化における伝統と近代

講 師 山 本 新

思想史における仏教とキリスト教

教 授 仁 戸 田 六 三 郎

日本人の経済行動と集団主義

講 師 金 子 ユ リ カ

日本的政治文化の伝統と近代化

教 授 河 原 宏

日本の社会構造における伝統と近代

助教授 菊 地 靖

習俗・伝承の本質と変遷

講 師 坪 井 洋 文

沖繩文化と周辺諸文化

講 師 村 武 精 一

都市化と機械文明

講 師 高 橋 徹

総合科目 E 付置小クラス 2-2-4

010 特 論E～1

講 師 北 村 正 義

010 特 論E～2

講 師 茵 田 稔

010 特 論E～3

講 師 内 山 美 樹 子

010 特 論E～4

講 師 橋 本 梁 司

010 特 論E～5

助教授 菊 地 靖

010 特 論E～6

講 師 星 川 進

010 特 論E～7

講 師 上 杉 允 彦

010 特 論E～8

講 師 清 水 浩 昭

011 哲 学 2-2-4

(講師 岩 本 一 夫)

哲学は何を与えるか。人間は生きる限りぎりぎりの問題につき当る。かかる問題は人各様であろう。然し人間は自分自身この立場に追いつめられた瞬間、その人間は自然に哲学を求め。一方哲学は、その求めに応じて、その人間に何かを与える。それは求める人間にのみ分かるように与えられる。従って、哲学はこれを普遍化しなければならない。そして伝達する。以上、追いつめられたぎりぎりの問題、その普遍化と伝達、これらを一般的に解明せんとするのがこの科目の内容である。

(教授 鈴木康司)

紀元前5世紀ごろに始まる哲学を時代の流れに沿ってみていきたい。その流れの根幹をなすものを現代的観点から日本人の目でとらえていきたい。

テキスト 鈴木康司：「哲学—西洋哲学史—」(文真堂)

012 論 理 学 2-2-4

(講師 内田種臣)

「人間は考える蘆である」と。蘆はもろいが考える働きに支えられて人間は生きて行く。そして現代は何人も知るように学問によって裏付されている世の中である。特に自然科学の進歩発達は各方面にその影響を浸み亘らせている。これら皆人間思考の産物である。そこで哲学的に自らを省みる時、当然思考そのものの本質本性ならびにそれが律せられる法則を守ろうと志すようになる。かくして論理学が存在するのである。論理学は、一般に思考の根本原理、思考の要素たる概念、判断、推理の三者に対する本質本性諸原則、諸規則さらに思考を正しく導く方法等を研究し思考の本質を捉えんとするものである。一般教育として論理学は思考の何たるかを知らせ、人生における最良の伴侶たる思考を完全に己がものたらしめる役割を果たすものである。

教科書：「論理学講義覚え書き」(稲門堂)

013 文 学 論 2-2-4

前期(教授 榎本重男)

〈文学と政治〉を主題にしてさまざまな問題を取り上げながら、文学とはなにかを考えてゆくことにする。

後期(教授 加藤真二)

この講義では20世紀ロマンの特質を、リアリズムの崩壊、究局的なもの探究、作家と社会などの観点から考察するが、個々の作品としては、ムシル：《特性のない男》；カフカ：《審判(訴訟)》、《城》；トーマス・マン：《ファウスト博士》、《魔の山》；リルケ《マルテの手記》を取り扱う。

(講師 保昌正夫)

日本文学——近代と現代、といったことをテーマに話をしたいと考えます。明治の文学、大正の文学、昭和の文学と呼ばれているところと現代の、こんにちの文学の動向、情況との突き合わせを念頭に置いて話を進めたいと思います。

(教授 森常治)

文学というのは不思議な存在である。人生の一時期もしくはある種の人々にとっては他のあらゆるものより貴重なものに見えるし、また別の時期もしくは他の人々にとってはこれほどつまらない人生の些事はないように思える。要するに文学はある面では買われられる面では不当に無視される。文学の真の位置づけはどこに求めたらよいのだろうか。本講義では、文学「論」である以上論理の構築に努力を尽してみたい。例は日本文学、西欧文学古今東西に亘るつもりである。次のような設問を無意義だと思わない人は受講しても

raitai。「科学のレポートと文学作品における叙述はどう違うのだろうか」、「社会科学が与える予想と文学的予言とはどう違うのだろうか」、「哲学者・思想家の発言と文学作品はどのように違うのだろうか」、「文学作品が立派であること、作者が人間として立派なことと関係ありやなしや」授業における議論は小説や詩の技術論を相当突込んだ形で行う。理科系出身で作家や詩人になった人は多い。本講義を聴いて一人でも書くという作業に入る人がいれば幸いである。

014 表現法(日本語) 2-2-4 (教授 武部良明)

考えていることを整った表現にまとめる力、それを正しい文字づかいで表記する力、それらは知識人として欠かすことのできない能力である。そこで、この講義では、誤解を招きやすい表現やまちがいがやすい表記に関し、身近な実例をいとぐちとして問題を掘り下げ、好ましく正しい表現および表記の体系的な研究に進みたいと思う。これによって日本語そのものの実情と規範を再認識するとともに、日本語が自由に使いこなせる能力の増進にも役立てるつもりである。

015 心理学 2-2-4 (教授 服部清)

私達が私達の日常行動を理解しようとする場合に、客観的根拠に基く秩序だった知識が必要である。精神現象についての科学がどのようなものであるか、知覚、情動、学習、人格などの問題を主としてとりあげ、精理現象についての理解を深めようとする。これらを通じて、人間理解についての心理的な考え方をつかんでもらえば幸である。

(講師 野沢 晨)

心理学の方法論、行動のメカニズム、ヒトや動物の情報処理などの実験心理学的な問題を中心として講義を進める。テキストは使用しない。社会心理学的な問題、臨床心理学的な問題などについては触れる予定がないので、このような問題に興味があるときは、他の講義を聴講されることが望ましい。

016 歴史学 2-2-4 (講師 松島栄一)

一般教養としての歴史学、とくに科学および科学史の正しい理解のために、また社会の歴史的な発展を認識するために講義する。とりわけ社会科学・文化科学も、自然科学・科学技術とともに社会を背景として歴史的に考察するときのみ、その発展の正しい系列をつかむことができる。そうしてそれこそが現代に生きる態度の根底になればならないものであるという主旨にもとずいておこないたい。

こういう観点から、社会の発展の諸相、とくにルネッサンス以後の、産業革命・農業革命・市民革命をふくむ民主主義革命の意義(とくに明治維新の意義)、近代社会における資本主義の発展や、わが国の近代化および第一、第二次大戦と日本、また今日の世界と日

本の当面の課題を講じて、現代社会を正しく認識し、また自覚をうながす資としたい。いうまでもなく、日本史をふくめた世界史の全体系の上で述べてゆくつもりである。

017 人文地理学 2-2-4

(講師 黒崎 千晴)

地理学は、地表空間に展開する諸事象を、その複合体において追求し、複合体の構造やその諸因子の相互作用ないし干渉関係とその結果との考察を主眼とする。地域、空間関係に対する理解が、今日ほど要求されている時はないが、人文地理学は、社会的にして生物的存在である人間集団が、その生活の維推と向上をめざして、生活環境の利用、地域空間の整備、資源の開発その他をどのように進めて来たのか、これらに関する今日的課題は何かなどに、その関心を集中している。概論としては、人口論、環境論、資源論、立地論および交渉圏の拡充などが、おもな題材となるが、とくに、地表空間における農本社会から産業社会への移行過程つまり近代化をめぐる諸問題に焦点をあわせ講義を進める予定である。地表空間という場からすると、近代化の遅速とその方向の異同——過密と過疎、開発と公害、などを含めて、当然問題となろう。

018 現代思想 2-2-4

(教授 河原 宏)

現代における科学・技術および労働の思想(科学・技術論、労働観)と政策の展開を、政治・社会構造との関連において考えてゆく。このため、主たる問題点は以下のようになる。

- 1) 戦前から戦中(第二次大戦)にかけての科学・技術および労働の思想と政策
- 2) ドイツ・ナチズム及び日本の天皇制支配の特質
- 3) 戦前——戦後の政治的・思想的断絶および連続性
- 4) 現代資本主義社会の構造的特質
- 5) 現代日本の科学・技術及び労働の思想と政策

019 文化人類学 2-2-4

(助教授 菊地 靖)

文化人類学は、異なる文化の理解から出発して、広く人類文化の究明につとめてきた。時間的にも、空間的にも、人間がつくり出した文化の多様性を認識し、それを通じて、すべての人間に共通な文化の普遍性を把握することが、この統合的な学問の目的である。

参考書：蒲生正男・祖父江孝男編「文化人類学」

昭和44年3月刊行(550円)有斐閣双書

020 法 学A 2-2-4

(講師 大沢 正男)

法は、正義や公平という社会の秩序維持および市民の権利保護に機能する社会規範として把握できるが、法学は、このような規範を中心とした社会に関する科学である。

本講では、市民社会の生活に要求される法的知識と法律を通じての合理的なものの考え方の習得を目標として、法の基本理論と各種の法制度のうち、特に私たちに身近な重要問題について講義を進めていきたいと思う。

テキストには、「法学概説」（大沢・鈴木他）早稲田大学出版部刊を使用する。

021 法 学 B (憲法) 2-2-4 (講師 石 田 光 義)

憲法秩序が有効に作用するためには、国民の「憲法への意志」が生き生きとしていなければならない。また、憲法が、その時代の精神的、社会的、政治的あるいは経済的正当性を無視するところでは、憲法は不可欠な生活力を欠くことになる。こうした観点から「日本国憲法」下に定着しつつある憲法意識の態様を把握したうえで、この憲法のもつ基本的問題について考察し、できるだけ体系的に講述したいと思う。

022 政 治 学 2-2-4 (講師 浅 沼 和 典)

現代政治学における政治権力論、政治過程論、政治変動論の諸問題について、わが国の問題性に関連させながら、講述したい。

023 経 済 学 2-2-4 (講師 長 谷 川 啓 之)

本講座は、経済学の基礎理論を学ぶことを主たる目標にするが、現実の経済問題を理解する能力を養うために、さらに広く経済史や経済政策にも触れるつもりである。また理論を生きたものにするために、実証的な側面との関連をできるかぎり明らかにしていきたい。したがって、できるかぎり新聞・雑誌などを読んで、現実のなかから問題点を引き出すことが肝要である。講義は、主として近代経済学的なアプローチを採用する。

教科書：熊谷他著「経済理論の基礎」（富山書房）

(講師 太 田 正 樹)

現代社会の経済的仕組みを知るために必要な経済学の基礎知識（国民所得分析、価格分析）を体系的に講義するとともに、現実には発生している様々な経済問題（物価問題、公害問題、国際通貨問題など）についても分析的な解説を行なう。

(参考文献は、必要に応じて指示する。)

(前期 教授 和 田 禎 一)
(後期 講師 江 頭 稔)

経済はわれわれにとって最も身近な日常生活の一側面である。家庭における主婦やわれわれの日常の買物、すなわち消費行為も、企業の生産活動や金融上の取引、そしてまた国家の財政活動や国際関係の取引も、重要な経済行為である。経済学は、このような人間の営む経済行為と、それらが全体として形成する社会経済の動きを、一つの理論体系によって捉えようとする学問である。

そこで、この講義では、身近な経済現象もとりあげながら、その経済的意味、それから

発生する経済問題、それに関する経済理論や経済政策などを説明しながら、経済学的思考の必要性や、経済学の概要を理解できるように進めていく。

- 講義は、1. 現代経済学の基本問題 2. 経済循環と国民所得 3. 消費と生産
4. 価格形成と所得分配 5. 貨幣および物価の理論 6. 政府と財政政策
7. 国際経済 8. 経済発展論の順序で行なう。

024 経営学 2-2-4

(教授 千賀正雄)

経営学は資本主義経済における経営経済の問題を取扱うものである。経営経済は企業と経営の二面性を持つ統一体である。一つは個別資本の価値増殖過程として捕えたものであり、他は生産物を作る社会的労働過程として捕えたものである。

この講義ではその本質をあきらかにするとともに、今日の経営学の鳥瞰図を与えようとするものである。

(講師 菊地敏夫)

最近、経営学関係の文献が非常に多くなり、その科学的性格も多彩になってきた。従来は、経済学的なもの(経営経済学)と、管理論的のもの(経営管理論)が多かったのであるが、今日では、社会学、行動科学、エンジニアリングのような立場からする展開もみられるようになり、とり上げるテーマも、これまでの費用・収益・利益の関連や管理組織の問題から、意思決定、情報処理、人間関係、リーダーシップなどの新しい領域にひろがるようになった。それだけに、これらの諸問題の関連性をあきらかにしながら、経営学の展望をおこなうことはむずかしいが、この講義では、経営者のおこなう意思決定という角度から(意思決定論の立場から)、経営的問題を、できるだけ体系的に説明してゆきたい。

025 社会学 2-2-4

(講師 福永安祥)

社会学は、現代社会の学問的認識をめざすもので、18世紀の社会思想を母胎とし、19世紀の40年代に成立し、20世紀の20年代に成年期に達したと考えられる新しい学問である。

それは、人間社会を、実証的に把握することを目的とする実証的理論の確立を目標として、人間社会を、実証的に、多元的に、歴史的に、相関的にとらえようとする。

講義は、日本の社会と現状と問題点を明らかにすることを基本方針として、前期においては、社会学の基礎理論を、後期においては現代社会の分析に重点をおくことにする。とくに、社会学的視点——社会事実を、心理的・生物的・経済的視点とは異なった立場——においてとらえることにつとめる。さらに、比較社会体制論の立場において、東南アジアの諸地域——インドシナとインドネシアを中心として——の社会構造の究明を進めることにする。

ひとり自然科学的実験データの処理のためばかりでなく、ひろく社会、経済・経営諸現象の計量的把握を目標として、近代統計学の方法を入門的且つ鳥瞰的に解説し、以て統計的観察の思想を涵養しつつ、専門学科中の「数理統計」(確率統計)への階梯としたい。

内容は統計的認識の特質・統計学の発達史・統計調査法・統計分析法等のはか特に理工科方面の研究者に欠け易い社会的経済的要因の考察を含ませたい。

031 日本美術史 2-2-4

(講師 五味充子)

1972年に発掘された高松塚古墳に明らかのように、日本の古代美術は中国・朝鮮など、東アジアとの関係をぬきにしてとらえることはできない。本講は日本の先史時代から平安時代にいたる美術を、アジアの美術と関連づけながら時代順に概説するが、スライドの使用により様式の展開を跡づけることに重点をおきたい。また、いくつかの具体例をとりあげ、日本美術における外来様式受容のありかたをも検討したい。

032 東洋美術史 2-2-4

(講師 長島健)

東洋美術の歴史は長く久しい。しかも美術は多くの部門にわかれ、美術が生みだされた地方も広範にわたっている。限られた時間内に、東洋美術史の概説をのべることは難しい。それで私は、年来興味をもちつづけている中国美術のうち、明器について講義する。

明器は墳墓の中に副葬した土製や木製などの、人物・動物・日用器具・建築物等の模型品のことである。明器の起原は中国の古代にさかのぼるが、美術的価値が認識されるようになったのは、20世紀になってからである。とくは触放後、盛んな発掘調査が行なわれて、その結果、新資料を豊富に加え、私たちの明器にたいする知見は、一層広まりつつある。私はスライドを用い、文献を示しながら、漢・六朝・唐時代の愛すべき明器の諸相をのべたいと思う。

033 西洋美術史 2-2-4

(教授 坂崎乙郎)
(講師 西澤信彌)

この時間はひとつの近代西洋美術史概説となろう。言うまでもなく、〈美術史〉を成立させるのは〈様式〉という概念であり、それは天才たちの個性、民族と時代の美意識、宗教感情、風土、社会構造、素材の特質などさまざま要素の複雑な作用のなかで形成される。しかし美術史は個々の作品なしには存在しない。ここでは今日に遺された代表的作例に即して、ひとつの民族とひとつの時代が共有した〈かたち〉をその時代とその民族の美術様式と見做し、ルネッサンス期以後19世紀に至る西ヨーロッパの主として建築・絵画・彫刻の典型的作例をスライドで見ながら、かかる様式とその変遷の大略を概観して行きたい。

034 技 術 史 2-2-4

(前期 講師 田 中 実)
(後期 講師 飯 田 賢 一)

前期

人間は、生物学的な本能ではなく、文化によって環境に適応してきた。文化のうちでも、自然資源を利用する技術は最も基本的なものである。このような観点から、先史時代以来、古代都市文明の発生にいたるまでの、技術の発明、伝播、およびその社会的影響を跡づける。

後期

産業革命前後を中心に、世界史の大きな流れのなかで、人間にとって技術とは何か、という問題に光をあて、東西の比較史的観点も交えながら、科学・技術の思想、近代技術者の生き方を追求する。講義のベースには、小著『近代日本の技術と思想』(1974年、東洋経済新報社刊)を用いるが、随時現下の技術問題をとりいれる予定である。

035 日 本 文 化 史 2-2-4

(講師 松 島 栄 一)

日本の近代文化の展開とその特質を、近代資本主義社会の発展や生活・思想・技術の展開と関連づけつつ、考えてゆきたい。とくに日本とアジアの関連、日本と世界の関連を視野に入れてゆきたい。

036 日 本 思 想 史 2-2-4

(講師 野 崎 守 英)

037 言 楽 論 2-2-4

(講師 吉 田 泰 輔)

西洋音楽の歴史において、各時代や社会の状況と深く結びついた特有の芸術形式が生まれている。こうした形式はその背景の移り行きに従って、その内外両面での現象形態を変えながら、生命を保とうとする。ここにジャンル史という音楽史固有の領域が成立するのだが、ここでは「ミサ曲」「オペラ」「交響曲」「ソナタ」を取りあげて考察を進めて行きたい。

038 現 代 宗 教 論 2-2-4

(前期 講師 鈴 木 範 久)
(後期 講師 藤 井 正 雄)

「前期」：主として内村鑑三をとりあげて、近代日本社会における宗教のあり方をみる。
「後期」：激動する現代社会をとらえ、そのメカニズムを考えて、日本人の信仰構造を論ずる。

039 現代マスコミ論 2-2-4

(講師 佐藤智雄, 宮崎吉政)

情報化社会といわれる現代社会において、マス・コミュニケーション状況は、いっそう複雑をきわめている。現代マス・コミュニケーションの特質を以下の構成によって説明しようと考えている。

- I 現代マス・コミュニケーションの概念 II 送り手集団とマス・メディア
III 現代マスコミ批判

040 現代組織論 2-2-4

(講師 樋口弘其)

社会が複雑になるにつれて、明確な目標指向性をもった人間協力のシステム、すなわち組織がますます必要になってくる。しかも脱工業化社会や情報化社会が問題になりつつある現在、組織自体のたえざる自己革新が要請されているのである。現代組織が、恒常的変化という社会条件に適応して存続していくためにはどのような構造をもったらよいか。このようにダイナミックな組織論を展開するための一つの方法論的立場が、システム論であり、行動科学である。しかしシステム論にしる行動科学にしる、なお統一的な立場があるわけではない。したがって、現代組織論では、そうした方向を指向しながら、現代の経営組織、労働組合組織、政治組織等の構造と機能を明らかにすることによって、その変化の方向を現代社会のダイナミズムのなかで追求していく。

041 社会心理学 2-2-4

(教授 橋本仁司)

本講では現在われわれが過している日常生活の裏に如何なる規則性があり得るか、探究のためにどのような視点から眺めたらよいかを探究してみたいと思っている。なるべく受講者諸氏に新しい視点を提供してみたいと思っている。

042 社会思想 2-2-4

(講師 加藤諦三)

043 都市地域計画論 2-2-4

(講師 佐貫利雄)

I 講義の趣旨

日本列島の未来像をデザインすると共に都市計画、地域計画を行うに当たっての基本的考え方や知識技術を講義することを狙いとしている。

そのためにはフィジカルプランとメタフィジカルプランのフィードバックシステムが重要である。主体論～機能論～空間論の三つの論理的展開によって都市と地域設計を考えてゆきたい。(原則として建築・土木学科の諸君を優先的に対象とした)

II 講義内容

第1章 日本列島の未来像と地域・都市開発政策

第2章 都市の自然淘汰論

- 第3章 都市機能と都市デザイン論
 第4章 交通革命と都市機能の再編成論
 第5章 情報化社会と都市設計論
 第6章 若干の提案
- ① カセットシステム都市
 - ② 医療都市・物流都市
 - ③ 自由時間都市
 - ④ 海上都市

Ⅲ テキスト 佐貫利雄『現代都市論』(学研)

Ⅳ 参考文献

1. 伊藤善市『都市化時代の開発政策』(春秋社)
2. 丹下健三グループ(21世紀の日本研究会)『21世紀の日本』(新建築社)
3. 菊竹清訓『菊竹清訓作品と方法』(美術出版社),『海上都市』(鹿島出版会)
4. 佐貫利雄『超高速新幹線』『情報化社会度の計量分析』

044 現代都市問題 2-2-4

(講師 黒 沼 稔)

都市問題は、都市の生活をめぐるすべての問題、例えば消費生活・勤労・レジャー・住宅・土地・生活環境(公害その他の災害・ゴミ・自然環境等)・福祉・教育文化・政治・行財政・都市計画(都市再開発等を含む)・都市装置(エネルギー・水・下水・交通・情報装置等)等々を包含し、都市政策・都市調査・都市長期計画・都市未来論・都市科学等のほか、民間ディベロッパーその他の都市関連システム産業の問題等々も講義の対象問題となる。テキストは、下記を必読書とする。

[テキスト]『都市問題概説』磯村英一・黒沼稔共著 鹿島研究所出版会

昭和49年7月刊・定価1,800円

『関東都市学会年報』Ⅲ(4月刊予定)

045 中国研究 2-2-4

(前期 教授 六角恒広、講師 太田勝洪)
 (後期 講師 山下龍三、講師 小島麗逸)

日中国交正常化のこんにち、中国を知ることの重要性はますます大きくなっている。特色ある国づくりを進めつつある現代中国について、この講義では総合的に講述し、中国認識の一助としたい。第1時間目に4人の講師全員が出講してオリエンテーションをおこなったあと、六角が現代史を中心とした概説、太田が外交政策の特質、山下が経済および軍事の問題、小島が人民公社および技術思想について、それぞれ論述する予定である。

046 東南アジア研究 2-2-4

(前期 教授 増田与、助教授 菊地靖)
後期 教授 山岡喜久男
助教授 後藤乾一、

東南アジアの近代化は、現代世界史における主要な課題であり、広い関心の焦点となっている。従来、この地は、植民政策諸学の対象であり、伝統あるオランダの研究は、慣習法論、宗教（イスラム）論、二重経済論から、東インド社会学、農業社会学への系譜をひいている。今日の研究の中心、アメリカでは、民族主義と革命の現実の承認から出発し、比較政治学、文化人類学、経済学の一を履修した学生に、東南アジアの一国を対象として選ばせ、各国の言語、文化、現代史を集中的に学ばせ、現地での長期調査に従わせ、成果を刊行しており、その実証的な方法は、一般に地域研究と呼ばれている。本講座では、この研究史に学び、文化人類学、経済学、比較政治学、ならびに、総論の四項に分って、東南アジアの地域研究に必要な諸基礎を講義する。

047 人間工学研究 2-2-4

(講師 小谷津孝明、森 孝行)

Engineering における Human factor の諸問題のうち基礎的な問題を取扱う。主として感覚と運動過程・学習・適応・情報及び処理、シミュレーションなどの問題を説明する。

048 行動の科学 2-2-4

(講師 児玉昌久)

—環境と人間—

20世紀初頭に、観察可能な行動を人間研究の手がかりとして、その関係を明らかにしようとするいわゆる行動主義が抬頭して以来半世紀を経て、人間行動を科学の対象としようとする試みは、時代の要請に伴って、行動科学という新しい領域を形づくり始めた。同時に非常な多様性をもつ人間行動の基盤として環境の重要性が目ざされ始めた。

人間の行動は環境との交互相用の結果であり、環境刺激に対する反応である。環境と行動は不可分であり、環境はそこに表れる行動によって測定されるべきであり、評価されるべきであるが、従来は物理的特性が測定の中心になっており、行動科学的、心理学的考察は充分ではない。

環境の影響が行動にどのように表れるか、行動をどのようにとらえ、どのように分類するか、どのように測定することが可能か、問題行動に対処するための環境を設計するため、にどのような考察が必要か、など、行動の測定、分析による環境への心理学的接近法をとりあげる。

049 産業構造論 2-2-4

(講師 金子敬生)

産業構造論にたいする operational approach を中心に講義する。その内容としては、日本経済の産業連関分析による産業構造の解明をとりあげる。

テキスト、金子敬生『産業連関の理論と適用』（日本評論社、¥ 1,800）

金子敬生編『日本経済の産業連関分析』（有斐閣双書）、1975年

参考書、通商産業省『産業構造の長期ビジョン』、1975年

050 日本経済論 2-2-4

（教授 和田 禎一）

本講座では、その主要視座を戦後日本の経済成長におきながら、戦前期以来の日本経済の発展を現代的意義との関連のもとに考察することを目的とする。日本経済の発展は、その高速度のゆえに、広く先進国はもとより、発展途上国の側からも、学問的、世俗的関心の対象となってきた。そこで、われわれは、この異例の日本経済発展に機能した経済的要因を解明し、その論理的帰結についての評価を加えていきたいと考えている。講義内容は次の通りである。

- 1 序説
- 2 戦前期日本の経済発展
- 3 戦後経済の成長
- 4 資本形成と重化学工業化—高度成長の思想
- 5 高度成長と金融・財政政策
- 6 産業構造と二重構造
- 7 農業とその近代化
- 8 産業組織と財閥
- 9 物価をめぐる諸問題
- 10 国際貿易、国際関係
- 11 高度成長と社会的文化的要因
- 12 高度経済成長の帰結
- 13 日本経済の課題—未来への展望

051 雇用・労働問題 2-2-4

（講師 孫田 良平）

組織体で2人あつまって共通の仕事をするれば、そこに使う者、使われる者の労働問題が生れる。労働力この不足と過剰の共存・賃金上昇の経済に入りつつある現代の経営・技術は、通用・労働問題を無視しては成り立たぬ。そこで理工学部学徒の広い教養としてばかりか、将来直面する労働経済・労働法の実用的な知識も含めて、日本の雇用と労働関係を実証的に討究する。

日本の雇用、労働問題の現状判断、雇用と賃金の関連、労使関係（労働組合・労働争議）、労働問題と国民経済、企業における労働問題および現代労働政策について、教科書を用いず、講師が編集した統計集を使って総合的具体的に把握する。

052 国際経済論 2-2-4

(講師 小松 憲 治)

国際経済関係を考える上で必要な国際貿易論、国際金融論および開発理論の基礎的知識を体系的に講義し、最終的には、国際社会の中で日本経済が直面しているさまざまな課題に対応してとらるべき対外経済政策のあり方を解明する。なお、参考文献は、必要に応じて指示する。

053 マーケティング 2-2-4

(講師 片山 又一郎)

“販売なくして事業なし”といわれるように、マーケティングは今や企業活動の中心課題となってきた。本講はこのマーケティングの問題を戦略的立場に重点をおき、産業界の実情とも関連させながら解説してゆきたい。

1. マーケティングの概念
2. マーケティング戦略の展開＝製品計画、価格、広告、セールスマン活動、販売促進、流通チャネル、物的流通、
3. 卸小売業のマーケティング
4. マーケティングと法的規制
5. 業種別マーケティングの展開

054 産業心理学 2-2-4

(助教授 田崎 醇之助)

産業心理学は、心理学の一領域として、産業界の中での人間の問題を研究する学問である。今日の産業界は、科学技術の目ざましい革新によって発展と同時にげい急変革をみせている。そのことが、人間生活の向上に寄与する一方で、人間生活上に多くの阻害問題を生み出している。

産業心理学はこの問題を解決する上にまだ十分な力を備えているとは云い難いが、現在そうした問題点に研究を集中しており、さまざまな科学的知識を獲得しつつある。この知識を実際に生かすには、産業界の中で技術革新を実際に押し進める役に当る科学技術者の人々が、こうした知識を理解し、これを技術革新の中にとり入れてゆくことによって可能になるのである。この意味で産業心理学を理工学部の学生諸君に学んで頂きたいと思う。

参考書 疎外感(大日本図書)、組織心理学(有斐閣) Industrial Psychology (B. v. H. Gilmer)

055 産業社会学 2-2-4

(講師 萩原 一 義)

056 商 法 2-2-4

(講師 井上 治 行)

本講義においては、株式会社法を中心に進めることとし、法律学を学んだことのない人達にも容易に理解できるよう身近な具体例や新しい判例、学説をも参照しながら、できるだけ平易に説明を加えることにした。さらに、応用問題を掲げこれを解き明かすことによって、法的思考能力の涵養に努めたい。

なお、テキストは大野実雄「商法(総則・会社)」(成文堂)を使用する。

以下記載 058～067 の10科目は、第3年度に置かれている。これは、英米独仏露の文学、芸術、哲学、思想、社会、科学などについての講義であるが、講義にあたっては、第1、2年度においておさめた外国語の力を、第3年度においてさらに強化養成することを旨とし、それぞれの外国語のテキストを用いて、25名定員のゼミ方式で行なわれる。

058 アメリカ文化論 (原書講読) 2-2-4 (教授 森 常 治)

American Cultural History in English 本講義はすべて英語で行われる。将来米大学に留学し講義を聴講する場合の最初に受けるショックを和らげるためである。将来そうした可能性を希み、かつ予感する諸君の集まられんことを望む。学生は講義ノートを取り、次の時間の最初にノートを提出する。ノートは上中下によって評価されるが、それが出席カードにもなる。上中下の総計によって成績は評価されるので、学期末試験も、レポートも課されない。最初の試みであるので本年にかぎりノートは英文《タイプすること》でも、和文でもよいことにする。クラス全体の成績は bell-curved shape になるので、ABCDF の配分は一般授業のそれと変わらないことになる。

059 英米哲学研究 (原書講読) 2-2-4 (教授 鈴木 康 司)

現代英米哲学の特質を考えてみたい。とくにドイツ哲学と比べて英米哲学や考え方の特質をさぐっていききたい。

テキスト J. Dewey: Reconstruction in Philosophy 中の1～2章
ほか (未定)

060 イギリス文化論 (原書講読) 2-2-4 (教授 高 野 良 二)

著者ミケシュは、1912年ハンガリーに生まれ、後にイギリスに帰化した世界的ユーモア作家である。第一作の前者は1946年出版。彼一流の軽妙な筆致で、イギリスの国民性や風俗習慣を描出した、いわば出世作。その続編ともいふべき後者は1960年出版。15年の歳月の間に何が変わり何が変わらなかったか？ この辺にイギリスの栄光と衰退の原因があるのではないか？ 彼のユーモアとサタイアの背後にある人間愛と文明批評を感得すること、そこから、イギリス文化解明の道は開き得るはずである。

テキスト: How to be an Alien How to be Inimitable (George Mikes)

(両者ともペンギン・ブックスに収録されているが、注釈本が、前者は研究社、後者は金星堂から出ている。)

061 イギリス社会史研究 (原書講読) 2-2-4 (教授 東 浦 義 雄)

われわれが西欧文化のどの面を研究対象とする場合にも、大きな影響を与えたイギリスの社会史について、ある程度の知識をもっていることが望ましい。また同時にそれは、小

学校から大学に至る教育を始め、国民生活の根底をなしている15・16世紀以来の宗教思想、封建性から近代性への脱脚をとげた社会機構、空前の国家的繁栄をもたらした産業革命や貿易の伸長を生んだ経済的発展、また温存されつつも徐々に内容を変えつつある階級組織、あるいは世界に民主主義の模範を示しながらも廃止される徴候のない君主制など、中世から現代に至るイギリス社会の変遷には、それ自身興味のある幾多の問題が含まれている。

本講座はこのような世相の推移を概観するもので、テキストには L. C. B. Seaman の “A Short Social History of England” (篠崎書林発行) を使用する。

062 比較文化論 (原書講読) 2-2-4 (助教授 菊地 靖)

日本の親族組織と社会組織の文化的位置付けを他の東アジア諸国のそれと比較することを目的とした講座である。

日本の親族組織は一般に祖先中心的(単系的)であるが、フィリピン社会には自己中心的(双系的・多系的)な親族組織がみられる。両者の対比を行ないながら、それぞれの社会の価値観・社会行動様式などの類似性、及び相違性について、フィールド・ワークによるデータ・モノグラフを使用しながら考察してゆく。使用文献はその都度指示する。

063 ドイツ文化論 (原書講読) 2-2-4 (教授 加藤 真二)

この講座にはふたつの側面が考えられる：ひとつは人文・社会系の科目として、ドイツ文化の特質を考究するそれであり、他は原書講読という、語学面の強化である。もちろん、両者の調和的総合が理想であるけれども、これはまた両方とも中途半端に終わる危険性をもはらんでいる。

そこで、どちらに重点をおくか、の問題になるが、人文・社会系の科目ということからすれば、当然前者を重視すべきであろう。しかし、外国文化を論究する場合、テキストの正しい理解が大前提となる。まして、本講座受講者諸氏の平均的ドイツ語歴を考えると、後者に重点をおくのが適切である、と思われる。

従って、本講座では内容の深い、そして文体も少しむずかしいテキストの正しい理解を主とし、それに対する考究を従にしてゆきたい。

テキストは Löwith: Der europäische Nihilismus; Radbruch: Die Krisis der Demokratie; Riehl: Das deutsche Bürgertum など。

なお、理工系原書の講読を希望するむきもあるが、それは専門科目にゆだねることとし、この講座では思想、文化批判、歴史を内容とするテキストを取りあげることとする。

064 ドイツ文学論 (原書講読) 2-2-4 (教授 中村 浩三)

トーマス・マン研究：これは20世紀のドイツの世界的文豪トーマス・マンの生涯と作品についての講義ですが、この授業はもともとドイツ語の力をつけることを目的として設置

されたものなので、トーマス・マンに関するドイツ文テキストをゼミナール方式で読むことにします。最初はず、Robert Schinzinger: Thomas Mann を読み、そのあとトーマス・マン自身の作品から適当なもの（たとえば、Meine Zeit など）を選んで読みたいと思っています。

065 ドイツ演劇研究（原書講読） 2-2-4 （講師 上田 浩 二）

066 フランス文化論（原書講読） 2-2-4 （教授 桜井 成 夫）

この科目には、二つの目的がある。その一つは、第2外国語としてせっきく習いおぼえたフランス語を、2年間だけでしり切れとんぼに終らせず、さらにこれを強化向上させることである。

もう一つの目的は、原書を講読しつつ、フランス文化の性格とそれの母胎であるフランス人の精神構造との両面に触れて、各領域に見られるさまざまな文化現象の必然性、存在理由などを理解するのに必要な一応の基礎知識を得られるようにすることである。

教材、プリント

067 ロシア文化論（原書講読） 2-2-4 （講師 落合 東 朗）

ロシア民族の性格やその民族文化の特質については、これまでいろいろな形でとりあげられてきた。きびしい自然環境と絶えまない政治的変動のなかにおかれたロシア文化の運命に関心を寄せる人は少なくないだろう。

ここではプーシキン、レールモントフ、西欧派とスラヴ派の詩人、ツルゲーネフ、世紀末の詩人、革命とともに生きたマヤコフスキやエッセーニンなどの詩を読みながら、作品が産みだされた背景について考えてみたい。

下記の6つの講座は、日本語の読解力、聴解力、表現力などが、一般日本人学生の水準に達しない外国人留学生のために設けられたものであって、出来るだけ平易な日本語で、過去および現在の日本について説明し、必要に応じて、視察実習なども行ないたい。

外国人留学生は、一般科目の社会科学、人文科学系の単位の代わりに、この講座を選択することが出来る。

068A 総合科目F 2-2-4 （助教授 菊地 靖 他）

068B 日本の歴史 2-2-4 （講 師 浅 沼 正 明）

068C 日本の文学 2-2-4 （教 授 森 常 治）

068 D 日本の美術 2-2-4

(教授 鈴木康司)

飛鳥、奈良時代から現代までの日本美術の主流を述べ、日本美術および日本人の美意識の特質を考えてみたい。

テキスト 「日本美術史」(美術評論社)

069 A 日本の社会構造 2-2-4

(講師 藤見純子)

日本社会を特徴づけている社会構造について、その近世末からの変化をも問題にしなが
ら、以下の順序で、なるべく具体的に話をしていく。

1. 日本の農村における伝統的社会構造
2. 日本社会の近代化
3. 現代日本における社会構造上の特質

069 B 日本経済構造論 2-2-4

(教授 森常治)
(講師 小松憲治)

069 C 日本経済の発展 2-2-4

(助教授 間宮国夫)

080 A, B 英語 4-4-4
081 C 2-2-2

教授：今西基茂、東浦義雄、鈴木康司、森田貞雄、高野良二、森常治、曾我
昌隆
助教授：石井 博、岡崎凉子
講師：市川 淳、イデラ・グレイブス・茅野、遠藤嘉徳、岡田福市、岡野松
雄、岡本文生、金勝 久、金丸十三男、木内信敬、木田盛雄、北川悌
二、ケイ・ヴァン・アッシュ、小日向恒夫、佐藤吉介、坂本和男、榎
原威征、島岡 将、清水ちか子、神保春雄、田中睦夫、高田美一、田
部井正未、千葉則夫、寺門泰彦、中林孝雄、中村匡克、プライヤン・
ワトソン、本間 武、本田和也、松村賢一、松山正男、山下雅己、山
田英教、行吉邦輔、リンダ・アイリーン・ミラー、レイモンド・ロー
レンス・キーン、渡辺一雄

〔教授の主旨〕

本学部における英語授業の目的は大別して二つとなる。その専門とする分野の英語で書かれた書物を将来自由に読み、自己の学説または Report を英語で書き、あるいは英米人と会話を自由になし得るばかりでなく、学術上の意見をも互に交換し得る能力を授けようとするのがその一つであって、これは学部としての性質上、もっとも重要なことである。しかしわれわれはただそれだけでは未だ足れりとはしない。もう一つの目的は、新制大学設立の趣旨にそって卒業後社会人として、技術家として、研究者として、世界的視野を持ち、広く且つ大いなる舞台に活躍するのに必要な高度の教養を英語を通じて学生に授けよう

とするものである。

〔授業内容〕

本学部では、1年は4時間（4単位）、2年は2時間（2単位）を必修として課する。そして1年では2人、2年では1人の教授（または助教授、講師）がそれぞれ1週2時間ずつ出講する。その3人は外見上同様な教材を使用しながらも、前項の教授の主旨にしたがって、おのおのその特色を異にするものである。すなわち

(a) 語学力涵養を主とするもの

(b) 英米文芸の鑑賞ならびにその背景的知識の習得を主とするもの

二つである。

なお、随意科目として会話をおいてある。

082A, B ドイツ語 4-4-4
083A, B ドイツ語 4-4-4

教 授：榎本重男，加藤真二，助広 剛，高木 実，中村浩三，子安美知子
助教授：加藤諦三，田ノ岡弘子，大久保進
講 師：秋葉裕一，井上正蔵，市村 仁，大槻真一郎，喜多尾道冬，菊地慎吾
小島正雄，近藤逸子，坂下 進，杉浦忠夫，滝崎安之助，竹内康夫，
田中 敏，中村耕平，平井政男，北条清一，水谷 洋，村田碩男，森
田 茂，山田潤二，吉田 孚，鷺山恭彦

ドイツ語は第1年度週4時間、第2年度週4時間で、2年間に8単位である。初めの1年間に初歩文法と簡単な読本による訳読、つぎの1年間に中級読本を中心に訳読を主とし、随時文法に触れていく。この2年間に将来自力でそれぞれの専門書の解説ができるだけの基礎を作るのである。しかしこれのみにとどまらず、語学的学習を通じて広くドイツ文化に親しみをもつことが考慮される。

クラス編成：

第1年度初級（週4時間）……ABCの初級から始めるもののクラス。

第1年度中級（週4時間）……当学部入学前に初歩ドイツ語程度を既習したもののクラス。

第2年度級（週4時間）……第1年度初級ないし中級の単位を取ったもののクラス。

ドイツ語の必修課程は以上のとおりであるが、さらに実力をつけたいと思う希望者のために、随意科目として、ドイツ語会話 第2年度級（週2時間）、上級独語 第3年度級（週2時間）が置かれている。

なお、本年度の使用教科書については、年度はじめに掲示する。

084A, B フランス語 4-4-4
085A, B 4-4-4

教授：桜井成夫, 河村正夫, 中村三郎
助教授：ソランジュ・E・ナイトー
講師：野村二郎, 薄井歳和, 白川宣力, 山本慧一, 田島衣子, 佐々木茂美,
小島慶一, 寺田恕子

langue vivante (living language) の学習に話し言葉を重視すべきことは言うまでもないが、特にフランス語では、その国際語としての重要性と、書き言葉話し言葉の距離が大きい(発音と綴り字の遊離、特に形態法の面で綴り字に基いた文法とは別のものとしての話し言葉の文法の存在、連辞面での単語の独立性の稀薄さ)点から、聞き話す能力の基礎を入門期に養っておくことが肝要である。そこで、本理工学部に入學して初めてフランス語を学ぶ学生に対しては、第1年次は、日常話されるフランス語を中心とした教材を用い、スライドと語学ラボラトリーを活用して、音としてのフランス語を聞きとって口に出す練習に重点を置いた訓練を行なう。こうして聞き話す習慣と、話されるフランス語の文法を身につけた後に、第2年次は、既修の文法事項を強化補充しながら、新しい語彙と表現をふやし基本的な読書力の養成に重点を移してゆく。

高等学校でフランス語を学習した者に対しては別クラスを編成して、フランス語の諸能力を更に強化するとともに、フランス語を通じて広い教養を得るように努める。

なお、一層の実力をつけたい人のために、随意科目として上級フランス語、仏会話(フランス人講師)がおかれているほか、人文科目の一つとしてフランス文化論が設けられていることを注意しておく。

086A, B ロシア語 4-4-4
087A, B 4-4-4

(教授 笠間啓治
講師 五味勝義, 狩野吳子, 岡林菜実)

ロシア語は、第1年度、第2年度を通じて週2回、第1年度ではロシア語基礎学力の養成に重点をおいて、ロシア語基本文型による簡単な文章の読み書き話し聞く能力を修得するためのトレーニングがおこなわれる。第2年度では、引き続き基礎学力の拡大をはかりつつ、読解・発話・作文・聴取・の本格的な能力を修得する。なお、この他にロシア語会話の学習を求める学生にたいしては、ロシア人講師による会話クラス(随意)が設置され、また論文読解練習を主とした上級露語クラス(随意)が第3年度に設置されている。

070A, B スペイン語 4-4-4
071A, B 4-4-4

072A, B イタリア語 4-4-4
073A, B 4-4-4

074A, B デンマーク語 4-4-4
075A, B 4-4-4

074 A, B	デンマーク語	4-4-4
075 A, B		4-4-4
076 A, B	ポルトガル語	4-4-4
077 A, B		4-4-4
078 A, B	中国語	4-4-4
079 A, B		4-4-4
088 A, B	朝鮮語	4-4-4
089 A, B		4-4-4

091 日本語（外国学生 必または選） 8 単位

外国人学生のための日本語授業のおもな目的は、日本語を、“使う”能力を養うこと。とくに、本学部学生として、（日本語で行なわれる）講義を理解し、教科書・参考書をはじめとする出版物を自由に読み、実験を行ない、レポートや論文を書くことができるようにすることであるが、さらに、日本の文化を理解し、日本の社会の一員としてその習慣に従い、まさつのない生活ができるようにすることも意図している。

このため、授業内容としては文型練習による正しい表現法の学習、テープレコーダーなどを使っての、聞き方・話し方の訓練、絵・写真・スライドやいろいろな“もの”を使っての表現の練習、種々のテキストの講読、作文などを行なう。テキストとしては、初・中級は本学語学教育研究所日本語教室で作った「外国学生用日本語教科書」を用い、また上級では新聞・雑誌・単行本などを用いる。さらに専門語の習得に役立つように、専門的な書物や論文も用いる。

クラス編成

初級（D……週18時間 4単位）

初歩から集中的に学ぶ必要のあるものためのクラス

中級（C……週12時間 4単位）

初歩はすでに習得しているが、なお実力が不足しているものためのクラス

上級（B……週6時間 4単位）

（A……週4時間 4単位）

一応は日本人学生についていけるものためのクラス

新入学生のクラス分けは、3月に行なわれた「外国学生日本語入学試験」の結果に基づいて行なわれる。そのさい、Dと判定されたものは、学部の授業に先行して日本語を専修しなければならない。C、Bと判定されたものには日本語が必修である。Aと判定されたものは選択必修とすることができる。第2年度は成績により1級または2級上のクラスに進む。したがって、日本語の学習課程をあげれば、次のコースとなる。

必修コース(1)	初級(4単位)	中級(4単位)	} 使用教科書は年度はじめに掲示する。
〃	(2) 初級(〃)	上級(〃)	
〃	(3) 中級(〃)	上級(〃)	
〃	(4) 上級(〃)	上級(〃)	

092A 英 会 話 2-2-2 (講師 ケイ・ヴァン・アッシュ)

英会話は随意科目として英人講師により担任される。これは1年から4年までの学生が随意に選択し得ることになっている。

092B 米 会 話 2-2-2 (助教授 アルバート・W・ピーターソン)

092C 独 会 話 2-0-1
0-2-1

初級ドイツ語をおえた程度の学生を対象にして、ドイツ人講師による会話の授業が行なわれる。授業は学期毎に完結される。

092D 仏 会 話 2-0-1
0-2-1 (助教授 ソランジュ・E・ナイトー)

随意科目、週2時間。第2外国語の授業が、とくに「話す」力を養う点で極めて不十分であるのは、わが国における語学教育の現状である。外人講師にお願いして、こういうブラクティカルな面の不足を少しでも補いたい。この講座を有効に利用することを望む。聴講希望者は、フランス語の単位をすでに修得しているか、もしくはそれと同程度の素地のあることを要する。

092E 露 会 話 2-0-1
0-2-1

093A 上 級 英 語 2-2-2

093B 上 級 独 語 2-2-2

093C 上 級 仏 語 2-2-2 (教授 河村正夫)

随意科目、週2時間。2年間でせきかく習いおぼえた新たな外国語を、学年の進むとともに忘れてしまうというのが、大方の学生に見られる傾向である。これは、いかにも遺憾なことである。成績が優秀なものである場合には、いっそうこの感を深くする。そこで、既習の語学を忘れさせず、さらにいっそうの力をつけさせるのが、本科目のねらいである。2年およびそれ以上のフランス語単位修得者を対象にするのが一応の建てまえであるが、科目の性質上、ある程度フランス語の素地のある学生なら、自発的にこれを聴講することを奨励したい。教材は、さほど高度のものではない。

093D 上級ロシア語 2-2-2

(教授 笠間 啓治)

いわゆる初等文法を習得した学習者を対象とし、哲学・科学・技術に関する論文の正確な読解の練習を行なう。ロシア語シンタクスの学習を中心に精読・翻訳の練習を行なうと共に、テキスト全体の主旨把握と大意抽出の練習を通じて直読直解・速読へ向かう。

094A 工業英語

(助教授 篠田 義明)

理工学分野の英文は、他のいかなる分野の英文よりも、事実を卒直に、かつ、正確に、完全に伝達することが要求される。以上の点を中心にして、各種理工学分野の論文を英訳・和訳する際に是非とも心得ていなければならない事項を考究し、併せて演習を行なう。この分野特有の英文のスタイル、表現法などを説明する。

テキスト：『工業技術英語の基礎』『工業技術英語の構文』ほか。

095 体育講義 2単位

A 体育理論講座

体育論、体育史、体育原理、体育管理、体育の歴史と方法、体育の心理学、社会体育、体育と生活、職場体育、現代スポーツ論、体育社会学、近代体育

B 保健衛生講座

遺伝優生学、安全の生理学、栄養学、生活の衛生学、社会的疾患、体力衛生、スポーツ医学、保健の心理学、社会医学、体力調整論、労働の科学、体育の医学、発達の生理学、行動衛生論、公衆衛生、環境衛生、衛生の科学

以上の講義科目がおかれている。

詳細は体育局発行「保健体育履修要項」参照。

096 体育実技 2単位

A 年間実技

陸上競技、軟式野球、硬式庭球、ソフトボール、バスケットボール、ハンドボール、サッカー、卓球、レスリング、馬術、ボクシング、合気道、フェンシング、柔道、空手、一般体育、弓道、剣道、バドミントン、ウェイトトレーニング、バレーボール、体操競技、ホッケー、女子体育、フェンシング、ダンス、弓道、水泳、相撲

B シーズン実技

夏季 水泳、山岳、ヨット、ボート、野外活動

冬季 スキー、スケートその他ワンダーフォーゲル、自動車

C 夏季実技 夏季休暇中に年間実技の科目を集中的に行なうもの。

詳細は体育局発行「保健体育履修要項」参照。

数学・物理学・化学系科目

C101 図 学 2-2-4 (教授 川上新太他)

工業図学を主としたもので演習帳または製図実習を併用する。従って製図用具を一通り用意する必要がある。用具は最初の時間に細かく説明する。なお、図学は共通専門科目として取り扱われ、使用図書は担任教員により異なることがある。

参考書：平山 高他4氏著、「図学」(培風館)。川口 毅著、「図学」(東京電機大学出版部) 福永節夫著「図学概説(培風館)・幸田 彰、森田 鈞共著、「図学問題演習」(オーム社)

C102A 数 学 A 2-2-4
C102B 数 学 B 4-4-8

教授：田中忠二、中島勝也、杉山昌平、野口 広、洲之内治男、入江昭二、寺田文行、木下素夫、垣田高夫、有馬 哲、草間時武、広瀬 健
助教授：小島 順、五百井清右衛門、郡 敏昭、小島清史、清水義之、室谷義昭、足立恒雄、福山 克
講師：浅枝 陽、伊藤良彦、五関善四郎、石田寅之助、岩田利雄、岡本武義、齊川長三、芹沢正三、大石尚弘、本庄昭三、政池寛三、赤平昌文、青木統夫

一般教育としての数学は、理工学部においては、A、Bの二科目に分け、ともに基礎教育科目として取り扱い、各学科必修である。

数学A(毎週2時間)では線形代数学を中心に講義を行なう。

数学B(毎週4時間)では一変数、および多変数の微積分の講義を行なう。

教科書は、A、B共に教授が指定する。

C102C 数 学 C 2-2-4
C102D 数 学 D 2-2-4

教授：田中忠二、中島勝也、杉山昌平、野口 広、洲之内治男、入江昭二、寺田文行、垣田高夫、木下素夫、有馬 哲、草間時武、広瀬 健
助教授：小島 順、郡 敏昭、小島清史、清水義之、室谷義昭、足立恒雄、福山 克
講師：早川康式、政池寛三

一年の数学に直接つづく講義で、物理数学的な解析を必要とする科の学生を対象とし、解析学の基礎知識を与えると同時にまた近代解析のセンスを養うことをその目的とする。

実施の際には、つぎのごとく、函数論を主体としたコースと、微分方程式を主体としたコースにわけが、両者は内容においては、必ずしも独立のものではない。

数学C 1. 函数論 2. 演算子法

数学D 1. 微分方程式 2. フーリエ級数

C102E 数 学 E 2-2-4

教授：田中忠二，中島勝也，杉山昌平，野口 広，洲之内治男，入江昭二，
寺田文行，木下素夫，有馬 哲，草間時武，広瀬 健
助教授：小島 順，郡 敏昭，小島清史，清水義之，室谷義昭，足立恒雄，福
山 克
講 師：大石尚弘，藤沢武久，早川康弼

一年の数学Bにひきつづき、微分方程式と函数論を中心にした講義を行ない、解析学の基礎知識を充実させることを目的とする。

103 数 学 演 習 (応物・物理2) 2-2-2 (教授 飯野理一) (助教授 梶 正義)

物理数学Aおよび数学概論Ⅱの講義内容を充分理解しうるように多くの問題について演習を行なう。

107Ⅰ 数 学 概 論 A (数学1) 2-2-4 (助教授 清水 義之)

初等整数論，代数学入門，特に群の概念を中心とした話題

107Ⅱ 数 学 概 論 B (数学1) 2-2-4 (教授 中島勝也)

数学科の学生として数学を学ぶに際して、常識として知っておくべき基本的概念のうち、特に解析学に関係のある部分を説明する。これは同時に、数学Bの補ない、および、2年度以降におかれた講義科目への下準備をも目的としている。

108Ⅰ 代 数 学Ⅰ (数学3) 2-2-4 (教授 木下素夫)

中心課題はガロアの理論である。そのために必要な群論，体論からの補充にはじまり、一般可換体(標数 p の場合を含む)上でガロア理論を展開する。一般代数学に接続する。

108Ⅱ 代 数 学Ⅱ (数学4) 2-2-4 (教授 寺田文行)

非可換代数学に属する半単純環の理論から群の表現論へ進むコースと3年の代数幾何学

をうけついで、代数幾何学の基本定理である Riemann-Roch の定理の紹介とを1年おきにおこなう。代数学 I に接続すると考えてよい。

109 一般代数学 (数学2) 2-2-4 (助教授 足立恒雄)

1年の数学概論Aの群論をうけつぎ、アーベル群の基本定理へすすむ。つぎに環、モジュール、テンソル積、多重線型写像など抽象代数学の基本概念にすすむ。

さらに応用方面を考えて束論、ブール代数などもとりあげる予定である。

110 代数幾何 (数学3) 2-2-4 (教授 有馬哲)

代数幾何学の基本的な諸概念を前期に扱い、つづいて後期は一般イデアル論を扱う。とくにネーター環、アルティン環、デデキント環におけるイデアル論を紹介する。2年の一般代数学、幾何学の知識を仮定する。

111 整数論 (数学4) 2-2-4 (助教授 足立恒雄)

整数論の基本定理であるイデアルの分解定理からはじめて、古典整数論の著名な話題や付値論からはじまる現代整数論へのアプローチなど予定している。予備知識は2年に設置してある一般代数学程度とする。

112 位相空間 (数学2) 2-2-4 (助教授 福山克)

位相幾何学、位相解析、位相代数学の基礎をなす位相空間の基本的理論への入門をのべる。

〔参考書〕野口 広：「位相空間」(至文堂)

チン・スタンロート・「初歩のトポロジー」(河出書房新社)

113 微分幾何学 (数学4) 2-2-4 (講師 立花俊一)

ユークリッド空間における曲線、曲面の性質を微分幾何学の古典的方法でしらべ、次いでテンソル解析の方法でリーマン幾何学を概説する。

114I 幾何学 (数学2) 2-2-4 (助教授 小島 順、清水 義之)

前半は線型代数の補充として、線型写像、双対空間、アフィン空間と射影空間、エルミート形式とユニタリ変換群などを扱う。

後半は、ノルム・アフィン空間における微分法を準備した後、 R^N の中の微分多様体、複線型代数とくに外積代数、外微分形式とチェーン上の積分、一般ストークスの定理までを目標にする。

114Ⅱ 幾何学特論 (数学4) 2-2-4 (講師 立花俊一)

微分幾何学, トポロジー, 古典幾何学等より適時に話題をえらぶ。

115 位相幾何学 (数学3) 2-2-4 (教授 野口 広)

代数的位相幾何学への入門である。ホモトピーの概念, 基本群, 被覆空間, 多面体あるいはセル複体のホモロジー群 (コホモロジー群), 位相多様体における双対定理などが話題であるが, この分野の急速な発展に対応して, 特異点の理論などを中心として講義は進める。

115A 位相幾何 (通信4) 0-2-2 (教授 野口 広)

この講義は, 位相幾何 (Topology) とよばれる数学の一分野の基礎的な知識について説明するもので, 電子・通信工学の多くの分野, たとえば回路網解析および合成, 情報伝達・処理系の解析および合成, 制御系の解析および合成など, で必要とされる各種信号間の対応関係, 接点・端子の連結関係などに幾何学的方法論を与えるために設けられたものである。この分野の急速な発展に対応して, 例えば力学系の理論などを中心として話を進めることもある。

116 解析学 (数学2) 2-2-4 (教授 入江昭二, 中島勝也)

第1年度で修得した事項を基礎として, 多変数の微積分を詳しく説明し, 演習と併せて確実に理解せしめる。さらに解析学の各分野の入門の手引きとして, それ迄に述べた理論がどのように結び付き, 展開していくかを概説する。

〔内容〕 多変数の微積分, ベクトル解析, フーリエ解析, ラプラス変換

〔参考書〕 入江昭二外: 微分・積分 (内田老鶴), 高木貞治: 解析概論 (岩波), 吉田耕作, 加藤敏夫: 応用数学I (裳華房), 一松 信: 解学序説 (裳華房)

117 多様体 (数学3) 2-2-4 (助教授 清水 義之)

多様体の基本概念を学び, 複素多体, de Rham の定理などを目標する。

〔参考書〕 松島与三: 多様体 (裳華房), 村上信吾: 多様体 (共立)

119 I 数学基礎論I (数学3) 2-2-4 (教授 広瀬 健)
(助教授 福山 克)

数理論理の初歩から始め述語論理の完全性, 自然数論の不完全性, 無矛盾性など数理論理の基本的事項についてひと通り触れる。

119 II 数学基礎論II (数学4) 2-2-4

(教授 広瀬 健)
(助教授 福山 義)

公理的集合論入門。濃度や順序数の理論を展開した後 Gödel による選択公理や一般連続体仮説の無矛盾性の証明を解説する。第一階述語論理についての初等的知識を仮定する。

120 数値解析 (数学4) 2-2-4

(助教授 室谷 義昭)

「数値計算法」を基礎として、この「数値解析」ではさらに進んだ内容について、とくに関数近似と偏微分方程式の数値解法に重点をおいて研究して行く。

[参考書] L. Collatz: The numerical treatment of differential equations. Springer Verlag.

R. S. Varga: Matrix Iterative Analysis, Prentice-Hall. 1962.

杉山昌平, 高橋馨郎: 数値解析 (広川書店), 一松 信: 数値解析 (税務経理協会), 森 正武: 「数値解析」 (共立出版)

121 I 関数論(I) (数学2) 2-2-4

(教授 田中 忠二)

複素関数論の初歩的部分を完成し、他の解析方面に利用し得る体制を確立する。

[参考書] 遠木幸成, 阪井和: 基礎課程 関数論 (学術図書出版)

柳原二郎: 一般関数論 (朝倉書店)

Z. Nehari: Introduction to complex analysis (Maruzen Asian Edition)

121 II 関数論(II) (数学3) 2-2-4

(教授 垣田 高夫)

関数論 I に接続して若干高等な部分を完成する。

[参考書] 梶原穰二: 多変数関数論 (森北出版)

122 積分論 (数学3) 2-2-4

(助教授 小島 清史)

2年の実関数論の講義をふみ台として抽象的な測度空間におけるルベック積分論を講義し、後半で確率論を講義する。実関数論の講義を聞いておけば理解がふかくなるであろう。

[参考書] 鶴見 茂 確率論 至文堂

伊藤清三 ルベック積分入門 裳華房

123 実関数論 (数学2) 2-2-4

(教授 洲之内 治男)
(助教授 小島 清史)

19世紀までの解析学への反省から起こったトポロジー、ルベック積分などの新しい解析学の考え方や関数空間などを解説し、現代の解析学への入門とする。

[参考書] 洲之内治男: ルベック積分入門, 吉田洋一: ルベック積分入門, 伊藤清三: ルベ

124 応用関数論 (数学4) 2-2-4 (講師 西本敏彦)

応用数学に現われる特殊な諸函数, 対応する二階線形微分方程式, Laplace 変換についての函数論的な取り扱いおよびそれらの物理的問題への応用について説明する。

[参考書] 犬井鉄郎: 特殊函数 (岩波全書), 小松勇作: 特殊函数
・井上正雄: 応用函数論 (共立全書)

Whittaker, E. T., and Watson, G. H.: A course of modern analysis.

125 関数解析 (通信4) 2-0-2 (教授 洲之内治男)

この講義は, 関数解析 (Functional Analysis) とよばれる数学の一分野の基礎的な知識について説明するもので, 電子・通信工学の多くの分野, たとえば回路理論・電磁波理論・情報理論・制御理論など, における数学的方法論の総括を行ない, また, それらの拡張をうながす基礎を与えるために設けられたものである。

まず, 集合論の基礎・距離空間・線形ノルム空間・線形作用素方程式について述べ, ついで測度概念の導入によって測度論・可測関数・Lebesgue 積分・Hilbert 空間などについて順次解説する。

126 I 関数解析 I (数学3) (教授 洲之内治男)
(助教授 小島清史)

実関数論および位相空間論の続きとして, 関数方程式や数値解析への応用についても適宜にふれながら, ヒルベルト空間の理論を中心に, 関数解析の基礎的事項を説明する。

助教授 小島清史: 偏微分方程式論, とくに非線形双曲型偏微分方程式論の研究。

126 II 関数解析 II (数学4) 2-2-4 (講師 網屋正信)

関数解析 (I) の続きとして, バナッハ空間論超関数論の初歩, およびフーリエ解析を前半に, 後半ではその応用として, 適宜に話題を選んで紹介する。

127 常微分方程式 (数学3) 2-2-4 (教授 杉山昌平)

常微分方程式の基礎理論に関係する事項について説明する。

(1) 初期値問題 (2) 線形微分方程式 (3) 特異点 (4) 境界値問題, 固有値問題
(5) 非線形振動論

(数学概論, A. B. 解析学, 函数論, 線形代数の初歩を履修していることが必要である。)

[参考書] 福原満州雄: 微分方程式上・下, 小松勇作: 常微分方程式論
斉藤利弥: 常微分方程式論, 吉沢太郎: 微分方程式入門

木村俊彦：常微分方程式

Coddington and Levinson: Theory of ordinary differential equations.

129 I 偏微分方程式 I (数学 3) 2-2-4 (教授 入江昭二, 垣田高夫)

古典的な方法(例えば, 特性曲線, Fourier 級数・積分, Green 公式等)を用いて, 1階偏微分方程式, および2階の物理数学の方程式(波動方程式, Laplace 方程式, 熱方程式等)の解を求め, また性質をしらべたりする。これは同時に, 偏微分方程式の理論への実際的入門でもある。

129 II 偏微分方程式 II (数学 4) 2-2-4

偏微分方程式 I の続きとして, 偏微分方程式のより理論的な取り扱い方について解説する。

選択上の注意: 129 I 偏微分方程式 I, 126 I 関数解析 I などを, 前もって聴講しておくことをすすめる。

130 関数方程式概論 2-2-4 (助教授 室谷義昭)

常微分方程式の基礎的な部分としての

- 1) 基本定理: 解の存在と一意性, 解の初期値に関する連続性, 微分可能性, パラメーターを含んだ方程式についてのパラメーターに関する解の同様な性質
- 2) n 階線型微分方程式
- 3) 2 階の解析的微分方程式

および年毎にえらばれる適当なトピックス, 例えば,

- [1] スツルム-リュウビルの固有値問題
- [2] 積分方程式
- [3] 差分方程式

等が組合わされる。

131 実験計画法 (工経 4) 2-2-4 (教授 池沢辰夫)

本講義は情報量の効率をいかにしてあげるかを, 解明することを目的とする。すなわち, 数理統計学, 統計的方法演習で学んだ統計的方法を用いて, 合目的に出来る限り少ない実験数で, しかもなるべく推定の精度をよくするためにはいかなる実験を計画し実行すべきかを教示せんとするものである。当該科目を履習するには, 「品質管理」, 「統計方法演習」のいずれか二科目を履習していることが望ましい。

C132 数理統計学 2-2-4

(教授 草間時武)
(講師 崎野滋樹)

まず確率論の基礎概念を述べた後、なるべく実際の問題にふれながら点推定、区間推定、仮説検定の基礎理論を講義する。

〔参考書〕 裏西、加納、河野、瀬口：統計解析入門（広川書店）

宇野利雄：数理統計学演習（共立社）、石井吾郎：数理統計入門（培風館）

132A 数理統計学（工経2） 2-2-4

（講師 藤沢武久）

情報化時代を迎え、より良いデータ解析の必要性が高まっている。単に統計的手法を修得せしめるだけでなく、その理論的背景および適用の理論的根拠を丁寧に解析する。

132B I 数理統計学(I)（数学2） 2-2-4

（教授 草間時武）

本講義では確率論の初歩、数理統計学の準備としての基礎概念、十分統計量等について述べる。数理統計学(II)と接続し、(I)だけでは数理統計学の一部にすぎないので(I)、(II)共に聴講することが望ましい。

132B II 数理統計学(II)（数学3） 2-2-4

（教授 草間時武）

本講義では仮説検定、点推定、区間推定、分散分析、予測等について、なるべく手法の良さや考え方に重点をおいて述べる。積分論の講義も聞くことが望ましい。

〔テキスト〕 草間時武 統計学（サイエンス社）

133 応用統計学（数学4） 2-2-4

（教授 高橋磐郎）

統計学における実験計画法の構成問題に組合せ数学を基調とするが、それは現代では通信工学の一部である符号理論や情報検索におけるファイリング理論に発展しつつある。本講座はこうした情報工学関係を中心とする。

実験計画法（ガロア体、直交表、ガロア体上の幾何、不完備バランス計画（BIB）、部分不完備バランス（PBIB）

符号理論（誤り訂正符号、線形符号、巡回符号）

情報検索（キーワード型ファイル、ファセット型ファイル）

134 確率論（数学4） 2-2-4

（講師 青木統夫）

これは偶然および予測に関する理論である。古典確率論を現代風に解説し、ポレル、エルモゴルフにはじまる近代確率論とその応用について講義する。

参考書 伊藤 清：確率論

H. G. Tucker: An introduction to probability and mathematical statistics.

W. Feller: An introduction to probability theory and its applications.

M. Loeve: Probability theory.

136 応用確率過程 (応物・物理3) 2-0-2 (講師 佐藤 拓 栄)

確率・統計の理論の応用分野は品質管理法, 抜取検査法, 実験計画法, オペレーションズ・リサーチ, 情報理論, コンピューターによる情報処理, その他自動制御関係など広い。これらに用いるときのことを考えて, 確率論, 統計量の分布, 推定論, 時系列, 確率過程論などの基礎的な概念を講義する。

C138 オペレーションズ・リサーチ (機械4) 2-2-4 (講師 坂本 実)

「組織化されたシステムを効果的にコントロールする問題を解決するための科学的方法の複合」である OR について, つぎの順で講義する。

OR の基本原理, 数値計画法の諸手法 (離散型, 非線形, 動的), オペレーションの確率的モデル化。

C138 オペレーションズ・リサーチ (通信4) 2-2-4 (教授 春日井 博)

138A オペレーションズ・リサーチ (工経3) 2-2-4 (教授 春日井 博)

オペレーションズ・リサーチ (O.R) は近年, 管理技法として特に注目を集めている。本講義は, インダストリアル・エンジニアリングの基礎技法として OR のモデル (在庫モデル, 配分モデル, 待ち行列モデル, 取替モデル, 競争モデル) を用いて説明する。技法としてリニア・プログラミング, ダイナミック・プログラミング, 待ち行列理論, ゲーム理論, モンテ・カルロ法, 論理演算等について述べる。事例を機能別に選んで解明する。

140 最適値問題 (数学4) 2-2-4 (教授 示村悦二郎)

多くの計画, 設計あるいは制御問題は最適値問題として定式化される。この講義では主として制御問題に重点をおいて最適値問題を扱う。非線形計画法, 動的計画法, 最大原理および最適値問題の計算アルゴリズムなどが主な内容である。

141A 数値計算法 (数学3) 2-2-4 (教授 中島勝也)

数値計算法の基礎知識を講述し, 演習や計算機実習を通じて, その応用の能力をつけることを目標とする。具体的には, 線形計算, 微分方程式の解法, 高次代数方程式の解法について講述する。

【参考書】 一松 信「数値解析」;(税務経理協会) 戸川隼人「マトリクスの数値計算」

(オーム社)

宇野利雄「計算機のための数値計算法」(朝倉書店)

中島勝也「電子計算機」(筑摩書房)

141B 数値計算法 (電気3) 2-2-4 (教授 田村 康男)

工学の問題は適切な定式化ができれば半分解けたのと同じである。ここでは定式化に留意しながら工学上の諸問題を数学的に分類し、その主なものについてコンピュータ向きのアルゴリズムを解説する。

古典的な数値計算に加えて、最適化手法の基礎、シミュレーション技術および制御用コンピュータとソフトウェアの関連をも述べたい。

選択上の注意：講義に付随して自発的な実習とレポートの提出を求める。またデジタル・コンピュータのプログラミングに関する初歩的知識を必要とする。

主な項目

- | | |
|------------|----------------------|
| 1. 数値計算の基礎 | 5. 偏微分方程式 |
| 2. 線形計算 | 6. 最適化手法の基礎 |
| 3. 代数方程式 | 7. シミュレーション技法とソフトウェア |
| 4. 常微分方程式 | 8. プロセス・コンピュータ |

C142 電子計算法 2-0-2 (講師 木下 暁, 武田俊男)

電子計算組織の一般概念、および、科学技術計算に対する電子計算組織の使用法を重点的に解説する。主な内容は下記のとおり。

1. 電子計算組織の概説
2. FORTRAN (科学技術計算用言語) の解説
3. FORTRAN 例題, 練習問題
4. 応用
5. その他

142A 電子計算法 (数学2) 2-2-4 (講師 小島 惇)

電子計算機のプログラミングとソフトウェア工学の基礎を説明する。

1. チューリング機械
2. 電子計算機の基本原理
3. プログラム用言語
——アセンブラ言語, FORTRAN, COBOL, PL/I——
4. プログラミング技法
5. ソフトウェア工学の基礎

142B 電子計算法 (土木2) 2-0-2 (教授 宮原 玄)

デジタル電子計算機の使用方法について解説する。

すなわち、デジタル電子計算機で何らかの仕事を行いたい場合はその仕事の内容を電子計算機に理解させるために、我々は特殊な言語を用いる。この言語は Machine-oriented Language, Algorithm-oriented Language, Problem-oriented Language に大別されている。これら言語について説明を行い大学に設置されている電子計算機を用いて実習を行う。

142C I 電子計算演習 I (工経2) 2-0-1 (教授 十代田 三知男)

デジタル型電子計算機のプログラミング技術を修得するための第一歩として、機械語によるプログラミング演習を行う。本演習は各人毎に作成したプログラムをパンチさせ、実際の電子計算機によるアウトプットを得ることによって、これを行う。

1. 電子計算機概説
2. 四則演算と入出力
3. ジャンプ命令とループ
4. フローチャート
5. 自由課題
6. サブプログラムシステム

142C II 電子計算演習 II (工経 I) 0-2-1 (教授 十代田 三知男)

経営工学、管理技術に関する研究を進めるために必要なデジタル計算機のプログラミング技法の基礎を修得するための演習を行う。

1. FORTRAN
2. I/O 概説を主とした算術演算の演習
3. コントロールを主とした演習
4. サブプログラムを使う演習
5. シミュレーション演習

以上について個人毎のプログラムを各自にパンチさせ、実際に電子計算機によって、アウトプットを得ることによって、これを行なう。

142D 電子計算機の応用 (金属4) 0-2-2 (教授 中田 栄一)

電子計算機の原理について略述し、この応用について述べる。特にデジタル計算機のソフトウェアに関しては、オペレーティングシステムの概略について述べ、さらに、自動プログラミングの実習を通じて数値計算法について説明する。ハードウェアに関しては Boole 代数について述べ、デジタル計算機の論理回路の概要について述べる。つぎに金属学の各分野における応用例、およびトピックスについて述べる。

142E 電子計算法 (通信 I) 2-2-2 (教授 小原 啓義)

電子計算機を使用して数値計算などを行なう場合に必要のプログラミング技術を学習する。実習するプログラム主語は当分の間 PL/I とする。

143 情報科学概論 (数学4) 2-2-4 (講師 藤野 喜一)

情報とその処理に関する基本的意味づけと、コンピュータ利用に際して重要な情報の構造、表現及び処理方式を体系的に述べる。

〔参考書〕 計算機システム基礎論（共立出版）
ネットワーク入門（日本経営出版会）

144 線型計画法（機械4） 2-0-2 （講師 小田切美文）

線型計画法の基礎理論を解説し、生産・輸送・混合・配分・代謝・神経機能などの応用例を通して線型計画における制約条件、目的函数、双対関係ゲーム論とのつながり、整数変数問題等を考察する。続いてシステム運用、ある種の工学設計その他の工学技術問題展開への拡張について講述したい。

145 ゲームの理論（機械4） 0-2-2 （講師 坂本実）

ゲームの理論の（数学的）基礎を、その応用に留意しながら講義する。
すなわち、マトリックス・ゲーム、無限対立ゲームを中心に、基本概念、数学的定式化とその解法を学ぶ。

146 数 学 1（機械3） 2-2-4 （講師 下郷太郎）

確率および統計の基礎概念、確率過程論の基礎を修得させることを目標とする。同時に工学に対する応用の能力を養う。おもな内容は、マルコフ連鎖、ポアソン過程と出生死滅過程、拡散過程、信頼性理論など。

147 数 学 2（機械3） 2-2-4 （教授）

常微分方程式。偏微分方程式。力学系の運動、積分方程式、境界値問題。ポテンシャル論議論、を具体的なモデルに求めつつ展開するように行ってゆきたい。

148 数 学 3（機械3） 2-2-4 （講師 岡本哲史）

複素変数、函数論、特殊変換。これらの講義を応用例を示しながら行なう。

149 応 用 数 学（土木3） 2-2-4 （教授 平嶋政治）

微分方程式、積分方程式、差分方程式、変分法、近似解法論等を土木工学への応用を主題として講義する。

150 工 業 数 学（機械2） 2-2-4 （教授 高橋利衛、田島清瀬、木下素夫）

函数論および微分方程式を主体として解析的手法の基礎を与え、これを通じて工学上の数理解析力の養成に資することを目的とする。

151A 物理数学A (応物・物理2) 2-2-4 (助教授 梶 正義)

行列, 常微分方程式および物殊関数について解説する。

151B 物理数学B (応物・物理3・化4) 2-2-4 (助教授 梶 正義)

物理数学における線形及び非線形偏微分方程式の古典的取扱いと関数解析的取扱いを解説する。

151C 物理数学C (応物・物理4) 2-2-4 (授教 飯 野 理 一)

主としてヒルベルト空間における関数解析の基礎的事項を解説し, 応用として, 偏微分方程式, 積分方程式を取扱う。

152 物理数学 (通信3) 2-2-4 (講師 小 寺 武 康)

この講義は, 電子・通信工学を含む物理系に現れる偏微分方程式と, それに関連する応用数学とを詳細に論述するものである。まず, 実際に現れる偏微分方程式の特有の型を説明し, ついで, 特性体の理論を概説する。そして, 各型の異同を論じ, その解の特性について明らかにする。さらに, Green の定理, Green 関数の適用を例示する。つぎに, 円柱状ならびに球状の系に関連して円筒関数系ならびに球関数系を誘導し, その解析的性質を詳述する。(または, 積分変換に関する統一的な理論の解説を行なう。) そして, 一般 Fourier 展開の概念に言及する。さらに, 具体的な例題を伴ないつつ, 固有関数と固有値の問題を詳細に解説する。

[参考書] A, Sommerfeld: "Partial Differential Equations in Physice" Academic Press Inc., Publissers (New York) 1949.

153 数学研究 (数学4) 2単位

広 瀬 助教授 数学基礎論研究

福 山 助教授 数学基礎論研究

数学基礎論における適当な研究テーマについてセミナーを行なう。計算の理論, 帰納的函数論, 公理的集合論, 証明論など, 分野のえらび方は学生の希望をいれる。

寺 田 教 授 代 数 研 究

木 下 教 授 代 数 研 究

有 馬 教 授 代 数 研 究

足 立 助 教 授 代 数 研 究

代数学, 整数論, 代数幾何の中から学生の希望も考えて研究テーマを決定する。そのう

えで適当な文献で研究発表させる。

野 口 教 授 トポロジー研究

主として、微分トポロジーの応用の話題についてセミナーを行なう。学部の位相幾何を学習しており、解析学につき理解をもっていることが必要である。

小島(順)助教授 幾何学研究

清 水 助教授 幾何学研究

リー群、位相幾何、微分幾何などの中から学生の希望も考えて研究テーマを選びセミナーを行なう。3年の多様体、位相幾何学の内容を修得していることが望ましい。

田 中 教 授 関数論研究

原書によって函数論を研究する。「テキスト」は次のものを使用する。

Reül V. Churchi: Complex variables and applications

(International student edition)

洲之内 教授 関数解析研究

小島(清)助教授 関数解析研究

入 江 教 授 偏微分方程式研究

垣 田 教 授 偏微分方程式研究

関数解析の研究、およびその理論の偏微分方程式や数値解析等への応用について研究する。

杉 山 教 授 関数方程式研究

微分方程式の基礎理論とその数値解析に関する研究および数理計画における最適化問題(非線形計画法、変分法、最速制御、ダイナミックプログラミング)の研究を行なう。

小 林 教 授 確率統計研究

今日の社会においては科学技術の発達にともない確率統計を応用する分野は急速にその範囲が拡大しつつある。従ってここではその応用面を一応注目しつつ主として確率論及び統計学の数学的基礎理論の近代の発展状況を明らかにしたいと思う。

[参考書] S. S. Wilks: Mathematical Statistics.

草 間 教 授 確率統計研究

郡 助教授 確率統計研究

確率論，又は数理統計学の数学的基礎づけを適当なテキストを用いながら行なう。位相空間と積分論の知識をもっていることを要求する。

中 島 教 授 計算数学研究
室 谷 助教授 計算数学研究

電子計算機を用いて，科学，技術上の問題を解く場合の数学理論の応用について研究する。現実に出現頻度の高いものは，行列の計算に関係するものであって，この方面の研究が主要部分を占める。線形代数，解析学，函数方程式，数値計算法の十分な知識があることが望ましい。

〔参考書〕 主要なものは学年始に示す。

153A	代 数 演 習Ⅰ (数学3)	0-4-2	(教授 有 馬 素 哲) (助教授 木 下 素 夫)
153A	解 析 演 習Ⅰ (数学1)	0-4-2	(教授 杉 山 昌 平) (助教授 室 谷 義 昭)
153A	関数解析演習Ⅰ (数学3)	0-4-2	(教授 垣 田 高 夫) (助教授 小 島 清 史)
153A	幾 何 演 習Ⅰ (数学3)	0-4-2	(教授 野 口 広) (助教授 小 島 順)
153A	数理統計演習Ⅰ (数学3)	0-4-2	(教授 草 間 時 武)
153A	数学基礎論演習Ⅰ (数学3)	0-4-2	(教授 広 瀬 健)
153A	代 数 演 習Ⅱ (数学4)	4-0-2	(教授 寺 田 文 行) (助教授 足 立 恒 雄)

主に整数論を題材とする。特に応用関係に進みたい人にはオートマトンの研究をとりあけることも可能である。

153A	解 析 演 習Ⅱ (数学4)	4-0-2	(教授 中島勝也，田中忠二)
153A	関数解析演習Ⅱ (数学4)	4-0-2	(教授 入江昭二，洲之内治男)
153A	幾 何 演 習Ⅱ (数学4)	4-0-2	(助教授 清 水 義 之)
153A	数理統計演習Ⅱ (数学4)	4-0-2	(助教授 郡 敏 昭)
153A	数学基礎論演習Ⅱ (数学4)	4-0-2	(助教授 福 山 克)

講義と演習を適当に配置して，小人数に分けておこなう。5コースの中の1コースを選び必修とする。卒業論文作成のための重要な予備部門であり，内容については実施に先だてて詳しく説明を与える予定である。

154 数理経済学 (数学4) 2-2-4 (51年度休講)

156A 数学概論I (応物・物理1) 0-2-2 (教授 飯野理一)
(助教授 梶正義)

複素数面における点集合論と複素変数関数論の初等的部分について述べる。

156B 数学概論II (応物・物理2) 2-2-4 (教授 飯野理一)

解析関数, 調和関数の初等的理論, フーリエ解析とその偏微分方程式への簡単な応用の解説。

157 物理学概論 (応物・物理1) 2-0-2 (教授 大槻義彦)

C170 物理学A 2-2-4

教授 松原 普, 広田晴男, 植松健一, 木名瀬亘, 大槻義彦, 浅井 博, 近
桂一郎, 千葉明夫
助教授 大場一郎, 上江洲由晃
講師 川崎昭一郎, 堀 素夫, 府川隆夫, 森 健寿

物理学全般の基礎である力学を第1学年全員に共通に行なう講義で, 毎週2時間4単位である。これは第2学年度以降に行なう物理学関係の講義を理解する上の基礎となっている。大体の内容は次の範囲で随意演習も行なう。

運動学 (ベクトル, 変位, 速度, 加速度, 極座標による表示)

質点の力学 (運動の法則, 慣性系, 単振動, 減衰振動, 強性振動, 仕事とエネルギー, 角運動量と力のモーメント, 加速度系における運動の方程式)

質点系の力学 (運動量の法則, 角運動量の法則, エネルギーの法則, 二体問題と衝突, 質点系の振動)

剛体の力学 (剛体, 固定軸の周りの回転運動, 剛体の平面運動, 剛体の運動のエネルギー, 剛体の釣合い, 撃力)

そのほか適当な所で弾性体, 流体および波動についてもふれる。

C170B 物理学B 2-2-4 (教授 鈴木英雄, 大井喜久夫)

真空中の電磁気学を基礎とし, 物質の電磁気学をマクロに構成していく考え方を筋道として講義する。また, 静的なものから動的なものに進むが, 各段階において次の段階の基礎を準備し, マクスウエルの理論に到達するのを目標とする。

1, 静電気学, 電界と電位 (クーロンの法則, 電界, 電位, ポアソンの方程式), 導体 (導体, 導体の表面, 導体系, 静電エネルギーと場のエネルギー), 誘電体 (双極子モーメント, 誘電率, 電気分極と電気変位, 誘電体)

2. 定常電流と磁界, 定常電流 (電流と電流密度, オームの法則, 電解質溶液, 接触電位差, オームの法則に従わない電流), 電流と磁界 (磁気誘導, ローレンツ力, ビオサヴァールの法則とアンペールの法則, ベクトルポテンシャル), 磁性体 (磁気モーメント, 磁界, 透磁率, 常磁性体と反磁性体, 強磁性体)

3. 一般の電磁界 (ファラデーの電磁誘導の法則, 一般の電流, 交流, インダクタンス, 電磁界の基本式, 電磁波およびエネルギー)

C170C	物 理 学C	2-2-4
C170D	物 理 学D	2-2-4
C170E	物 理 学E	2-2-4
C170F	物 理 学F	2-0-2
C170G	物 理 学G	2-0-2
C170H	物 理 学H	2-2-4

{	教 授	藤本陽一, 木名瀬亘, 加藤鞆一
		鈴木英雄, 井口 馨, 大井喜久夫, 長谷川俊一
	講 師	後藤捨男, 横田紀男, 小林澈郎

現代の技術を理解するのに必要な物理学を体系的に与えることを目的とする講義である。その内容は各学科の特質を考え、項目に対する時間配当も適宜考慮する。

C (土木工学科) : 物理学Aに引続き, 変形する物体の力学 (流体, 弾性, 塑性), 電磁気学, 熱力学および統計力学を各論的に扱い, 固体の物性に至る。

C (機械工学科) : 目標を固体材料の物理におき, 統計力学, 量子力学および原子物理学をその基礎として講義する。なお, この講義は物理学Bの知識を必要とする。

D (金属工学科, 資源工学科) : 化学結合の基本的性格や結晶などの物質構造を目標とする。したがって, 原子, 分子の量子力学や統計力学に重点をおく。

E (電気工学科) : 解析力学, 熱力学, 統計力学, 量子論および原子構造論の初歩を講義する。

E (電子通信学科) : 解析力学, 統計力学, 量子論および原子構造論の初歩を講義する。

F (電子通信学科) : 上の講義と併行して熱力学および気体運動論を扱う。

G (応用化学科電) : 磁気学の基礎を扱う。

H (電子通信学科) : E, Fの知識にもとづき, 物性の基礎となるように量子力学を講義する。段階的な学習に重点をおき, 多体問題, 衝突問題, 波動場にまでおよぶ予定である。

C172 物 理 実 験 3-3-2

{	教 授	松原 普, 植松健一, 大照 完, 市ノ川竹男, 中村聖一, 木名瀬亘, 大井喜久夫, 道家忠義, 石渡徳弥, 浅井 博, 近桂一郎, 尾崎 肇, 川瀬武彦
	助教授	菊池 順, 上江洲由晃
	講 師	三觜秀郎, 木村臣司, 高橋裕一

物理学の法則を理解し、あわせて実験技術の基本を習得することを目標としている。

最初全員に単振子を用いているいろいろの振動に関する実験を自主的に行なわせる。引続いて以下に示す項目により隔週6時間の実験を行なう。

球の運動、流体の運動、物質の弾性率、分光計による屈折率の測定、レーザー光の干渉と回折、検電器、熱起電力、オシロスコープⅠ、オシロスコープⅡ

なお、選択実験として次の2グループから、それぞれ1種類を各人に選択させて実験を行なう。

第1グループ：気体の熱膨張、真空の実験、液体の表面張力、アボガドロ数の測定、固体の弾性率、放射線のゆらぎ。

第2グループ：ダイオードの実験、電子の e/m の測定、音波の実験、電波の実験、マイクロ波による波動、インダクタンスの性質、電磁の実験、ラジオの組立

C173 工学基礎実験 4-4-2

機械	山根, 大田, 林(洋), 広田, 久村, 吉永
電気	松本, 鈴木, 康原, 大頭
資源・応物	萩原, 房村, 広田, 大頭, 千葉
応化	長谷川(肇), 土田, 菊地
金属・通信	上田(重), 渡辺(尙), 富永, 大泊, 千葉
土木・化学	後藤, 森(麟), 市ノ川, 井口, 伊藤(礼)

本実験は理工学全般に亘る基礎的実験法・測定法を習得せしめ、併わせて基礎学力の向上を計るを目的とする。而して各専門実験を習得することに必要な基礎能力の涵養を計り、また実験結果のまとめ方、整理の仕方も把握せしめる。

実験の種類は力学、弾性力学、流体力学、光学および電磁気学ならびにこれ等の応用に関する分野等、工学の基礎全般にわたり研究実験の基礎的知識を十分に会得せしめるように努める。

176A 解析力学 (数学3) 2-2-4 (51年度休講)

176B 解析力学 (機械3) 2-2-4 (講師辻岡康)

ラグランジュの運動方程式、微小振動論、変分原理およびハミルトンの正準方程式、正準変換などを扱う。

177 非線形力学 (機械4) 2-0-2 (講師中沢克紀)

系や物体の anfiguration 非線形方程式に表現されるものについて講義を進めたい。

178 非線形問題 (応物4) 2-0-2 (教授 高木 純一)

自然現象を記述する多くの理論は線形とよばれる形の微分方程式を中心に論じられてきた。しかしながら実際には非線形微分方程式で記述されるものも多いのであって、そのような現象の特長を学ぶのが本講の目的であるが、ここでは振動現象を中心とする。数学的な解決の得にくいものが多いが、2, 3の有力な手法に触れる。

179 理論物理学通論 (応物・物理2) 2-2-4 (教授 並木 美喜雄)

現代物理学の学習に必要な基礎知識を中心にして講義をする。はじめ解析力学と波動現象について述べ、次にこれを基にして量子論および原子構造論の初歩を説明する。

本講義は、基礎課程の物理学から専門科目の諸講義への橋渡しをするのが主な目的である。

180A 統計力学A (応物・物理2) 0-2-2 (教授 齋藤 信彦)
(教授 加藤 鞆一)

主として熱力学の講義を行うが、分子論的、統計力学的考察をつねに念頭におき、一方現象論のもつ一般的性格や、その論理構造も強調する。気体および溶液に対する応用ものべる。

180B 統計力学B (応物・物理3) 2-2-4 (教授 齋藤 信彦)
(教授 加藤 鞆一)

統計力学Aに接続する講義であって、Aで主としてのべた熱力学を統計力学の立場から組立て、それを具体的な問題に応用し、物性物理学の基礎を与えるものである。応用例は理想気体、双極子系、固体の比熱、フェルミおよびボーズガス、分子場近似による相転移高分子の問題などである。

余裕があればブラウン運動論、輸送論、輸送現象も取扱う。

181A 統計力学 (化2) 0-2-2 (講師 落合 萌)

この講義では統計力学の基本的な考え方をのべ、多数の粒子の統計的平均という巨視的な立場から熱力学の諸概念のつながりに関する基礎づけを行こなう。

181B 統計力学 (金属3) 0-2-2 (教授 齋藤 信彦)

理想気体を例にとりて、分子運動の立場から熱力学をくみわたる統計力学の考え方をのべさらに、一般的な系を取り扱うときの方法をのべる。例題には不完全気体、合金の秩序無秩序の問題、吸着、溶液などを取り扱う。

量子統計については Bose および Fermi の分布則を導びくのみで、その応用は半導体

の講義にゆずり、ここでは深く立ち入らない。ブラウン運動論、Eyring の反応速度論、輸送現象などは時間の余裕があればふれる。

183 電磁気学 (応物・物理3) 2-2-4 (教授 大井喜久夫)
(教授 鈴木英雄)

電磁気学は現代物理学の主要な基礎学問である。初歩的な学習は低学年ですでに修了しているので、この講義では電磁場論、電子論および特殊相対論をとりあげる。話の範囲は量子論以前の古典磁気学であるが、現代物理学へのつながりを重視する予定である。

184A 量子力学A (応物・物理3) 2-2-4 (教授 並木美喜雄)
化4

量子力学は原子や分子の構造、金属の電子論、化学反応素過程、原子核の構造および反応などを取り扱うのに欠くことのできない道具である。序論として量子力学の生まれるまでのことを簡単に述べてから本論に入る。はじめ一番簡単な力学系としての力の場における一個の粒子の量子力学を学ぶ。それから量子力学に特有な演算子とその実現を一般的に考察し厳密に解くことができない問題の近似解法(摂動論など)を学ぶ。電子のスピン、多体問題、衝突問題、光の放出吸収などにもふれる。

184B 量子力学B (物理4) 2-0-2 (助教授 大場一郎)

量子力学Aにおいて学んだ基礎知識を出発点として、相対論的電子論、場の量子論の初歩を講義する。出来れば素粒子物理等の入門まで話をひろげたい。

184 量子力学 (電気3) 2-2-4 (教授 尾崎肇)
(助教授 鈴木克生)

シュレーディンガー方式の基本的解釈とその運用についてのべる。電子物性への応用についてものべる。

186A 原子核A (応物・物理4) 2-2-4 (教授 山田勝美)

原子核物理学全般に対して入門的講義を行う。とくに、核の静的性質(大きさ、質量、スピン、核の電磁気能率)、放射能(アルファ、ベータ、ガンマ崩壊)、核反応(陽子、中性子等の散乱、元素の転換、核分裂)に重点を置くが、素粒子、核力、核構造、実験装置についても簡単に解説し、同時に量子力学の理解を深めるようにする。予備知識として、初等的な量子力学を知っていることが必要である。

186 原子核B (物理4) 0-2-2 (講師 府川峰夫)

高エネルギー核反応、素粒子物理および宇宙線などについての初歩的な知識を中心に話をする。

186 B 原子核実験学 (応物・物理4) 2-0-2 (教授 通 家 忠 義)
Experimental Nuclear Physics

原子核物理実験に関する方法および技術について、加速器、放射線検出器に重点を置いての講義を行なうと共に核分光、核反応に関する実験例の解説を行なう。

内 容

1. 原子核実験序論
2. 放射線検出器 i) 検出器の原理 ii) 荷電粒子線検出器の現状 iii) 中性子線検出器の現状 iv) ガンマー線検出器の現状
3. 加速器 i) 磁場を用いない加速器 ii) 磁場を使用する加速器 iii) 加速器の現状と将来性
4. 原子核実験の実例 i) 核分光実験 (α 線スペクトロメトリーの実例) ii) 核反応実験 iii) 宇宙線、宇宙空間物理実験

188 A 物性物理学A (応物・物理3) 2-2-4 (教授 市川竹男, 大照 完)
中村堅一

物性物理学Aは全時間数の3/4で固体物理の基礎的な部分の説明が行われ、後の1/4で、これらの基礎的な知識をもとにした材料工学への応用が解説される。基礎部門では固体内電子論、固体の熱的性質、誘電体、磁性体、光学的現象、格子欠陥、超伝導等が取扱われ、応用部門では主として磁性材料と半導体について、応用面から材料に要求される特性、使用法、その試験法、および具体的応用例が述べられる。

188 B 物性物理学B (応物・物理4) 2-0-2 (教授 大 槻 義 彦)

物性物理学Aより一歩進んで、固体物性における量子力学的状態について説明する。とくに、フォノン、プラズモン、エレクトロンフォノン相互作用などを物性現象と対応させながら議論する。

189 結晶物理学 (応物・物理3) 2-0-2 (教授 小 林 謙 三)

結晶はすべての固体の基本をなすものである。そこまでまず結晶学を群論を用いて教授する。ついて熱膨張、電気分極、圧電性、弾性、光学性などの重要な物性を述べる。

結晶の構造に関する知識より、結晶の物理的性質を理解するのが結晶物理学の仕事であるが、この目的のために、どのような研究が進められてきたかを、例をあげて講義を進めることとする。

190 電波物性論 (応物4) 2-0-2 (講師 西 岡 篤 夫)

高周波、マイクロ波あるいは光波など電磁波の吸収、放出を利用する電波分光法の基礎

と応用を代表的な例について述べる。NMR, ESR, マイクロ波分光法, レーザー—その他電磁波を利用する最近の新しい機器分析法を含めて概説する。

191 分子構造論 (応物・物理・化学4) 2-0-2 (講師 石黒英一)

量子力学および物理数学の初歩を修得していることを前提として、原子、分子内電子の状態がいかに説明できるかを講述する。

C196 生物学 2-2-4 (教授 大島康行, 平俊文
菊山 栄)

生物の最も特徴的な現象の一つである、遺伝、発生、調節、生態の問題を中心に解説し、それによって生物がどのような過程をたどって発展したか、現在どのようなしくみで自己を維持し、種族を保存し、地球という限られた環境のなかでその生活を続けるかを理解してもらいたいと考えている。

196 生物物理 (物理4) 2-2-4 (教授 斎藤信彦, 鈴木英雄
浅井 博)

生物学、生理学、生化学などの分野において物理学の立場よりみて興味のある現象、特に情報の伝達、エネルギーの交換などについて解説する。たとえば遺伝、酵素反応、神経伝導、膜輸送、光合成、筋肉収縮、電子およびエネルギー伝達などである。量子力学、生体高分子論の立場からも考察を加える。

198 光学 (応物・物理3) 2-2-4 (教授 広田晴男, 大頭 仁)

本講義においては電磁光波理論を基礎として、Iに於ては平面波の反射、屈折に於ける性質を講義し、位相の変化およびエネルギーの移動の問題を論じ、IIに於ては偏光現象の分野に於て各種偏光の成因、振動面の回転等の問題を考察し、IIIに於ては光の吸収および分散の問題を論ずる。IVに於ては干渉、回折の理論、光学機械の分解能ならびに各種干渉回折計の原理と応用を講ずる。最後に結晶光学、金属光学および薄膜の光学などについての概論を行なう。

199 応用光学 (応物4) 2-2-4 (教授 大頭 仁, 広田晴男
小林 謙三)

この講義においては、第一に光学レンズ系に生ずる各種の収差の成因およびそれらの性質を明らかにして、光学機械設計の基礎知識を確立し、光学機械設計の実験上の指針を与える。第二に光学系の情報理論的解析と情報処理への応用、さらにレーザーなど新しい光学の分野とその応用を論ずる。第三に結晶体の光学的性質、各種光電効果など物性光学の基礎を論ずる。

200 連続体の物理 (応物・物理3) 2-2-4 (教授 斎藤 信彦)

弾性体や流体の基本的な取扱い方と法則をのべると共に、一般に不可逆、輸送過程における各種の保在則や収支方程式の取扱いと応用をのべ、熱伝導、振動および波動の物理、非線形問題、レオロジー等を取上げる。

201 地球および天体物理学 (物理4) 2-0-2 (教授 藤本 陽一)

星の内部でおこる核融合反応と星の構造・進化と元素合成の問題、宇宙空間をしめるプラズマ・宇宙線の問題を中心として、恒星および銀河系の進化と太陽系および地球の起源について述べる。古典力学を応用した天体力学、気象学、地震学などの分野については、必要な点で簡単にふれることにとどめる。

204 原子力工学 (応物・物理4) 0-2-2 (講師 喜多尾 憲助)

媒質中での中性子の挙動など、原子炉理論の基礎となる事項について述べるほか、実験上、中性子や原子炉を利用するという立場から、中性子の発生と検出の方法、中性子スペクトロスコープ、中性子と物質との相互作用などについて説明する。

C204 原子力工学 2-0-2 (教授 藤本 陽一)

原子力の発展の歴史の紹介を通じて、原子力のもついくつかの特色を明らかにする。つづいて、原子炉物理の基本をのべ、最後に放射線防護の問題をかたんに説明する。

C205 計測工学 (機械3) 2-0-2 (教授 土屋喜一, 示村悦二郎, 内山明彦)

(土木3) (応化4) 2-0-2 (教授 大照 完, 小林 寛)
(工経4) (町山忠弘, 黒沢龍平)

工学分野における計測についての基本概念および各種変量の計測に関する基本原理・構造・特性について述べる。内容としては、単位・次元・次元解析・誤差論・実験式・計測器の動特性・各種変量の計測概説を含む。

206A 計測原論A (応物・物理3) 2-2-4 (教授 中村 堅一)

この講義は計測全般に亘っての基礎となる考え方および事項を抽出し、具体例を織りまぜて概説するものである。

- (1) 物理現象、工学現象、を計測の立場からみたらどのような見方ができるか。
- (2) アナログ的・アプローチ
- (3) 線形現象と線形回路
- (4) 非線形現象と計測回路
- (5) 情報の性質と扱い方

206B 計測原論B (応物・物理3) 2-2-4 (教授 大 照 完)

電子計算機を用いた情報処理を常に念頭におき、計測工学の基礎を概説する。

内容は、誤差と雑音、単位と標準、計測系の変換、零位法、倍率器と増幅器、記録計と波形測定、アナログ演算、シミュレータ、デジタル計測の基礎、テレメタリング、磁気測定で具体例と共に説明する。

206C 計測原論(通信2) 0-2-2 (教授 伊 藤 毅)

本講義は各種の電気計測を行なうための基礎として、国際単位系(SI units)、観測値に関する問題、誤差論および最小二乗法、実験式、精度および有効数字などについて講述する。

209 特殊計測(応物4) 2-0-2 (講師 桜井健二郎)

レーザを中心とする光情報技術について講義する。この分野はまだ開発途上であるがそれだけに興味ある研究課題に富んでいる。内容は、レーザの原理、レーザ技術の概論、レーザ応用計測、アナログ光演算、デジタル光演算、ホログラフィ、光記憶、光伝送線路、レーザ情報伝送などであるが、進展の速い分野だけにトピックス的なこともおりまぜて講義する。

213 真空技術(応物3) 0-2-2 (講師 富永五郎)

実験室または工場において使用される真空装置の基礎的事項に関する講義である。学生は力学、気体論、電磁気学を知っているものとして、はじめにこれらのもののうちで真空技術に必要な部分を復習しつつ、真空下での諸現象についての考え方の基礎を説明してから (1) 各種真空ポンプの原理と実際 (2) 各種真空計の原理と実際 (3) 真空装置および各種部品設計法 (4) 真空洩れ探し法を述べ、次いで (5) 各種真空工業の概要を説明する。

215 I 物理学演習(応物2) 4-4-4 (教授 大井喜久夫, 加藤綱一)
物理学演習(A)(物理2) (助教授 斎藤信彦, 鈴木英雄, 大場一郎)

主として理論物理学通論, 統計力学, 電磁気学に関する演習問題を行なう。必要に応じて、解析力学および量子力学の初歩あるいは電磁気学, 確率および統計論などで、正規の講義で行なわれないようなものを講義することもある。

215 II 物理学演習(B)(物理3) 4-4-4 (教授 小林 寛, 中村堅一, 鈴木英雄, 大井喜久夫)
(助教授 大場一郎)

主として電磁気学, 量子力学, 固体電子論についての演習を行なう。これらは最も基本

的な知識であり、何をやる場合にも必要不可欠なものであるから、いろいろな種類の問題を自分で解く力を十分に養うことを目的とする。これら以外からも興味ある問題を取りあげられることもある。教室で問題を解くことと、レポートと二本立で進めていく。

216 応用物理学演習 (応物3) 4-4-4

(教授 中村堅一, 小木 寛,
大井喜久夫, 鈴木英雄)
助教授 大場一郎

ここでは主に (1)量子力学, (2)固体電子論, (3)電磁気学, (4)回路理論, (5)電子工学, (6)工学問題の物理的処理についての演習を行なう。これらはもっとも基本的知識であり必要不可欠なものであるから、自分で問題を解く力を十分に養うことが目的である。そのため教室では限られた時間内にいろいろな種類の問題をとくことになれ、かなり基本的な難しい問題は宿題でといてレポートを提出することを方針とする。

217 物理実験学 (応物・物理3) 2-2-4

(教授 小林誠三, 植松健一)
助教授 上江洲由晃

自然界より特定の物理現象を抽出し、解析するには、物理現象を測定する手段の賢明な選択および応用がきわめて重要である。物理現象を観察する実験法を述べるのが本講の目的であるが、物理実験法は非常に多方面にわたり、また複雑である。そこで本講ではいろいろの実験法をできるかぎり統一的にまとめて原理・技術を解説し、かつ各実験法の得失・発展の歴史にふれる。更に進歩しつつある最新の実験法についても充分注意を払う。

内容は次のものから選ぶ。

1 物質の精製法：単結晶作製法、不純物制御、薄膜製法。 2 物質の微視的構造決定法：回折法。共鳴法。 3 力学的性質測定法：弾性常数転位の観察。 4 電気的性質測定法：誘電率、導電率、起伝導。 5 熱的性質測定法：比熱、熱伝導。 6 磁気的性質測定法：帯磁率。 7 光学的性質測定法：ケル効果、ファラデー効果、レーザー。 8 高低温実験法。 9 高圧実験法。 10 磁気共鳴法。

218Ⅱ 物理実験(A) (物理2) 4-4-2

(教授 松原 普)
講師 上江洲由晃

本実験は物理学およびその応用に関する分野の基礎的実験法を習得し、あわせて物理学を実験を通して学ぶことを目標としている。実験の種類は弾性力学、光学、電磁気学およびエレクトロニクスの諸分野に亘っている。

218Ⅲ 物理実験(B) (物理3) 8-8-4

(教授 植松健一, 大井喜久夫)
浅井 博, 近桂一郎

物性実験および、計測実験を次の項目から選び物理化学実験室と電子通信実験室とでおこなう。

分子量測定, 平衡定数, 示差熱分析, 放射能測定, X線回折, 帯磁率, 誘電率, 内部摩擦, 真空実験, ホール効果, 可視スペクトル, トランジスタ増幅器, 高周波インピーダンス, マイクロ波, 論理回路, 電気回路過渡応答。

218Ⅳ 物理実験(C) (物理4) 4-4-2 (全 教 員)

次の項目から適宜選んで履修する。

磁気共鳴(核磁気, 電子スピン) 静磁気の測定, 核四重極共鳴, 結晶光学実験, レーザ光実験, 生物物理実験, 流動二色性, 電子顕微鏡および電子線回折, バンデグラフ加速器による原子核実験, 宇宙線および放射線の測定, 電子計算機プログラミング。

219Ⅰ 応用物理学実験(A) (応物3) 8-8-4 (教授 市ノ川竹男, 大照完
小林謙三, 小林 寛
中村堅一, 千葉明夫)

応用物理学実験(A)は物理化学実験と電子通信実験とからなり, (1)~(11)までの項目に主として物性実験, (12)~(16)までの項目は主として電子計測実験である。実験項目は次のようなもので, その中から適宜選択して行なわれる。

(1) 分子量測定 (2) 平衡定数 (3) 示差熱分析 (4) 放射能測定 (5) X線回折 (6) 帯磁率 (7) 誘電率 (8) 内部摩擦 (9) 真空および電子顕微鏡の実験 (10) ホール効果 (11) 可視スペクトル (12) トランジスタ増幅器 (13) 高周波インピーダンス測定 (14) 論理回路 (15) 過渡応答 (16) マイクロ波

219Ⅱ 応用物理学実験(B) (応物4) 2-2-2 (応用物理学科全教員)

次のような項目からなり学生は適宜選んで修得することができる。

(1) 電子計算機のプログラミング (2) 巨大分子のX線および誘電の実験 (3) 磁気共鳴 (4) 電子顕微鏡および電子回折の実験 (5) 強誘電体のX線および結晶光学的実験 (6) 光学薄膜の光学的実験 (7) レーザの実験 (8) 生態記憶のシミュレーションの実験 (9) 非線形回路の実験 (10) 光電変換素子の実験等

220 卒業研究 (応物・物理4) 6単位 (応用物理学科全教員
物理学科全教員)

第4年度は各研究室にわかれ, 教授の指導のもとに, 物理学および応用物理学の理論または実験についての研究方法を修得する。

C231 化 学A 2-2-4

(教授 関根吉郎, 高宮信夫, 井口 馨, 伊藤礼吉, 高橋博彰, 多田 愈)
(助教授 伊藤紘一, 新田 信,
講師 藤山常毅, 柏木希介, 木邑隆保, 佐藤泰夫, 成沢茂男, 吉富末彦)
旗野嘉彦, 中村友保

一般化学としては、“記憶の化学”を脱皮して“考える化学”の立場から、現代化学の概略を習得する。そのためには物質構造、物性については原子分子の構造を中心として原子価電子と化学結合、気体と分子、物質の電気、結晶と金属などを学び、簡単な水素化合物や酸化物を系統的に理解する。一方反応については化学結合の立体性、相平衡、溶液の性質、酸化還元と塩基、化学平衡および反応速度を学ぶ。

C231B 化 学B 2-2-4

(教授 伊藤礼吉, 高橋博彰, 井口 馨)
(助教授 伊藤紘一
講師 鈴木 功, 岡本浩一)

必修化学Aにつづく2年以上選択の講義である。化学Aで習得した分野をより整った学問体系の一部として取扱う。即ち熱力学的立場より物質系を理解する方法であって、内部エネルギー・エントロピー、自由エネルギーの概念および統計力学の初歩を学び、これらの概念から物質の相の平衡関係、化学反応等を解説する。より専門分野へ進むための基礎となる講義である。

C231C 化 学C 2-2-4

(教授 関根吉郎, 高宮信夫, 多田 愈)
(助教授 新田 信)

2年以上が選択する講義である。有機化合物の化学の反応を初等量子化学の知識をもとにして講義する。有機電子論入門程度の内容である。

C231D 化 学D 2-2-4

(教授 井口 馨, 伊藤礼吉, 高橋博彰)

化学Aおよび化学B、化学Cのあとにおこなわれる3年選択の講義であるが、2年生でも選択できる。ここでは量子論的な立場から物質を考察してその性質を究明する分野を学ぶ。量子力学を分子構造論と原子価論に応用した量子化学とよばれる分野を含む。

C232 化学実験 3-3-2

(教授 関根吉郎, 高宮信夫, 井口 馨, 伊藤礼吉, 高橋博彰, 多田 愈)
(助教授 伊藤紘一, 新田 信,
講師 竹川裕淑, 松尾 毅, 脇田 宏, 上田豊甫, 小鹿原猪一, 大橋ゆか)
子, 今橋勇三, 玉浦 裕

本実験は隔週1回行い、つぎのような項目を実施する。

(1) 定性分析 3回

金属陽イオン中第4族の遷移金属、第5族のアルカリ土類金属、第6族のアルカリ

金属を半微量分析法によって行う。

(2) 学量分析 3回

基本的な定量分析として次の実験を行う、

中和滴定法：塩酸の規定液の作製

酸化還元滴定法：過マンガン酸カリウムの規定液の作製。過酸化水素の濃度決定

キレート滴定：EDTA による Mg^{2+} の滴定

(3) 有機化学実験 3回

アニリンの合成

尿素樹脂、メチルオレンジの合成及びペーパークロマトグラフィによる分析

エステル化反応、エステルの加水分解及び光によるアベンゾンゼンのシストランス異性

(4) 物理化学実験 3回

滴定曲線：ガラス電極 pH メーターにより中和滴定を行い、滴定曲線を描く。

比色分析：比色計を用い有色溶液の可視光に対する吸光度を測定し、溶液の濃度を求める。

ショ糖の転化反応：ショ糖の転化速度を、旋光度の変化測定することにより求める。

234 化学理論 (工経2) 0-2-2 (教授 塩沢清茂)

当科の学生に、化学工業の基礎となる化学の理論に対して理解をもたせ、化学に対して広い教養を与えることを目的としている。

内容は主として物理化学の分野であるが、理論とその応用に対して理解を深くさせる。さらに基礎理論を十分に習得させるために、講義と並行した計算等演習を行い、また実験式の作成、工業化学数値の取扱いなどの演習も行なう。

これら講義、演習を通じて、工業化学に必要な基礎理論の内容を把握させる。

235 無機化学 (応化・化1) 2-2-4 (教授 大坪義雄)

最近の原子及び分子構造に関する知識をとりいれ、元素及び化合物について個々の独立した事実としてではなく相互の秩序ある関係を見出し体系として述べる。一般に無機化学の多くは鉱物、冶金、工業、化学分析に関するものまで含むが、本講ではこれらの方面になるべく触れないことにする。時間の関係から一部の元素及び化合物を割愛するが、これらの物質といえども疎かにすることなく、必ず教科書により自ら勉強し時間の不足を常に補わねばならない。また聴講にあたっては予め教科書を通読して内容の概略を呑込んでく

235A 無機化学演習 (応化2) 0-2-1 (教授 大坪義雄)

無機化合物の入門物理化学

236 I 有機化学I (応化1) 2-0-2 (教授 藤井修治)

236 II 有機化学II (応化1) 0-2-2 (教授 藤井修治, 鈴木晴男)

236 III 有機化学III (応化2) 2-0-2 (教授 鈴木晴男)

3期にわたって下記の内容について順次講義を行う。化学技術者に必要な有機化学の基礎を与えることを目的とする。有機化合物を分類し、命名法、各化合物の名称、存在、物理的性質、化学的性質、製法ならびに利用についてのべる。このさい、主として化学反応に重点を置き、代表反応については、その反応を行なう化合物と行なわない化合物との構造の差違を明らかにする。また有機化合物の分析法ならびにその検出法についても述べ、さらに数種の化合物についてはその構造が決定された経過の解説を行なう。有機化合物の電子論の概要についても述べる。

236(A) 有機化学A (化1) 2-2-4 (教授 多田 愈)
(助教授 新田 信)

有機化学を学ぶにあたり、量子化学的見地から有機化合物の構造を体系的に学ぶものである。有機化合物の分類と官能基の構造および立体化学に関することを講義する。

236(B) 有機化学B (化2) 2-2-4 (教授 多田 愈)
(助教授 新田 信)

有機化合物の化学的性質について学び、反応性を電子論に基づいた体系づけを行なう。有機化学Aに併せて有機化学の全体系を学べるよう配慮がなされている。

236(A) 有機化学演習A (応化2) 0-2-1 (教授 長谷川 肇)

有機化学の基礎としての命名法、化学結合、異性現象、酸と塩基および反応について問題を与え、討論を行う。

236 B 有機化学演習B (応化2) 0-2-1 (教授 藤井修治)

主として有機電子論について、ゼミナール形式で学習する。

236 C 有機化学演習C (応化2) 0-2-1 (教授 佐藤 匡)

有機化学(236)の講義内容を基礎として演習形式で行なう。

教科書: R. Stewart 著, 中崎昌雄訳, 有機反論(現代の有機化学3)東京化学同人

236 D 有機化学演習D (応化2) 0-2-1 (教授 篠原 功)

有機電子論について演習形式で学習する。進歩の歴史、現在の課題、将来の展望について討論する。

236 E 有機化学演習 E (応化2) 0-2-1 (助教授 菊地 英一)

有機化学における化学反応速度論についてゼミナール形式で学習する。

236 有機化学実験 (化3) 6-0-2 (教授 関根吉郎, 多田 愈)
(講師 新田 信)

有機化学で必要な蒸留, 再結晶などの物質の構製を学び, さらに具体的化合物の合成, 構造決定, 反応機構に関する実験を行なう。

237 I 物理化学 I (応化2) 2-0-2 (教授 土田 英俊)
(助教授 菊地 英一)

物理化学 I においては気体, 液体の性質, 物性と分子構造, 化学平衡論, 熱学などの初歩的な知識を与えることを目的としている。これらの内容は化学工業の技術者を志すものにとっては欠くことのできないものであり, 外国語を読む習慣を養うため英文の教科書を使用する。

237 II 物理化学 II (応化2) 2-0-2 (教授 加藤忠蔵, 宇佐美昭次)

本講義は固体の構造化学, 物質の相平衡, 反応速度論を取り扱う。固体の構造化学では結晶化学の基礎事項, X線分析などによる結晶構造の解析, 固体の構造と性質との関係について述べる。相平衡においては相図の解析法, 気体-液体-固体の相平衡, 物質の状態変化に伴う基本法則について解説する。反応速度論においては, まず速度式を中心に数式的考察を行なったのち, いろいろな反応の機構の解析を行なう。

237 III 物理化学 III (応化2) 0-2-2 (教授 吉田 忠)

古典物理化学の範囲内で, 滯液論一般, 電解質溶液, 電導論および電位論並びに起電力について平易に述べる。

尚, 十分な理解を目的として, 随時適当な演習を課すると共に試験を実施する。

237(A) 物理化学 A (化2) 2-0-2 (教授 伊藤 礼吉)
(講師 鈴木 功)

物質の性質を理解するための巨視的な学問として熱力学を学び, 内部エネルギー, エントロピー, 自由エネルギー等の概念を修得する。とくに物質系の相平衡, 化学反応との関係について講義を行なう。

237(B) 物理化学 B (化2) 2-0-2 (講師 上田 豊甫)

「化学反応が如何にして進むか」を広田鋼蔵・桑田敬治著「反応速度学」(共立全書)をテキストとして講義する。衝突の様子を知る為に気体分子運動論を, 衝突から反応へ進む

確率を与えるものとして素反応理論を学び、次に実際の反応形式に従って逐次・可逆・連鎖・光化学等の均一反応と、不均一反応として拡散および吸着現象に基く解媒反応等を紹介する。最後にこれらの反応速度とくに高速反応や活性物質を研究するのにどのような新しい手法があるかを概観する。

237A 物理化学演習A (応化2) 0-2-1 (教授 宮崎智雄)

本演習では、原子価、化学結合および分子構造に関する基礎理論を理解せしめ、その正確な応用が可能となるよう指導する。

〔参考書〕水島三一郎著：分子。水島三一郎著：量子化学。ハイトラー著：初等量子力学。ポーリング著：化学結合論入門。クルソソ著：化学結合論。

237B 物理化学演習B (応化2) 0-2-1 (教授 吉田 忠)

古典物理化学一般およびその応用に関する外国語文献の調査ならびに理解に重点を置き、輪講を実施する。

237C 物理化学演習C (応化2) 0-2-1 (教授 宇佐美昭次)

化学の基礎に関する著名な文献をえらび、ゼミナール形式で学習する。なお文献の選択にあたっては学生と相談する。

237D 物理化学演習D (応化2) 0-2-1 (教授 土田英俊)

反応動力学、熱力学、平衡論などを中心に具体的な反応例を取り上げて解説、演習を実施したい。

また諸君の希望も含めて化学や化学技術の歴史を、その背景となる社会や思想と関連させて眺めたい。特に諸君の演習を通じて、科学の展開の方向やアセスメントの問題を探り、進歩が及ぼす人類や社会への影響を討論する。

- | | | |
|--------------------------|--------------------|-------------------------------------|
| C238 物理化学実験 (応化3) | 8-0-2 | (教授 森田義郎, 宮崎智雄)
(助教授 土田英俊, 菊地英一) |
| | (金属2) 0-4-2 | (教授 鹿島次郎, 加藤栄一)
藤瀬直正 |
| | (資源3) 4-4-2 | (教授 山崎豊彦, 大塚良平)
黒沢竜平 |

本実験は応用化学科、金属工業科、資源工学科の学生を対象とし、物理化学の理解を深め、物性の測定方法、実験器具の取り扱い方、結果の解析法等を学ばすことを目的とする。実験項目の次の項目で、このうち各科毎に実験時間に応じ必要項目を選択する。

反応熱，反応速度，分子量測定，密度，粘度，平衡定数，電位差滴定，イオン交換樹脂，温度計補正，表面張力，示差熱分析，粘度分布，放射能測定，X線，帯磁率，誘電率，内部摩擦，真空実験，ホール効果，可視スペクトル，偏光試験。

240 分析化学 (応化2) 2-0-2 (教授 加藤 忠 蔵)

化学に従事するものに化学分析はつきものといつてよい。化学分析は古く経験の集積によって組立てられた技術であった。現在では物理化学的諸性質を利用して、物質の確認、定量、分離が行なわれている。本講義では電解質における平衡、酸、塩基の理論についてのべたのち、物質定量に関する化学分析方法、光学および電気化学的分析方法の諸原理と応用例について述べる。教科書：理論分析化学 (昭晃堂)

241 機器分析化学 (応化3) 2-0-2 (教授 加藤 忠 蔵)
(教授 宮 崎 智 雄)

本講義は機器による分析化学一般についてのべるが、とくに次の機器分析の理論、方法、応用について重点的にのべる。

- 1 吸光分光分析
- 2 発光分光分析
- 3 電気分析およびポーラログラフ分析
- 4 X線分析
- 5 熱分析
- 6 質量分析
- 7 ガスクロマト分析
- 8 核磁器共鳴分析

241A 機器分析法(A) (応化3) 0-2-2 (教授 長谷川 肇)

最近の化学では研究手段として機器による分析が盛んに行なわれる様になった。特に有機化学の分野では化合物の固定に、MS, IR, NMR, UV, 等のスペクトルを組合せ利用することが多い。この見地から特に MS, NMR の原理とそのスペクトルの利用法を説明し、上記スペクトルを利用した同定法の演習を行う。

241B 機器分析 (化3) 2-0-2 (教授 高宮信夫, 伊藤紘一)
(助教授 新田 信)

最近の理学、工学の進歩にともなって、結果が迅速に得られ、しかも人為的な誤差の少ない分析法が望まれるようになった。機器分析は迅速性と信頼性という要望に答えられるだけでなく、検出限界、自動分析、自動プロセス制御などについても、古典的な分析法のもつ限界を超えている。本講義では、代表的な機器分析法である。分光分析、クロマトグラフ分析、質量分析を中心に、その基本原理を説明する。

C243 化学分析実験 (資源2) 4-4-2 (教授 原 田 種 臣)
(中 村 忠 晴)

(応化2) 4-4-2 (教授 大坪義雄, 加藤忠蔵)
(宇佐美昭次)

主として重量分析法，容量分析法および比色分析法その他簡単な機器分析法による実験を行なう。

244 無機分析化学実験 (化2) 4-4-2 (教授 関根吉郎
高宮信夫)

主として重量分析法，容量分析法および比色分析法その他簡単な機器分析法による実験を行なう。

245 無機高分子化学 (化4) 2-0-2 (教授 関根吉郎)

有機高分子化合物は多くのすぐれた性質もっているが，欠点の一つは耐熱性の劣ることである。この点を改良する目的で Si, P, S 等の第3周期元素を含む化合物について考える。

246 無機工業化学 (工経3) 2-0-2 (教授 石館達二)

無機化学工業の化学工業の中に占める位置は近年大きく変貌したが，本講義は各種無機化学工業の変化の様相を示すとともに，それ等の製造工程，原材料，エネルギー，立地等の問題につき解説する。従って，各化学工業において取り扱われる単位反応，単位操作の概略，さらに原材料，エネルギー，労務等の原単位や生産性等を示すことにより当該化学工業を把握させると共に経済性についても考察せしめるものである。

246A 無機工業化学 (応化3) 2-0-2 (教授 大坪義雄，吉田忠
加藤忠蔵)

無機化学工業の原料，製造工程と現状について分野別に解説する。

無機合成化学工業で酸・アルカリ・肥料工業など，珪酸塩工業ではセメント，耐火物，ガラス工業など，電気化学工業では，電解，電熱，電池工業などについて述べる。

これらの分野は非常に広く，本講義では概説にとどまるので詳細は無機合成化学，鉱物化学，電気化学において述べる。

247 有機工業化学 (工経4) 2-2-4 (教授 篠原功)

有機化学工業には極めて多数の種類がある。それらのものを部門に大別して，その主なる部門を挙げると，燃料工業，繊維素および繊維工業，発酵工業，食料工業，油脂工業，ゴム工業，プラスチック工業等である。一つの部門の中にも種々の工業が含まれている。この講義はこれら多数の化学工業全般に亘って，その発達，製造の理論および技術等について述べるものである。各々の工業について技術の末梢を説明する事を避け，主なる有機化学工業についてその基礎的理論および技術の概要を理解し得るようにするものである。

247A 有機工業化学 (応化3) 4-0-4

(教授 篠原 功, 森田義郎
鈴木晴男)

燃料化学工業, 高分子化学工業, 油脂化学工業, 生物化学工業, 染料化学工業などの広い分野を概括的に展望し, その化学について述べるだけでなく, 技術の歴史的進展, 工業の現状と問題点, 将来の予測などについても若干ふれて, この分野に対する視野を開き, 認識を深めるように指導する。

249 石油化学 (応化3) 0-2-2

(教授 森田 義郎)

石油化学工業製品は全化学工業生産額の過半数を占めている。この工業の基礎となるのが石油化学である。講義は石油化学原料, 炭化水素の転化, 炭化水素の化学加工等に分け, 石油化学ならびにその工業全般に亘って述べる。

250 I 生物化学(I) (応化3) 2-0-2

(教授 鈴木 晴男)

250 II 生物化学(II) (応化3) 0-2-2

(教授 宇佐美 昭次)

生命とは何かということを化学の面から追述しようとする学問が生物化学であり, また生物化学工業の基礎となる学問でもある。

まず, 生体を構成している各種の複雑な化合物のうち基礎的なもの, すなわち炭水化物, 脂質, アミノ酸, タンパク質, 核酸などの化学について述べる (以上生物化学 I)。ついで生体内反応に不可欠な触媒である酵素の化学構造と機能を述べたのち, これら諸物質がいかに有機的に連繫して生命現象に寄与しているかを, 代謝化学, 生物エネルギー学, 代謝制御の観点から説明する。(以上生物化学 II)

251 生物化学工業 (応化) 2-0-2

(教授 宇佐美 昭次)

近年, 生物化学の進歩とともに, とくに微生物を利用して産業上有意味な物質をつくる応用生物化学の分野の発展にはめざましいものがあり, すでに生物化学工業として化学工業の一部門を占め産業上重要な地位を獲得しつつある。この講義はまず微生物の総括的反応を述べたのち, たとえば石油資源のタンパク化, 鉱物から有用金属の溶出など, 新しい話題を中心に解説を行なう。

252 鉱物化学 (応化3) 0-2-2

(教授 大坪 義雄)

セラミックスあるいは珪酸塩の基礎に関する項目について述べる。内容はつぎのようである。結晶および非晶質の構造, 同形置換, 多形, 相転移, 相図, 一成分系, 二成分系, 三成分系。

253 I 高分子化学 I (応化3) 2-0-2

253Ⅱ 高分子化学Ⅱ (応化3) 0-2-2 (教授 土田 英俊)

高分子化学の初歩を理解する目的で、前期においては高分子化合物の概念、構造と物理的性質の関連、高分子の固体や溶液の特性などについて説明し、後期においては合成高分子、生体高分子、重合反応、高分子反応など、主として機能と高次構造の関連につき講義し、討論する。

254 高分子化学工業 (応化4) 2-0-2 (教授 篠原 功)

高分子化学工業は有機化学工業の一大中心をなし、飛躍的な発展を遂げている。繊維、プラスチック、ゴム、皮革、紙等の工業の発展動向、問題を指摘説明する。また繊維形成能、プラスチックの改質、リキッドエラトマー等テーマをえらんで解説する。

255 界面化学 (応化2) 0-2-2 (教授 吉田 忠, 加藤忠蔵)

コロイドの基本的性状並びに一般不均一相界面に関する諸現象、とくに固体においては表面構造と性質との関係について述べる。また電導性固体あるいは液体と電解質溶液との界面に関する基礎的性状について解説する。

尚、いずれの場合にも基礎的現象とその応用について、事情の許す範囲を講述する。

256Ⅰ 量子化学(Ⅰ) (応化2) 0-2-2 (教授 宮崎 智雄)

化学における諸現象を理解するために量子化学は不可欠なものである。本講義は量子化学入門ともいうべきものである。

〔参考書〕 ポーリング、ウィルソン共著、桂井訳：量子力学序論。マレル、ケトル、テッダー共著、神田訳：量子化学。クールソン著、関訳：化学結合論。

256Ⅱ 量子化学(Ⅱ) (応化3) 2-0-2 (教授 宮崎 智雄)

量子化学的取扱いのうち最も簡単な、“単純 Hückel 法”について述べる。有機 π 電子系化合物の分子軌道および軌道エネルギーの算出法をのべその結果より得られる電子密度、結合次数、自由原子価を用いて化合物の反応性等を説明する。教材として、ロバーツ著、湯川訳：分子軌道法計算入門を使用する。

〔参考書〕 東、馬場著：量子有機化学。福井研究室共著：量子化学入門上・下。ドーデル著、大鹿訳：量子化学上・下。ストライウィーザー著、都野訳：分子軌道法。サンドルフィ著、尼子訳： π 電子スペクトルの理論。

256A 量子化学A (化3) 2-2-4 (教授 井口 馨)

量子力学およびその化学の諸問題への応用について基本的事項を講義する。内容としては、波動力学、行列力学の基礎的事項を説明した後、角運動量型演算子、摂動論および変

分法について述べる。ついで原子および分子の波動関数について講義する。

256B 量子化学B (化3) 0-2-2 (教授 伊藤礼吉)

分子軌道法の分子の電子状態に関する応用について述べたあと、分子の光学的および化学的な性質を説明する。特に半経験的な分子軌道法をもとにして化学結合を中心とする分子科学の問題について述べる。

257 工業化学実験 (工経3) 4-4-2 (教授 石館達二, 塩沢清茂)

本実験は前期では分析化学、後期では物理化学に関する実験を行なう。その内容は共通科目としての分析化学および物理化学の中より適切な実験項目を選択履修せしめる。

257I 工業化学実験(I) (応化3) 0-8-2 (教授 長谷川肇, 佐藤 匡)

化学技術者として必要な有機合成実験法を修得することを目的とする。

合成する化合物は、(1) エオシン、(2) ニトロフェノール、(3) 安息香酸メチル、(4) オレンジII、(5) アセトフェノン、(6) β -ナフチル、メチルエーテル、(7) アントロン、である。

257II 工業化学実験(II) (応化4) 8-0-2

(教授 吉田 忠, 篠原 功,
鈴木晴男, 藤井修治,
宮崎智雄)

本実験は各種化学工業の基礎となる知識を修得するのが目的であり、工業化学コースの学生を対象とし、工業化学実験(I)よりもさらに専門的な実験内容が盛り込まれている。その内容は工業化学実験(I)よりも複雑な合成実験、工業の基礎となっている種々の製造実験、工業化学実験(I)に織り込めなかった分析法、実験法および反応などである。具体的内容は、(1) 有機合成実験、(2) 有機定性実験、(3) 燃料工業化学実験、(4) 高分子製造実験、(5) 酸素による反応実験、(6) 電解酸化実験などである。

258 無機合成化学 (応化3) 0-2-2 (教授 加藤 忠 蔵)

無機合成化学の目的は新しい化合物の発見と合成条件の改善にある。この分野は研究者の少いこと、新化合物は少いという錯覚のため取り残された状態にある。しかし新しい理論と手法を用いることにより、大きい未来を残している。本講義では酸・塩基の理論と溶媒との関係、無機反応機構、反応速度についてのべたのち、無機合成の実験方法と珍しい化合物の合成について述べる。また非水溶媒の特性とそれを利用した合成についてもふれる。初めに無機工業化学の講義において省略した無機合成化学工業の基礎反応と合成条件の関係を反応速度論に基づいてのべ、ついで上記の事項を説明する。

259 配位化合物化学 (応化・化2) 0-2-2

(教授 高橋 博彰)

配位化学は現在、無機化学、分析化学、生化学および有機化学の分野で重要な貢献をしているだけでなく、物理化学の領域でも興味ある問題を提供している。

この講義は配位化合物、とりわけ金属錯体の化学的、分光学的および磁氣的性質を理解するために必要な理論的概念を与えることを目的とする。とくに錯体の立体構造を結晶場理論にもとづいて説明することに重点をおく。

261 触媒化学 (応化3) 2-0-2

(教授 森田 義郎)

触媒化学は現代の化学および工業化学を志す者にとっては是非とも心得ていなければならぬものである。化学工業における新しい技術の過半数はその反応に有効な新触媒の発見によるといってよい。本講義は触媒の構造と機構に関する基礎的な知識を与え、これをもとにして一般的な触媒の分類、作用、反応、製法等を述べ、併せて工業的利用の概要を解説するものである。

併せて工業的反応の実情を述べる。将来化学工業を志す者にとっては是非とも心得ていなければならぬ内容である。

262 放射化学 (応化4) 2-0-2

(教授 藤井 修治)

放射性同位元素の特性を利用し、これをトレーサーまたは放射線源として用い、化学的問題および工学的問題を研究し、解決して行くことが研究者および化学技術者にとって必要となって来た。これらに関する基礎知識を与えるのが本講義の目的である。

その内容は放射性壊変現象、放射性同位元素の製法、放射性同位元素の取り扱い法、放射能測定の原理および方法について述べるとともに、放射性同位元素の化学分析への応用、ならびに工業的利用について、例をあげて説明する。さらに放射線の照射による化合物の分解反応、重合反応などいわゆる放射線化学について述べる。

263 構造有機化学 (応化2) 0-2-2

(教授 鈴木 晴男)

有機化合物の構造と性質(物理的および化学的)との関係について、有機化学I~IIIでは断片的かつ簡単にしかふれることができないので、ここでまとめて系統的にやや詳しく説明する。ここでいう構造には化合物内の電子分布状態と原子の空間配列状態とが含まれている。前者は有機電子論の一部であり、後者は立体化学として知られている分野である。構造図や模型をできるだけ豊富に用いて理解をたすけたい。

264 有機反応機構 (応化・化2) 0-2-2

(教授 長谷川 肇
佐藤 匡)

有機化学における反応は、多種多様であり複雑な経路をとるものが多い。この機構の説

明には平衡，反応速度による研究が必要となる。この講義では初歩の反応速度論を説明する。

有機化学 (236) の講義を修得したことを前提として有機反応機構について述べる。

[参考書] F. Sykes 著，久保田訳：有機反応機構 (東京化学同人)

264A 有機反応機構演習 (応化・化3) 2-2-2 (教授 佐藤匡彦)

有機反応機構 (264) の講義内容を基礎として演習を中心としたセミナー形式で行なう。
教科書：Roberts, Stawart, Caserio 著 Organic Chemistry

265 電気化学 (応化・化3) 2-0-2 (教授 吉田忠)

(1) 電極反応論の初歩 (2) 電気化学的計測法 (3) 商用電池 (4) 金属の腐食と防食
(5) 主要な電解および電熱工業

これを要するに，進路の如何を問わず，科学技術者に必要な基礎的素養について述べる。

266 装置工学 (機械3) 0-2-2 (講師 市川道雄)

各種産業用装置の計画，設計に必要な事項の概要を与えることを目的とするもので，はじめに基礎として各種単位操作の方法および特性，反応器の様式，スケールアップの問題について述べる。単位操作は粒砕，分級，分離，輸送，溶解，蒸留，乾燥，乾りゆう，焼成およびその他の熱処理を含み，とくに気液平衡についての理解を深める。つぎに反応器の様式として固相・気相間の反応および物質移動の方法を，充てん層式，流動層式，回転炉式，気流輸送式などの方式に分けて整理し，異種の業態の各所で操業されている装置を共通の原理で考察する基礎を養う。

C267 I 化学工学(I) (応化1
資源3
工経4) 0-2-2 (助教授 酒井清孝)

C267 II 化学工学(II) (応化2) 2-0-2 (教授 豊倉賢)

C267 III 化学工学(III) (応化2
化学2
工経4) 2-0-2 (教授 平田彰)

近時化学工業の高度化に伴い，そのプロセスの構成は複雑となり，構成装置類の容量も大となってきた。これに対抗して，従来の実験室的な考え方と異なる工学的視野から，プロセス構成の理論や化学装置の操作・設計法が不可欠なものとなってきた。「化学工学」はこれらの化学装置の操作・設計の基礎理論と化学装置群によって構成されるプロセスの設計理論による生産工程の確立を目的とするのである。

本講義系列はこれらの設計法の基本となるプロセス論，および拡散操作，機械操作につ

いて体系的に講述する。

化学工学(I)：プロセスおよび構成装置の概念，物質収支，熱収支，移動速度，平衡関係

化学工学(II)：機械的操作

化学工学(III)：拡散操作

267A 化学工学演習A (応化2) 0-2-1 (教授 豊倉賢)

267B 化学工学演習B (応化2) 0-2-1 (教授 平田彰)

267C 化学工学演習C (応化2) 0-2-1 (助教授 酒井清孝)

「化学工学」学習の意義を的確に把握することを目的とし，化学工学基礎理論より技術論にいたるまでの化学工学全般を内外著名文献の調査で概観する。

268 化学工学実験 (工経4) 0-4-1 (教授 石館達二, 塩沢清茂)
横溝克己

応用化学における化学工学実験 (I) より数実験を選び履修する。

268I 化学工学実験 (応化3) 0-8-2 (教授 城塚正, 平田彰)
豊倉賢
助教授 酒井清孝

本実験の理解に必要な講義系列：化学工学 (I, II, III)

化学工学が各種の化学工程の工業化のための学問であり，化学反応装置および化学機械装置の設計および操作に関する理論を考究することを目的とするならば，これらの装置を自らの手で操作し，得られた結果を整理計算して，始めて真の理解を得ることが出来る。

本実験において化学工学の基礎理論および主要単位操作を，「流動」「伝熱」「物質移動」「機械的分離」「反応装置」の5大別された実験装置により，実験修得せしめる。

268II 化学工学実験(II) (応化4) 8-0-2 (教授 城塚正, 平田彰)
豊倉賢
助教授 酒井清孝

本実験の理解に必要な講義実験系列：単位操作 (A, B) ——反応工学 (A, B) ——
化学工学実験(I)

化学工学実験(I)に引き続き，やや高度の熱移動，物質移動理論に関する実験，非定常系のモデルによる装置の動特性に関する諸実験と解析および反応装置，比較的大型装置，機械の取り扱いを修得せしめるための諸実験を実施する。

269B 反応工学A (応化3・化4) 2-0-2 (教授 城塚正)
269B 反応工学B (応化3) 0-2-2

本講義の理解に必要な講義系列：化学工学（Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ）

化学工学の単位操作は主として物理的な分離操作を対象とするが，反応装置の操作特性，設計法は反応工学において扱われる。化学工業プロセスの中心は反応装置であって，これの理解によってプロセス全般が把握できる。本講は反応機構，反応速度論による反応系の特性解析を基礎とし，物質，熱移動速度論を応用して，各種の反応装置の操作特性と設計法について講述する。

反応工学A：工業反応速度論，攪拌槽型反応装置，管又は塔型反応装置，固定層触媒反応装置などの設計法

反応工学B：ガス，液，固体・流体系などの異相間反応装置，流動層反応装置など特殊反応装置の設計法，混合特性論，混合特性をもつ各種反応装置設計法，反応装置の動特性および安定性

270A 単位操作A（応化3） 2-0-2 (教授 豊 倉 賢)
(助教授 酒 井 清 孝)

270B 単位操作B（応化3） 2-0-2 (教授 平 田 彰)

本講義の理解に必要な講義系列：化学工学（Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ）

化学工業プロセスの構成装置を単位操作別に，その操作特性，設計法などについて講述する。

単位操作A：蒸発操作，晶析操作，医用化学に伴う単位操作。

単位操作B：蒸留操作（多成分系を含む），ガス吸収操作，抽出操作，吸着イオン交換操作など。

272 プロセス制御（応化3） 0-2-2 (講師 村 上 昭 彦)

単位操作および単位反応を組み合わせたプロセスのダイナミックス（動特性）と制御について概説する。プロセス・ダイナミックスは混合現象，熱移動，物質移動，化学反応およびその他について述べ，プロセス制御ではプロセス制御系の挙動を中心にアナリシスとシミュレーションの問題を扱う。

273A プロセス設計（応化3） 0-2-2 (講師 和 田 敏 也)

本講義の理解に必要な講義系列：化学工学（Ⅰ，Ⅱ）

本講義の目的はプロセス・エンジニアリングに対する考え方（Philosophy）および方法論に対する理解を深めるにある。そのために実際にプロセスをとり上げて，その解説と設計演習を行う。プロセスを選定し，化学工学的，経済的考察の討議を経て最適の操作条件を決定するまでの過程，ならびにプロセスを構成する機器の形式や次元の算出を修得させる。

プロセス設計：有機工業化学プロセスを対象として

274A プロセス工学A (応化2) 0-2-2 (助教授 酒井清孝)

本講義の理解に必要な講義系列：化学工学 (I, II, III)

化学工業プロセスにおいて流体の輸送は欠くことが出来ず、送風器、ポンプ等の設計において重要である。さらに加熱・冷却といった伝熱操作もプロセスにおいて基本的な操作と言われている。そこで本講義においては、現在化学工業プロセスにおいて用いられている流動装置および伝熱装置を取り上げ、装置内の流体輸送に伴う圧力損失さらに熱交換器内における伝熱現象に重点を置いて講述する。

274B プロセス工学B (応化2) 0-2-2 (教授 豊倉賢)

本講義の理解に必要な講義系列：化学工学 (I, II, III) 特に無機化学工業プロセスを例として化学工業が初期の回分操作から連続化へと発展するにつれ、いかに各単位操作・装置が変遷し、また有機に組み合わされて来たかを講述するとともに、これらの化学工業において、化学工学が如何に寄与するか、またこれらの装置コストの推算法について言及する。

275 装置構造設計 (応化3) 0-2-2 (講師 溝口憲吉)

化学プラントで主として使用されるタンク、圧力容器、タワー、熱交換器、加熱炉などに関し構造設計、強度設計を主にして、材料の選択、製作法も総合的に講義する。

276 粉体工学 (応化4) 2-0-2 (助教授 酒井清孝)

化学工学特に機械分離系、化学反応系操作および装置において粉体の理論とその応用の果しつつある役割は近時異常なる進展を見つつある。本講義はその主要科目である機械分離系操作および装置について講述する。

277 プロセス開発 (応化4) 2-0-2 (講師 妹尾三郎)

1) プロセス開発は何故必要か 2) 研究開発の方法論—フルフラールよりグルタミン酸合成プロセスの研究例 3) 化学における大発見について 4) 特許戦略について 5) プロセス開発の方法論—プロセス開発に必要な情報データについて 6) 研究開始よりプラトン運転まで—グルタミン酸ソーダ、イノシン酸ソーダなどの製造プロセスの開発例 7) プロセス開発管理システムについて 8) プロセス開発の将来について

278 光反応化学 (応化4) 2-0-2 (教授 長谷川肇)

最近光化学が各方面から注目される様になり、研究も一段と盛んになって来ている。こ

れも、BHC、カプロラクタムの光化学的合成法の成功などもこの傾向を助長したものと
いえよう。

光化学反応は光エネルギーの提供によって開始するものであるから、熱反応では望みに
くい自由エネルギーの増加する反応も可能になるという魅力がある。しかも注入する光エ
ネルギーの多少により色々な励起状態や解離状態が生じるので、その反応の多様性が生れ
る。この見地から合成化学的な興味がある。

この講義では、励起エネルギー、分子の励起状態、励起による解離等を述べ、あわせて
有機光化学反応の機構を説明する。

279 構造化学 (応化3) 2-0-2 (助教授 伊藤 紘一)

分子分光学の基礎的概念を説明し、回転スペクトル、振動スペクトル及び電子スペクト
ル等の分光法が、分子構造の決定に如何に使用されるかを示す。講義は、下記の教科書に
従って行う。

G. M. Barron "Introduction to Molecular Spectroscopy" (International Student
Edition, 好學社)

279A 構造化学A (化2) 0-2-2 (助教授 伊藤 紘一)

本講義の前半は、分子の持つ双極子モーメントや誘電率の研究に重点をおき、それらが
分子構造に関してどのような知見を与えるかを示す。又誘電分散について説明し、緩和現
象の基礎的概念について言及する。後半は、光散乱、X線回折、電子線回折等電磁波と電
子線の回折と干渉現象を利用した分子構造決定法の原理を説明し、各々の方法が、どのよ
うな情報を提供するかを示す。

279B 構造化学B (化3) 2-2-4 (教授 高橋 博彰)

最近では分子構造にもっぱら物理的方法によって決められる。とくに電磁波を使う分光
法と電子線などを用いる回折法は、最も直接的であり、ほとんどの場合唯一の方法でもあ
る。分光法、回折法のいずれを使うにしろ、分子構造を決定するためには、実測される物
理量と分子パラメーターとの関係を知っている必要がある。本講義では、電子スペクトル、
振動スペクトル、回転スペクトル、電子スピン共鳴、核磁気共鳴、誘電分散、ラマン効果、
光電子スペクトル、X線回折、電子線回折、中性子線回折などによって測定される物理量
と分子構造の関係を説明する。

280 拡散操作 (応化3) 0-2-2 (講師 早川 豊彦)

化学工学全般に関する講義を履修した応用化学系の学生のうち、さらに進んだ専門講義
の履修を希望する学生を対象として実際の工業で重要な分離・精製技術の基礎となる拡散

操作について述べる。

内容 1. 序言 2. 化学プロセス 3. 分離プロセス 4. 分離プロセスと拡散操作
5. 蒸留 6. 吸収 7. 液-液抽出 8. 調湿 9. 乾燥等

281 機械的操作 (応化3) 0-2-2 (教授 豊倉 賢)

本講義の理解に必要な講義系列：単位操作A, B

単位操作Aに引き続く講義で、混合、粉体（粉碎、分級、貯槽、輸送）、集塵、炉過、沈降、遠心分離などを化学工業プロセスを例にしながら講述し、プロセスに合致した装置形式の選定から装置の設計、計算まで述べる。

282 システム工学 (応化4) 2-0-2 (教授 城塚 正)

化学工業プロセスはシステム論によれば、大型の System であってこれを構成する単位操作機器は Subsystem である。Subsystem の特性は、化学工学、反応工学によって数学的な表現で与えられる。この Subsystem 特性を用いて、全 System に合成して System 特性を表わし、実際の化学工業プロセスをシュミレートする手法が、化学工業プロセスにおけるプロセス工学である。本講ではこの手法と具体的なシステムの解析例について講述する。

283 モデル解析法 (応化3) 2-0-2 (教授 平田 彰)

本講義の理解に必要な講義系列：化学工学 (I, II, III) 数学E

化学装置の設計・改良・創造的開発などに伴う諸問題を解決するためには、先ず問題の本質を明確にすることおよびモデル化の手法により装置内で生ずる諸現象を数学的に記述し基本方程式を立式することから始まり、次に数学的解析手法により基本方程式の解をえて、諸現象の特性を明らかにしなければならない。さらに、えられた解がはじめの問題を充分満足するものであるかどうか、またさらに一步進め、得られた解の普遍化まで行なうことが重要である。本講では、これらの過程を通じて、モデル化の意義・目的・手法、数学的解析手法、解の吟味法、普遍化手法などを修得することを目的として講述する。

283A 二 移動速度論 (応化3) 0-2-2 (教授 平田 彰)

本講義の理解に必要な講義系列：モデル解析法

化学工学の基礎として重要な【Engineering Science の支柱としての移動速度論について、特に運動量、熱および物質移動に関し、その基本的な考え方、速度論的考察等について三者間のアナロジーに基盤を置いて講述する。さらに、これらの基礎理論が実察問題とどの様に結びつくかを探求しながら諸移動現象の機構を講述する。これらを通じ、各人の創造的能力の再発見と開発を本講の目的としている。

283B 物性定数推算法 (応化3) 2-0-2 (助教授 酒井清孝)

粘度, 熱伝導度, 拡散係数などの輸送現象係数, また蒸気圧, 比熱, 蒸発潜熱などの物性値は化学工学の基礎的数値として重要である。これらの物性定数に及ぼす温度, 圧力その他の因子の影響, また, 物性定数が未知の時の推算法について演習をはさみながら講述する。

〔参考書〕 佐藤一雄著: 物性定数推算法, 丸善

284 化学工業論 (応化4) 2-0-2 (教授 村井資長)

I 現代産業と化学工業

1) 産業の巨大化時代の意味 2) 化学工業の構造変化 3) 日本の化学工業とその国際的地位 4) 資本と技術の問題

II 化学工業の技術変遷

1) 経済史の視点から 2) 原料資源の視点から 3) 国家・国際資本・戦争の視点から

III 現代および未来の化学工業

1) 巨大化メ리트資本の集中 2) 資本の自由化と内外独占資本および国の役割 3) 新技術の開発と巨大科学 4) 経済政策における化学工業の地位

IV 二, 三の化学工業の経済分析

1) 新しい経済分析の方向 2) 石油精製と石油化学工業 3) プラスチックおよび合成ゴク工業 4) 合成繊維工業 5) その他

285 レオロジー (応化3) 0-2-2 (教授 篠原 功)

主として各種材料の粘弾性的性質について講義を行なう。さらに分散系のレオロジー, 生物レオロジー, 工学に関連して破壊, 加工のレオロジーにも触れる。

286 工場見学・実習 (応化3) 2単位 (応用化学科全教員)

近時その規模構造が急速し変化しつつある化学工場の諸設備を見学することによって, 基礎学を主とする大学における教課内容を補うことを目的とする。原則として年度内に東京近郊を中心に代表的工場を指導教員引率の下に見学し, レポートを提出させる。

287 卒業論文 (応化4) 1単位 (応用化学科全教員)

応用化学科における卒業論文というのは4年度の後期において工業化学または化学工学に関するある問題について研究をするもので, 大学4年間の履修課程中最も重要な科目である。その研究は先人の研究を追試するものでなく, 何等かの新しい課題に取り組んで在学中に修得したあらゆる知識や実験上の方法を集中して研究するものであるから, この研究に従事して初めてこれまで学んだ講義および実験上の技術が活用されるのである。

卒業論文に従事することによって、初めて研究とはいかにして進められるものであるかが体得出来るばかりでなく、研究を進める上に内外の専門雑誌に発表されている学術論文を読破理解しなければならぬので、知識の進歩は真に著しいものがある。さらにこれによって種々考える力も養成される。

289 環 境 化 学 (応化4) 2-0-2

(教授 森田義郎, 城塚 正)
宇佐美昭次

近年、産業の発展と消費の拡大に伴う環境汚染は大きな社会問題となっている。とりわけ有害物質の大半が化学反応に伴って発生している以上、特に化学者の責任とその果す役割は重要である。本講義はまず自然系における物質の循環と生物の役割を述べたのち、生物化学的方法による廃棄物処理、化学工学的的方法による水質汚濁防止、さらには大気中に存在する複雑多様な汚染物質の分析や防除法など環境汚染防止に役立つ新技術の概要について述べる。

電子工学・電気工学・電子通信学 系科目

301 電気技術史 (電気4) 2-2-4 (教授 高木 純一)

電気技術に関するひと通りの素養を学んだ学生を対象に、電気技術が発展してきた過程を人間的な要因、社会的要因などとともに総合的に見なおすことを目標とする。歴史は人間の価値追求の歴史でもあるから、科学技術の成果だけでなく、未来へつながる技術者の態度について考えてみるための科学でもある。

C302A 電気工学A (機械3) 2-2-4 (教授 高橋利衛, 町山忠弘)

C302B 電気工学B (資源2)
(工経3) 2-2-4 (教授 清水 司)

本講義は電気系以外の学生を対象とし、電気工学の諸概念とその工学一般への応用を理解させることを目的としている。

(A)では、おもに電気をエネルギー面から考察し、その伝達・交換・制御(特に、電気—機械エネルギー間の変換)について講述する。

(B)では、おもに電子現象および電子回路を中心に情報の蓄積、変換、制御、計測に関する電気工学の諸概念について講述する。

C302C 電気工学C (工経3)
(土木4) 0-2-2 (教授 坪内 和夫)

本講義は、電気工学の諸概念とその工学一般への応用を把握させることを目的としている。まず発電、送電、配電などの電力系統に関する学理を学ばせ、次いで電動機などの電気機器についての技術を会得させる。おわりに、これらの電力を企業において合理的に使用するために用いなければならない手法を説明している。

306A 電気磁気学A (電気1) 2-2-4 (教授 矢作 吉之助)

307A 同 演 習 (//) 2-2-2 (講師 鈴木 克生)

電気を主として取扱う工学に生じる電気磁気の諸現象を理解し、さらに新しい装置の設計創造を行なうための基礎となる電磁現象の基本法則を講義する。ベクトル、微分方程式としての表現と共に、ここでは第1学年の講義であることから、電気工学における具体例を活用し現象の理解と、工学との橋渡しへの姿勢を得るようにつとめる。特にエネルギーコースに進む学生にオーダーしたものではないが、時間に限りがあるため、学科演習での繰返し理解による自習が行なわれる。

306B 電気磁気学B (電気1) 2-2-4 (教授 高木 純一)

307B 同 演 習 (//) 2-2-2 (教授 白井 克彦)

電気電磁現象を知り、これをひろく応用に役立てるように、基礎的な法則を学ぶことを目標とする。体系としてはマクスウェルの理論を中心とするが、応用のことも考えて関連する物理現象にも触れる。

システム工学コースとしての特別な配慮はせず、むしろシステムとして抽象される前の物理的な本質を考えるようにしたい。また物理現象を計量し、数学形式に表現してゆくことを学ぶことも目標のひとつである。

以上のような内容を短時間の講義だけで理解することは困難であるから、学科演習の問題を中心に、学生自ら学びとることが課せられている。

306C 電気磁気学C (電気1) 2-2-4 (教授 木尾 侯 守 彦)

307C 同 演 習 (//) 2-2-2 (教授 木尾 侯 守 彦)

電気エネルギーとその流れから電磁界基礎方程式を導き、電界、磁界、電磁波およびその物質との相互作用について述べる。

308 電気磁気学特論 (電気2) 2-2-4 (教授 白井 克彦)

主として、巨視的な電気磁気現象について物理的内容とその数学表現を詳しく学び、電気工学の基礎理論を充分理解することが目的である。

内容は、静電界、特殊相対論、運動電荷による場、電流と磁界、Maxwell の方程式、エネルギーと運動量、物質中の電磁界、電磁波と境界値問題などである。

本講義は、「電気磁気学」(電気1年)に直接、接続するものではないが、電気磁気に関する一通りの知識を仮定している。

309A 電磁気学A (通信2) 4-4-4 (教授 香西 寛)

電磁気学は通信工学、電子工学の基礎をなす重要講義で、これを理解するのに最も適当な体系を構成するよう特に留意してある。

電磁気学Aにおいてはベクトル解析、座標解析にはじまり静電界、静磁界、電流現象、電流の磁気作用、電磁誘導現象を取扱い、かつ解法を習熟せしめるため、適当な演習を課して修練する。

電気振動および電磁波諸現象については、回路理論および電磁気学B、にゆずりここでは触れない。

本講義においては単位系はM. K. S 合理系を用いる。

309B 電磁気学B (通信3) 4-0-2 (教授 副島光積)

「電磁気学A」(309)の後に接続する講義で、理論の構成に重点をおき、重要な思想の発見については、その歴史的意義を強調する。講義と平行し、そこにおいて述べられた諸理論、重要な法則、ならびに実用上の問題について、その理解を深め、かつ解法の習熟に資するため、適当な問題を課し修練する。記述はベクトル記法を用い、単位はM. K. S 有理化単位系による。

内容はマクスウェルの方程式を出発点として、電磁気学の理論を講述する。

309C 電磁気学C (通信3) 0-2-2 (教授 副島光積)

「電磁気学B」(309B)に接続する講義で、ベクトル波動方程式と境界値問題、伝送系、共振系、特殊相対性理論ならびに、電子と電波との相互作用につき説明する。この科目に関しては、演習を行なわない。

310A 電気物性A (電2) 2-0-2 (助教授 鈴木克生)

固体における伝導現象および誘電的、磁氣的性質の初歩的な知識を与えることを目的とする。

310B 電気物性B (電気2) 2-0-2 (教授 木俣守彦)

物性工学の基礎となる、エネルギー帯構造、電気伝導現象およびその応用としていくつかの効果について述べる。

311 回路理論 (応物・物理2) 2-2-4 (教授 久村富持)

線形受動電気回路の解析とその応用を主目的とする。内容は、交流の性質とその表示法から始めて、LRC 回路の計算法、グラフ理論の応用、キルヒホッフの法則、重量の原理、テブナンの定理等の線形回路の基本諸定理を詳述し、ついで二端子回路、四極子回路、分布定数回路の解析と設計法を述べる。さらに非線形性を有する歪波回路の計算法を述べ、最後に過渡現象についての解析を行なう。

本科目はその性質上、複素関数の取り扱い、および電磁気学と深い関係があり、したがってこれらの科目の十分な理解があることが望ましい。

311A 回路理論A (電気2) 2-2-4 (教授 石塚喜雄)
311I 同演習 2-2-4 (助教授 松本隆)

電気工学科学生として習得すべき電気工学の基礎に立ち、これに必要な最小限の回路理論を講述する。

方法は具体より抽象への道程を採り、工学上の立場より現象面、応用面の理解に重点を

置く。古典交流理論を電気、通信、電子の三系を対象として説き、ラプラス変換による分布定数回路の動能解析に終る。パルスその他の一般動態、シミュレータ、回路論等を詳述する時間は無いので、これに続く特論を履修して、大学課程としての回路論の基礎教養を完了され度い。

重な項目

- I 定常交流理論（正弦波交流，交流回路の基礎，交流回路解析，交流測定，三相交流，分布定数回路，伝送回路，鉄心非線形）
- II 線形回路過度理論（電気回路動態，ラプラス変換，一般線形システムのダイナミックス初歩）

311B 回路理論B（電気2） 2-2-4 （教授 成田 誠之助）
311II 同 演 習（#） 2-2-2

電気工学科システム工学コースを対象とした基礎的な回路理論であり，主として線形受動電気回路の解析手法と応用を講ずる。一般の線形システムのダイナミックスは「システム解析」で論ぜられるので，ここでは電気回路論の枠内で回路固有の問題に対する理解を徹底させるように努める。内容としては，交流回路の定態解析，過渡現象，非線形回路，断続回路，その他である。尚，理解の徹序をはかるため，別に演習を行なう。

311C 回路理論C（電気2） 2-2-4 （教授 秋月 影雄）
311III 同 演 習 2-2-2

電気工学科エレクトロニクスコースを対象とした回路理論である。内容は，正弦波交流回路の定常状態解析，グラフ理論，2端子網，4端子網，3相交流，分布定数回路，ひずみ波交流，過度現象解析である。非常に多くのテーマについて述べなければならないので，講義では細部には触れず基本的な考え方について詳しく説明する予定である。また，本講では交流回路の取り扱いに充分なれることも目的の一つであるので，毎週演習問題を課し，具体的な問題を解く能力を養成するとともに，講義の理解の助けとする。

312A 回路理論A（通信2） 4-4-6 （教授 内山 明彦）

前期は回路に関する各種の法則および諸定理から入り，インピーダンスおよびベクトル記号法などを説明する。次に1端子対回路の解析から2端子対回路の各種パラメータの説明へと進む。

後期は分布定数回路の解析から入り，次にラプラス変換，フーリエ級数および変換について講義を行なった後，直流の過渡現象から交流の過渡現象へと進む。なお，毎週講義に関連した演習を行なう。

312B 回路理論B (通信3) 4-0-4 (教授 平山 博)

回路理論(A)のあとを受け、電気回路網のグラフ理論的考察を行ない、一般的な電気回路網の解析を説明する。さらに、非線形素子を含んだ回路の解析についても講義を行なう。なお、講義に関する演習を適宜行なう。

312C 回路理論C (通信3) 0-2-2 (教授 平山 博)

回路理論A, Bの後をうけて、回路網の合合理論および非線形回路の取扱いについて講義する。変定数回路についても論及し、パルス回路の基礎理論となるようなものに触れる。

313 回路理論特論 (電気3) 2-2-4 (助教授 松本 隆)

近代回路網理論への入門である。近代回路網解析に不可欠な Network Topology および状態変数解析に関する基礎的な知識を与える事を目的とする。

この講義の内容は次の諸項目を含む：有向グラフ、基本ループと基本カットセット、キルヒホフの法則、双対性、Tellegenの定理とその応用、proper tree, normal tree, 状態空間、状態方程式、回路網の複雑度、状態遷移行列、zero-input response, zero-state response, 随伴方程式、随伴回路網、時変回路網、非線形回路網。

314A 情報回路 (通信3) 2-0-2 (教授 小原 啓義)

論理回路の基礎であるブール代数から始めて、各種論理回路素子の性質、組合せ論理回路および順序論理回路、それ等の構成法、情報処理システムで使用される各種情報回路の設計法等を講ずる。

314B 情報処理ソフトウェア (通信4) 2-0-2 (教授 小原 啓義)

電子計算機システムにおけるプログラムによる情報処理の基本概念を中心とし、データ構造とそれを処理するプログラム言語、プログラム構造、オペレーティングシステムなどを講ずる。この科目を受講する学生は情報回路および情報処理システムの単位を修得していることが望ましい。

315A 電子回路A (通信3) 2-4-4 (助教授 大泊 巖)

トランジスタなどの能動素子を含んだ回路で、線形な動作をしている場合について扱う。夫々の素子の構造、動作原理からはじまり、等価回路、回路パラメータによる表現へと進む。次に増幅および発振の一般理論と、これらの素子を用いた具体例について述べる。後半においては、変調、復調、電源回路をはじめ他の応用回路について講義を行なう。なお、後期には講義に関連した演習を行う。

315B 電子回路B (通信3) 0-2-2 (教授 富永英義)

主としてパルス回路について講義する。まずトラスジスタのパルス応答についてのべ、無安定、単安定、双安定回路について講義する。さらに論理回路としての原々の回路について述べる。また波形操作回路について、振幅に関するものと時間に関するものとに分けて説明する。最後に計数回路、AD変換回路について説明を行なう。

316 電子物性工学 (通信3) 2-0-2 (教授 伊藤糾次)

真空・気体および固体中の電子伝導に関連する物性について述べる。電子装置Aの受講に必要な基礎知識を作ることを目的としているため、主として電子工学の分野で取り上げられている内容について論ずる。

317A 電子装置A (通信3) 0-2-2 (教授 伊藤糾次)

真空中の問題に関しては、電子幾何光学的な取り扱いおよび空間電荷効果を加味した取り扱いで解析できる範囲について論じ、気体中の問題としては、主として α 、 β および γ 作用に関する考え方について述べる。また、簡単な応用装置として真空管および放電管についてその作用を述べる。次に、固体中の問題としては、おもに半導体中の基礎となる金属-半導体接触およびPN接合について論じ、応用装置としてダイオードおよびトランジスタについて述べる。

317B 電子装置A (通信4) 2-0-2 (教授 伊藤糾次)

電子装置Aを補充するための講義で、超高周波真空管、特殊放電管あるいは超高周波トランジスタ、電界効果トランジスタ、トンネルダイオードなどの重要な電子装置の構造、動作原理、特性等について述べる。

319 電気材料 (電気3) 0-2-2 (教授 三田洋二)

この講義は電気材料に対する基礎的な教養を与えることを第一の目的として、ついで電気技術者の立場から、その利用を考えることを要点としている。電気工業に使用されている材料をR、L、C材料等に大別し、材料科学の基礎概念を述べてから材料各論に入る。できる限り、結晶模型・材料の見本等を親しく手に触れて理解できるようにする。

320A 電子材料A (通信2) 0-2-2 (教授 清水司)

320B 電子材料B (通信3) 2-0-2 (教授 清水司)

A. 物質の電気的性質(導電性、誘導性、強誘導性等)および磁氣的性質(常磁性、反磁性、強磁性等)を固体内電子群の演ずる種々の様相としてとらえ、電子および通信工学

部門で用いられたる各種材料の諸性質を明かにし、かつその応用について述べる。

B. 量子現象、プラズマ現象など新しいエレクトロニクス開発の素材とその工学的利用について考察する。

323 固体電子素子 (電気3) 2-0-2 (教授 木 俣 守 彦)

固体の基本的物性を直接的に利用する Bulk 素子および Junction の組合わせによる素子のうち、電子工学の講義にないものを主として取上げる。

325A 電子材料A (電気3) 0-2-2 (助教授 鈴木 克 生)

電子素子を作成する時、必要な固体についての基礎的な知識を与える。

325B 電子材料B (電気4) 2-0-2 (教授 三 田 洋 二)

この講義ではセラミック材料—Ge, Si 単結晶を除く非金属、無機材料を R 材料・L 材料・C 材料に大別しやや詳述する。

R セラミックスとして感温抵抗素子等・L セラミックスとしてフェライト・C セラミックスとして低損失絶縁材料・特殊コンデンサー・圧電セラミックス等について述べる。

326A 電子工学 (応物・物理3) 2-2-4 (教授 小 林 寛)

技術革新の担い手であるエレクトロニクスについて述べる。すなわち、第1部は各種条件下における電子のふるまいについて解説し、第2部にその電子のふるまいの応用として、各種電子管、半導体素子、磁性素子、量子エレクトロニクス等、およびそれらの応用について述べる。

326B 電子工学 (電気3) 2-0-2 (教授 尾 崎 肇)

半導体素子およびレーザーを中心として、エレクトロニクスにおける各種の素子の動作原理を解説し、動作特性を導びく。

予備知識として、電気磁気学および回路理論の講義を受けていることを前提とする。

327A 医用電子工学 (通信4) 0-2-2 (教授 内 山 明 彦)

生物体を信号源または負荷と考え、その計測、情報処理および制御について主に工学分から取り扱う。更に今後の病院システムおよび医用器機の信頼性についても講義を行なう。

327B 生物工学 (通信4) 2-0-2 (講師 戸 川 達 男)

生物体の機能を工学的な観点から講義を行なう。生物の形態、物質の摂取および排泄、

生体内環境の維持機能，生体外環境への適応機能に至る一連の現象を具体例を中心に述べる。

328 電子工学実験（通信4） 6-0-2 （項目別担当）

電子工業課程の学生に対し，第3年の電気通信基礎実験の次の段階として用意する課程必修実験であり，電子工学における基本的な諸項目について実験を行なう。

〔実験項目〕 通信測定，量子エレクトロニクス，電子計測，回路部品，音響，理論回路，マイクロ波回路，マイクロ波アンテナ，半導体の製作，材料の定数，測定パルス回路，自動制御，電子計算機

329 システム・プログラム論（電気4） 2-2-4 （講師 宇都宮公訓）

前期はFORTRANを例にとりながら言語の形式化とコンパイラの構造を，後期はオペレーティング・システムの構造と動作を具体的に講述する。

329A 計算機論（電気3） 2-2-4 （教授 門倉敏夫）

計算機を歴史的にながめながら，テクニカルタームを説明して，PCS，デジタル計算機に入る。

シミュレータによる機械語の実習と，アセンブラ言語の実習を終了してから，プログラムの概要を論じ，前期を終了する。

後期は計算機におけるコード問題より入り，簡単な回路から，ブール代数を導入し，これを中心に論ずる。

シンセシス，簡略化，演算記号の問題等，組合せ理論を述べてからFlip-Flopの設計，シーケンシャル回路について説明し，実例として計算の理論設計を説明する。

329B 情報処理シスエム（通信3・応物3） 0-2-2 （教授 富永英義）

デジタル型計算機システムの概要，構成要素および構成方法を述べ，さらにその応用，プログラミング，将来の発展について説明する。この講義を受ける学生は理論回路を修得していることが望ましい。

329C 計算機応用（電気4） 0-2-2 （ ）

330A 電子回路A（電気3） 2-0-2 （教授 小林精次）

真空管，トランジスタなどの能動素子として用いる電子回路について，主として線形回路を中心に講義する。内容は各種電子素子の小信号等価回路の，等価回路による統一的な取扱い，増幅，フィードバック，発振，整流，変復調など諸回路の原理，解析法，設計法などである。

330B 電子回路B (電気3) 0-2-2 (教授 門倉敏夫)

デジタル技術の基本概念から出発して、各種のデジタル回路を講述する。古典的な Flip-Flop から Latch の考え方を通し、IC, LSI CMOS 回路の順に説明し、電卓の設計例を使用してマイクロプログラムまでを講述する。

電気3年に設置した、電子回路Aを修得し計算機論を同時に履修すること。

331A 電気計測 (電気3) 2-2-4 (教授 示村悦二郎)

計測は意志決定に必要な情報を対象から収集し、必要な処理をほどこし認識する過程であり、そのための道具立てが計測システムである。計測システムはしたがってこのような見地から合目的に構成されなくてはならない。この講義では計測および計測システムを上記の立場でとらえ、その基本的な技術である電気的量の計測および非電気的量の電気的計測を中心として、基本的な計測器の構成、その動特性、情報の伝送、処理および提示の問題を学ぶ。

331B 電気計測 (通信3) 2-2-4 (教授 田中末雄)

電気的諸量の大きさはいかにして決定するか、その理論、方法、装置、誤差、適用限界等を考究する。まず諸量の単位、標準および測定法一般について説明し、ついで各種電気計器の原理、構造などの解説を行ない、特に諸量測定に当って最適の計器の選択使用に注意する。なお最近の自動平衡計器、数字式(Digital)計器の概要を説明する。電気測定法としては周波数によって分類し、直流および電力周波数、可聴周波数および無線周波数についてそれぞれ電圧、電流、電力、回路定数、周波数波形等の測定法を述べ、その測定理論、装置、誤差、適用可能範囲等を検討する。

332 電子計測 (通信4) 2-0-2 (教授 田中末雄)

第3年度の電気計測(330B)に引きつづき、電子通信学科電子工学課程の第4年度において講義される。電子工学技術を応用した計測を対象とし、電子的手段による基本量の測定(電圧、電力、周波数など)、各種の物理量、工業量(長さ、変位、時間、圧力、ひずみ、温度、湿度)の測定法、遠隔測定といわれる遠隔点にある量の測定法、自動的に目的とする測定を行なう自動測定などの原理・方法の解説を行なうと共に工業に対する応用を述べる。

333A 制御工学 (通信4) 2-0-2 (講師 白崎善宏)

333 制御工学 (電気3) 2-2-4 (教授 小林精次)

電気工学、機械工学などを縦割りの工学体系と呼ぶならば、制御工学はこれらすべての

縦割りの体系にからみ合う横割りの工学体系である。主としてシステムの動的ふるまいに焦点を合わせ、設計者の意図する動きをするシステムを構成するのが制御技術であり、これの背景となる理論が制御理論である。本講では、制御理論を中心に制御工学の考え方を学ぶ。制御とはなにか、どうやって理論を組立てていくのか、どうすればよい制御を実現できるか、などが大きな問題点となる。具体的には、線形制御系の、ラプラス変換にもとづく周波数領域での解析、設計を中心に、非線形系の取扱い方、制御問題の状態空間におけるより近代的なとらえ方などを講ずる。

334 システム解析 (電気2) 2-2-4 (教授 示村悦二郎)

ダイナミカルシステムの設計、制御の基本となるのは、その動態の適切な把握である。システム技術の特徴は、それが電気工学、機械工学などの個別工学の縦割りの体系を超えて、すべての分野に関連するいわば横割りの方法を提供することにある。それはさらに、社会システム、生体システムなどにも共通する視点を与える。この講義では、電気系、機械系、流体系、熱系、およびそれらの複合系などの種々のシステムの解析から出発して、ダイナミカルシステムの動態を理解する統一的な方法を学ぶ。微分方程式によるシステムのモデル化、モデルの線形化、線形システムの過渡応答、周波数応答の解析、グラフによるシステムの表現などが主要なテーマである。

335 数理計画法 (電気4) 2-2-4 ()

電気技術上の設計問題、いろいろなシステムの計画問題、あるいは制御システムの最適制御の問題は、多くの場合、適当に選ばれた関数を、与えられた条件のもとで最小あるいは最大にする点を求めることに帰着される。このような問題の解の存在条件、最適解の満たすべき条件、最適解を実際に求めるためのアルゴリズムなどを中心に講義する。

336 オートメーション工学 (電気4) 2-0-2 (講師 中村隆昭)

現代生産技術の重要課題であり制御工学のひとつの柱であるオートメーションについて、実際例とその創造的観点から眺めた抽象化および示図化をもとにして解説する。講義内容は工業技術の進歩に歩調を合せて順次変革されるが、日本の技術開発とオートメーション、自動化の本質、労働とオートメーション、プロセス工業でのオートメーション、加工組み立て工業でのオートメーション、集中化と分散化、人間-機械系通信、多品種生産の自動化、ロボット工学などが主な内容である。

337 エネルギー変換工学 (電気2) 2-2-4 (教授 小貫天)

エネルギーには、力学的、電磁気、熱、化学、放射線、核などの種々の形態がある。この講義では、先づこれらのエネルギーの資源・輸送・貯蔵の諸問題を概説し、電気工学科

学生が聴講者であることを考え、特に電磁エネルギーについて詳述する。ついで、電磁エネルギーと各種エネルギー間の相互変換について、その原理より出発し、現在あるいは将来のエネルギー変換機器について、工学的見地より解説する。

338 電気機器 (電気3) 2-2-4 (教授 山崎秀夫, 小貫 天)

エネルギー変換工学で学んだ電気・機械間のエネルギー変換の具体的例として、直流発電機・直流電動機・変圧器・同期発電機・同期電動機・誘導電動機の原理・構造・特性を扱いこれらが制御系の一要素として利用される場合を考えてこれらの動特性を論じ、また電気・機械総合系の解析に言及する。

主な項目

真流機、変圧器、同期機、誘導機、電気・機械回路、電気・機械系の解析、パワーエレクトロニクスなど。

340 電気機械 (通信3) 0-2-2 (教授 小貫 天)

いわゆる強電とは、電気をエネルギー面から考察したものであるが、この講義ではその中の電気機械エネルギー変換の原理、方法について述べる。内容は、電気磁気学の電流の磁気作用、電磁誘導の部と初等力学との結合したものの応用であって、対象とする機器は、普通の発電機、電動機の他にスピーカ、マイクロホン、電磁石、電気クラッチ、電磁ポンプなどすべての電気機械を結合する機器にまでおよぶ。

通常の電気回路論では静止回路を主対象とするが、本講義では動回路を対象とするものである。従って電気系と機械系が結合した回路を取り扱う。

次に、これら電気機器の制御方式についてものべ、また全体にわたって演習問題を附し、実際問題との接触をはかる。

341 電力工学 (通信4) 2-0-2 (講師 都築 旋 二)

水力、火力一般および原子力発電等から送配変電にわたる電力系統全般の技術的ならびに経済的原則の大綱を解説するとともに、電気事業の現状から将来への展望を通じて、考慮される系統計画、建設、保守、運用上の問題点について論述する。

342 電力系統工学 (電気3) 2-2-4 (教授 田村 康 男)

電気事業の生産活動および社会生活に対する基本的役割を述べ、電力系統に存在する多様な要素の結びつきとシステムの構成・運用およびその責務について、系統計画および運用の面から平易に解説する。

発電設備、エネルギー伝送路、保護継電器、制御装置などの送変電設備および情報伝送・収集・処理を概説し、その一部を詳述する予定である。また回路理論、制御工学、電

子計算機、数値計算法など基礎学科目の融合にも留意したい。

主な項目

1. 系統運用の意義
2. エネルギーと情報
3. 電力系統の基本特性
4. 電力潮流と状態推定
5. 系統保護と安定度
6. 電力系統の最適化問題
7. 総合自動化とソフトウェア管理
8. シミュレーション技術。

343 システム工学（電気4） 2-2-4 （教授 成田 誠之助）

線形システム理論で代表される基礎的なシステムの理論と、大規模で複雑な実際システムの計画・解析・設計・運用・保守等の諸問題との橋渡しをするのが本講の目的である。

まずシステム概念とシステムの接近法の必要性を述べ、引き続き、システムの計画・解析・設計・運用・保守の各ステージで用いられる概念と技法について解説する。特にコンピュータ・シミュレーション、システムの信頼性、大規模システムの運用、コンピュータ・コントロールシステムなどについて重点的に解説する。議論が抽象化に過ぎることを避けるために出来るかぎり実際システムの具体例を混えることにし、また理解の徹底と理論の活用をはかるため、レポートの提出とコンピュータによる数値的な演習を課す。

343A 系統工学（通信3） 0-2-2 （教授 平山 博）

情報システムや交通システムなどをネットワークとしてとらえ、網構成・網制御に関する講義を行う。またシステムの信頼性の問題を保守性を加味して論ずる。

344 電気法規（電気4） 2-0-2

まず、電気法規と電気事業の関連を考えつつ、電気法規の沿革を述べる。次は現在の電気法規を分類して、各法規の概要を述べ、最後に電気施設に関する技術基準について、その制定の理由、適用の方法、各条間の関連等について詳述する。

345 電力施設管理（電気4） 0-2-2 （講師 井上市郎）

電力施設および電力系統の総合的運営、電力施設の建設計画、電力施設と環境保全、電力の需要および供給、給電の技術および業務、電力原価と電気料金等について述べる。

346 放射線工学（電気3） 0-2-2 （教授 ）

放射線照射による色々の問題を概説する。有機絶縁物との相互作用による電気的性質の変化、放射線発生装置、放射線防護法、障害防止法、などについて内容とする。

347 原子力発電 (電気3) 2-2-4

(講師 深井佑造, 野村 孜)

原子力発電についての基礎知識を簡単に解説し, 実際の種々の発電プラントの静的, 動的特性について説明する。

前期は基礎と静的な特性を主として説明する。基礎知識としては, 原子炉物理で発電炉設計に直接関係する知識, 原子力発電に関する種々の概念等について解説する。次に発電炉の設計上の問題等について説明すると同時に, 各種の発電炉の諸特性を論ずる。

後期は発電炉の動的特性を主として説明する。内容は原子炉動特性と原子炉制御に大別される。動特性では基礎から応用および実験上の問題についても言及する。原子炉制御では発電炉での制御すべき量と計装との関係を述べ, 実際の原子力発電所の制御方式について解説する。

348 高電圧工学 (電気3) 2-2-4

(教授 山崎 秀夫)

高電圧が印加された条件下において気体・固体と液体およびその複合体の電気的特性とそれらが電氣的に破壊される場合の現象まで取扱い, それに必要な高電圧発生装置, 試験法と測定法におよぶ, そして例えば気体の導電現象と最終形式であるアーク放電を利用した機器等特徴ある導電現象を利用した機器や高電圧に耐えるための種々の機器について説明する。しかし実際この内容に対して講義時間が少なく一部の講義に終ることになる。

主な項目

イオン化と消イオン作用

気体の電氣的破壊

固体・液体の電氣的破壊

高電圧発生装置

高電圧測定と非破壊試験

アーク機器 遮断器とアーク整流器

高電圧機器 変圧器, 套管, ケーブル, コンデンサ, 整流器

349 高電界物性 (電気3) 2-0-2

(教授 矢作吉之助)

近年電力輸送の超々高電圧化, エネルギーの高密度輸送が社会的ニードとなっているが, これに必要な高電界絶縁技術とそれを支える基礎物性科学が大変重要になっている。ここでは, このような電気工学の最近の動向を背景としてふまえながら, 高電界による絶縁体中のキャリア増倍と, それに続く電気絶縁破壊理論, 機器又はパーツの絶縁寿命推定の統計論など, 高電界絶縁設計技術の基礎となる理論を講義する。

350 電子回路設計 (電気4) 2-0-2

(講師 浪本 敬二)

352A 電気応用A (電気3) 0-2-2

(講師 木脇 久智)

この講義では静電応用について述べる。まづ静電界理論、帯電現象、静電界中の荷電粒子の運動を論じ、帯電保安対策、集塵装置、電子写真、静電塗装その他につき、時間の許す限り詳述する。

352B 電気応用B (電気4) 2-0-2 (教授 石塚喜雄)

この講義では電気鉄道に関して述べる。直流方式に限り主として電気車内の電気設備に重点を置き、給電系統は大略に止どめる。故に牽引用電動機の特性および制御理論をその定態並に過渡現象について理論的に詳述し、運転曲線の算定、運転設計を述べる。交流方式は時間の関係上割愛する。

主項目：列車運転力学、牽引用電動機、運転曲線の算定、電動機制御、制動、電力と電力量、鉄道信号

352C 電気応用C (電気4) 2-0-2 (講師 山口博、倉田恭)

本講義は主として電熱工学と照明工学とより成る。

電 熱

電気加熱は抵抗・アーク・誘導・誘電・エレクトロンビームそれに赤外線と加熱方式が各種あり多彩で各々の特徴を生かして用いられ、主要工業材料の製造と民生に欠くことが出来ないものとなっており、その電力消費量も多い。

電気加熱は石油の燃焼により得られる熱エネルギーを電力に変換し、これを再び熱エネルギーに変換利用する方式であるといえるが、この間接的方式が直接燃焼により加熱する方式とならんで使用されていることを電気工学を学ぶ一員として理解する必要がある。

熱が電気と違う点は、電気系機械系などで発熱現象を熱損失というようにエネルギーは、最終的に再利用不可能な熱エネルギーに変換されること、電流は導体のみを流れるとして差支えないような絶縁を施すことが出来るが、完全な熱絶縁は物性論的に困難で高温では導体と絶縁物との差違は著しく縮少することである。

本講義は電磁気・電気回路などの基礎を修得していることの前提で

- (1) 熱と電気の相似と相似則適用の限界
- (2) 各加熱方式の特性

を述べ、次いで時間のゆるす限りハードの面として下記を述べる。

- (3) 電熱負荷の特異な点とそのために必要な電気機器
- (4) 電気炉、溶接機などのハードな電熱機器

照 明

人間の生活、生産、活動を支える眼の働きはすべて照明に依存している。その照明を如何にして適切、経済的に実施するか。眼の生理心理についての照明の基礎を第一に、白熱電球からメタルハライドランプにまで発達した各種光源、光のコントロール、色の座標表

示、照明計算、照明計画と設計等、電気技術者としてマスターすべき内容を、各種の照明プラクティスについて講義する。

354 電力応用 (電気4) 2-2-4 (講師 石黒敏郎, 難波江章)

本講はいわゆるパワー・エレクトロニクスを論ずる。前半は系統部品としての固体電子デバイス、とりわけSCRを始めとする半導体素子の特性を述べ、次いでそれ等の応用を主に電力エネルギー系を対象とし、且つエレクトロニクス回路部分を中心として出来る限り広範囲に最新の技術の紹介を行う。後半は主としてパワー系に重点を置く。即ち電動機の起動、制御等の運転特性およびその応用上の一般事項について、他の電気機械講座との重複を避けつつ説明し、次に電動機によって駆動された機械、即ち起重機、捲揚機、昇降機、荷役機、コンベア等の運搬機械、および送風機、圧縮機、冷凍機等の空気機械、更に水力機械、工作機械、紡績機械等について、その制御上の特性を一般的に解説する。

356 製 図 (電気2) 4-4-2 (助教授 栗田忠四郎)

前期では製図の基本から入って、新JISに基いて機械製図を習得し、後期には電気関係製図を実習することになっている。

教科書には栗田忠四郎編「新JISによる製図要覧」を使用する予定である。

357 工場見学・実習 (電気3) 2単位 (全 教 員)

近年急速に発展を遂げつつある第一線の工場設備を見学することにより、基礎的の学問を主とする学内教育を補うことを目標とする。年度末3月に集中して実施し、各工業地帯における代表的工場の見学を行ないレポートの提出を求める。原則として学生50名につき教員1名が引率し、適宜見学指導を行なう。

C358 電 気 実 験 (運営委員長 教授 小 貫 天)

この実験は電気工学全般にわたる基礎知識を実験によって修得させるのが目的である。従って各学科は必要と認められた実験項目を下記の用意されている項目中より選び、1年間に対しては20項目、半年間に対しては10項目を選定する。実験は1項目につき3時間を要する。実験する場所は電気工学実験室で1班は最大5名、3班同時に同じ項目の実験が可能。取容学生数150名、その運営はこの実験を選定する学科から選出された教員により組織する運営委員会が当たっている。

用意されている実験項目

- | | |
|-----------------|------------|
| (1) 交流回路中のR・L・C | (2) 交流電力測定 |
| (3) 高・低・接地抵抗の測定 | (4) 鉄損の測定 |
| (5) 半導体整流素子 | (6) 光電変換素子 |

- | | |
|-----------------|---------------|
| (7) トランジスタ | (8) 増幅器 |
| (9) シンクロスコープ | (10) ブリッジ回路 |
| (11) 電磁型記録計 | (12) サイリスタ |
| (13) 直流電動機 | (14) 直流発電機 |
| (15) 変圧器 | (16) 3相誘導電動機 |
| (17) 単相誘導電動機 | (18) 3相交流発電機 |
| (19) 3相交流整流子電動機 | (20) 2相サーボモータ |
| (21) 磁気増幅器 | (22) 論理回路 |
| (23) アナログ計算機 | (24) 高電圧実験 |

358 電気工学実験 (電気3) 4-4-2

(教授 山崎秀夫, 田村康男
白井克彦, 田中末雄
河村秀平)

この実験は電気工学の基礎的知識を実験によって理解し、あわせて、実験技術、報告作成の能力を養成することを目的とする。実験はすべて自習を建前とし、現場における指導は、機器の取り扱い方を説明するにとどまるから、実験者には事前指導時によって、その実験に関する十分な準備をしておかなくてはならない。実験は下記項目をおこなう。

1. 光度および照度の測定 2. L.R.C. 3. アナログ計算機 4. 電力測定 5. 変圧機 6. 直流機 7. 誘電体損測定 8. 同期機 9. 整流回路 10. 増幅器 11. 磁性体の特性試験 12. 三相誘導電動機 13. 磁気増幅器 14. 高電圧実験 15. 論理回路 16. 半導体の諸特性 17. 同期機の運転特性 18. 保護継電器 19. ブリッジ回路 20. トランジスタ

359A エネルギー工学実験 (電気4) 4-4-2

(教授 石塚喜雄, 小貫天
示村悦二郎, 松本隆)

359B システム工学実験 (電気4) 4-4-2

(教授 高木純一, 門倉敏夫
成田誠之助, 秋月彰雄)

359C 物性工学実験 (電気4) 4-4-2

(教授 三田洋二, 木俣守彦
矢作吉之助, 尾崎肇)

上記3種の実験は、電気工学実験に続くものであり、前半と後半の2部よりなっている。前半は、各コースに定められた実験項目を履修し、後半は卒業研究担当教員の指定する実験を行う。

360 卒業研究 (電気4) 2単位

(電気工学科全教員)

第4年度の始めに問題を決定し、1ヵ年間にその問題を研究して一つの報告に纏め上げる。問題の決定は教授の出題による場合、または学生自身の創案による場合があるが、何

れにしても指導教員の承認を受け、その指導のもとに研究を進める。これは実験、計算または調査などにより、従来修得した知識の総合的行使の修練が目的である。なお問題の決定に当り修得単位が少なく卒業研究の能力を欠くと認めた場合にはこれを許さないことがある。

361A 情報工学 (電気3) 2-2-4 (教授 白井克彦)

情報工学の対象は大変広く、漠然としているが、本講義は、計測、通信、制御システムにおける情報の概念と情報処理技術の基礎理論を述べる。内容は、まずシャノンによる情報理論を中心に、情報量、エントロピーの概念、符号化の方法、通信路の容量などを概説する。つぎに情報処理装置の基礎として、基本的なデジタル回路、オートマンおよび言語理論、アルゴリズム論などについて述べ、最後にパターン認識などに用いられている統計的決定理論および学習の理論に触れる。

361B 情報理論 (電気4) 2-0-2 (教授 秋月影雄)

自然界には時間関数として明確に定義できない不規則な信号や振動がしばしば観測される。このような信号や振動を解析し、そこに含まれている性質を見出す手法について講義する。すでに情報工学の講義において、情報と確率的な見方との結びつきについて説明されているので、本講ではさらにシステムとの結びつきに重点がおかれる。はじめに基礎となる確率論について概説し、ついで定常確率過程の性質の捉え方をのべ、線形システムとの関係を明らかにする。最後に応用として予測・推定問題について述べ、システム同定に触れる。なお、本講義につづくより高度な取り扱いは大学院の講義である確率システム理論で述べる。

361 通信工学 (電気4) 2-2-4 (講師 小林登, 桑原守二)

362 電子通信工学入門 (通信1) 2-2-1 (助教授 大泊 巖)
(隔週)

電子通信学科に置かれている専門科目を理解し修得する助けになるように、各分野に共通する基本事項(波動、確率など)をとり上げて、原著の輪読、演習を行なう。

363 アンテナ・伝波伝搬 (通信4) 2-0-2 (教授 副島光積)

この講義は無線工学の基礎をなすもので中波よりマイクロ波領域にのるまでのアンテナ系の構成と、その動作原理を説明し、アンテナから放射された電波の伝搬につき講義を行なう。

368A 通信方式A (通信4) 2-0-2 (講師 小林登)

電気通信事業の概要、電話網の構成、データ通信技術および画像通信技術について最も

基本的な事項および将来動向を平易に解説する。

通信または電気技術者としての常識を深めるとともに、各通信方式の経済性等を論じ、システム的な思考を涵養することに重点をおく。

368 B 通信方式 B (通信 4) 0-2-2 (講師 桑原守二)

電気通信に一般的に用いられる有線伝送方式および無線伝送方式について、基礎的な伝送理論、方式の実例について解説する。また移動通信、衛星通信等の最近の動向について展望する。

368 C 交換工学 (通信 4) 2-0-2 (教授 富永英義)

主として電話交換技術について講ずるが、電話網にかぎらず、各種の情報網システムの基本となる基礎的な事項に重きをなして、次の項目について講ずる。

1. 交換技術の発達と情報システムの発展
2. 情報網の機能
3. 通信論とトラフィック理論
4. 交換回路機能
5. 交換機の制御方式

370 A 確率過程 (通信 3) 2-0-2 (教授 堀内和夫)

この講義は、情報の伝達および処理や計測に際して不規則な時間(空間)関数の形で現れる不規則信号および雑音や誤差信号など、多くの確率過程を取扱うための一般的な方法論について説明するものである。

まず、確率概念の数式化、確率論における基本的諸量の性質について概説し、ついで、平均の概念や標本抽出の基本原理について述べる。さらに、スペクトル解析の方法を導入して、これを詳細に論ずる。

370 B 信号理論 (通信 3) 0-2-2 (教授 堀内和夫)

この講義は、線形な情報伝達・処理系における信号の状態・変換・処理に関する理論を詳細に論ずるものである。まず、線形系における信号の状態・変換に関する基本的な性質を述べ、ついで、信号処理に際して考慮すべき雑音(妨害)の性質と、それが同一系においてみせるふるまいについて説明する。そして、雑音指数に言及する。さらに、信号・雑音を処理する目的に応じた最適な線形系について、なるべく詳細に解説する。

この講義を履修するためには、**370 A 確率過程**の内容に相当する予備知識を必要とする。

370C 情報理論 (通信4
応物4)

2-0-2

(教授 堀内和夫)

この講義は、C. E. Shannon によって提唱された情報の伝達すなわち通信 (Communication) に関する数学的基礎理論の概略を論ずるものである。まず、通信に関与して構成される系の概要を説明し、ついで、情報理論の根底をなすエントロピー概念を導入して情報源の性質を詳細に論ずる。そして情報の評価、変換器・通信路の性質、雑音の取扱い、連続信号と離散信号との異同、信号空間の考え方などについて述べる。

この講義では、フーリエ解析および確率課程に関する基礎的な知識を必要とする。

371 制御理論 (通信4)

2-0-2

(教授 堀内和夫)

この講義は、電子通信学の基礎的な学力をもつ学生に対して、各種の自動機構を含む制御系に関する理論上の基礎知識を与えるものである。まず、この様な制御系の一般的性質を説明し、ラプラス変換の知識を用いて、線形制御系の動作特性、安定性の問題を論じ、回路理論の見地から線形制御系設計を述べる。さらに、搬送波を必要とする系、Sampling 系、On-Off 系などの非線形制御系について、その基礎的な性質の概略を説明する。

この講義では、周波数解析を含む回路理論の一通りの知識を必要とする。

372 音響工学 (通信3)

2-2-4

(教授 伊藤毅)

音響工学は、電気音響機器の急速な発達と共に近時急速に開発されて来た工学の一分野であるが、その基礎をなす専門分野として、振動、波動、電気磁気、電気回路などの物理学的な分野のほか、心理学や生理学の分野をも必要とし、さらに建築学や機械工学の分野にも関係する。しかし、その主流をなす分野は音響波動理論であって、それは電気通信工学の一部門を占めるものである。このような事情にかんがみて、この講義は音および聴覚についての基礎事項から始めて振動および音響波動現象について講述し、音響学の理論大系を明らかにする。

次いで電気音響学および電気音響機器について、その理論、設計法ならびに具体的な特性について述べ、さらに円板録音、磁気録音、光電録音、立体音響再生などを講じ、室内音響、騒音制御にも言及し、音響工学を専攻する技術者に必要な基礎的知見を付与する。

本講義には音響工学原論上下巻を教科書として使用するが学生は初等物理学、力学および微積分学を履修していることを前提とする。

374 マイクロ波工学 (通信4)

0-2-2

(教授 香西寛)

マイクロ波工学はこれを大別すると伝送回路、共振回路、放射系、マイクロ波測定および各種のマイクロ波応用に分けることができる。伝送回路においては同軸線路を中心として分布定数線路、各種導波管および表面波線路とこれに関連する整合素子、分岐回路を、

共振回路においては空洞共振器とこれが応用としてマイクロ波フィルタの梗概を述べる。放射系として従来空中線と対空せしめてパラボリックアンテナ、電磁ホーン、誘電体アンテナ、レンズアンテナ等について説明する。マイクロ波測定に本講義の最も重要な部門、電力および周波数の基礎量の測定から種々の応用測定についても詳述する。

375 電子機器 (通信4) 2-0-2 (教授 河村 秀平)

本講義は、放送に関連する機器および方式等について解説を行ないまた特にテレビジョンについて講述する。

テレビジョンは、電子工学、パルス工学、および通信理論等で開発されたエレクトロニクスならびに電子工業技術を基礎とし、さらに人間の知覚神経の生理学をも加え、これらを巧みに利用して集約して得られたものである。かかる観点から、白黒およびカラー・テレビジョンの各種方式と現行のテレビジョン放送規格、ならびにこれに必要な送信設備、受像器、空中線、中継方式と機器等の大要と実施例について述べ、さらに産業方面へのテレビジョンの利用と今後の発展についても言及する。

376 電子部品 (通信3) 0-2-2 (教授 河村 秀平)

基礎事項を電子部品に対する規格また製作に関する観点から了解させることを企図している。講義の間において計画を課題とし、計算(主として数値計算)を命ずることが多い。

内容を簡単に示せば、(1)機器構成の機械的部品選択、保護・保安装置、結線、配線の基礎要素、(2)基本測器 ①各種計器の用途に関する考察、②抵抗器、蓄電器・自己および相互誘導器・減衰器・濾波器・変成器等の実際的设计法と機構、(3)通信測定方式の説明とこれに対する基本測器の適用方法を述べる。(4)応用測器の構造および運用の具体例の説明。

C381 電子実験 2単位 (教授 田中末雄他)
電子通信基礎実験 4単位

この実験は、エレクトロニクスの基礎的な知識を実験によって修得し、あわせてエレクトロニクスの基本的な実験法を習熟することを目的としている。実験の内容は、下記の項目の中から、各学科によって1年間20項目、半年間10項目の割で適当に選ばれることになっている。

用意されている実験項目

- | | | | |
|---------------|----------------------|---------------|--------------------|
| 1 R. L. C.の測定 | 2 直流電源回路 | 3 非線形回路素子 | 4 電界効果トランジスタ (FET) |
| 5 熱電子放出の測定 | 6 ブラウン管およびそれによる真空管特性 | 7 サイリスタ | 8 フィルタ |
| 9 増幅器 (電圧、電力) | 10 発振器 (LC, CR, 水晶) | 11 振幅変調復調回路 | 12 周波数変調復調回路 |
| 13 マルチバイプレート | 14 波形成形回路 | 15 電気回路過渡応答測定 | 16 増幅回 |

路および発振回路 17 高周波電圧測定 18. 高周波インピーダンス測定 19 高周波周波数測定 20 分布定数線路 21 マイクロ波基本測定 22 アンテナ
23 論理回路 24 磁気増幅器 25 自動制御実験 26 半導体特性 27 受信機試験

382 情報工学実験 (通信4) 6-0-2 (項目別担当)

情報工学課程の学生に対し、第3年度の電気通信基礎実験の次の段階として用意する課程必修実験であり、通信工学における基本的な諸項目について実験を行なう。

〔実験項目〕

通信測定、量子エレクトロニクス、電子計測、回路部品、音響、論理回路、マイクロ波回路、マイクロ波アンテナ、半導体の製作、材料の定数測定、パルス回路、自動制御、電子計算機

384 電子通信学特論 (通信4) 2-2-4 (講師、講義の課題、期日等はその都度連絡する。)

工学の中でも電子工学関係は学問の性質から基礎的には応用の面でも極めて進歩発達が著しいので、当学科の学生として通常の講義以外に是非聴いて貰いたい新しい研究課題や技術上の諸問題についてその部門の専門家から2~3回、のべ数時間の程度で解説的に大要を話していただくというのが本講義の目的である。本講義は主として当学科第4年度を対象としているが低学年や他学科の学生も聴講することができる。

386 論文 (通信4) 5単位 (電子通信学科全教員)

これは、学生各自が特定の専門的研究課題について実験、計算あるいは調査した結果を論文形式に纏めて期日までに提出する卒業論文であって、全教員がこの指導に当る。参考のために、指導教員とその主要指導項目とを掲げれば、大体下記の通りである。

田中教授	電学工学、電子回路・測定
河村教授	電子部員、通信機器、音声パターン
伊藤(毅)教授	音響工学
平山教授	回路理論、電子回路、電子計算機
香西教授	マイクロ波回路
副島教授	アンテナ、マイクロ波工学
伊藤(糾)教授	電子物性、電子装置
清水教授	電子材料、電波物性工学
小原教授	情報処理、電子計算機
堀内教授	情報理論、回路理論、制御理論、電磁波論
内山教授	電子装置、医用電子

富 永 教授 データ通信システム, 記憶装置, 交換方式
大 泊 助教授 電子物理, 電子材料

機械工学・金属工学・資源工学・工業経営学 系科目

401 工学系の解析設計演習(I) (機械2) 3-3-2

(教授 高橋利衛, 林 郁彦, 田島清瀬, 加藤一郎, 土屋喜一, 川瀬武彦)
河合素直

工学は理学の単なる応用ではなく, 《生産》という人間の基本的実践媒介にされた, 独自の論理の価値体系を有するものである。これを具現するため, まず本講が目標とする訓練要目は次のとおりである。

(1) 工学系を Gestalt としてとらえること (2) その Zergietelung 関係を数学的表現にすること (3) 以上を力学的に解釈し発展させること (4) さらに工学的な諸要求に適合させること

このため演習を中心としたパターン・プラクティスを行なう。これにより学生は次のようなメリットを期待することができる。

(1) 人間の物質的要求に関する基本的問題を創造的に解決しようとする工学的姿勢の確立 (2) 工学基礎諸科目に散在する諸原理を総合的に理解し, 広い視野のもとに専門に進みうる能力の把握

本講の〈解析〉は, 次年度の〈設計〉に直結する。

402 工学系の解析設計演習(II) (機械3) 3-3-2

(教授 高橋利衛, 林 郁彦, 田島清瀬, 加藤一郎, 土屋喜一, 川瀬武彦)
河合素直

工学は分析理論にもとづく〈解析〉に終始すべきものではなく, 〈設計〉という実践性の論理が貫徹し, かつ開花しなくてはならない, 基礎的な知識や能力が, それ自体のなかに停滞していたエンジニアとしては, アクセサリにすぎないからである。

それゆえ〈解析〉によってえた認識を転換して, 〈設計〉にまで総合する能力の養成が本講の主眼である。そのため演習中心の活動学習を行なう。これにより学生は次のようなメリットを期待できる。

(1) 未知領域に対し主体的に思考し, (2) 工学的判断を行ない,
(3) 技術的決断を下し, (4) なおその結果を合理的に追及する

なお, ここでいう〈設計〉とは, エネルギー・プロセッシングに対する見通しを意味し, いわゆる機械設計ではない。

C403B 自動制御B (応化・工経4) 2-0-2 (講師 依田 昇)

自動制御はほとんどあらゆる工学分野で取り入れられているが, 本講義ではそれらに共通した原理を把握せしめることに重点を置き, その基礎となるラプラス変換による線形連

統制御系の一般理論を概説する。まず、いろいろな工学系が数学的モデルすなわち伝達関数によって一般的に表現出来ることを説明し、そのモデルを用いて自動制御系の応答、安定性などの特性の解析法および設計法がフィードバック制御理論により統一されることを示す。

403 C 自動制御 (応物3) 2-2-4 (教授 久村 富持)

この講義の目的は、自動制御工学の基礎理論についての概括的な知識をあたえることにある。まず、ラプラス変換にもとづく従来の線形制御理論を述べ、つぎに状態という概念を基礎にした新しい制御理論の初歩を述べる。

以下に主な内容を示す。

1. 古典制御理論；ラプラス変換、伝達関数と周波数応答、安定性、制御の良さ、シンセシス問題。
2. 現代制御理論；状態の概念と状態変数、線形系の状態方程式とその解、可制御性と可観測性、安定性。

時間の余裕があれば非線形系、サンプル値系の取り扱いにもふれる。

404 制御理論 (機械3) 2-0-2 (教授 河合 素直)

「制御理論」として制御の論理構造(初等的)を学習することを目的とする。自動制御は各個別にとられない総合工学であるから、回路論の立場から統一的に講義を進める。なお、「電気工学A」の前期で学習する回路論は常に関連づけがなされる。

**404 A 制御工学 (機械3) 0-2-2 (教授 川瀬 武彦
河合 素直)**

「制御理論」の学習を終えた学生を対象に、制御の理論と実際との結合過程を理解させようとするものである。実験を含めて進めることもある。

404 B 自動化システム (機械4) 2-0-2 (講師 依田 昇)

この講義で初めにシステムについての概念を把握し、次に焦点を生産システムに絞り、その自動化について考えて行く。生産システムの代表的なものとしてプロセス工業と組立工業のシステムを対比し、それらの類似点、相違点、それに伴う自動化の方式の特徴について述べる。また自動化システムを構成して行く基本となる考え方について計測、制御(計装)、生産工学などに関連させて述べる。

409 数値制御工学 (機械4) 2-0-2 (講師 本多 庸悟)

数値制御(NC)はメカニカル・オートメーションの一手段であって、工作機械などに

与えたい動作を予め記号と数値によってプログラムし、それを紙テープにパンチするなどして入力し制御するものである。NCプログラムの作成や機械のNC駆動などについて、電子計算機の一応用分野ともなりつつある。本科目では概ね下記項目を講義する。

- 1) 数値制御の原理,
- 2) NCプログラミング,
- 3) NC自動プログラミング,
- 4) 工作機械の計算機制御

411 流体力学 (資源3) 2-0-2 (教授 橋本文作)

流体の流動状態における運動の様相、力の釣合の概念を把握することを主眼とする。流体の状態、連続、運動およびエネルギー方程式から出発して各種流体の流れ(ポテンシャル流動、写像)力学的相似則、次元解析、層流および乱流、管内の流れ(抵抗、衝撃損失)オリフィス、流量測定、境界層、乱流の統計理論などについて講述する。

〔参考書〕 岡本哲史：応用流体力学

Daugherty, Ingersoll: Fluid Mechanics

411A 流体の力学 (機械2) 2-2-4 (教授 田島清瀬, 川瀬武彦) 大田英輔

流体に関する力学の特殊性、基礎となる概念、現象および取り扱い諸量の間の基本的な関係を求める手段を展開する。なお修得した事項に対する理解を深め、また、知識を整理するために演習を行なうこともある。

411B 流体工学 (機械3) 2-2-4 (教授 田島清瀬) 大田英輔

流体の力学(411A)により修得された知識や方法を一層発展させて流れに関する現象をより深く把握することを目的とする。二次元流や非定常流あるいは粘性熱伝導の影響などのより複雑な問題をも含めて、流体や気体の運動を取扱う。流体機械(412)とも関連する科目である。

412 流体機械 (機3) 2-2-4 (教授 町山忠弘) 川瀬武彦

流体工学の直接の応用である流体機械は、管路、リザーバその他多くの要素と共に一つの流体輸送システムを構成する。この流体輸送システムにおける流体機械の基礎的かつ技術的特徴及びそれら諸特性とシステムの作動の相互関係を力学問題として扱う。

417 空気力学 (数学4) 2-2-4 (講師 岡本哲史)

流体力学の基礎方程式、2次元ポテンシャル流れへの等角写像の応用、粘性流と境界層理論、乱流理論、熱理論、超音速空気力学。

C419 工業熱力学 (資源3) 2-0-2 (助教授 永田勝也)

工学一般に必要な熱力学の基礎的な概念を理解させることを目的とする。まず熱力学の第一法則、第二法則の意味を説明し、完全ガスの性質とその状態変化を通じて、熱エネルギー、エントロピーなどの熱力学的諸量の意義を理解させ、計算に習熟させる。ついで実在ガスや蒸気の性質、気体の流れの取扱いなどを説明し、応用例として各種サイクルについて説明する。

**420 工業熱学 (機械2) 2-2-2 (教授 齋藤 孟, 小泉陸男)
(助教授 永田勝也)**

工学で必要とされる各種の熱現象に関する基礎的な知識を与え、その問題処理能力を養成する。内容は、温度、熱量の概念と熱力学第一法則、理想気体の状態変化とその際の仕事および熱の出入、熱力学第二法則とエントロピーの概念、気-液の相変化をとまらぬ熱現象、湿り空気、燃焼、伝熱に関する諸現象、各種の熱力学サイクルなどである。

421 熱力学 (機械3) 2-0-2 (教授 小泉陸男)

工業熱学に接続する講義で、熱工学を勉強する人にとって必要な事項を補足する。内容は気体運動論の考えかた、またこれによる、粘性係数や熱伝導率のごとき輸送性質の簡単な導入のしかたについて説明し、さらに熱力学的な取扱いによる多成分系の平衡および化学的平衡の問題の取り扱いについて説明する。

422 移動速度論 (機械3) 0-2-2 (助教授 永田勝也)

熱、物質および運動量の移動と反応速度を、それらの類似性にもとづいて統一的に論じ、さらにそれを基礎として各々の現象の組合わされた総合的現象も取り扱い、工学上の实例を参照しつつ講義を進める。静止物体の熱伝導、拡散については主として定常現象を論じ、簡単な非定常問題にもふれる。対流移動現象については乱・層流境界層内における熱、物質、運動量移動の総合的現象を考察する。放射熱について固体放射、ガス放射伝熱の取り扱いをのべる。さらに反応をとまらぬような現象の総合的取り扱いを論ずる。

425A 内燃機関 (機械3) 0-2-2 (教授 齋藤 孟)

主として往復動内燃機関に関する基礎的な知識を与える。熱力サイクル、燃料と燃焼、吸排気過程、燃料噴射と気化装置、潤滑と摩耗、排気対策等について講義する。425B 内燃機関設計に接続する講義で、大学院の講義科目「内燃機関特論」を選択するために本講義を修得していることを必要とする。

425 B 内燃機関設計 (機械4) 2-0-2

(教授 関 敏 郎)

往復動内燃機関の造形設計に親しむのを目的として、単筒機関を例として設計の手法を進めて行く、まずエンジン出力の予想のために簡単に平均有効圧を概算できる式を誘導して、指圧線図の指数対数計算に習熟する。次に、出力、回転数に応じた直径、行程が決まったところで、機関の力学計算を行なってエンジン設計の準備をする。ついで、ピストンロッド等の諸部品を順を追って計算を行ない、最後に、本設計方式に従えば、自発的に自己の開発せんとする機種的设计作業の道は完成へと近づくであろう。

〔教科書〕 関 敏郎著：機械設計製図演習2 (ガソリンエンジン編) オーム社発行

425 C 熱 機 関 (機械4) 2-0-2

(教授 小 泉 睦 男)

蒸気原動所の構成要素であるボイラ、蒸気タービン、復水器等の構造と特性、ガスタービン機関の構造と特性をのべ、原動所における実際上の諸問題、将来の熱原動機についてもふれる。

431 自動車工学 (機械4) 0-2-2

(教授 関 敏 郎)

「自動車とは、道路において、原動機を用い、軌道または架線によらないで運転する諸車をいう」と道路交通取締法にきめられてある。

原動機については、その詳細は内燃機関に譲り、本講においては、ガソリン、ディーゼル、ガス駆動の自動車用原動機の現状と、そのあるべき姿について述べる。次に、足元が軌道などの制限を受けずに、また、かなりの悪路および不齊地などの路外までをも走破しうる事が自動車の第二の特徴であるが、所期の目的を果すために、まず、自動車の走行性能の研究より出発して、原動機の馬力、クラッチの容量、最高速度ならびに登坂能力の見地よりの変速理論と変速機の設計、自在接手の変動率、推進軸の共振現象、減速機、差動装置における前進後退時の負荷の様相ならびに軸受荷重、装軌車両の終減速装置、前後車軸、手足ブレーキの容量、懸架装置の悪路における平衡法とスプリングの問題、フレームにかかる荷重、一般自動車用材料の問題に言及する。

なお、自動車発達の過ぎ越し方を顧み、これを味うと同時に、現在世界稼動車両の主要諸元を示し、原動機ならびに車両の種類、性能、特徴などの性格描写を行ない、全貌を把握せしめる。又都市における自動車による排出ガスに基づく大気汚染の発生を極力抑制するため、最感のアイドリング状態を少なくするような交通流を行なう交道行政等についても触れる。

都市に、新しい清い空気を確保するには、自動車はすべからく

running through away on a through way

と行く行政を行なうべきである。

最後に、自動車工場生産管理要綱を略述する。

〔教科書〕 関 敏郎著「自動車工学」(1), (2) (コロナ社)

432 航空工学 (機械4) 0-2-2 (講師 中 口 博)

1. 序論 2. 飛行機の空気力学的特性 3. 推進装置の特性 4. 飛行性能 5. 安定および操縦性 6. 飛行機の荷重と構造

433 船舶工学 (機械4) 2-0-2 (講師 武藤 富三郎)

船舶工学の大要を手っ取り早く、しかも的確につかむため、講義は造船学あるいは造船技術の観点から行い。浮体(船舶)の動揺、したがって浮体の姿勢制御などについては意欲的に追究したい。

なお、講義の内容には、水中翼船 (Hydrofoil boat), ホーバークラフト (Hovercraft) などのような新しい形式の船舶、あるいはまた、コンテナヤードの整備とあいまって高速コンテナ専用船による輸送方式などについての新知識をも加えたい。

437 材料の力学 (機械2) 2-2-4

(教授 奥村敦史, 林 郁彦, 山根雅巳)
(助教授 林 洋次)
(講師 山川 宏, 山本有孝, 加賀 広, 吉永昭男)

ここでの直接的な対象は、機械を構成する固体要素・部材の強度および弾性変形に関連する、主として静力学的な問題の一群である。すなわち、ここでは連続体における「応力・ひずみ」の概念、弾性を介してのそれらの関連性の理解を基礎として、主として棒状部材の引張り、ねじり、曲げ、屈座、および曲りはり・円筒の問題などの、かなり単純化された変形仮定にもとづく実用的解法を示すと同時に、応力集中・材料の疲れ、弾性破損の諸説を概説し、単純な形状・荷重状態の機械要素や構造部材のいわゆる初等的な強度計算の基礎をあたえる。

より解析的に厳密な立場で、一般弾性体・塑性体の問題をあつかう理論の展開は、「弾性学」・「塑性学」にうけつがれる。

機械工学科において、「材料の力学」は、これと平行または前後して履習される「流体の力学」・「機械工学の基礎A」などととも、いわゆる「基礎力学」(質点・質点系・剛体の力学)に立脚しそれを機械工学の、各種局面において応用・分科させて行くものであるが、学習者は具体的問題を通して「基礎力学」の再認識・体得を深めると同時に、同じ根幹より発するこれらの分枝が、また現象や解析形式などの多くの面・点で再度接触・交錯しつつ、機械工学の基礎をおりなしてゆく総合的な展望をうることに、常に留意すべきである。

学習方式：学生の自習を主体とする特殊方式で行なう。

〔教科書〕 奥村著「材料力学」（コロナ社）

〔参考書〕 クランドル，ダール編「固体の力学入門」（コロナ社），大学演習「材料力学」（裳華房），等

C437B 材料力学B (資・通2) 2-0-2 (講師 桜井 譲 爾
電2) 水野 正 夫)

「応用力学」の中で、主として静力学的に構造部材の強度、変形などの計算問題を扱う分野を「材料力学」という。

弾性力学；構造材料の機械的性質、静定構造および簡単な不静定構造の強度、変形計算などの基礎的問題について、具体的な例によって、解法が容易に理解できるようつとめる。

更に力学の他の分野との関連についても述べ、より高度な問題に対してもアプローチする力が養成されるよう配慮する。

C437 材料力学（土木1） 2-2-4 (教授 宮原 玄)

構造物の設計および施工にあたっては常に力学的な考察と対策が必要である。特に土木においては、構造物の施工はほとんど各現場で行なわれるという性格を持っており、他の工業が主として工場生産であるのに対して土木では現場生産の面が強い。したがって設計の立場に立つ者のみならず、施工の側における者も共に力学的な問題に直面するのでその職場の如何を問わず基礎的な重要性を持っていると言えよう。講義内容は、共通科目としての「材料力学」においては力の合成と分解、断面の性質、材料の強さ、応力と歪、静定バリ、断面の応力分布、ハリの撓みなど力学的に静定の問題が中心として述べられる。なお本講義については「材料力学演習」が平行して行なわれるので講義および演習を共に習得することを希望する。

437A 弾性学（機械3） 2-0-2 (教授 林 郁 彦)

「材料の力学」から接続される課程である。棒、軸、柱、はりなどを取り扱ういわゆる「材料力学的手法」で取り扱えない弾性変形問題を、連続体力学の立場からその手法をとべる。

437B 塑性学（機械3） 0-2-2 (教授 林 郁 彦)

「材料の力学」、「弾性学」に接続する課程である。固体に生じる弾性限度をこえた応力、変形の解析を主としてマクロ（連続体）の視点から、その数学的手法を示す。単純な具体的な構造部材を対象として、基礎理論を確実に理解されることに重点を置いて講述する。

438 A 機械工学の基礎 A (機械 1) 2-2-4 (教授 森田 鈞, 奥村教史)
(講師 山川 宏)

機械各部の動き方およびこれに働く力を明らかにするため、静力学、運動学および動力学の基礎をあつかう。機械各部の動き方については、機械内部における二要素間の運動伝達の形式、機械要素を構成する場合の基本的組み合わせ、およびその運動を考える。

438 B 機械工学の基礎 B (機械 1) 2-2-4 (教授 松浦佑次)
(講師 中沢弘, 阿部喜佐男)

機械の部品や材料の製造工作技術の基礎知識をつぎの分野に分けて述べる。金属材料を溶解して鋳型に注入して成形する鋳造加工(阿部)、材料に力を加えて変形させる塑性加工(松浦)、材料を刃物で削って成形仕上げする切削加工(中沢)、などを中心にして関連する種々の加工法の基本と加工機械について説明する。

439 構造の力学 (機械 4) 2-0-2 (教授 谷 資 信)

437 材料の力学に接続する課程である。材料の力学では主として単一部材の問題を研究対象としたが、ここでは多部材によって構成された構造物に拡張される。構造物は骨組の構造と板の構造に大別され、前者は滑節骨組(トラス)と剛節骨組(ラーメン)などに、後者は平面、曲面の構造に分類される。すべてにわたって評論することはできないが、その代表的な構造を機械技術者に即した例について概説したい。

440 機関の力学 (機械 3) 2-0-2 (教授 関 敏 郎)

往復動内燃機関の力学について詳述する。すなわちピストンの変位、速度、加速度、最高速度・平均速度、極大、極小加速度の解析およびその図式解法・ロッドの角変位・角加速度・ピストン・ロッドに働く慣性力・クランクに働く回転・多気筒機関の回転・軸系のねじり振動、フライホイールと調速器、機械および機関の不釣合と平衡、ならびに動弁機構の運動にわたり講述する。特にディーゼル機関の軸系のねじり振動調節ならびに、あらゆる各種機関型式における残存不平衡力、偶力の実態並びにその平衡法について詳論する。
〔教科書〕 関 敏郎著：「自動車工学」(1), (2) (コロナ社)

441 振 動 学 (機械 3) 0-2-2 (教授 高・橋 利 衛)

機械発生する振動を防止・絶縁しようというのが、いわゆる機械振動学であるが、一方において振動を利用する機械もある。さらに電気・音響……などの諸工学はもちろん、自然と人生の諸相に発現するのが振動という現象である。これらを一貫原理に注目することが、振動工学を学ぶものにとって必要である。

C444A 基礎製図A (機械2) 4-4-2

(教授 稲田重男
講師 中沢 弘, 川喜田隆, 岡沢文一, 本荘恭夫)

(資・金2) 4-4-2 (教授 渡 辺 真 一)
(工経 2) (講師 三 好 研 吉)

これは製図の基礎を修得する共通科目で、内容は主として製図の基礎に関する技術的約束を中心として、講述とあわせて実習を行なって製図力および読図力を育成すると同時に、設計力の基礎を培かう事を目的とする。とくに数字、文字の練習と共に機械要素（ねじ、ボルト・ナット、カップリングなど）の製図実習を行ないながら、寸法・仕上げ精度・はめあい・材料表示等各種基礎的な製図規格・習慣などを体得させる。

**445 機械設計 (機械3) 2-2-4 (教授 和 田 稲 苗)
(講師 本 荘 恭 夫)**

機械を構成している種々の要素について、工学設計の立場から講義を行ない、その機能、構造および使用目的を把握すると同時に各種要素の設計考案能力を培かう。他方これらの要素の総合力を高めて機械設計の基礎知識を与える。

講義内容は設計基礎・はめあい・精度・締結法・圧力容器・管・弁・漏れ・防止・軸・軸継手・潤滑・軸受・ばね・ブレーキ・カム・斜板・歯車伝導装置・摩擦伝導装置・巻掛伝導装置・回転・往復機械主要部品などとこれらの総合である。

**447 設計実習 (機械3) 4-4-2 (教授 和 田 稲 苗)
(講師 岡 沢 文 一)
三 好 研 吉)**

この科目は機械設計(445)と密接な関連をもちながら、創造性設計の立場にたって、各種機械の基礎知識を知るとともに、設計製図能力を培う。

とくに下記の機械に関する構造・機能の理解と、主要な性能および強度計算を行って、これらの資料にもとづいた設計製図を的確に表現する実習を行う。課題は次のうちから選択して実施する。

ウインチ、チェーンブロック、ジャッキ、ボイラ、変速装置、ポンプ、空気圧縮機など。

448 設計演習 (工経4) 2-0-1 (教授 古 川 光)

製造部門の技術者が日常出会うと考えられるテーマをとりあげて実際に即した設計の演習講義を加えながら行なう。この間、設計書の作成、材料表の作成、材料寸法、はめあい、精度、構造、機構等についての図面上の表示の約束や、規格の適用等を現実に図面上に現わして修得させる。

内容は機能設計・生産設計の観点から工場機械設備・装置や治工具の設計を演習の形式で行なう。

C449A 機械工学A (電気2・資源4) 2-2-4 (講師 片山芳春)
(通信3) 2-0-2

機械工学以外の学生に対して機械に関する一般的な概念を与えるための講義であって、前期においては、ねじ、リベット、軸、軸受、クラッチ、ブレーキ、カム、ベルト、チェーン、歯車など機械の要素、機具の締結方法、運動の伝達機構等について述べ、又金属材料を取上げてその工作法、すなわち鋳造、鍛造溶接、機械加工など機械製作の基礎知識を与える。又前期において水車、ポンプ、ファンプロラ、コンプレッサなどの流体機械とボイラ、蒸気原動機、内燃機関などの熱機関について説明する。

C449B 機械工学B (工経3) 2-2-4 (講師 片山芳春)
(土木4) 2-0-2 (東秀彦)

機械工学Aと同様に機械に関する一般的な概念を与えることを目的とするが、機械工学Aと異なる所は機械製作法に関するものを除き、その代りに荷役、運搬設備に関する講義を加えたものであって、機械製作法の講義のある学科、または機械製作法の知識をそれほど必要としない学科の学生のために設けた講義である。

前期において熱機関、流体機械についての講義を行ない、後期においては機械要素・動力伝達機構などについての講義をする。

453 機械理論 (工経2) 2-2-4 (講師 川喜田 隆)

工場の経営管理上必要とする程度の機械技術に関する基礎的理論を修得させるもので、基礎的事項として材料力学を主にし、熱力学、流体力学、機構学等をその目的に添うごとく要約関連させて一般技術の理解に役立たせると共に、技術者として一応の素養を得させ、将来工場等の管理運営上に役立たせようとする意図している。

454 製作技術 (工経3) 2-2-4 (教授 古川 光)

生産の方式はその製品の種別、生産量の大小および製作されるものの精度に応じて夫々最も適切な工作法が選ばれるべきである。従ってこの講義においては、IEE に必要とされる製作技術をまず鋳鍛造などの素材の加工から機械工作にわたって、精度と生産量に応じた生産方法について述べる。また生産設計の問題についても併せ述べ、種々の加工法別によるそれぞれの得失を比較しながら講述する。

要目：限界ゲージ方式、鋳造法、鍛造法、機械木工法、金属切削加工法、溶接、溶断、プレス加工法、プラスチック加工法、工作機械、治工具およびそれらの設計、工程の設計、生産設計。

455A 工作機械(機械4) 2-0-2

(講師 中 沢 弘)

工作機械とは広く解釈すれば金属、材料などの材料を切ったり、曲げたり、延ばしたりして所要の形に作り上げる機械すべてをいうのであるが、本講義においては、そのなかで金属を切削および研削によって加工するところの工作機械のみを取り扱うこととし、将来工作機械の設計、製作に従事しようとする者に対してはもちろん、工作機械を使用する場合にも役立つようにということを目標にして講述する。

講義は工作機械汎論、切削理論、工作機械構造の三部に分け、汎論においては工作機械の歴史、特異性、設計方針、所要馬力、精度検査、加工精度、振動などについて説明し、切削理論において、切削機構、切削力、被切削性などについて述べ、構造の部では伝動方式、速度変換機構、自動装置、ならい装置、ベッド、滑り面、軸受、工具支持装置などについて述べる。

458 精密機械(機械4) 2-0-2

(教授 森 田 鈞)

主として精密測定法およびそれに用いる精密測定機器について述べる。内容として、精密測定の基礎事項(誤差、感度、精度など)長さ、角度、仕上面の測定、歯車、ねじの測定などを扱う。また精密機械に特有の機械要素である歯車、ねじ、ばね、軸受などの特徴およびそれらの構成法を述べる。

459 治 工 具(機械4) 2-0-2

(教授 古 川 光)

治具取付具について、使用上の立場から設計上の注意事項ならびにその設計などについて全般にわたり述べ、さらに製作上の経済計算、作業研究上の問題などを併せて述べる。

内容：概説、旋削用治具、穴あけ用治具、平削輪削用治具、研削用治具、組立用治具、特殊専用治具、治具取付具の経済計算

選択上の注意：機械工作法、工作機械およびこれらと同程度の講義を受講していることが望ましい。

460 溶 接 工 学(機械4) 2-0-2

(教授 中 根 金 作)

溶接は鍛冶やろう付のように大古から行なわれて来た接合法から、アーク溶接や抵抗溶接のような比較的近代のもの、さらに電子ビーム溶接、レーザー溶接、爆発圧接などごく最近開発されたものまでを含み、その種類は極めて多い。最近橋梁、船舶、車両、圧力容器などはいずれも溶接構造にかわり、ほとんど、リベットは見られない。従来铸造によっていた部品を鋼板の溶接組立てに切り替え、驚異的な重量軽減に成功している例は枚挙に暇がない。原子炉や人口衛星も溶接法なくしてはその組立てを考へることはできない。

講義の内容は次の通りである。

各種溶接法の原理，溶接機器，溶接材料，溶接部の諸性質とその試験および検査法，溶接設計，溶接施工，各種溶断法

463 機械構造溶接設計（機械4） 2-0-2 （講師 内野和雄）

近時，機械は高能率化が要求されるにともなうて，次第に高荷重・高速度になる傾向がある。加えるに国際市場における競争力を高めるためには機械の作業能率および精度の向上を計るとともに特に価格の引下げを行なわねばならぬ。この目的を達成するには設計および製作に溶接技術を全面的に採用せねばならない。

本講義では機械構造物の溶接設計の基礎として，基本的溶接継手および簡単な溶接構造部材について，静的強度ならびに疲労強度を考慮した設計法を述べる。この講義は大学院の講義の溶接構造設計特論に接続する基礎的なものである。

464 溶接法（金属4） 2-0-2 （教授 中根金作）

溶接法は金属の接合法として最も広範囲に使用されている重要な加工法である。しかるに溶接の基礎理論において，あるいは応用方法において，特に冶金学分野における今後の研究にまつところが非常に多く，深い関心を持たれる工法である。この講義では各種溶接法の基礎的事項と，重要な金属材料の溶接性に重点をおいて講述する。ガス切断その他の溶断法にも触れる。

467 機械工学実験・実習（機械3） 4-4-2

この科目は機械工学実験と機械製作実習とよりなり，学生は実験と実習とを交互に隔週に行なうものとする。

機械工学実験 （教授 松浦佑次，他）

機械工学の基礎学力と実験技術を具体的に応用し，機械技術者として必要な諸種の機械の性能試験および各種の材料試験の原理と取扱操作の実務の修練を積み，実験データの観測および処理方法，構成能力を会得するための一般機械工学の実験である。

各実験は個別に専門の教授，技術職員および教務補助によって指導される。実験項目は年度毎に適当なものを選ぶが主なる項目は次の通りである。

	熱および制御関係	流体関係	材料関係
実験項目	ボイラの性能試験 蒸気原動機の性能試験 内燃機関の試験	オリフィスの実験 せきの実験 管摩擦の実験	引張試験 圧縮試験 ねじり試験

実験項目	発熱量の測定	水ポンプの性能試験	硬さ試験
	温度測定	水車の性能試験	曲げ試験
	計測制御に関する実験	空気機械の実験	摩耗試験
			金属試験
			振動試験

機械製作実習

(教授 稲田重男, 他)

機械製作に関する講義において、習得したことと実際の工作技術との間の関連性を体得するための実習であって、工作実験の鋳造、塑性加工、機械工作、精密工作、精密測定、溶接、熱処理、特殊加工などの各実験室において専門技術職員の実地指導のもとにそれぞれの基本作業から各種工作機械、測定機械の操作とそれによる製作作業、製品の精密測定などを行なうものである。

実習項目は大体下記のようなものを準備するが年度により多少の変更はあり、また機械工学科以外の学生の実習に対しては、それぞれ適当なものを選んで課するようにする。

なお実習は単に物の形を作ることに止まらず、これに実験的あるいは研究的態度をもって臨むように指導する方針であって、専任教員の他に講師、技術職員および教務補助がこれを担当する。

実習項目

1. 木型の基本解説および製作と鋳造方案
2. 鋳造の基本解説および鋳型製作
3. 溶解、鑄込み作業
4. 旋削作業
5. タレット作業
6. フライス作業
7. 歯切り作業
8. ならい作業
9. 研削作業
10. ラッピング作業
11. 超仕上げ作業
12. 放電加工
13. 工作機械の検査
14. ねじの測定
15. 表面あらさの測定
16. 溶接作業
17. 熱処理作業
18. プレス作業
19. NC工作機械による作業

468 コース別実験・実習 (機械4) 4-0-1

(機械工学科全教員, 他)

基礎課程での知見と解析、構成能力をより高い専修分野の各コースにおいて発展し、体得するため、毎年コースにおいて選定される項目について履習する。また、必要に応じて設計実習をも行なう。実施項目は別に指示する。

1. 産業教学コース

つぎに挙げる項目に関する演習を中心として履修する。

- (1) 線形プロ
- (2) ゲーム理論
- (3) オペレーションズ・リサーチ
- (4) コーディング・プロ
- (5) 生産管理
- (6) 産業連関論 など

2. 機械設計コース

機械の強度耐久の面より構造設計の基礎となる解析の実験項目を選定して履修する。

- (1) 応力測定
- (2) 疲れ実験
- (3) 振動実験
- (4) 動つり合実験
- (5) 座屈実験
- (6) 摩擦潤滑実験
- (7) 光弾性実験

3. 流体工学コース

流体工学上の具体的問題を捉え、実験とその準備を主体として基本計測の意味を知り、事例を通じ理論と現象の対応をつける。

- (1) 流体機械を中心とした実験 (2) 管路内の流体の流動に関する実験 (3) 流体力学関係の諸量の計測

4. 熱工学コース

卒業論文・計画の論文をとる者はこの科目で設計実習を履習し、計画をとる者は実験を履習する。

実験はつぎの諸項目から選択実施する。

- (1) 蒸気タービンの性能試験 (2) 内燃機関の性能試験 (3) 熱交換器の性能試験
(4) 冷凍機の性能試験 (5) 燃料の性状試験 (6) 温度測定

設計実習は主として自動車機関の設計図を画く。

シリンダヘッド、ピストン、クランクケース、クランク軸、はずみ車、吸排気管などの主要部品を画き、それらの部品図の誤りのないことを確認し、全体の構成を把握するため組立図を画く。

5. 材料加工コース

塑性工学に関する基礎的解析のためにつぎの項目より選定して履習する。

- (1) 鍛造性実験 (2) 圧延実験 (3) 押出性実験 (4) 非破壊実験

6. 機械工作コース

工作に関する測定と各種検査法の基礎を履習する。

- (1) 切削力の測定 (2) 限界ゲージの工作と測定 (3) フライス盤作業と測定
(4) ジグ中ぐり盤作業と測定 (5) 工作機械の試験と検査 (6) 歯車の測定
(7) NC工作機械による作業とプログラミング (8) その他

7. 溶接工学コース

溶接工学の基礎的実験と測定および溶接設計の履修を行なう。項目は選定の上実施する。

- (1) アーク溶接実験 (2) 抵抗溶接実験 (3) 溶接部の残留応力測定
(4) 溶接製図など

8. 制御工学コース

つぎの項目を中心に計画、設計製図、実験を融合的に学習する。

- (1) 制御機器に関する実験実習 (2) 制御系に関する実験実習
(3) アナログ演算に関する実験実習 (4) 空気源装置に関する実験実習

C469 機械実験・実習 (電気3 0-4-1 工経3 4-4-2)
資源3 4-0-1 467と同じ)

これは機械工学科以外の科の学生に機械の実験、実習を修得せしめるために準備した科

目であって、一年間を二期に分け、前期に機械実験、後期に製作実習、あるいはこの反対として課する。また科の希望によって半年とし、実験または実習のどちらかをとることもできる。実験項目、実習項目としては467および468に掲げられた項目の中より、それぞれの科の希望によって適当なものを選んで課するが、年度により多少の変更がある。

470 ゼミナール (機械3) 4-4-8 (機械工学科全教員, 他)

全学生は約20名のグループにわかれて、指導教授から専門分野の端緒に関する学問の指導を受けるとともに、工場の実験を把握する目的で実務の見学を行なう。この科目は、機械工学の理論と実際を学習するものであるから、この単位を取得しなければ卒業論文・計画に着手できないときめになっている。また1, 2年学年における必修科目および実験実習科目のすべての単位を取得したものでなければ、この科目に参加することができない。

471 卒業論文・計画 (機械4) 10単位 (機械工学科全教員, 他)

卒業論文あるいは卒業計画はこれまでに習得した知識を基にして、大学における学業の最後の仕上げとして指導教授より課せられたテーマ、または自分の選んだテーマについて深く研究して、その結果を論文にまとめるか、またはある機械や実験装置を設計し、製作することにより成果を挙げる。

この論文をまとめ、あるいは設計図を完成し製作することにより、これまでに習得した知識や技術が活用され、また完全に体得されて、将来エンジニアとして世の中に出たときの活躍の基礎となるものであるから、学生はこの卒業論文や卒業計画に全力を傾注する覚悟をもたねばならない。低学年における必修科目および実習科目の単位を全部取得していない学生は卒業論文、計画に着手できないことがある。論文、計画の指導は全教員が分担してこれに当る。

472 材料の構造 (機械3) 2-0-2 (教授 井口 信洋)

諸種の原動機、産業機械から船舶に至るまで、それらを構成する物質がいわゆる材料 (Engineering Material) である。もっと広くいうならば工学分野のあらゆる学問は材料の性質を基幹として始めて成立するものである。それゆえに機械工学技術者は材料の知識 (Material Science) を修得することが肝要である。

さて物質は結晶体と非結晶体とに分類される。ひるがえって機械を構成する材料は金属材料と非金属材料と二大別され、その約98%は金属材料であるがこれは結晶体に属する。したがって本講義は金属材料を主として、材料の基礎知識の涵養を目的とし、まず物質のエネルギー源としての原子構造から説きおこし結晶構造におよび、金属の組織および物理的性質に対する概念を把握させ、合金の組織、変態理論、および合金研究法の概念を把握させる。

しかる後、材料の結晶構造、組織の諸性質（特に機械的性質）との関係を論じ、機械材料に対するより深い知識を講述する。

474 材料の強度（機械3） 2-0-2 （教授 山根雅巳）

機械・構造物を設計する立場における金属材料の強さについての課程である。ぜい性破壊、疲れ強さ、クリープおよび高温強度などをテーマとして、機械技術者が直面する問題に関して、基礎理論から具体的な設計までの概説をのべる。

475 生産工学（機械2） 2-2-4 （教授 松浦佑次，広瀬正吉）

機械材料や機械を生産する方式はその種類、生産量および精度により適切な加工方式を用いて製作される。設計から製作にわたり加工方式の特長と製作技術に適した設計および品質管理について述べる。

476 機械材料（機械2） 2-2-4 （教授 中根金作，井口信洋）

機械製作に必要な金属材料および非金属材料についての製造法、性質、加工法および用途について講述し、とくに機械設計の立場から材料の選定に対する基礎事項について述べる。機械材料の最も新しいデータも逐次講述し、工業標準規格とともに理解するよう述べる。優秀な材料を機械部品の適所に用いることの必要性と認識を高めるよう解説する。

477 工業材料（工経2） 0-2-2 （講師 小川喜代一）

工業材料の主体となる金属、非金属その他材料に関し、広範囲におよぶ各種性質につき講述する。すなわち鉄鋼、鋳鉄、非鉄金属などの物理化学的性質、（金属組織、機械的性質などを含む）または多くの使用状態における適性材料の選択、合理化あるいは性質改善を計るための熱処理法などにつき、主として材料使用者側の見地から述べる。

478 工業材料（応化3） 2-0-2 （教授 吉田 忠，加藤忠蔵
長谷川 肇）

本講義は、化学工業にたずさわる技術者、研究者に必要な工業材料一般について行なう。講義内容は次の通りである。

1. 金属材料

鉄鋼、合金鋼、鋳鉄、銅合金、アルミニウム合金等化学技術者に必要な金属材料についてこれ等の物理性、化学性（耐食性）および用途等を講述する。

2. 無機工業材料

建築材料、土木材料、電気材料、耐火材料、特殊耐熱材料、断熱材料、耐腐食材料、研磨材料、無機質繊維材料、顔料、螢光材料、吸着材料、電子力工業関係材料、其の

他。

3. 有機工業材料

プラスチックの化学装置への利用を主眼として、次の各項について述べる。

防食材料、断熱材料、パッキング材料、建築材料、土木材料、電気材料、包装材料、容器材料、型材。

479 非金属材料学 (金属3) 0-2-2 (教授 鹿島次郎)

各種の工業材料のうち、金属に関連の深い非金属材料を選定してその一般的性質、特徴を夫々広く浅く解説する。

- 例えば
1. 無機材料として 耐火物、珪瑯、セメント、硝子類、カーボン。
 2. 有機材料として 天然樹脂、油脂類、合成樹脂類。

481 I 鉄冶金学(I) (金属3) 2-0-2 (教授 草川隆次)

製鉄、製鋼および造塊の3部より成っている。

まず製鉄技術の歴史を述べ、特に日本の製鉄技術の発展について述べる。

第I部製鉄においては製鉄原料、鉬石の予備処理、高炉ならびに附属設備の構造、製鉄法、特殊製鉄法、直接製鉄法等について略述する。

第II部製鋼については、現在主として行なわれている純酸素転炉製鋼法、電気炉製鋼法について述べ、平炉製鋼法その他の製鋼法についても述べる。

第III部造塊については、造塊設備、鋼塊の種類、欠陥とその対策等について述べる。また特に連続鑄造法についても述べる。

481 II 鉄冶金学(II) (金属3) 0-2-2 (教授 草川隆次)

製鉄および製鋼については、そのおのおのの理論について詳述するとともに、反応工学的な方法についても述べる。

造塊については鋼塊の凝固機構について述べる。

482 半 導 体 (金属4) 2-0-2 (講師 岡田純一)

電子材料としての半導体について、その物性と工業技術の両面から述べる。内容としては、真性および不純物半導体からPN接合におよぶ半導体の主要な物性、それを工業的に応用するために必要な原料の精製、単結晶の成長、素子製造技術などの材料処理、およびトランジスタや集積回路などの半導体装置に関する比較的基本的な事項を予定している。

483 金属工学概論 (金属1) 2-2-4 (担当：クラス担任)

金属工業ならびにその基礎となる金属工学の概要を講述する。とくに金属工学の全体と

その基礎となる学間についての視野を学生に与えるよう講義を行なう。

おもな内容は下のとおりである。

1. 産業における金属の役割
2. 金属工学の領域と対象
3. 金属の物性, 結晶
4. 合金の構造
5. 金属, 合金の強さ
6. 金属の製錬 (冶金)
7. 金属の塑性加工, 溶接その他
8. 実用合金
9. 腐食, 防食
10. 金属の研究, 試験の方法
11. 金属材料の使用例

484 金属物理化学 (金属2) 2-2-4

(教授 鹿島次郎, 藤瀬直正)
加藤栄一

金属工学の基礎として物理化学を主として論ずる。内容は大別して 1. 化学熱力学, 2. 気体分子運動論, 3. 化学反応速度論であり, 化学熱力学においては熱力学の諸法則について述べた後, 主として自由エネルギーの概念を用いて, 相平衡, 溶液の熱力学, 化学平衡を議論する。化学反応速度論の内容は反応次数, 反応速度の温度変化, 衝突理論の検討, 溶液内反応などである。

〔教科書〕 エペレット著, 玉虫, 佐藤訳「入門化学熱力学」東京化学同人

〔参考書〕 ムーア著, 藤代訳「新物理化学」上, 下 東京化学同人

485 I 金属組織学 I (金属2) 2-0-2

(教授 渡辺 尚)

本講義は金属学を専攻する初学者に, その基礎として金属および合金の組織と関連して合金の凝固理論と平衡状態図を理解せしめることを目的とする。まず最初に金属組織学の現状について紹介し, 第2に相律より始めて二成分系, 三成分系の合金平衡状態図についてその基本型と実例について詳細に説明し, 併せて不平衡凝固に伴なう諸現象について解説する。第3に実用金属合金の顕微鏡組織を中心として平衡状態図と関連を保ちつつ凝固および熱処理について述べる。

〔教科書〕 ガイ金属学要論, 諸住正太郎訳, アグネ社

485 II 金属組織学 II (金属3) 0-2-2

(講師 吉田 進)

本講義は金属組織学 I に引き続き, まず金属, 合金の電氣的, 磁氣的, 熱的性質について述べる。次に, 金属, 合金の熱処理の基礎として, 拡散, 相変態 (核生成, 核成長),

組織変化（凝固，析出，回復，再結晶）について述べ，終りにその応用例として鋼の熱処理について説明する。

486 X線金属学（金属3） 2-0-2 （教授 中山 忠行）

本講義においては結晶の空間格子および逆格子と回折現象との関係にもとづいて，各種X線回折法とその金属材料あるいは化合物への応用について電子回折法と対比しながら解説する。

487 金属物理学（金属2） 2-2-4 （客員教授 幸田 成康）

金属に対して物性論的考察をする学問を金属物理学という。量子力学，熱力学，統計力学，格子欠陥論などをもとに金属の諸性質を明らかにすることを目的とする。本講ではそのうち下記について概要を講義する。

I 簡単な結晶学 II 金属の結晶構造 III 金属の塑性と転位 IV 金属の点次陥
V 金属の自由電子論 VI 金属内電子の帯理論 VII 金属の磁性

490 冶金熱力学（金属3） 2-0-2 （教授 加藤 栄一）

熱力学は冶金学の基礎的な原理として非常に重要であるにもかかわらず，これを習得し，さらにその原理を冶金に関する諸現象に応用することは学生諸君にとってなかなか容易でないようである。この講義では金属物理化学において習得した基礎理論すなわち物質状態論，熱力学，化学平衡論などの応用を鉄冶金や非鉄冶金の具体的な例について述べ，また演習を学生に課して実力の涵養につとめる。この他金属に関する熱力学諸数値の測定方法についても述べる。

〔教科書〕：大谷，水渡，早稲田著「冶金物理化学演習」丸善

492 I 冶金学総論（金属3） 2-0-2 （教授 川合 幸晴）

冶金の定義，分類より説き起し，冶金原料，冶金方法，冶金装置，冶金燃料，冶金生成物などを理論的に説明する。特に冶金方法については，種々の冶金法を分離の様相に拠って分類し，それ等に化学平衡論，反応速度論に基づいた解説を加える。

492 II 非鉄冶金学（金属3） 0-2-2 （教授 川合 幸晴）

非鉄金属の冶金の中，乾式の代表として銅冶金，湿式の代表として金，銀冶金，特殊の冶金としてアルミニウム冶金を選び，それ等の概要を述べる。内容は原料，本邦および世界におけるその産地，製錬所，産出量などを紹介した後，冶金法，装置，操業法，生成物とその処理，能率などをほぼ工程の順序に従って講述する。

493 I 金属電気化学 I (金属 3) 0-2-2 (教授 藤瀬直正)

金属工学への電気化学理論の応用面は、電解精製、電解採取などの製錬電気めっき、電解加工などの電解的表面処理、メタルスラッグ反応および金属の腐食防食など多岐にわたっている。また、金属工学の各分野の研究にも電気化学的手法が広く利用されている。ここでは主として、金属に関する電気化学的分野の基礎的事項および基礎と応用との関係などに重点をおいて講義する。

493 II 金属電気化学 II (金属 4) 2-0-2 (教授 藤瀬直正)

金属電気化学 I の応用分野の各論について、その目的と基礎との関係に重点をおいて講義する。

494 粉末冶金学 (金属 3) 0-2-2 (教授 渡辺尙尚)

金属粉末を主要原料とし、溶解鑄造をへずに金属製品を造る方法に関し、その理論と工業的応用について述べる。総論では粉末冶金法の発達史、金属粉の性質、圧粉体の性質、焼結機構等の基礎的事項および粉末冶金の特徴とその応用限界等について、各論では機械材料、電気材料、磁気材料、超硬合金材料、耐熱材料、電子材料、原子炉材料等、粉末冶金法が工業上に応用されている現状について講述する。

[教科書]: 粉末冶金, 渡辺尙尚著, 技術書院

495 原子炉燃料・材料 (金属 4) 0-2-2 (教授 長谷川正義)

本講では原子力工業の最も重要な問題の一つである核燃料または親物質としてのウラン、トリウムおよびプルトニウムなどの特殊金属の製錬、性質と各種の原子炉用金属材料についての概念を与えるため以下にのべる区分に従って講述する。

1. 冶金学に必要な核工学の概念
2. 金属の核的性質
3. 放射線損傷
4. 核燃料の冶金および化合物
5. 燃料エレメント
6. 原子炉用 Al, Mg, Zr および Hf 合金
7. Be および化合物
8. 原子炉用鉄鋼材料およびステンレス鋼
9. 腐食の問題
10. 溶接の問題
11. 高速炉用材
12. 高温ガス炉の材料

[教科書] 講義用プリント: [参考書] 長谷川・三島監修「原子炉材料ハンドブック」

496 生産冶金学 (資源 3) 0-2-2 (教授 中井弘)

鉱石から金属が抽出される原理および方法について概説する。はじめに一般論として鉱石の予備処理、乾式製錬および湿式製錬などの冶金操作を、つぎに各論として鉄および非鉄金属の製錬工程をそれぞれ略述する。

497 流体金属論 (金属4) 2-0-2 (教授 加山延太郎)

熔融金属の物理的性質および流動状態における力学的な性状について講述する。すなわち、熔融金属の構造、粘性、表面張力、流動性、流路の摩擦損失と形状損失、湯口系の形状、寸法などについて論じ、熔融金属を取り扱う諸分野における基礎的な知見を与える。

498 I 鉄鋼材料学(A) (金属3) 2-0-2 (教授 長谷川正義)

1. 工業材料としての鉄鋼, 2. 鉄鋼の結晶構造・金属組織 3. 変態, 時効, 析出,
4. 鋼におよぼす合金元素の効果, 5. 鉄鋼の強度と靱性, 6. 鋼の基礎的性質 (温度による変化, 加工性, 溶接性, 腐食, 疲れ, クリーブなど), 7. 実用炭素鋼, 8. 低合金高張力鋼, 9. 機械構造用鋼, 10. 超強靱鋼, 11. 工具鋼, 12. ステンレス鋼,
13. 耐熱鋼および超耐熱合金, 14. 電磁用, その他特殊用途鋼

〔教科書〕 講義用プリント

498 II 鉄鋼材料学(B) (金属3) 0-2-2 (教授 梶信久)

本講義は铸造用材料としての鉄鋼、鑄鉄について述べる。第1部は鑄鋼にして、圧延鍛造用鋼との化学組成、性質などの比較を行ないつつその特徴、熱処理、規格について述べる。第2部は鑄鉄にしてまず鋼に対する鑄鉄の地位と特徴について述べ、鑄鉄の組織、黒鉛を中心として組織の構成、凝固現象および黒鉛化理論を詳説し、ねずみ鑄鉄、球状黒鉛鑄鉄、チルド鑄鉄につきそれらの組織、物理および化学的性質、機械ならびに工業的性質、熱処理、用途および規格の説明を行なうとともに、性質の改良方法について述べる。なお白鉄の黒鉛化理論を中心として各種可鍛鑄鉄を論じ、その製造法、諸性質、用途、規格などについて技術諸問題と関連させつつ詳細に説明する。

499 I 非鉄金属材料学 I (金属3) 2-0-2 (教授 雄谷重夫)
499 II 非鉄金属材料学 II (金属3) 0-2-2

非鉄金属材料とは鉄鋼材料以外の金属材料であり、その範囲に含まれる材料の種類は非常に多い。従って講義では主として比較的多量に生産される銅、ニッケル、アルミニウム、マグネシウム、亜鉛、錫、鉛などおよびその合金材料について述べる。これらの材料は物理的、化学的、機械的および電気的性質が各合金系により独自の特徴を持つが、これらを金属学的な面から論じる。そしてさらに各材料の製造法すなわち溶解、鑄造、圧延、熱処理などの加工方法およびこれらの方法と諸性質との関係、実際に生産されている材料の種類、材料の使用上の問題点についても説明する。

500 転位論 (金属3) 2-0-2 (教授 中田栄一)

金属結晶の塑性変形について、転位論を中心として論じる教科である。

塑性変形の基礎として、金属結晶のすべり変形、双晶変形、すべり線の形態また転位論の基礎として、転位の観察、理想結晶のせん断応力、転位のまわりの原子配列、Peierls-Nabarro 力、転位のまわりの弾性応力場、転位の自己エネルギー、転位の運動、転位と点欠陥、転位の増殖等について説明および演習を行なう。

500 I 材料強度学 I (金属3) 0-2-2 (教授 中田栄一)

非金属材料、および金属材料の強さ (Strength of Engineering Materials) についての機械的諸性質、降伏、塑性流動、破壊、加工硬化、疲れ等、および金属材料の強化機構について述べる。

500 II 材料強度学 II (金属4) 2-0-2 (教授 中田栄一)

金属の機械的諸性質を金属結晶の格子欠陥等の基本的性質を通じて理解し、降伏、加工硬化、破壊、疲れ強さ、クリープ等に関して、それらの基本的概念と実用的諸問題について述べる。

501 鑄物工学 (金属3) 0-2-2 (教授 加山延太郎)

鑄物製造技術を理論的な裏付けを行ないながら解説する。内容はつぎの通り。

鑄物砂：砂粒、粘結剤、鑄物砂の高温性質

鑄型：(1) 無機粘結剤鑄型 [生型、乾燥型、CO₂ 鑄型、流動自硬性鑄型]。

|(2) 有機粘結剤鑄型 [シェル型、フラン樹脂鑄型]。

(3) 特殊鑄型 [精密鑄型、Vプロセス]。

造型法：鑄物砂の処理と配合、造型機

押湯：押湯の寸法、効果範囲、合金の凝固現象と押湯

溶解：溶湯とガス、溶湯の改善処理、鑄鉄、鑄鋼、銅合金、軽合金の溶解

504 伝熱工学 (金属3) 0-2-2 (講師 田中楠弥太)

- a 伝導(1)——1. 板 2. 管
- b 対流伝熱——1. 相似則 2. 強制対流 3. 自由対流 4. 蒸発、凝縮伝熱
- c 対射——1. 基礎法則 2. 角関係 3. 黒体放射 4. 灰色体放射
5. ガス放射
- d 伝導(2)——1. 二次元定常伝導 2. 一次元非定常伝導 3. 図式解法

505 塑性工学 (機械5) 2-0-2 (助教授 本村貢)
(客員教授 田中浩)

塑性変形による材料、部品の生産技術に関する専門知識を履修し、第1次金属加工の基

基礎理論と加工技術の実際について説明する。

1. 塑性変形に関する基本則の解説
2. 塑性加工における加工方式の種類とその特長の解説
3. 圧延・鍛造・押出・引拔・深絞・曲げ・せん断加工などの材料の挙動、作用力の計算式、潤滑、加工機械の特長および塑性加工に関する実験技法の解説

506 I 金属塑性加工学 I (金属 3) 0-2-2 (教授 中井 弘)

金属の塑性変形に関する基礎理論として、金属結晶の変形および塑性力学について概説し、さらに塑性加工法の代表的なものについて略述する。

506 II 金属塑性加工学 II (金属 4) 2-0-2 (教授 中井 弘)

金属塑性加工学 I につづいて、鍛造、圧延、押出し、引抜きなどの加工法について略述する。

507 塑性加工技術開発論 (金属 3) 0-2-2 (講師 五弓 勇雄)

508 熱処理理論 (金属 4) 2-0-2 (教授 長谷川 正義)

金属および合金の熱処理に関する基礎理論と、熱処理作業に必要な工学的理論について講述し、あわせて実用鋼材の熱処理操作上の問題点を例示する。主な講義内容は下記の通りである。1. 定義と分類, 2. 拡散と焼鈍, 焼準, 3. マルテンサイト変態, 4. 析出硬化, 5. 恒温変態と連続冷却変態, 6. 焼入性, 7. 実用鋼材の熱処理設計, 8. 鋼材熱処理操作の例。

講義用プリントを使用

510 金属表面処理 (金属 4) 2-0-2 (教授 上田 重朋)

金属加工技術の一部門として、金属材料の防食、硬化、広い意味での装飾美化などのために、金属表面に施す加工技術の理論と実際について講述する。概要は、金属表面を得る方法、表面を変成する方法、金属被覆法、非金属被覆法、その他に大別し、電解研磨・化学研磨法、表面焼入法、浸炭法、窒化法、浸炭窒化法、拡散被覆法、溶融めっき、溶射めっき、電気めっき、真空蒸着法、陽極酸化法、化成処理法、塗装法、電解着色法などである。また非金属表面の金属被覆について講述する。

512 I 金属表面工学 A (金属 3) 2-0-2 (教授 溝葉 山 房 夫)

金属表面の仕上げと加工性の関連について述べた後に、表面あらかの問題、表面層の構造、表面加工層の状態などのほか、主として表面の物理的現象をあつかい、耐摩耗性、摩擦と潤滑などに言及する。

512II 金属表面工学B (金属3) 0-2-2 (教授 上田重朋)

金属表面の化学的現象の一つとして、金属材料の腐食理論を、金属学的見地から講述する。さらに、防食法、金属表面技術に言及する。おもな内容は、電気化学的腐食形態、機械的因子による腐食形態、大気・土壌腐食、高温酸化、防食法、腐食試験、表面加工技術などである。

515 金属生産管理法 (金属4) 2-0-2 (教授 堤信久)

金属生産に従事する冶金技術者あるいは研究者として必要なデータの統計的処理法を中心として統計的品質管理の基礎を理解されるとともに、これらの手法を用いて、金属生産工場における諸データの処理法と製造における品質管理法について修得させる。

内容の概略は次の通りである。

統計的手法の基礎、度数分布と確率分布、母平均および分散に関する推測、相関、不良率および欠点数の推定、管理図および実験計画法の実際。金属生産および研究における品質管理。

516 金属工場設備 (金属4) 2-0-2 (講師 窪田龍一)

工場の立地条件、敷地選定、生産計画と工場建設計画、経済計算、工場建設の配置、所要面積の決定、建物の設計、換気採光、各種の構造、工費概要、給水排水、排塵、暖房、照明、電気動力、配線配管等の設備、福利厚生、研究所、作業員養成所の施設安全および消防施設、運搬計画、工場内通路、軌道、運搬機械器具等、およびそれ等の保全について述べる。さらに現場技術として、又作業員に対する指導者として、工場設備を管理し、生産を遂行し、工場を運営して行くための基礎的常識を与える。

517 金属の機器分析 (金属4) 2-0-2 (教授 鹿島次郎, 中山忠行)

物質を分析する時、その感受精度の向上および操作の時間工数の縮小の条件は常に重要な問題である。これに対し、今日までに各種の機器分析が実用化されている。金属の分析においても同様な関係にあり、それら各種機器分析法を一括して講義する。

なお、その主たる金属機器分析法をあげれば次のごとくである。

1. 蛍光X線分析
2. X線マイクロアナライザー分析
3. X線回折および電子線回折分析
4. 発光による分析
5. 吸光による分析
6. 電気的方法による分析
7. クロマトグラフ分析
8. 質量スペクトル分析

518A 金属学実験A (金属3) 4-4-2

(教授 葉山房夫, 長谷川正義, 雄谷重夫)
堤 信久, 中山忠行

金属物理学，金属組織学，金属材料学などの講義において履修した学理を實地に応用する基礎段階として本実験を課する。これは将来工場あるいは研究所などにおける生産ならびに研究に従事する際に金属技術者として修得して置くべき基礎的事項に関連する下記諸実験を行ない，実験装置器具の取扱いに熟練させるとともに，これら実験結果については，内外の文献を調査参照の上検討を行い，報告書を提出させる。その実験項目を挙げれば次の通りである。

高温度測定法，熱分析，合金の凝固組織，熱天秤取扱法，金属の熱膨脹測定，鉄鋼の熱処理，鉄鋼および非鉄合金の顕微鏡組織検査，金属顕微鏡写真撮影ならびに写真操作，材料試験（引強，圧縮，曲げ，かたさ，衝撃など），内部摩擦，ホール効果，X線回折および各種合金の熱処理（時効硬化，焼入等）など。

518B 金属学実験B（金属3） 4-0-1

（教授 川合幸晴，草川隆次，藤瀬直正）
中井 弘，加藤栄一，渡辺悠尚

冶金熱力学，鉄冶金学，非鉄冶金学，電気冶金学，粉末冶金学などの講義中に述べられる冶金に関する理論と操作を実験的に確かめるとともに，実験方法を習得し実験技術に習熟させることを目的とする。実験項目は次のごとくである。

酸化物の生成自由エネルギーの測定，メタル——スラグ反応のモデル実験，鉄鉱石の還元，粗金属の乾式精製，溶液中における金属の電気化学的特性，金属粉体の焼結現象

518 金属学実習（金属2） 0-4-1

（教授 加山延太郎，上田重朋）
中井 弘，中田栄一

つぎの金属加工関係の実験実習を課す。木型製作，鋳型製作，溶解鋳込作業，溶接作業プレス加工作業，表面処理実験，機械切削作業，表面粗さの測定，加工材のマクロ組織実験。

523 金属材料力学（金属2） 2-2-4

（教授 葉山房夫）

機械を構成する金属材料の強度および弾性変形に関連した「応力ひずみ」の概念の基礎を与え，引張・ねじり・曲げ・座屈などの問題の解法を演習的に講ずる。

ついで，機械要素について述べ，単純な形状・荷重状態における要素の力学的概念を深めさせ，材料設計の入門とする。

524 冶金反応速度論（金属4） 2-0-2

（教授 加藤栄一）

冶金に関する諸現象を理解するには熱力学に基づいた化学平衡論のみでは不十分であり，冶金反応速度論および輸送現象論を駆使する必要がある。この講義においては製銑，製銅

過程やときには固体内反応について上記の諸理論を応用し、その解析を試みる。

526 卒業論文 (金属4) 4単位 (金属工学科全教員)

卒業論文は大学課程のしめくりで、教員と学生が一体となり、最大の努力を注ぐ科目である。論文の題目は学生各人の希望と教員の指示とによって選定されるが、いかなる題目についても、論文を作り上げるための基礎としては、大学の課程で修得した広い知識が要求される。しかもそれを一定の期間内に完成しなければならないので、学問に対する真面目な心構えと、熱心な努力が必要となる。

学生が教員の指導のもとで研究方針をたて、それに従って、文献や資料を集めて調査し、実験を行ない、それ等の結果を整理し、考察を加え、一つの論文にとりまとめて発表し、これによって学生は各自の知識や能力を研究に注入する方法を習得することができる。なお卒業論文着手の基準があるので注意すること。

527 工場見学・実習 (金属3) 2単位 (金属工学科全教員)

金属工学の全分野にわたって講義または実験実習により習得した広汎な内容について、実生産工場または研究所においていかにそれらが応用されて生産、試作および研究が行なわれ、また技術管理、環境制御、安全管理などが行なわれているかを見学し、あるいは現地で実習する。この場合その会社工場または研究所の性格によって、講義または実験実習の担当教員が引率把握して指導を行ない、現地においても経営者、技術者、先輩を混えて教育および討議を実施する。

529 資源工学概論 (資源1) 2-2-2 (資源工学科全教員)

資源工学の目的を理解し、内容が概括的に展望できるよう、資源工学の全分野にわたって説明が行なわれる。本講義は入門的な意味で設けられているので、論述は系統的・組織的方法に必ずしも則らない。いかにしたら諸君が資源工学へ速くアプローチできるようになるかに配慮が注がれる。したがって講義内容も年度により若干の変更がある。

1) 国の発展と資源 2) 地域内部開発について 3) 地球と地質学 4) 資源利用の歴史 5) 新しい鉱物学 6) エネルギー問題 7) 地球の科学 8) 地球物理と探査工学 9) 鉱山の開発 10) 石炭を掘る技術 11) 石油、天然ガス、地熱の開発 12) 資源と化学 13) 原子力の開発と利用 14) 製鉄技術と原料処理 15) 電子計算機によるシミュレーション 16) 鉱業管理について 17) 災害と安全

本講義の単位は正規の計算よらない。

530 海洋資源 (資源4) 0-2-2 (講師 奈須紀幸)

海洋資源は、海水そのものと、海底および海底下に包蔵されているものから成りたって

いる。海水はその有する物理的性質を利用して、エネルギー資源とすることができる。その一面、これを純水化して、上水、工業用水、農業用水などに役立てることも、すでに実行にうつされている、また、海水中には、地球創生期以来、諸種の有用物資が溶有されている。これを取り出して、利用する方途も考慮されている。さらに海底には、多種多様の有用鉱物が堆積、沈澱、散在しているし、海底下には、浅海、深海地域をとわず、多くの資源が埋蔵されている。これらのものは、従来ほとんど顧慮されることなく、等閑視せられてきたが、今後は調査の歩を進め、大いに開発して利用しなければならない。私たちは資源工学研究の立場から、このような問題について論述したい考えである。

531 資源経済地理 (資源4) 2-0-2 (教授 森田豊夫)

最初に半世紀に亘る資源開発技術の変遷を述べるとともに、地下主体の鉱業が海水準1,000m余の深度に到達するに至って技術、経済の両面から限界に近づきつつある事を解説し、今後の開発の在り方を提案する。ついで、近代生活に必要なおもな地質資源について、各国の生産状態の推移を述べ、殊に重要なエネルギー資源については残存量を示し、使用効率の向上に努力すべきこと、また地球上に偏在する資源を保有する国家と資源なき国家との共存の方途について言及する。

532 鉱物学・岩石学 (資源2) 2-2-4 (教授 大塚良平, 今井直哉)

前期では、鉱物を対象とし、鉱物(結晶)の構造および形態、鉱物の物理的性質、鉱物の化学的性質について述べる。

後期では、岩石を対象として、岩石学概論、火成岩成因論、変成理論、堆積岩成因論について述べる。

533 鉱物学・岩石学実験 (資源2) 4-4-2 (教授 大山崎良平)

下記、各項目について実験を行なう、

前期

- 1 結晶形態に関する実験
- 2 結晶投影法の習得
- 3 結晶構造に関する実験

後期

- 1 鉱物の光学性と偏光顕微鏡の操作法
- 2 主要造岩鉱物の光学的諸性質に関する実験
- 3 各種岩石(火成岩、堆積岩、変成岩)の組織に関する実験

534Ⅰ 岩石力学 (資源2) 0-2-2 (教授 橋本文作)

岩石のような弾粘塑性体を対象として将来このような材料の取扱うときに必要な基礎的な概念や手法、考え方を基礎力学に立脚し初等材料科学の一環として講述する。講義は地下資源の開発や土木工事におけるような工学の対象としての岩石、岩盤の力学的挙動の説明に重点を置き、内容は弾性論の初歩として各種の応力状態とひずみの概念および変形エネルギー、材料の破壊理論、強度とその試験法、変形レオロジー的な説明を行なう。

テキスト山口、西松「岩石力学入門」

534Ⅱ 地圧・支保概論 (資源3) 2-0-2 (教授 橋本文作)

地下資源の開発に際し、作業を安全に行なうためには地圧の統制が必要である。本科目では地圧現象とその制御の方法について初歩的な解説を行う。内容は弾性岩盤内の地圧の初歩的取扱いについて述べ、岩盤の変位、応力の測定法を説明し、次に岩盤内に掘られた坑道、切羽の支保につき、抗棒の力学と支保の方法について述べる。

535 地質学・鉱床学 (資源3) 2-0-2 (教授 山崎純夫、今井直哉)
大杉 徴

前期において、一般地質学および構造地質学の立場から主として地質構造発達史および地殻変動論を講述する。後期では、金属鉱床の概要を述べるとともに、鉱床の形態および鉱床と地質構造との関係および鉱床形成の場の地質学的・物理化学的環境を主題とし、最後に現代鉱床成因論の諸問題を講求する。

537 地質学・鉱床学実験 (資源3) 4-0-1 (教授 山崎純夫、今井直哉)
講師 石島 渉

この実験は次の項目を実施する。1) 堆積岩・変成岩類の岩石薄片の鏡検、2) 割目パターンなど地質構造の諸単元の投影法・統計処理法、3) 写真地質による地質構造の判読、4) 鉱床地質図の判読と鉱量計算、5) 試錐データの整理法と地質図への投入法、6) 各種鉱床に伴う鉱石研磨片のスケッチと研磨片の鉱石顕微鏡下の観察。

注：この実験科目を選ぶ者は必ず“地質学・鉱床学(講)”を選ぶこと。

538 地質図学 (資源4) 2-0-2 (教授 大杉 徴)

地質図学は地殻表層部に関する地質学的情報を地表に投影し地質図として表現するための図学である。各種の岩類とそれらの地質構造について得られた調査結果を平面図あるいは断面図として適確に表現し、または解読し得るために必要な図学について講述する。

541 開発工学概論 (資源2) 2-0-2 (教授 萩原 義一)
房村 信雄

資源工学科2年度生の全てを対象として、資源の開発および生産に関連する学問、技術

の全般についての概念を与えることを目的とする。

講義の内容は、まず開発工学の意義および必要な手法についての概念にふれ、ついで探査、掘さく、採鉱、運搬、保安および工程管理などの章に分けて資源開発に必要な工学全般にわたり必要な基礎知識を概説する。

542A 開発計画 (資源3) 2-2-4

(教授 萩原義一)
(講師 中井 裕)

探査によって獲得された鉱床をどのように開発してゆくか、即ち、鉱量、ならびに鉱床の形態、存在位置等に対して最も適切な開発計画をたてるための手法を講述する。

講義の内容は鉱床の存在状況によって露天開発計画と、坑内開発計画ならびに開発計画をたてるにあたって経済観念を導入するための鉱業経済の3つに大別される。

542B 爆破工学 (資源3) 0-2-2

(講師 山口梅太郎)

爆薬を使って主として岩石を破壊する技術についてその理論と方法について講述する。内容は掘さく技術における爆破の意義、爆薬の爆轟によって岩盤内に発生する応力、岩盤内部の応力波の測定法、爆破による岩盤の破壊機構、爆破の理論、岩石爆破法、水中爆破、爆破保安と公害などである。

543 試錐工学 (資源4) 2-0-2

(講師 河内英幸)

試錐工学は地下資源の探査および開発に必要欠くべからざる技術であると共に、土木・建築関係の基礎地盤調査にも広く活用されている。また最近脚光を浴びてきている海洋ボーリング、地熱ボーリングおよびトンネル工事の先進ボーリングなどはいずれも試錐技術に頼らなければならない。本講義においては試錐の目的、分類、試錐機械の構造などの基本的要項を説明した後、試錐作業および管理などの現場責任者として、あるいは計画立案者として必要な事項を述べる。

544 開発機械 (資源3) 2-0-2

(教授 橋本文作)

資源の開発では岩石および土砂等、地盤および岩盤の掘さくに重点が置かれる。過去においては手掘、つづいて発破等の採掘法に変わり、最近機械採掘が著しい進歩を遂げている。本講義ではこれらの採掘機械を主とした開発機械について、1. 機械の分類、岩石の機械に対する性質 2. 切削機械 3. 打撃機械 4. 回転打撃機械 5. 水力破碎機の能力と設備 6. 積込機械 7. 試錐機械 8. 流体機械等について講義する。

546 資源工学演習 (資源4) 3-3-2

(全 教 員)

各教員の専門とする分野について、1～3年間に教育できなかった事項を解析、詳述す

るとともに演習問題による計算などを数グループ毎に分け、卒論、就職面などと考え合せて、2グループ以上選択修得させることを立前として指導する。

547 探査工学 (資源3) 2-2-4 (講師 下村弥太郎, 遠藤源助)

探査工学とは地形、地質調査、物理および化学探査、試錐などによって、地殻の構造および鉱床の賦存状況を明らかにするための技術である。

本講義においては探査工学に関する概論を述べ、次に地震、重力、電気、磁気、放射能探査法および物理検層法について、その基礎と調査法および測定結果の解釈について述べる。また石油、天然ガス、石炭、金属、非金属鉱床、地下水、地熱および土木、建設関係の基礎地盤の探査例についても広く説明する。さらに探査計画のたて方、探査結果のまとめ方、開発工学、建設関係の地盤調査への応用について述べる。

549 運搬工学 (資源3) 0-2-2 (教授 山崎豊彦)

資源の開発生産に必要な運搬法について、その計画の基礎となる力学および計画法を生産法との関連において説明する。その内容は次のようである。

1. 運搬の基礎力学：鉱車および機関車の運動抵抗、牽引力、ロープ破断力、制動抵抗、流体中の粒子の運動、流体輸送馬力計算法、等について説明する。
2. 運搬、搬送、流送機械、巻上機、エンドレス、索道等のロープ運搬機、各種コンベア、流体輸送およびガス石油のパイプライン輸送貯蔵について述べる。

550 資源工学実験 (資源3) 4-4-2 (教授 萩原義一, 山崎豊彦, 伏見弘, 原田種臣)

本実験は資源工学の各分野における実験中特に必要と思われる各項目について履修する。
〔開発及びエネルギー資源関係〕

- 1) 岩石及び砂の形状、比重、粒度分布
- 2) 岩石の力学的性質
- 3) 岩石物性 (音の伝播速度、比抵抗等)
- 4) 地層の浸透性
- 5) 掘削泥水の性質
- 6) 石岩の工業分析
- 7) エネルギー資源の含熱量
- 8) 原油中の水分、硫黄分

〔鉱石処理関係〕

別に掲げた関連講義「事前処理工学」、「物理選鉱学」、「浮遊選鉱学」の理解を深めるとともに、各種の鉱石処理試験操作と試験結果表示法を履修する目的で以下の項目の実験が置かれている。

- 1) 粉碎とふるい分け
- 2) 沈降と濃縮
- 3) 比重選別
- 4) 磁選
- 5) 静電選別
- 6) 浮選Ⅰ
- 7) 浮選Ⅱ
- 8) ベンタイジング

551A 環境・安全工学(A) (資源3) 0-2-2 (教授 房村信雄)

551B 環境・安全工学(B) (資源3) 0-2-2 (教授 橋本文作)

労働環境における労働能力を減殺する諸因子を除去し、快適な環境たらしめる技術が環境工学であり、工場、鉱山等における生産の安全性を高める技術が安全工学である。資源開発およびその関連産業では特にこの技術の推進と応用を必要とすることはいうまでもない。

本講義は（Ａ）環境工学および安全工学に関する一般概論を述べ、（Ｂ）で工場換気、空気調和、および坑内通気法について、基礎理論と計画設計法について述べる。

552 環境・安全実験（資源3） 0-4-1 （教授 森田豊夫，房村信雄）

環境および安全工学に関する実験を行なうものとする。内容は次の通り。

通気測定，粉塵測定，爆発防止，騒音測定，照度測定，聴力測定，作業強度測定等に関して実験する。

559 原料工学概論（資源2） 0-2-2 （教授 伏見 弘，山崎豊彦）

資源工学の専門分野に進む第一段として、その主要分野の概括的な知識を持つことが更に高度の内容を持つ各分野の理論に甚だ重要である。本講義は開発工学概論と並んで、開発生産された資源の原料化について概説する。

I 総論 II 固体原料工学 III 流体原料工学 IV エネルギー原料工学
の4章に分け、原料となり得るための条件と原料化の技術（分離・精製・濃縮など）について概説する。

560 燃料工学（資源4） 2-0-2 （教授 山崎 豊彦）

燃料工学は一般に燃料化学工学として講述されているが、本学科の学生諸君のため特に資源分野の内容を豊富にして講義する。

1. 世界の化石燃料及び地熱資源について
2. 燃料資源の成因及び賦存
3. 燃料の物理・化学的性質・試験法
4. 燃料のガス化・液化・コークス化法
5. 地熱発電・新動力発生法

563 事前処理工学（資源3） 2-2-4 （教授 伏見 弘）

選鉱学の資源工学における立脚点を示し、その概論を指示するもので、選鉱学総論と本論とから成る。又併せて溶解処理、浸出等、乾・湿式事前処理方法と化学工学とにおける関連分野を解説し、その基本的な応用を会得せしめる。

総論においては沿革、原理、機械、補助装置、文献、用語等について説明し、本論は破碎、分粉、分級、混合、脱水、乾燥および脱塵等の理論、機械、応用について述べ、化学

工学の一部としてその重要性を認識させる。特に廃水処理問題およびその対策技術などについて、現状分析をする。

又、乾・湿式による事前処理加工方法は、最近になって益々その製鉄、製錬工程に必要、緊密性を増して来たもので煨焼、岩焼、焼結、製団および溶解、浸出等の基本的なことについても実例によって概説する。併せて基礎として必要な金属組織学に関する知識を教授する。

564 物理選鉱学 (資源3) 2-0-2 (教授 原田 種 臣)

有用鉱物と不用鉱物の分離を目的とした技術は、1) 両者の物理的性質の差を利用して機械的に分離する「物理選鉱」と、2) 両者の表面化学的性質の差を利用して機械的に分離する「浮遊選鉱」と大別される。

物理選鉱はさらに、有用鉱物と不用鉱物の分離に利用する物理的性質の種類に対応させて、比重選鉱、重液選鉱、磁力選鉱、静電選鉱、放射能選鉱、その他(電気摘出法・光電選鉱・分級による選鉱・優先破碎法・熱砕法・粒形の差による選鉱・熱粘着法など)に分類することができる。

本講は物理選鉱に含まれる上記各選鉱法の原理、実用される選鉱機の構造と機能、実操業への適用事例と操業上の問題点について論述する。

565 浮遊選鉱学 (資源3) 0-2-2 (教授 原田 種 臣)

本講は前掲の「物理選鉱学」に呼応する科目である。「物理選鉱学」と本講を併せて受講することにより、工業原料鉱物の選別(有用鉱物あるいは石炭と不用鉱物との分離、有用鉱物相互の分離)技術全般に関する基本事項を履修したことになる。

まず浮遊選鉱の原理として、浮遊選鉱に関する原理と物理化学的関連現象、浮選剤とその機能、浮選成績に影響をおよぼす諸要因について論述する。ついで浮遊選鉱機、浮遊選鉱の付帯設備、浮遊選鉱の実際(操業系統・各種鉱物の浮選法)と基礎理論とのつながりにつき論述したのち、浮遊選鉱の新しい動向について展望する。

568A 鉱物工学A (資源4) 2-0-2 (教授 大塚 良平)
568B 鉱物工学B 2-0-2 (講師 今井 秀喜)

天然資源は金属鉱物資源と非金属鉱物資源に大別することができる。前者を対象とする工業は金属工業であり、その学問的背景をなすものが金属工学である。

一方、非金属鉱物資源は従来は原料として、窯業や化学工業に使用されていたのにすぎないが、近年の非金属材料の急速な進歩は、まことにめざましく、建築材料(セメント、板ガラスなど)、耐火材料、断熱材料、電気材料(磚子、抵抗発熱体など)、研削材料、超硬材料、飛翔機材料(サーメット、パイロセラム)、原子炉材料、光学用材料、通信機材

料、磁性材料などきわめて広範囲にわたっている。この非金属鉱物工業の学問的背景をなすものが鉱物工学 (Mineral Technology) である。金属工学では、冶金学、金相学および金属組織がその基礎をなしているのに対し、鉱物工学では、結晶化学、酸化物間の相律などが、その基礎的知識をなしている。

本講義は、A、Bの2つに別れており、並行して行なう。

講義内容は以下の通りである。

鉱物工学A：鉱物の結晶化学

鉱物工学B：1成分系、2成分系、および多成分系状態図の解読法

574 火 薬 学 (資源3) 2-2-4 (講師 浅羽 哲郎)

火薬類の一般、火薬類の製造、火薬類の試験、爆発の理論、産業爆破の一般、の五部に大別し、火薬類の一般ではその分類と組成、一般的特性、爆発と燃焼、用途を、火薬の製造では原料と中間品、化合火薬、液体火薬、ダイナマイト、炭鉱爆薬、火工品類を、火薬の試験では安定度、感度、威力、猛度、爆速、等を解説する。爆発理論では気体爆発、粉体爆発、固体および液体爆発、等について説明する。

なお産業爆破一般においては、爆破の理論、爆破の方式、特種工法、火薬類取扱いの注意、等について講ずる。

火薬類の感度、安定度の実験、発破現場の見学も適時行い。

本学科目の単位を取得した者には、国が定めた「火薬取扱い保安責任者」の資格を得る際に、学科試験免除の特典が与えられる。

579 現 場 実 習 (資源3) 2単位 (資源工学科 全教員)

現場実習は休暇を利用して相当の期間資源開発現場 (その他の場所も事情によって認められる) に滞在し、技術の事業の実態を実地に研修することを目的として行なわれる。実習報告書を提出し、報告会の席上で発表の結果単位の取得ができる。別に数グループに分かれて現場、工場を教員引率のもとに見学を実施して、報告書を提出、審査する場合もある。

学習上の注意 §4を参照のこと。

580 卒 業 論 文 (資源4) 5単位 (資源工学科 全教員)

学習上の注意 §4参照のこと。

581 地 学 (資源1) 2-2-4 (教授 山崎 純夫)

地殻を対象とする科学の概要を学習する。すなわち次の各項についての基本的な考え方を述べる。1) 地球表層を構成する火成岩、堆積岩、変成岩の生成、2) それら各岩類の

変質と変形, 3) 造山・造陸運動と地質構造, 4) 地史, 5) 野外における観察の方法。

582A 石油・ガス工学A (資源3) 2-0-2 (教授 山崎 豊彦)

石油・ガス工学は石油および天然ガスの賦存, 開発, 生産, 輸送, 貯蔵, 分離, 精製, 利用について, その基本技術を概説するものであるが, この中“石油・ガス工学A”は世界における石油, 天然ガスの賦存と埋蔵, 生産量および開発, 分離, 輸送の技術について概説する。その内容は次の通りである。

- a. 世界の石油と天然ガス b. 石油, 天然ガスの賦存と成因 c. 石油, 天然ガスの物理化学
d. 埋蔵量の計算法 e. 回転掘さく法 f. 石油, 天然ガス生産施設
g. 海洋油田の開発法

582B 石油・ガス工学B (資源3) 0-2-2 (教授 森田 義郎)

石油利用の歴史, 石油成分の性質, 原油の蒸留, 石油留分の転化, 精製等の工程, 製品の性質, 用途, 公害防止技術等につき講義し, 併せて製油工業と石油化学工業との関連や石油工業の展望等につき述べる。

582C 石油・ガス工学C (資源4) 2-0-4 (教授 山崎 豊彦)

石油, 天然ガスの開発, 生産技術についてその方法を力学的に解説する。その内容は以下に示す。

- a. 油層岩石の力学 b. 油層岩の孔隙率, 浸透率および流体の流動計算法 c. 掘さく用泥水の性質
d. 掘さく技術 e. 油層障害 f. 油層の解析法 g. 探査と検層
h. 油層の評価 i. 油井の仕上 j. セメンチング k. 採油法

601 工業経営総論 (工経1) 0-2-2 (教授 渡辺 真一)

工業経営学の大綱を修得させるのが目的である。経営管理とインダストリアル・エンジニアリングならびにシステムについて概念を述べ, 科学的管理の沿革, わが国の工業経営の歴史について略述する。ついで生産活動の支柱として生産の計画と管理, 場の問題としての工場計画, その他作業研究, 品質管理, 労務と賃金, 販売と購買, 原価, 資材の運搬, 安全衛生などの生産を中心とする諸問題について概括的に講述する。

602 工業概論 (工経1) 2-0-2 (教授 石館 達二)

工業の発展は各固有技術, 資本, 労働力, 原・材料, 市場などいろいろの要因がととのうことが必要である。本講義は主としてわが国の工業につき上記の要因と発展過程との関係を説くことにより, 工業活動の総合的な理解を与えるものである。

C603 管理工学 (機械, 土木 4) 2-0-2 (教授 古川 光行
応化 4 中井 重行)

インダストリアル・エンジニアリングを中心として工場管理のシステムが静態的、動態的に如何に在るべきか、又運営されるべきかその基本的考え方を前提としての生産技術的条件のもとに述べ、各種手法についてもふれる。

[参考書] IEセミナーシリーズ(日本生産性本部)、および工場管理(オーム社)
生産管理(ダイヤモンド社)

604 生産管理学 (工経3) 2-0-2 (教授 村松林太郎)

生産は、いろいろな性質を持った市場の要需を満足するために機械設備、労働、原材料を生産要素とした技術および資本等を集約的にしたシステムの活動としてとらえられる。本講義では、この生産システムが需要の基本要件である品種、品質、数量時間およびコストが最適になるような生産をするための各種の計画統制の原理と方法を述べる。この主なる内容は次の通りである。

- | | |
|-----------------|------------------|
| 1) 企業経営と生産活動 | 2) 生産活動の構成と管理 |
| 3) 生産管理の機能と運営 | 4) 生産計画と緩衝 |
| 5) 生産予測と生産指示方式 | 6) 量産方式の設計と管理 |
| 7) 個別生産方式の計画の管理 | 8) ロット生産方式の設計と管理 |

[テキスト] 村松林太郎：生産管理の基礎(国元書房)

604 I 生産管理(I) (資源3) 0-2-2 (教授 森田 豊夫)
604 II 生産管理(II) (資源4) 2-0-2

地下資源開発、利用上においての企業の組織、工程分析、時間研究、動作分析、作業能率および労務者の適正等に関し、現在特に必要と思われる資源技術管理上の諸問題について概説する。

605 マネジメントシステム (工経3) 0-2-2 (教授 村松林太郎)

本講義においては、企業の仕組みと運営を、職位の連鎖および機能の連鎖の両面から述べる。職位の面については組織論、機能の面としてはマネジメント・システム論に大別される。その講義の内容次の如し

I 組織と管理システム

II 組織

1. 経営管理とその職能 2. 組織原理 3. 組織の種類および型 4. スタッフ職能
5. 組織計画

III 管理システム (Management System)

1. 経営システム (Business System) 2. Management System 3. Operational

System 4. Management Information System および Decision Rule
5. Planning System 6. Control System 7. System Analysis 8. Buffer
Function 9. Production Management Systems Design

〔参考書〕 村松林太郎：マネジメントシステム

607A 品質管理 (応化4) 2-0-2 (教授 池 沢 辰 夫)
607B 品質管理 (工経3) 2-0-2

製造工程は製品の量および質の両面から経済的バランスを保つよう管理されなければならない。本講義は製品の質の面から、製造工程を管理する場合の、統計的品質管理についてその考え方および手法を中心として述べる。

1. 品質管理の基礎概念 2. 統計的手法 3. 管理図法 4. 抜取検査法

なお統計的手法はどうしても演習によらなければ理解しにくいので、これ等の演習は「統計的方法演習」において行なう。

608 資材管理 (工経4) 2-0-2 (講師 南 川 利 雄)

資材は、生産社会を一貫して流通している。これらを動的に、あるいはシステムとしてとらえていくのが新しい資材管理である。内容には、資材管理政策、経営計画への参画、資材計画、価値工学、在庫管理、購買管理、外注管理、倉庫管理、運搬管理、物資の流通管理、監査などがある。よってこれらを技術的ならびに経済的な面から検討し、経営上におけるあり方を研究し、新理論も展開し、ロジスティック的手法にもふれて、資材管理の方法を体系的に実践的に述べていく。

C609 熱管理 (資源・工経4) 2-0-2 (教授 塩 沢 清 茂)
応化

まずわが国のエネルギー資源につき論じ、エネルギー節約の必要性を述べる。熱管理技術は大気汚染防止技術とも関連があり、その観点から以下の内容について述べる。

1. 熱管理法 2. 燃料の性状とその管理 3. 熱焼設備 (ボイラ・窯炉) の種類とその構造、窯炉の設計 (炉材・保温材を含む) 4. 燃焼の理論と計算方法、燃焼方法と燃焼管理 5. 熱勘定の方式、方法および各種設備に関する実際の例 6. 熱設備の管理 7. 大気汚染防止技術

以上の項目に亘るが、できるだけ実際の例を引いて理論と実際の両面より検討を試みる。最後に、企業内における熱管理の現状を述べ、成果を挙げた例のいくつかを引用して参考に供する。

611 財務管理 (工経4) 2-2-4

(教授 尾 関 守)

この講義では、工業経営における経営計画の一環として利益計画並びにその運営上の利益管理、引続いて利益管理を期間計算的に具体化するための予算統制並びに原価管理、財務における目標管理を説明する。更に、生産管理と密接な連繫をもつエンジニアリング・エコノミーの問題、特に機械設備の更新、工程の設計、製品設計並びに設備稼働率等の問題について原価工学の立場から経済計算に言及する。

なお、この講義を選択するには、生産管理、生産技術の諸講義並びに会計学および簿記および原価計算演習を履修することが望まれる。

612 市場調査 (工経4) 2-0-2

(教授 石 渡 徳 弥)

本講義は、マーケティングの関連科目として、販売計画のための、製品計画のための、生産計画のための市場調査について述べる。なお、その内容は、市場分析と実態調査とから構成される。

613 マーケティング (工経3) 2-2-4

(教授 千 賀 正 雄)

マーケティングとは生産者から消費者または産業使用者まで商品またはサービスを流通せしめる企業の経営活動の遂行を意味している。この講義では主として生産者の立場から論じ、内容としては市場調査、製品計画と製品開発、配給経路、価格政策、広告販売促進、組織、等を含む。本講と並行して生産経済学を履修することが望ましい。

614 人間工学 (工経3) 2-0-2

(教授 坪 内 和 夫)

人間工学は、人間と機械とのシステムがもっとも合理的な形になるように、最適設計を行なうことを、目的としている。人間工学にあっては、まず、人間の特性をよく知り、ついで、それを機器の設計に適用している。したがって、本講義も、次の2つの部分に分かれている。

第1には、人間の特性ならびにその限界がどのようなものであるかをあきらかにする。このなかには、人間の感覚、環境条件、作業能力、反応特性などが含まれている。

第2には、これらの数値を使って、いかにしたならば効果的な人間、機械システムを設計することが出来るかを述べている。ここでは特定の機械を例にとり、その設計ならび

に解析方法を説明している。

参考書：坪内和夫著、やさしい人間工学、社会保険出版社

坪内和夫著、人間工学、日刊工業新聞社

坪内和夫編、信頼性設計、丸善

615 工場計画（工経3） 2-0-2 （教授 中井重行）

生産活動を円滑に推進しうるように、主として静態的なシステムの合理的編成をおこなうために、工場立地、工場建屋の建設、機械設備の配置、人員配置、その他関連諸要素すべてにわたり、適切な生産の場の確立のための計画の問題について論及する。

使用テキスト：工場計画（丸善刊） 工場計画（金原書店刊）

の内から一冊を選び使用する。

616 設備管理（工経3） 0-2-2 （教授 石館達二）

近代生産においては、製品の品質、納期、コストなど生産の条件は、使用される設備の性能によって決定されるといっても過言ではない。生産に用いられる設備の故障停止の防止、性能水準の維持に関する設備保全および更新、新・増設に関する設備計画についても設備に要求される技術性と同時に経済性が追求されなければならない。そこで設備に関する計画、管理に関する活動をエンジニアリング・エコノミーの立場から述べる。

618 工業心理学（工経3） 2-0-2 （教授 田崎醇之助）

産業のシステムは Tiffin によれば、機械に人間を適合させることも、人間に機械を適合させることでもなく、人間と機械とを、システム目標の追求のために最適にブレンドすることであるという。この科目の研究は、主にこの観点から、人間の、知的側面、動機づけの側面、情熱的側面について、その機能のとらえ方を紹介しながらそれぞれの環境との相互作用のあり方を追求する。特に、産業社会が人間疎外感の源泉としてどのような意味を持つかに注意したい。

参考書 適性の開発（大日本図書）疎外感（大日本図書）Industrial Psychology (Tiffin & McCormick)

619 労務管理（工経3） 2-2-4 （教授 尾関守）

経営人を人の集団組織と見て、これを業務遂行に協力させるために、集団行動の原理に基づき、協力を阻害する諸条件を撤去し、協力を促進する諸条件を設定して、生産関与者の協力を誘導成就させる一連の管理技術につき研究する。

労使間の紛争処理はもとより、日常業務遂行の場における産業平和の確保に関する管理と方法とを究明し、将来労務管理に携わる学徒の教養に資する、経営参加、労働協約、労

務組織、労働条件、従業員教育、厚生福利、人事管理、人事考課、給与制度、利潤分配、労務監査等の重要問題につき、労務管理、行動科学、労働工学の動向を検討し、今後わが国の産業経営における労務管理のあり方を触明する。

620 安全・衛生 (工経4) 2-0-2

(講師 安井 義之)

安全管理学は、安全、生産、管理経営等の衝に当る者が必要とする安全衛生管理技術の理論と応用とを講義する。生産技術の構成要素として生産要員と労働手段とが存在すること、および産業災害の発生原因がこの二要素を総合組織化する管理技術の欠陥に基くことを解説し、その欠陥を明確にすべき産業災害の分析的研究に関する理論とその応用を検討する。

これ等の基礎的知識を総合して、生産技術の欠陥を是正する為に必要な工学、衛生学、心理学の概要を述べ、これらを産業経営組織に導入するために必要とする管理技術を検討する。

労働者の健康を損う原因、作業能力を減殺する諸因子を除去し、産業の発展の為に充分な活動をなし得る能力を涵養し、確保し、さらにそれを遺憾なく活用する方法を概説する。特に労働基準法的人間的要素に関する事項が出来る基礎知識を授けることに力を注いでいる。

内容をなす主なる項目は労働生産学概要、作業環境の衛生、労働の合理化問題、産業疲労、労働時間問題、婦人年少者労働、職業疾患、産業災害、労働者の厚生施設、衛生管理の実際等である。

621 産業・労働法規 (工経4) 2-2-4

(教授 岡田 憲樹)
(講師 佐川 一信)

(1) 本講座では、前期において企業経営の法的形態すなわち会社に関する基礎的・総合的概念の把握を主眼とし、特に重要な株式会社について判例および実例等を示しながら実務に役立つ法知識の習得をえせしめるよう努めて講述する。

(2) この講義では、労働組合および労使関係の実態や慣行をかえりみながら、労働組合の理論と日本労働法の生ける理論を明らかにすることが目的とされている。そのため次の諸点について、特に労働組合論と労働法の原理や判例の傾向を把握することが意図されている。

1. 労働組合論をめぐる思想史的系譜、
2. 労働組合の経済的社会的機能と団結権の法理、
3. 労働争議の日本的諸形態とその法理、
4. 労働協約および経営秩序のための諸規範、
5. 労働保護、
6. 官公労法の現実と機能

622 工場運営演習 (工経4) 3-0-1

(教授 春日井博, 十代田三知男)
(講師 石渡徳弥, 古谷野美一)

本演習は最終学年の課程として、既に履修した工業経営および生産技術の諸学科の知識を駆使して、指定されたモデルについて工場の計画運営方法を演習するものである。

なお、その内容は、

- 事務組織設計に関する演習
- 生産在庫モデルに関する演習
- ビジネス・ゲーム
- プロダクション・ゲーム

などが含まれる。

625 経営経済学 (工経2) 2-0-2

(教授 千賀正雄)

経営学の発展過程、経営学の本質、企業と経営の概念、資本と経営と支配の関係、企業の形態、および経営財務について講述する。他の科目との重複をさけるため、管理組織、現場管理、経営労務についての講義は行なわない。

626 生産経済学 (工経3) 0-2-2

(教授 千賀正雄)

経済理論の内、工業経営学を専攻するものに特に必要と思われる部分について重点的に講義を行なう。内容としては生産の理論、市場の理論、価格の理論を含む。

628 会計学 (工経3) 2-0-2

(講師 佐藤真一)

経営機構の複雑化と生産組織の高度化に伴い、企業経営の合理的な運営のためには経営活動を計数的に測定する必要がある、そのためには会計学の知識が絶対に必要とされる。

本講座は、主として株式会社を中心とする企業会計の基本的な諸問題を、理論と実践の有機的調和を計りつつ研究するものである。参考書として「現代会计学通論」を使用し、企業会計の特質、機能、基本構造、公準、原則をはじめ、企業資本、企業負債、企業財産、減価償却、損益計算、財務諸表等、全般にわたる問題をとり上げる。

629 簿記および原価計算演習 (工経2) 2-2-2

(講師 中村清)

この演習では、技術方面を専門に学んでいる学生諸君に、企業経営上いかに簿記および原価計算知識が重要であるかを先ず認識させ、以下の内容について演習せんと思考する。

- (1) 企業簿記の基礎知識
- (2) 原価計算の基礎知識
- (3) 記帳演習

631A 事例研究(A) (工経4) 2-0-1

(講師 上田新次郎)

工業経営について、事例を主として学生に原理と応用の能力をつけることを講義の目標とする。従って会社の方針・組織・統制・業務について事例を主として説明する。

1. 会社の方針決定と産業界における企業の地位について 2. 組織と人の問題について 3. 管理統制にはどんなことがあるか。(生産管理活動が企業活動の内、如何なる地位にあるかを論議する。) 4. IE とは何か 5. 企業活動の実際を説明して会社の実態把握を便ならしむ 6. 人事管理の変遷の事例とその重要性(その他産業人として必要な心構えについて講義する。)

631 B 事例研究(B) (工経4) 0-2-1 (講師 徳江清太郎)

激動経済下における経営の苦難について、主として工業経営の実態の研究を通じ、各事例を中心に工業経営学の現代的適用がいかにか困難且つ複雑多岐のものであるかを認識の目標とし、企業の国際化、公害問題、人材計画、シンクタンク等々広汎なる総合を要求される現代経営の動態を探索しつつ、これに適応すべき工業経営の再編成の方向を研究したい。

632 作業研究 (工経2) 2-0-2 (教授 横溝克己)

作業研究は生産管理の基盤であり、一般に作業測定ならびに方法研究と言われているが、本講義では作業研究そのものの講義と共に生産管理と関連性をもたせて講義をする。すなわち、標準作業、標準時間を求める手段、作業システムの設計および改善、管理情報とその求め方、作業管理などについて述べる。

なお作業測定実験(必修)受講のためにも選択しておくことが望ましい。

634 統計的方法演習 (工経3) 3-3-2 (教授 村松林太郎, 塩沢清茂, 春日井博, 池沢辰夫, 石渡徳弥)

工業経営の諸分野の研究調査には資料の精製(分類, 収集, 要約化)分析方法の習得が基礎的かつ共通に必要である。本演習科目では、品質管理, 実験計画法, O. R, 市場調査, データ・プロセッシング, マネジメント・システムその他の科目で学ぶ計量値, 計数値の検定, 推定および分散分析法などの統計的方法について、その基本原理を事例について演習し理解を進めさせるものである。

[テキスト] 村松林太郎他編:「統計的方法問題集」

[参考書] (1)中井・池沢共著「工場統計と品質管理」

(2)村松林太郎監訳「経営工学のための数理統計学」日刊工業新聞社。

635 データ・プロセッシング (工経4) 0-2-2 (講師 中川一郎)

経営および技術の場における、事務処理, 数値計算, データ輸送, 各種データから経営政策決定用の情報への変換, システムシミュレーション等に、電子計算機を含むシステムを用いることは、もはや常識の段階に来ている。そこで本講義は、電子計算機を含め、その応用面としての情報処理システムの事例を中心に、データ通信を含めたシステム設計と

その技法を述べる。

636 作業測定実験 (工経2) 0-4-1 (教授 横溝克己)

作業のムリ、ムダ、ムラなくし、生産管理のために正しい標準作業と標準時間を設計することが、本実験の目的である。これは理解しにくいので、学生諸君が実際に目で見、行ない自ら実験演習して、これらの技術、および考え方を身につけるよう指導する。

1. 工程分析
2. 連続測定
3. ワークサンプリング
4. MTM分析
5. 動作経済の原則
6. 作業評価
7. 時間観測
8. 標準時間資料の作成
9. ラーニング
10. 機械干渉
11. ラインバランス
12. 稼働率

なお作業研究の講義を選択しておくことが望ましい。

637 管理工学実験 (工経3) 4-4-2

(教授 石鎬達二, 坪内和夫, 十代田三知男)
横溝克己, 池沢辰夫, 石渡徳弥
前田勝也

本実験は、人間の生産作業に影響をおよぼす環境条件に関する実験と、人間・機械システムの解析を行なう実験とから成っている。

実験内容は、主として各種作業環境および作業条件の一般的測定と

環境条件が作業者に対して与える生理的、心理的变化、作業者が示す応答動作の測定、ならびに、これによって職務分析、作業動作研究、人間工学、生産性向上に関する問題への適用について実験するものである。

638 レイアウト・運搬実験 (工経4) 0-4-1 (教授 中井重行, 渡辺真一)
石鎬達二
講師 宮内康美

材料は変形、変質されたり、組合わされて製品となるが、このような一連の工程を経ておこなわれる生産の場としての工場や機械設備のレイアウト、運搬の問題はコストに多大の影響をおよぼす要因として注目しなければならない。

本実験においては、レイアウトおよび運搬のための基礎的分析手法を種々の機材を用いて習得させることにより、工場および生産計画の円滑な運営に支障をきたさないような機械設備類の静態的編成の考え方を体得せしめんとするものである。なお実験のまとめのための時間を2~3回とり実際に条件をあたえて工場を計画せしめる。

639 運搬工学 (工経3) 0-2-2 (教授 中井重行)

本講は工場計画と表裏をなすもので流通機構内における輸送の問題、工場内における取り扱い、移動の問題について論述する。内容としては、輸送、運搬の計画と統制に主体を

置き運搬の自動化、自動倉庫の問題などを含め、広くマテリアルマネジメントとしての考え方に立脚したものとす。なお、機械・設備については用途面より解説する。

本講においては包装（主として外装）についても論及する予定である。

注 本講は前期（615）工場計画の関連講義であるから同科目を聴講して置く必要がある。

〔参考書〕 運搬システムの設計（日本能率協会出版部刊）

640 職業指導（工経4） 2-2-4

（教授 横溝克己）
（講師 宮本日出雄）

本講義の目的は、産業労働の基礎的問題である個人の適職への配置、雇用および指導訓練に必要な知識、技能、方法につき考察する。

従って、その内容としては職業および職業指導の発達過程を概観し、次に個性調査による適職の発見、職業情報、カウンセリング分析および労働事情等の問題につき考察する。

なお本講義は上述のごとく工業の経営管理上必要な労働の諸問題を取扱うため、工業経営学科の学生を対象としているが、また一面職業科教職課程として将来職業指導の教職につく学生に必要な内容をとりあげるものである。さらに、学生諸君の発表と討論、職業指導の現場の見学もする。

C641 発明および特許（機械4） 2-0-2

（講師 高木正行）

本講は、技術者にとって必要な特許に関する一般常識を体得させる目的でつとめて実例を入れ、概ね次のような内容について講述する。

- (1) 特許制度（制度の意義、わが国および欧米諸国における沿革、内容等）
- (2) 発明の環境（研究と発明、企業と発明の関係）
- (3) 特許を取得するまでの諸問題（特許になる発明、明細書等）
- (4) 特許を取得した後の諸問題（特許権、実施契約、特許に関する紛争等）
- (5) 職務発明
- (6) 特許の国際性（工業所有権保護同盟条約、技術の輸出、輸入等）
- (7) 発明実施の補助制度等（各種補助金制度、発明者の表彰等）
- (8) 特許庁その他の見学

642 卒業研究（工経4） 2単位

（工業経営学科 全教員）

当学科の卒業論文は4年間の学習総仕上げとして各自が工業経営に関する一つの主題を選定の上、論文に取纏め提出するものであって、審査合格することにより卒業研究として認められる。その内容は科学技術に関するもの、工業の経営管理に関するもの或は経済に関するものも許されるわけであるが実験設計等を伴う論文であっても差支えない。

論文の作成にあたっては夫々の主題に関係の深い教授が各人を指導し、学生の知識の総

纏め、研究の向上に資すると同時に、研究のまとめ方をも併せて習得せしめるよう指導する。

C645 産業公害（機械、資源、土木4）
（工経3） 2-0-2 （教授 塩沢清茂）

産業公害は社会的意義からも、企業の立場からも現在わが国の当面している重要な課題である。産業公害のうち、主として大気汚染、水質汚濁、騒音などを中心にして、つぎの項目について述べる。

1. 公害の現状
 - a) 最近の公害の特徴およびその歴史的背景
 - b) 汚染の現状
 - c) 国または地方公共団体、企業の公害防止対策
 2. 汚染の発生機構と発生源
 3. 公害の人間・生物への影響
 4. 公害関係法令
 5. 公害防止技術
 - a) 大気汚染防止技術
 - b) 水質汚濁防止技術
 - c) 騒音防止技術
 6. 測定技術（発生源および環境中の汚染物質の測定）
 7. その他として工場計画、立地、地域社会の問題など
- なおこの講義は共通科目として熱管理、水質汚濁概論と関連している。

646 工場見学・実習（工経2） 2単位 （工業経営学科 全教員）

工場は資本、労働、原材料、関連産業その他気候、風土などの諸条件の下に立地されており、この見学は工業、工場の立地条件、当該工場の特徴を理解する上に重要である。

さらに、第一線の経営管理者と討論することによって、経営管理の理論と技術の適用の問題を修得することは勉学に資するところ大きいものがある。

見学は事前の調査、事後の報告を含め教員の引率、指導の下に休暇中および随時実施され、他学年生の参加も許す。

C647 水質汚濁概論（資源、土木4） 2-0-2（教授 伏見 弘、遠藤郁夫）

水質汚濁は、自然汚濁と人為的汚濁とに分けられる。前者は、降雨時河川などの流量の増加に伴って起る汚濁の増加あるいは流域の地質的影響などによる場合である。水質汚濁とは一般に後を指し、河海に汚水が流れ、利水に何らかの障害を与えることをいう。

水質汚濁防止は、河海および工場排水などの汚濁機構を究明し、自浄作用にもとずいて利水をさまたげない様、汚水の流入規制をすることにある。

本概論は、理工学部全体の学生を対象として、環境保全に必要な河海の自浄作用、水質汚濁機構、廃水処理技術および再生、利用方法などについて基礎的な理論解説、各論を講述する。

建築学・土木工学 系科目

C701 建築工学（機械，土木4） 2-0-2 （教授 安東勝男）

建築とはどんなものか，ということに就いてまず述べたい。そして，建築の考え方を核としてその周囲をとりまく建築工学処分の概略を述べることによって，建築全体の把握の一助としたい。

702 建築学概論（建築1） 2-0-2 （教授 安東勝男）

建築学に入門するものの手引になると同時に，建築について広い興味と片寄ることのない考え方を養うための講義である。建築とは何かという論題からはじめて，自然と人間との関係，社会や経済との関連について概説し，技術や計画が何であるか，建築学の目的や方法，そして建築家の職能やその任務について述べる。

703 建築図法（建築1） 2-4-2 （助教授 戸沼幸市）

建築設計図の基礎として図面の表現，作図の方法を学ぶ。

1. 作図（平面，立体） 2. 透視図 3. 設計計画の表現

704 デッサン（建築1） 4-4-1（講師 橋本次郎，根岸正，三上友也）

デッサンの実習は，造形的フォルムに対する観察力（合理的理解，直感的把握）と表現力を養い，造形芸術の骨組をとらえる基礎訓練である。実習の対象としては古典彫刻の石膏像，雑器物，自然形体等を扱い，これらをデッサンしながら自然形体と人工形体との相違，形体が成立する諸要素諸条件（量，質，動勢，調子，色彩，均衡，調和……）とは何かを分析し，更にそれらが如何にして造形美として再構成されるかの原理を，描画技術の習得と共に学習する。

参考書：清水多嘉示監修「デッサン入門」（造形社）他

705 西洋建築史（建築2） 2-2-4 （教授 渡辺保忠）

建築学科において建築史の分担する機能は，〈過去の建築の考察を通じ，建築学的方法を探究するもの〉と私は考える。文学部の芸術学の中に設置される建築史とは，おのずから機能が異なるという前提にたっている。西洋建築史に対する私の講義の基本的態度も同様であるが，現実には，建築学科の専門科目が実質的に開始される第2学年度にこの講義が設置されているところから，建築学における諸概念の入門の手ほどきなしには先に進み得ない。たとえば〈建築空間〉の概念は，この西洋建築史を通じて入念に紹介されるはず

である。また下部構造(技術・生産関係・工業)としての建築と、上部構造(芸術・文化)としての建築の両側面と、その関連についても、さらには、特定の時代に生きた建築家の宿命的な課題と運命についても触れるべきである。その多様な問題のどこまでに到達できるかは、講述者と受講者との協同作業である。なお一般の西洋建築史の概説書は、〈様式史〉的記述に埋められているので、本講の直接的教材とはならない。

706 日本建築史(建築3) 2-2-4 (講師 西 和 夫)

わが国における建築は、各時代文化・国土国民性および外来文化の影響によって構成されている。それ故本講においては、各時代文化と建築との関係およびそれらの各時代の建築が技術的にいかなる様式手法をもつものであるか等について講述する。その内容は大凡次のごとくである。

1. 総論
2. 先史・原始時代建築
3. 飛鳥時代建築
4. 奈良時代(白鳳時代および天平時代)建築
5. 平安時代(弘仁時代および藤原時代)建築
6. 鎌倉時代建築
7. 室町時代建築
8. 桃山時代建築
9. 江戸時代建築
10. 明治以後現代建築

708 建築設計原論(建築4) 2-0-2 (教授 池 原 義 郎)

建築計画A・B・C・Dの講義が、テーマごとの各論を中心として講述するのに対し、この講義は各建築の共通項の技術的総括を意図しようとするものである。

709 建築造形論(建築4) 2-0-2 (教授 穂 積 信 夫)

設計をまとめる手がかりをどのようなところにもとめるか。そのテーマをかたちにおとすにはどのような技術があるか、ケーススタディを通して造形の感受的総括をおこなう。

710A 建築計画(A)(建築2) 2-0-2 (教授 吉 阪 隆 正)

独立住宅からその集合体まで、住居を中心に、人々の生活とその物的な環境との絡み合いを探り、そこから設計計画の拠り所を求める。

710B 建築計画(B)(建築2) 0-2-2 (教授 安 東 勝 男)

学校建築、特にその特性の大きい幼児施設および義務教育課程のものを中心として、大学のキャンパスについても言及したいと同時に、それらを媒体として、複合建築、低層建築の考え方を、又、時間が許せば、Pre-Fabricationの考え方を述べたい。

710C 建築計画C(建築3) 0-2-2 (教授 武 基 雄)

多人数の集合する空間——主として劇場建築——のもっている特性、すなわちよく集ま

れること、よく触れあえること、よく見えること、よく聞えること、そしてよく演じられること等を中心として講義する。

710D 建築計画D (建築3) 2-0-2 (教授 穂積 信夫)

事務所建築の設計計画を講述する。講義の目標のひとつは、事務所作業空間の機能的解析を通して一般的な設計方法の一典型を述べることであり、もうひとつの目標は、重層空間の造形的特徴を述べることである。

**716 I 設計実習(I) (建築2) 4-4-2 (教授 池原義郎 東 直彦)
講師 竹内成志 森 義純)**

建築計画・設計は種々のデータを目的に向って統一すると同時に、形・空間生活に対する個着した判断、反応から解放される必要がある。

この科目は、後者の部分の個人個人の中にある資質を自から発見し引き出させることを目的として、幾つかの課題を実習するものである。

**716 II 設計実習(II) (建築3) 4-4-2 (教授 穂積信夫 畑 聡一)
講師 大矢二郎 平田翰那)**

1年間を通じ、住居空間について設計を実習する。前期は独立住居計画、後期は集合住居計画を行う。原則として、年約10課題演習を行う。

**716 III 設計実習(III) (建築4) 4-0-1 (教授 安東勝男 大高正人)
講師 菊竹清訓 後藤 久)**

最終学年の計画コースとしてより高度な、そしてより自由な実習を行なわせる。また併せて設計製図と関連をもったディスカッションを行ない、デザインの考え方やその意味について考究する。

720 応用力学 (土木2) 2-2-4 (教授 村 上 博 智)

材料力学に続く講義で主として弾性設計法にもとづく構造物の弾性変形および不静定構造物の解法について述べさらに塑性設計法の基礎的概念にふれる。なお本講義については「応用力学演習」が平行して行われるので、あわせて習得することを希望する。

721 応用力学演習 (土木2) 2-2-2 (教授 村 上 博 智)

「応用力学」の講義と平行して、その理解を深め、かつ工学者として具備すべき「数値」に対する考え方を徹底させるために、具体的な例について演習を行なう。

722 材料力学演習(土木1) 2-2-2 (教授 宮原 玄)

「材料力学」を深く理解し、また身近かな問題への応用方法を習得するために講義に平行して行なわれる演習である。

724 I 建築構造力学(I) (建築2) 2-2-4 (教授 田中 弥寿雄)

本講義は建築構造学の入門である実際の建築構造から構造力学への導入に始まって、力のつり合条件、応力と変形に対する基礎的認識をあたえることに主眼点をおいて、トラスはりなどを例にとって静定構造から不静定構造の初歩へすすむ。なお、実際の構造への応用についても触れ、平行し演習を行なって習得の徹底をはかる。

参考書：内藤多仲著「建築構造学」(早大出版部)
谷、杉山共著「建築構造力学演習1, 2」(オーム社)
田中弥寿雄著「建築構造力学」(昭晃堂)

724 II 建築構造力学(II) (建築3) 2-2-4 (教授 竹内 盛雄)

構造力学(I)に続く講義で、静力学、材料力学および構造力学等の初歩を習得していなければならない。

まず、建築物の構造計算に直接必要な理論の展開に重点をおき、不静定ラーメンの諸解法を詳述する。すなわち、たわみ角法および固定モーメント法等を相互に関連させながら進める。

つぎに、ひずみエネルギーより出発するキャストリアーノの定理を論じて、不静定構造の一般論を取り扱い、その応用としての不静定ラーメン、不静定トラスおよびアーチ等の解法を述べる。

なお、これと並行的に練習問題を課して、理論の理解を徹底させると同時に、計算能力の増進を図る。

参考書：(1)内藤多仲著「建築構造学」, 早稲田大学出版部
(2)竹内盛雄 他3名共著「構造力学II」一鹿島研究所出版会

724 III 建築振動学 (建築3) 0-2-2 (教授 竹内 盛雄)

建築物の振動性状を対象とする。振動の基本的事項を具体的に詳述して、その性格を充分把握せしめた後、建築物の振動を取り扱う。すなわち、有限自由度の振動、レーリーの方法、弾性体の振動ならびに建築物の振動への応用に関する種々の方法について述べる。

724 IV 地震工学(IV) (建築4) 2-0-2 (教授 南 和 夫)

建築物の耐震設計について、従来の静的解析法、最近の動的解析法および地震工学にお

ける近年の調査研究の傾向などについて述べる。

727 構造工学(土木3) 2-2-4 (教授 平嶋政治, 堀井健一郎)

構造物の外的構成要素(構造材料など)と、内的構成要素(構造解析理論など)の相関性を論じ、ついで構造工学上の問題点について述べる。

とりあげる問題の主要なものを列挙すれば、荷重、安全率、接合法、設計法などである。

729 建築構造設計概論(建築3) 2-0-2 (教授 谷 資 信)

鉄筋コンクリート造、鉄骨造および鉄骨鉄筋コンクリート造建築における骨組の設計、すなわち構造設計を行なう方法の概要を説明し、建築技術者として必要な構造設計に関する常識を会得させようとするものである。この講義には必ずしも力学や数学の高級なものが必要としないが、構造力学(I)における力学の基本的な知識を必要とする。

教科書: 日本建築学会関東支部「構造の設計」

参考書: オーム社「一般構造」

730A 建築構造設計(A)(建築3) 2-2-4 (教授 松 井 源 吾)
(講師 藤 本 一 郎)

鉄筋コンクリート構造の理論および設計法を梁、床、壁、基礎等の部材について解説する。ついで、鉄筋コンクリート建築物の構造設計、特殊鉄筋コンクリート造およびプレレスコンクリート造、鉄骨鉄筋コンクリート造について述べる。

〔教科書〕 松井他「鉄筋コンクリート構造」(鹿島出版)

730B 建築構造設計(B)(建築3) 2-2-4 (教授 谷 資 信)

鉄骨を主とする建築すなわち一般のビルや工場建築における鉄骨に関する構造計算に必要な理論の展開と細部に亘る設計計算に重点をおき、演習を通じて実際的な問題にも接触するようにし、できれば工場における製作、現場施工の状況を見学調査する等、努めて鉄骨構造に関する設計、施工の実体を把握させようとするものである。

教科書: 日本建築学会関係関東支部「鋼構造の設計」

参考書: 日本建築学会「鋼構造設計規準」

730C 建築構造設計(C)(建築3) 0-2-2 (教授 南 和 夫)

建築基礎構造の選択、設計施工に必要な土質力学と基礎工学の重要項目について講述する。その内容は土質と地盤調査、基礎荷重による地中応力分布、地盤とクイの支持力、圧縮と圧密、横土圧、浅い基礎、深い基礎、特殊基礎等の設計要旨、基礎障害と地盤改良などにおよぶ。

参考書：日本建築学会「建築基礎構造設計基準同解説」

南，古藤田，安達共著：土質・基礎工学（鹿島出版会）

731A 構造実習(A) (建築2) 2-2-1

(教授 田中弥寿雄)
(講師 桜井譲爾)

構造力学と設計との関連について述べ、演習を通じて実際の現象の力学的解析方法を学ぶ。なお建築構造力学(I)を補うために、そこで触れられていない、材料力学および弾性論の部分について述べる。

731B 構造実習(B) (建築3) 4-4-2

(教授 松井源吾，谷 資信)
(講師 市川英一)

鉄筋コンクリート造，鉄骨造，鉄骨鉄筋コンクリート造等の構造計算演習を行ない，構造設計を会得させる実習である。

732 建築構造計画 (建築4) 2-0-2

(教授 松井源吾)

建築物の目的に応じて最も合理的な構造を設計するのが構造設計の目的である。

本講義は屋根，床，梁，柱，架構，耐震壁と筋違，基礎，階段等の部材についての構造計画を実例について述べ，プレファブ，経済設計についても説明する。

教科書：松井「建築構造計画入門」(彰国社)

733 建築コンピューター計算法 (建築3) 0-2-1 (講師 桜井譲爾)

建築の設計，研究には盛んにコンピューターが用いられるが，この講義は，コンピューターについて，始めて学ぶ建築学科学学生のために，FORTRAN プログラミングとその基礎をなす数値計算法の基本を解説する。演習の回数を多くし学生が体得しやすいよう配慮してある。

1Ⅳ コンピューター概論 2. FORTRAN 解説1 3. FORTRAN解説2 4. (演習1) 5. FORTRAN 解説3 6. (演習2) 7. FORTRAN 解説4 8. (演習3) 9. 数値計算法1 10. (演習4) 11. 数値計算法2 12. (演習5)

※演習は，コンピューターを使って行なう。

734 構造実験 (土木3) 0-4-1

(教授 平嶋政治，堀井健一郎)
(講師 宮原 玄)

本実験は構造物に生ずる応力および変形の測定技術を修得せしめるのが目的であって，実験方法，機械器具の取り扱い方，結果の整理方法および報告書の作成方法等を体得させる実験は大別して次の三項目より成る。

i) 光弾性実験法による応力測定 ii) ストレンゲージによる応力測定および撓み計に

よる変位測定 iii) 振動測定

736 I 建築構造法(I) (建築2) 2-0-2 (教授 神山 幸弘)

木構造、鉄骨造、鉄筋コンクリート造および組織造など各種構造の種類と特長を述べ、構造体の安全性に関する基礎理論を与えるとともに、木構造を中心として軸組、小屋組、床組、階段の構成法を解説する。

736 II 建築構造法(II) (建築2) 0-2-2 (教授 神山 幸弘)

建築物を、屋根、外壁、内壁、床、天井、間口部などの諸要素に分割し、その仕上げ構成法について解説する。

736 III 建築構造法(III) (建築3) 2-0-2 (教授 神山 幸弘)

構法設計に関連する諸因子を設計、性能、生産、施工面よりとらえ建築生産の工業化を志向した構法設計の理論と実際について講述する。

738 I 建築材料学 I (建築2) 2-0-2 (教授 田村 恭)

建築物の構造材料のなかで、今日最も重視されているコンクリート・金属材料を中心として、その具備すべき条件を説き、各材料の成分・性質や特徴を用法等との関連に立って講述し、設計・施工のための要点を与える。

738 II 建築材料学 II (建築2) 0-2-2 (教授 田村 恭)

建築物の仕上げとして用いられる各種の材料の性質、特徴を述べ、それらを適用する上で、設計・施工上、また維持管理上注意しなければならぬ要点を講述する。

738 III 建築材料学 III (建築3) 2-0-2 (教授 田村 恭)

屋根・壁・床等の各部位に用いられる材料の選択、構法の設計の基礎となる材料の化学的・物理的および力学的諸性質について説明するとともに、新材料開発の理念および工法の検討を行なって、材料計画のための指標とする。

740 I 建築施工法 I (建築3) 2-0-2 (講師 寺井 健次郎)

740 II 建築施工法 II (建築3) 0-2-2 (講師 寺井 健次郎)

建築工事における基本的な技術活動の大要について、現在の社会的諸条件の下で、如何にすれば合理的、経済的かつ迅速に施工することが出来るかを説く。

1. においては、建築施工論、請負制度など施工制度ならびに施工計画の大要を述べる。

2. は施工各論として、仮設工事より基礎工事、躯体および各仕上工事に至る施工法の基本的原理と実際について講述する。

740Ⅲ 建築施工法Ⅲ (建築3) 0-2-2 (教授 田村 恭)

建築施工法Ⅰ、Ⅱの継続講義として、組積、屋根、防水、内外装、建具などの各種工事の施工法の要点について述べる。

741A 建築生産システム論 (建築3) 0-2-2 (講師 河盛 良夫)

建築生産活動の計画・実施・統制の手法を技術的・経営的側面から学習することを主眼として、下記の項目について講述する。

1. 建設業における生産システム化の現状
2. コンピュータ・システムとコミュニケーション・ネットワーク
3. 経営科学と科学的管理技法
4. ネットワーク技法
5. シミュレーション

741B 建築生産システム演習 (建築4) 3-0-1 (講師 小林 謙二)

建築生産システム論の継続講義として、各種の生産モデルおよびその活動について、経営科学的分析を実地に演習する。

742 施工実習 (建築3) 0-3-1 (教授 田村 恭)

現場作業に関した諸技術の作業研究などの実験を行なうほか、建築現場を見学し工事管理・労務組織・施工の実態を調査する。また施工法に関する資料を与える等、正しい施工管理技術の理解を深める。

743 建築経済 (建築4) 2-0-2 (講師 宮谷 重雄)

建築生産に従事する技術者に必要な建築経済の諸問題を講述し、とくに建築生産の基本となる建築費に関し、その原価構成や新しい原価意識について説明し、建築生産における積算の立場とその将来像などについて述べる。

745 建築材料実験 (建築3) 3-0-1

(教授 南 和夫, 松井源吾)
(講師 田村 恭, 神山幸弘)
田中義吉

木材、金属、コンクリートなどについて、日本工業規格に準じた諸試験法を実地に演習し、これらの材料の品質管理手法を修得せしめる。また土質、光弾性、溶接など特殊実験

を通じて建築材料の特性をめぐる計測法や実験計画法を学習せしめ、材料研究に必要な技術の理解を深めしめる。

教材：日本建築学会編「建築材料実験用教材」

参考書：藤本ほか：「材料及び構造実験」（鹿島出版会）

748 環境計画（建築2） 2-0-2 （教授 木村建一）

人間の活動にとって常に快適であるとは云えない外部環境の性状をまず把握し、これに対し、建築計画の上で室内環境の快適な状態を追求する方法論に関して論述する。この科目では特にその本質的な計画原理を学ぶことを目的とし、防寒防曇、防湿、日照、採光、照明、室内音響、騒音防止防災、などの理論とその応用について説明する。

教科書：大村幸一郎、建築計画原論、共立出版

748 設備計画（建築2） 0-2-2 （教授 井上宇市）

建築計画にあたりいかなる設備をいかなる方法で建築に適用するかを講述し、建築設備に関する建築家としての良識を養うことを目的とする。すなわち空調設備、給排水設備、電気設備、エレベータ設備などのうち、とくに建築計画に関係の深い部分を取り扱い、あわせて各種建築に対する設備の適用を述べる。

750A 設備基礎理論（建築3） 2-0-2 （教授 木村建一）

「環境計画」では主として建築計画における環境問題をどう扱うかに焦点をあてたが、本科目ではこれに対し、快適環境を実現させるために必要な建築設備に関する基礎的な理論について講述する。内容は、

建築物壁体の熱伝導、室内外表面の対流熱伝達、ふく射熱伝達、室温変動理論、湿分移動理論、熱力学基礎、遮音理論などである。

参考書：木村建一、建築設備基礎理論演習、学献社

750B 環境計測（建築4） 2-0-2 （教授 尾島俊雄）

環境問題を定性的に論じ、その上で建築・都市・環境計画を志す者として要求される最小限の基本的事項を定量的に測定する方法を具体的に講述する。

1. 定量化出来る環境要因・テクノロジーアセスメント・パーセプション研究
2. 大気・水・土・熱の物理的特性と測定法
3. 汚染・汚濁の定義と測定法
4. 模型実験、シミュレーション手法、遠隔探索法、次元解析

751A 空気調和設備A (建築3, 機械4) 2-0-2 (教授 井上宇市)

空気調和(暖冷房)設備の理論および実際に関し講述を行なう。

I 室内環境 II 湿り空気の性質 III 暖房負荷 IV 使用機器

本講義を聴講される建築科学生は設備基礎理論を同時に聴講することを希望する。

教科書: 空気調和ハンドブック

751B 空気調和設備B (建築3, 機械4) 0-2-2 (教授 井上宇市)

前講に引続き空気調和(暖冷房)設備の理論および実際に関し講述を行なう。

V 空気分配 VI 冷凍機および熱ポンプ VII 流体および流体機械 VIII ボイラおよび直接暖房

教科書: 空気調和ハンドブック

752 広域環境論 (建築3) 0-2-2 (教授 尾島俊雄)

人間をとりまく事物・状態・事情を環境と定義し、その世界が建築空間であった従来の建築環境論に対して、建築自体をとりまく都市環境を中心として、小気候論、都市設備論、各種行財政論、公害基本法、環境権の問題、情報による空間価値論、各種事業法等を具体的に説明し、その上で環境デザインについて講述する。

参考文献: 都市設備計画(鹿島出版)

753 給排水電気設備 (建築4) 2-0-2 (講師 中村守保, 前島 健)

「電気設備」建築電気設備の概論を行い、大系的に各項目を説明、また建築計画に必要な各室面積算出法、並びに、電気設備の目的と役割について特に詳述を行う。省エネルギー、省力化、省脳化などについて、今後の設備を、どう考え、計画するかについて、実際に役立つような内容とする。(中村守保)

754A 設備実習 (建築4) 4-0-1 (教授 井上宇市)

本科目は設備基礎理論(I)、および空気調和設備(A)、(B)の講義の実験実習を目的としたものであるから本科目の取得希望者はこれらの講義を予め取得することを前提とする。中規模ビルを対象として下記の実験を行う。

(I) 空気調和の計算 (II) 空気調和の設計 (III) 空調機器の設計

754B 環境工学演習 (建築4) 0-4-1 (教授 木村建一)

「環境計画」および「設備基礎理論」で講述した内容を基にして、具体的に興味ある環境工学の問題を課題としてとりあげ、その問題を解く練習を行なう。課題としては日照間

題、採光問題、二次元不定常熱伝導、大気ふく射、煙突効果、太陽熱集熱器、回路網、隙間風、室内温湿度変動、騒音防止などである。

760 交通計画 (土木4) 2-0-2 (講師 菊田 聡 裕)

交通調査、交通量の子測と配分、道路の幾何構造、交通運用及びそのための施設(標識・信号・交通規制など)、交通安全施設(照明・ガードレールなど)交通事故、交通環境など交通工学に関する各分野について概説する。また、これらの適用実例をあげて解説する。

761 都市計画 (土木3) 0-2
(土木4) 2-0 4 (教授 大塚 全 一)

都市の発展を歴史的に概説し、都市計画技法の変遷をのべる。次に近代、及び現代都市問題にふれ、それに対する諸外国及び日本の対応策をのべ、将来予測を含めた都市計画理論を考究し、又現行の都市計画の樹て方、設計法を解説する。国土計画および地方計画を概説する。

761A 都市計画(A) (建築3) 2-0-2 (教授 武 基雄, 吉阪隆正)

都市計画、地域計画、再開発計画、総合計画等の入門的な概説を行なう。また都市の史的展望、近代都市の分析、町づくりへの住民参加などの問題を通じて、社会的経済的なものと空間的有形的なものとのつながりを解説する。

761B 都市計画(B) (建築3) 0-2-2 (助教授 戸 沼 幸 市)

都市計画の設計の仕方について、その作業方式を2-3の実例のマスタープラン、地区再開発計画を通じて解説する。

762 建築法規 (建築4) 2-0-2 (講師 安 田 臣)

法令の一般性をのべ、次いで今日国民生活の中で、建築を中心とする諸課題は広い範囲において、重い比重を占めている。特に都市において、建築の集团的あり方についても、建築基準法と都市計画法等はその法令関係において強い結びつきの中にある。

又個々の建築はその所有者の生命、健康、財産の保護を図らねばならないために技術的基準を用意しなければならない。

それら一定の基準を保持するための行政機関と建築士の制度の説明を加え、且つ注文中で建築は他の多くの関連法令と関係しあうものである。この点についても併せ述べる。

763Ⅰ 基本製図(建築2) 10-0-3 (教授 池原, 神山, 田中)
(助教授 木村, 尾島
風間)

設計および構造に関する製図の方法や約束をまず実習によって修得, 次いで実際の設計の図面模写を行なう。

763Ⅱ 設計製図(Ⅰ)(建築2) 0-10-3 (教授 吉阪, 渡辺, 安東)
(穂積, 池原)

小建築, 主として住宅の設計を試みる。クラス担当教員に応じていくつかのグループに分け, それぞれのグループを1人の担当教員が責任をもって指導する。

763Ⅲ 設計製図(Ⅱ)(建築3) 4-4-2 (教授 武, 安東, 穂積, 池原)
(講師 佐々木, 川添, 宮入)

課題設計として次のことをおこなう。

- (1) 素材の特性を主題とするもの
- (2) 複合機能を主題とするもの
- (3) 重層空間を主題とするもの

763Ⅳ 構造・設備製図(建築3) 4-4-2 (教授 南, 竹内, 谷, 井上)
(講師 木村, 尾島
舟橋, 田中(義))

鉄筋コンクリート構造, 鉄骨構造の製図のコピーならびに事務所建築に関する建築設備設計製図のコピーをおこなう。

763Ⅴ 設計製図(Ⅲ)(建築4) 8-0-2 (教授 武, 吉阪)
(講師 木村(伝), 市川(博)
内井, 松下)

都市計画または複合建築の設計を通じて, 大型の計画を共同作業により学習する。

765 建築特論(建築1) 2-2-2 (専任教員全員)

2年度以降における専門課程の講義にそなえて建築の諸分野における理論ならびに技術の成り立ちやその内容と学習上の意義を説明するのがその目的である。講義は全教員が担当し, それぞれ専門の分野から国の内外の状況に注目しながら講述する。

1年生全員をA, B班に分け, 前後期にデッサンと交替しながら行なう。(たとえばA班は前期デッサン, 後期建築特論)

768 卒業論文(建築4) 5-0-2 (建築学科全教員)

建築学の諸科目によって習得した知識を基にし, 最終年度において, 各自が得意とするまたは興味を有する題目について, さらに深く研究し, これをまとめて報告するものである。実地調査によるもの, 文献上の研究によるもの, 実験室による実験結果によるもの等

である。

769 卒業計画 (建築4) 0-5-2 (建築学科全教員)

最終年度の後期において、それまでに習得した建築設計の能力により各自が自由に題目を選び、敷地その他外的条件を適当に仮定して建築計画を行ない、その設計図を提出するものである。各自の習得した全知識を十分に発揮し、よき建築を設計すると同時に、建築の企画能力をも発揮させることを目的とする。

770 土質工学 (土木3) 2-2-4 (教授 後藤正司)

この講義では、土の力学的性質についての基礎的な考察と、土質工学全般に関して要点を述べる。主な内容は次のようなものである。土の成生、土の工学的分類法、土中水の動き、土の圧密、土中の応力分布、土圧、基礎の支持力、斜面の安定、土の強度論、基礎の設計、土質調査方法等。これらの理解には、並行して行なわれる土質実験が必要で、両者を総合して土木における土の問題へのアプローチとして貰いたい。

〔教科書〕 後藤正司著「土質力学」(共立出版)

771 土木地質学 (土木4) 2-0-2 (講師 田中治雄)

土木技術者として必要な地質学の基礎について講義し、次に地質学の土木工学に対する応用に関しいろいろな工事施工の実例をあげて講述し、現代の地質工学のもっとも新しいうごきについて講述する。

772 土質実験 (土木3) 4-0-1 (教授 後藤正司, 森 麟)

実験を通して講義「土質工学」の理解を深めるとともに、土の物理的試験ならびに力学的試験の方法を習得する。実験の内容は前期においては物理的試験を主として土粒子の比重、含水量、粒度分布、コンシステンシー限界、透水係数等、締固めに関する実験を行ない、後期においては力学的試験を主として一軸圧縮、三軸圧縮、直接せん断、圧密、および CBR 試験等についての実験を行なう。学生は実験の後かならず実験報告を提出しなければならない。

〔参考書〕 土質工学会発行「土質試験法」

773 土木材料 (土木2) 2-0-2 (講師 柳田力)

この講義は土木構造物に用いられる材料の物理的、化学的な諸性質、すなわち、比重、吸水率、体積変化、強度、弾性および塑性、もろさおよびねばり強さ、熱的性質、電気的性質、ならびに耐久性などについて説明する。さらに土木構造物の建設にあたって材料の選択の考え方ならびに必要な規格類についても説明する。

774 材料実験 (土木2) 0-4-1 (教授 宮原 玄)

本実験は講義「材料力学」、「応用力学」および「土木材料」に関連して行なわれるもので、土木材料のうち金属と木材について、その力学に関する基礎的実験を実施する各実験の結果について、総て報告書を提出しなければならない。

実験項目は次の通りである。引張試験(鋼材)、振り試験(鋼材)、圧縮試験(鑄鉄)、曲げ試験(木材)、硬度試験(鋼材)、衝撃試験(鋼材)

775 コンクリート工学 (土木3) 2-2-4 (教授 神山 一)

まづ建設材料の立場から構造物の機能に応じた強さと耐久性をもつ経済的なコンクリートの配合設計、均等質のコンクリートを得るための品質管理、施工方法について総合的に考察する。

つぎに、構造物の設計では、鉄筋コンクリートおよびプレストレストコンクリートの基本的性質の理解に重点をおき、部材の設計および構造物の設計について述べる。

この講義はコンクリート実験と並行して進める。

〔注意〕 土木学会制定コンクリート標準示方書およびプレストレストコンクリート設計施工指針を用意されたい。

776 コンクリート実験 (土木3) 4-0-1 (教授 神山 一)

コンクリート工学と関連させて講義が終ったものから実験を行なう。講義よりも実験による方が容易に理解できる事項については実験のみを実施する。

実験項目は JIS 最初は規格試験、次いで、講義に関連して特殊項目を実施する。

777 水理学 (土木2) 2-2-4 (教授 銚川 登)

流れや波などの水の運動を解析する場合の基本的な考え方と解析法について述べる。講義の内容は、1. 流体の基本的性質、2. 静水の力学、3. 完全流体の力学、4. 水の波、5. 粘性流体の力学、6. 相似則、7. 管路の流れ、8. 開水路の流れ、である。

778 水理学演習 (土木2) 2-2-2 (教授 米元卓介、遠藤郁夫)

水理学の講義に並行して演習を行なう。水理学の理解を助け、かつ水理計算および水理構造物設計の力を養うためのものである。

使用参考書：米元・岩崎共著「水理学例題演習」(コロナ社)

779 水理実験 (土木3) 0-4-1 (教授 米元卓介、遠藤郁夫、銚川 登)

水理学の学習には、現象のモデル実験によって理解が一層深められる。また水理学の研

究には実験から理論が導かれ或は実験によって理論式を補正するものが多い。

本実験は水理学学習の一助としてデモンストレーション実験を行ない、併せて研究実験の基礎となる測定技術の習得を目的とする。実験項目は堰の検定、開水路の水位・流速の測定、不等流、地下水流、波の実験、管路の損失水頭の測定などである。

なお各実験につき10日以内に報告書を提出し、実験日の2週後に試問を受ける。授業時間は後期だけに配当されているが、実際は年間を通じて一人の学生にとっては隔週に実験を行ない、他の隔週には土質実験を行なうことにしている。

780 水 力 工 学 (土木4) 2-0-2 (教授 鮎 川 登)

水力発電の開発史、開発計画、調査およびダムや水路など水力発電に必要な構造物の設計と施工について述べる。講義の理解をはかるために演習を行なうこともある。

781 河 川 工 学 (土木3) 0-2 } 4 (教授 米 元 卓 介)
(土木4) 2-0 }

河川は古来人生と極めて密接な関係を持っている。人々は常に洪水に悩まされながらも、河川を各方面に利用してきた。近代生活においても、洪水被害の軽減をはかると共に出来るだけこれを利用しようとしている。それがために河川の本質を知り、技術的取り扱いを研究しようとするのである。

第1編 河川学：降水とその流出、洪水の性質などいわゆる水文学と水文資料の扱い方、河川の生い立ちと性質について講義。

第2編 河川工学：治水に関しては水源工、河道工、流量調節、護岸水制、河口処理等、また利水に関しては取水排水、河道改良、舟航、人工水路等、治水工および利水工の全般にわたり、原理、計画法、工法等を講ずる。

さらに以上の総合である国土の保全および総合開発について述べる。

782 港 湾 工 学 (土木3) 0-2 } 4 (教授 佐 島 秀 夫)
(土木4) 2-0 }

港湾修築に関し必要な調査項目と方法、平面計画、防波堤・けい船岸その他各種構造物の設計と施工方法、しゅんせつと埋立、陸上設備、航路標識、空港などにつき概念を与えることを主とし、最近の傾向を述べ、さらに計算方法を説明する。

教科書：渡部弥著作 改訂港湾工学 教材：日本港湾協会発行 港湾構造物設計基準

783A 上 下 水 道 (土木3) 0-2 } 4 (教授 遠 藤 郁 夫)
(土木4) 2-0 }

上下水道は上水道と下水道とからなるが、衛生工学の別名がある通り、衛生学と工学の両方面がある。講義では土木工学を中心として衛生学・水質化学および微生物学方面也取

り入れて講義する。

序論として上水道・下水道の目的および定義で専ら都市用の上水道と下水道とを中心としてこれを述べる。上水道では上水としていかなる水をどの位の量要するか、これに対し自然水は水源としていかなる状態にあるかを述べ、次に上水道の施設に従って取水、導水、浄水、配水、給水に亘って講義をすすめる。下水道では下水の水質と水量とを述べ、次にその施設に従って下水排除、下水処分、下水処理、汚泥処理および処分について講義する。その他、工業用水および廃水についても言及する。

783C 衛生工学実験 (土木4) 4-0-1 (教授 遠藤 郁夫)

本実験は上下水道および水質汚濁に関する学習の一助として講義に関連させながら実験を行なう。併せて、衛生工学研究或は実験の基礎的諸事項の習得を目的とする。実験項目は 1) COD および BOD 2) 凝集沈澱法 3) 活性汚泥法 4) 散水汙床法 5) 真空汙法 などである。

784 施工法 (土木4) 2-2-4 (講師 角田 修)

土木工事の第一歩である土工、さらに最近の機械化土工について述べ、また構造物の基礎である各種の基礎工、岩に対する最近のトンネル工に重点をおき、なお橋梁架法とくに最近多く施工されている P. C. 橋梁のカンチレバー架設法および連続架設法について述べる。

785 土木法規 (土木4) 2-0-2 (教授 大塚 全一)

土木技術者として知っておく必要のある土木行政に関する法規類について、その歴史の変遷と共に内容を概略説明する。土木関係の営造物はその建設にあたって法規にしたがわなければならない事が多いだけでなく、公共のものはその管理が法律、政令について行なわれているので、それ等を理解しておく必要があるからである。

786 橋梁工学 (土木3) 0-2
(土木4) 2-0 } 4 (教授 堀井 健一郎)

橋梁の設計・製作および架設について述べる。対象とする橋梁は主として鋼橋でありかつ基本的な形式に属するものとするが、時間の許す限りその他のものに触れたい。内容の概略を列挙すれば、まず橋梁の歴史・分類・材料・荷重・基本部材の設計・接合・各種設計示方書などについて述べたのも具体的な対象をいくつか選定しこれらについて設計・製作・架設その他に関して詳述する。次に架橋計画全般にわたって注意事項を述べこれに関連して下部構造についても解説を加える。この講義の直接の基礎になる学科目は応用力学、材料学、構造工学、コンクリート工学などである。設計の実際を修得するためには設計製

図 (I), (II) などがある。

787 道路工学 (土木3) 0-2 } 4 (教授 森 麟)
(土木4) 2-0 }

道路の幾何学的構造の設計に関するものと舗装設計施工に関するものの2つの部門があり、前者は道路の線形、巾員構成、交叉部などの設計理論の基本を講じ、後者については路床、路盤、鋼性舗装、タワミ性舗装の基礎理論と設計・施工の概要について講義する。

788 鉄道工学 (土木4) 2-2-4 (講師 棚 橋 宏)

システム工学の具体例という観点に立って鉄道車両と鉄道線路の相互作用、軌道構造、線路線形、運転保安等を述べる。幹線鉄道と都市鉄道にウェイトを置くが、産業用鉄道や新交通システムにも論及する。橋、トンネル、施工法等他科目で修得する事項は含まない。

789 地震学概論 (土木4) 2-0-2 (講師 笠 原 慶 一)

最近の地震学の成果をふまえて、地震の計測から波動伝播・震源機構にいたる一連の知識を概説する。それらを通じて地震災害を理学的な面から考える一助とする。

この際、地震によって生ずる震動の仮播理論、震害ならびにその測定法に関する事項や最近の地震工学上の諸問題を学んでおくことは大切である。

このような意味から上記の内容について講義する。

790 建設機械 (土木2) 2-0-2 (講師 伊 丹 康 夫)

これからの土木技術者に必要な建設機械に関する常識を修得する目的で次の内容について述べる。すなわち建設機械および機械化工事についての基本的な理論ならびに概念および各種機械化工事の形態および機械化工事の計画、実施、管理等、将来の土木工事の企画、監督施工に携る者にとって必要とする事項について講義する。また建設機械の製造工場、機械化工事現場の見学を実施するほか、写真等で建設機械を知る機会をあたえることに努め理解の困難な点を補う。

791A 測量学 (土木2) 2-2-4 (教授 佐 島 秀 夫)

測量学では測量方法の基礎とその応用、測量機器につき講義する。基礎としては

距離測量	トランバース測量	スタジア測量
角測量	三角測量	平板測量
水準測量		写真測量

があり、応用としては地形測量・路線測量・トンネル測量・河川測量などがある。要するに測量方法の理論と実際について述べる。

なお、この測量学は測量実習を行なってはじめて充分に理解できるものであるから、両

者を同時に履修することが望ましい。

教材：佐島・新井共著 測量(上, 下)

791B 測量学(資源2) 2-2-4 (講師 遠藤源助)

測量学は測量実習とともに、資源工学の基礎学科目と考えられる。内容は、1. 測量の対象と基準、地球の形状・物理的構造・地点位置の表わし方 2. 測量機器の構造・性能・精度 3. 基本測量 4. 一般測量 5. 応用測量 6. 写真測量 7. 測地測量 8. 地球物理測量および地図編集等について重点をおき説明する。本講義および測量実習の単位を取得した者には、国が定めた測量士補(さらに実務1年以上で測量士)の認定を受け資格が与えられる。

教科書：藤井、原田、遠藤、佐伯、中村共著 近代測量学(技術書院)

**C792 測量実習 4-4-2 (教授 佐島秀夫、森田豊夫、
鮎川 登)**

本実習は測量学の講義に関連して行なわれるもので、測量機器の使用ならびにその調整および各種測量における外業・内業に関する実技を修得させる。その主な項目は、トランシットおよびレベルの調整、トラバース測量、水準測量、地形測量(平板測量・スタジア測量を含む)、路線測量(図上選定を含む)、河川測量(三角測量を含む)または鉱山測量などである。

なお、河川測量実習の外業は7~10日間(本庄校舎に合宿の場合は、3年の夏季休業中5~7日間)引続き現地において行なう。鉱山測量実習は5~7日間引続き行なう。

793 測量および実習(建築2) 2-4-3 (講師 遠藤源助)

この講義は建築測量すなわち建築の設計、施工を対象とした測量であって、内容は測器(測距器械、測角器械、測高器械)、測法(放射測法、対角線測法、垂線測法、トラバース測量、三角測法、直接高低測法、間接高低測法)、計算および製図法(緯距・経距・座標計算法測量調整法、高低計算法、面積および体積計算法、測量製図法)、写真測量等によりなる。

次に実習はトラバース測量および三角高低測量、平板測量、レベルによる直接高低測量その他。

教科書：藤井、遠藤、永井共著 建築測量(実教出版発売)

**794 図学および土木製図(土木2) 4-4-2 (教授 後藤正司、
講師 本間健之)**

前期では構造物を図によって説明するために必要な基礎的な表現力を養うことを目的とし、図形幾何学を中心と演習をまじえて図学の習得をする。

後期では土木技術者に必要な製図の規準を参考図を写すことあるいは例題によって土木製図を習得する。製図用器具一式と参考書および演習用ノートを要する。

〔参考書〕 寺田 彰著「図学と製図」(培風館), 土木製図編集委員会編「土木製図」(オーム社)

795 I 設計製図(I) (土木3) 4-4-2 (教授 神山 一, 堀井健一郎)

図学, 土木製図および専門科目で習得した基礎知識を応用して具体的な構造物の設計計算および製図の方法を実習する。従って単なる製図の練習ではなく, これまでに習得した専門の基礎知識を活用しなければならない。対象とする構造物はその都度指示するが原則として次のような順序に従がう。

1. トラスのたわみの図解法
2. プレートガーダーの設計
3. 鉄筋コンクリート構造物の設計

指定された提出期限までに図面および計算書を提出しなければならない。

795 II 設計製図(II) (土木4) 4-0-1 (教授 堀井健一郎)

内容は設計製図(I)の延長であるがそれよりも複雑な構造物を設計する。対象とする構造物はその都度指示する。なお指定された提出期限までに作品を提出することが出来ない場合はその理由を担当教員に申告しなければならない。

796 卒業論文または計画 (土木4) 1単位 (土木工学科全教員)

学部課程の最後において, 既修科目の総括的演習として行なわれるものである。主として4年度の後期に行なう。

内容は次の二つに大別される。すなわち具体的な資料に基づいて計画をたて, その設計・施工の説明書および図面を主とする「計画」と, 実験的研究または理論的解析の報告を主とする「論文」である。学生はそのいずれかを選択しなければならない。「計画」については, その計画する内容の主流となる科目を選択し, 担当教員指導のもとに, 具体的な資料に基づいて事業計画, 構造物の設計, 工事施工などに関する説明書(設計計算書を含む)および図面を作成する。「論文」については研究題目あるいは研究分野について担当教員にその研究方法の指導を受け実験または理論的解析を行ない, 研究報告をまとめて提出する。

学科目の選択にあたっては, 「計画」においても「論文」においてもその課題に関連する専門科目に合格していることが必要である。例えば計画あるいは論文に河川に関する課題を選ぶためには「河川工学」の単位を取得していなければならない。従って専門科目の選択はなるべく広く, かつ慎重に履修することが大切である。

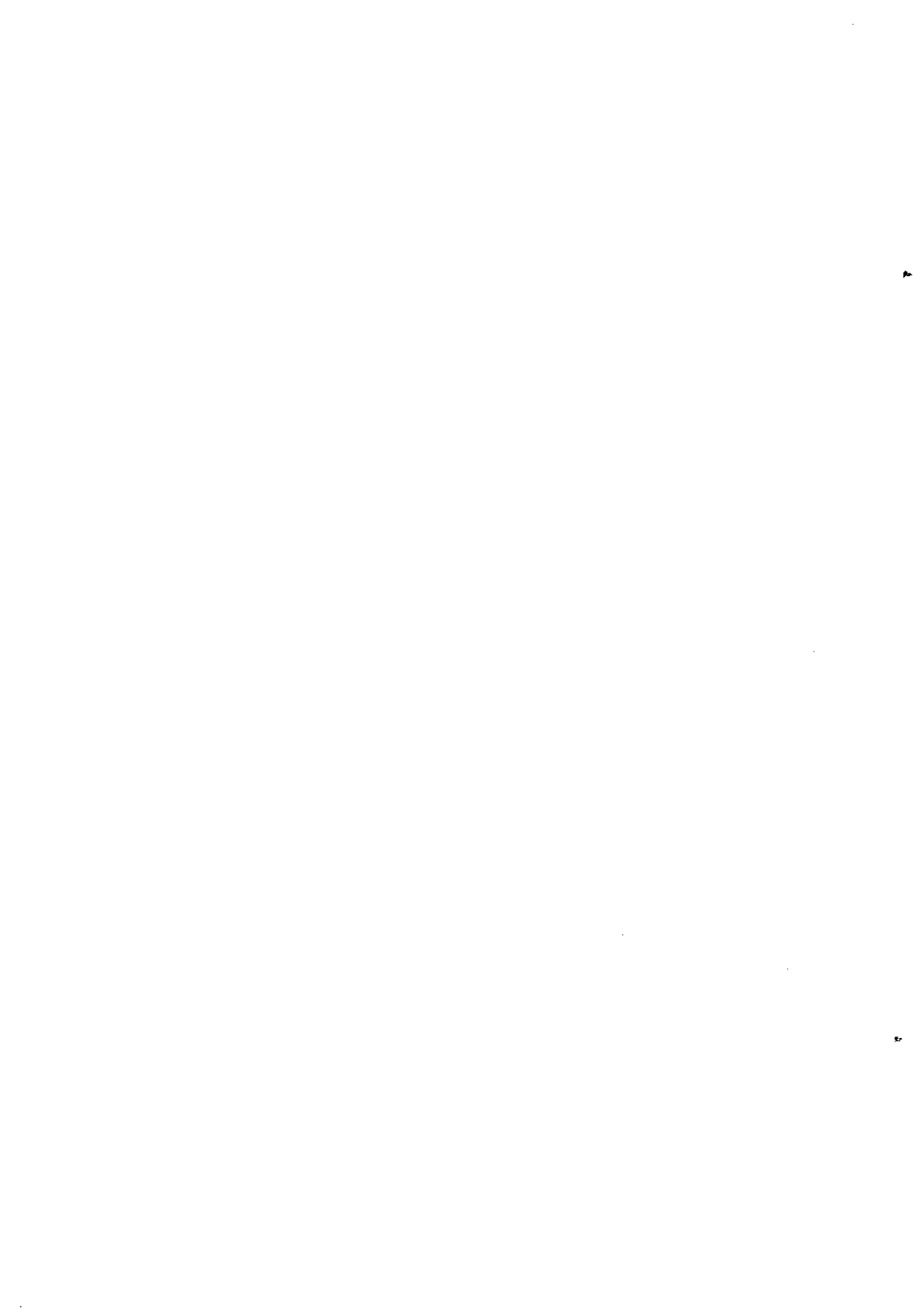
797 応用水理学（土木3） 2-2-4 （教授 鮎川 登）

非定常流，乱流拡散，密度流，流砂，地下水流など水理学の各分野における水の運動現象のとらえ方および解析法について基礎的な概要を述べる。講義内容の理解と水理計算の実力を養うために演習も行なう。



V

学 生 生 活



V 学 生 生 活

1 「学生の手帖」について

この学修要項とは別に、大学から「学生の手帖」が交付される。学修要項が理工学部における学修を中心に編集されているのに対し、「学生の手帖」は、早稲田大学における学生生活および学園の紹介を中心に編集されているから、これからはじまる4年間の学生生活におけるガイドブックとして、学修要項と共に活用してもらいたい。

2 クラス担任制度

学生生活等について、諸君の相談相手となって、必要な指導助言を与えるために、クラス担任制度が設けられている。教員と人間的接触を計りたい者、勉学上・個人生活上のアドバイスを希望する者は、この制度を利用して、学生生活をより有意義なものとするのが望ましい。

なお、担任教員の氏名・面会日等は、年度の始めに発表する。

3 奨 学 金 制 度

早稲田大学で、学生に給貸与されている奨学金は、大隈記念奨学基金・早稲田大学貸与奨学金・その他の学内奨学基金・地方公共団体・民間団体の奨学金等がある。その詳細については、前記「学生の手帖」(56ページ)に掲載されているから参照されたい。

4 各種証明書類の交付

- (1) 諸証明書 在学・成績・卒業見込証明書等は学生の請求により交付する。なお、集中する時期には交付までに一週間以上かかることがあるので注意のこと。請求の際は、事務所教務係備付の用紙に記入し、所定の料金(学生の手帖76ページ参照)を納入すること。
- (2) 通学証明書 国鉄・私鉄・地下鉄等は、最寄駅で学生証を提示すれば購入できる。都営バス等証明書を必要とする場合は、事務所学生係で交付する。
- (3) 学生証の再交付 写真一葉および手数料(600円)を添えて事務所学生係へ願を出し、承認を受けてから大学本部出納課へ提出すること。代理人の出頭には応じない。
- (4) 学割の交付 学割は学生が夏季や冬季の休暇に帰省する場合に発行する。その他の場

合に帰省する必要が生じた時は、これを証明する電報又は手紙を持参した者に限り発行する。休暇毎の発行枚数は約2枚としている。ただし、これは個人の割当枚数と定めているわけではない。

なお実習見学用学割は事務所学生係備付の所定用紙に該当学科目担当教員に所属学科の印をおしてもらって理工学部事務所学生係に請求すること。

5 学生相談センター分室

前掲のように、本学部には、学生相談にあたるため、クラス担任制度が設けられている。

この他全学的なカウンセリング機関である「学生相談センター」、(本部キャンパス診療所3階)の分室が西大久保キャンパスに置かれている。相談内容については、「学生の手帖」(72ページ)にくわしいが、クラス担任制度と同様活用してほしい。

なお、クラス担任制度などではカバーできない精神医学的、心理学的な面は専門の相談員が特別な相談指導に当たっている。大いに利用されたい。

場所：51号館に入った左側、階段隣り

電話(209)3211 内線432

なお、開室日時については分室の掲示をみること。

6 各種願・届

学生諸君が在学中、本人または保証人になんらかの異動や事故があった場合には、必ず願または届を提出しなければならない。届用紙は教務係にある。ただし、下記(7)は学生係にある。以下各項目別に要領を説明する。

(1) 休学願

- イ 休学は原則として2学年以上にあたることはできない。
- ロ 休学期間は在学年数に算入されない。
- ハ 病気の場合は診断書を添えること。
- ニ 休学中でも授業料は指定された期日までに納入しなければならない。休学期間中の授業料は半額とする。ただし、学年の途中で休学する場合は、その納入期の学費は全額徴収し、次の納入期の授業料が半額となる。

(2) 復学願

- イ 復学は学年の始め(4月)に限られる。
- ロ 病気回復による場合は、医師の診断書を添えること。

(3) 退学願

- イ 退学願には学生証を添えること。
- ロ 学年の途中で退学する場合でも、その納入期の学費は納めていなければならない。
(納入していない場合は、退学とはせず、抹籍扱とする)

(4) 再入学

正当な理由で退学した者が再入学を願った場合は、退学した学年の翌学年から起算して次の学年度までの間に限り、学年の始めにおいて選考の上、許可することがある。
学部……7年度まで

(5) 試験欠席届

欠席した科目の試験終了後速かに事務所教務係に届出ること。この場合その理由を確認するに足る証明書を提出させることがある。(届出は科目毎に行う)

(6) 改姓名、本籍変更

これらの様式は改姓名届に準ずる。改姓名及び本籍変更の場合は戸籍抄本を添えること。

(7) 住所変更届、保証人変更

本人及び保証人が住所を変更した場合等は、直ちに届出ること。(学生係)

(8) 願・届書の様式

休 学 願
昭和 年 月 日
早稲田大学理工学部
学部長 殿
理工学部 学科 年 番
氏 名 ㊦
昭和 年 月 日生
住 所
保証人 氏 名 ㊦
昭和 年 月 日より昭和 年 3 月
31 日迄 (理由) により休学いたした
く (診断書添え) お願いします。

復 学 願
昭和 年 月 日
早稲田大学理工学部
学部長 殿
理工学部 学科 年 番
氏 名 ㊦
昭和 年 月 日生
保証人 氏 名 ㊦
昭和 年 月 日より昭和 年 3 月
31 日に至る期間 (理由) により休学
中のところ今般 (理由) により復学
いたしたくお願いします。

退 学 願

昭和 年 月 日

早稲田大学理工学部

学部長 殿

理工学部 学科 年 番

氏 名 ㊦

昭和 年 月 日生

住 所

保証人 氏 名 ㊦

(理由)により退学致したく保証
人連署をもってお願いいたします。

改 姓 名 届

昭和 年 月 日

早稲田大学理工学部

学部長 殿

理工学部 学科 年 番

氏 名 ㊦

昭和 年 月 日生

昭和 年 月 日(理由)により
某を某と改姓名致しましたので戸籍
抄本を添えてお届けいたします。

本 籍 変 更 届

昭和 年 月 日

早稲田大学理工学部

学部長 殿

理工学部 学科 年 番

氏 名 ㊦

昭和 年 月 日生

昭和 年 月 日(理由)により本
籍 県 郡 村 字 番地を 県 郡
村 字 番地に変更しましたので戸
籍抄本を添えてお届けいたします。

以上の用紙は教務係にある。その他の届、願は、上記に準ずること、

7 学費の納入と抹籍

(1) 納入期日

学費は、それぞれの年度において、下記期日までに納入しなければならない。

第1期分 4月15日まで（入学手続の際は別に定める）

第2期分 10月1日まで

(2) 金額（本年度入学生）

		1 年 度		2 年 度		3 年 度		4 年 度	
		1 期	2 期	1 期	2 期	1 期	2 期	1 期	2 期
授業料		160,000	160,000	160,000	160,000	160,000	160,000	160,000	160,000
実験 実習 料	F	12,000	11,000	12,000	11,000	12,000	11,000	12,000	11,000
	G	13,000	12,000	13,000	12,000	13,000	12,000	13,000	12,000
	H	15,000	15,000	15,000	15,000	15,000	15,000	15,000	15,000
	I	17,000	16,000	17,000	16,000	17,000	16,000	17,000	16,000
体育費		1,700		1,700					
入学金		120,000							
施設費		70,000	30,000	50,000		50,000		50,000	

注 F…建築学科・数学科 G…工業経営学科 H…機械工学科・土木工学科

I…電気工学科・資源工学科・応用化学科・金属工学科・電子通信学科・応用物理学科・物理学科・化学科

なお、5年度以上の場合の授業料等は、年度始めに52号館掲示場に示します。

(3) 納入方法

窓口納入 大学本部出納課（本部構内）の窓口へ学生証と共に提出する。

送金納入 銀行振込と現金書留為替等の郵送の2方法があるが、必ず学部・学科・学年・学生番号・氏名および金額等を明記し、早稲田大学経理部出納課宛送金すること。

(4) 授業料延納願

特別な理由で(1)の所定期日までに納入できないときは、事務所教務係から授業料延納願用紙の交付を受け、願出しなければならない。

(5) 抹 籍

学費の納入を怠った場合は抹籍する。

8 掲 示

学生に対する公示・告示その他の伝達は、掲示をもって行なわれるから学生諸君は常に掲示に注意しなければならない。理工学部の掲示場は下記のとおり掲示内容によって分れている。

場所	掲示板名称	掲 示 内 容
	正門 掲 示 場	大学・理工学部の公示・告示，学生の会
52 号 館 (一階)	第1 掲 示 板	学部行事，日程，一般的注意事項，伝達事項，特別講義，テキスト，保健体育関係，語研関係
	第2 掲 示 板	各学科共通の授業・試験に関する事項（時間割，教室，担任変更等）休講連絡，学科履修選択に関する事項
	第3 掲 示 板	催物案内，広告，外国学生用
53 号 館 (一階)	第4 掲 示 板	大学院理工学研究科用
	第5 掲 示 板	奨学金，下宿，アルバイト，遺失物通知，学生の呼出し
54 号 館 (一階)	第6 掲 示 板	土木・応物・数学・物理
	第7 掲 示 板	機械・電気
	第8 掲 示 板	資源・建築
	第9 掲 示 板	応化・金属・通信・工経・化学
56 号 館 (一階)	第10 掲 示 板	物理基礎実験・化学基礎実験・工学基礎実験・化学分析実験 ・物理化学実験・工業化学実験に関するもの

9 事務所の事務取扱時間等

(1) 事務取扱時間・休業日

平日 午前9時～午後4時
 土曜日 午前9時～午後2時 (各曜日とも正午～1時休憩)
 休業日 日曜日・国民の祝日・創立記念日(10月21日)・年末年始(12月29日～1月3日)
 夏季・冬季休業中の土曜日

(注) 夏季休業・冬季休業等の期間中は、事務処理が平常より遅れる場合があるから留意すること。

(2) 事務所各係の所管事項

総合事務所(51号館1階)は、次の各係に分れ、学生に関係のある事項としてそれぞれ次の業務を所管している。

教務係……学科目登録、授業、試験、成績、学籍(休学・退学・抹籍等)、証明書(在学・成績等)、学費、教室・ゼミ室の貸与等

学生係……奨学金、就職、学割、通学証明、学外実習・見学、学生の会、住所変更届、遺失物保管、救急看護、入試・編入・転科試験等

庶務係……文書・建物・工作物・研究室・会議室の管理、営繕、警備・消防、学部報「塔」の編集、その他

用度係……用度・会計

大学院……大学院の事務全般

なお、総合事務所のほか、各学科に連絡事務室がある。

10 理工学図書室・学生読書室

学生読書室 52, 53号館地階(543座席)

読書室は、主として学部低学年・産専学生のための学習図書室で、蔵書は4万冊におよぶ。

53号館地階

閲覧室 378座席

雑誌架 軽い雑誌・新聞があり、自由に読める。他に、手動計算機8台、持込文献用複写機1台があるが、これは将来、レポート準備室(仮称)が出来る迄の過渡的なものである。

事務室

52号館地階

受付 閲覧票の発行、利用資格の確認、ロッカーの鍵の貸出し、返却、図書の貸出し、返却手続を行う。

文献複写機

所蔵文献を自由に複写できる。(持込資料の複写は認めない。もし、違反した場合は、コピーを没収し、料金は返さない)

書庫(北側)

分類順にAからTC（大学）までを排架してある。他に12座席。

書庫（南側）

TE（語学）からTZ（その他）まで、および、富永文庫、大形図書（27cm以上）、指定書、参考書、雑誌がある。他に99座席。

ホール

目録、貸出カード記入機の他、54座席。

I 利用手続

1. 携帯品は、ロッカーに入れたのち入室する。
2. 室外への図書の貸出しは、「貸出用紙」に必要事項を記入し、閲覧票（毎年度始め旧票と引き換えに交付）とともに受付に出す。（貸出冊数および期間の項参照）
3. 返却は、受付に返却図書と借用証を提出して閲覧票を受け取る。
4. 参考図書、指定図書、雑誌・新聞は貸出しをしない。
5. 夏季、冬季等の授業休止期間中については、別に休暇貸出しを行なう。

II 目録の使い方

当室の目録は、著者目録・書名目録と件名目録および書架目録の4種類がある。前者は著者名と書名を、訓令式によりローマナイズして、逐字式ABCの順に排列したものであり、書架目録とは、その図書の排架分類（図書の分類の項参照）別に、標目（著者名または書名）のABC順に排列したものである。従って、自分の必要とする図書は、その著者なり書名なりが、はっきり分っている場合や、双書名・訳者名・共著者名等がはっきり分っている時は著者・書名目録を、また特定の主題についてどのような図書があるかを知りたい時には、件名目録をみるのが便利である。

いずれの場合にも、カードの左肩にあるのが、その図書の所在を示す記号で、そのうち上段が分類記号、中段が著者名あるいは書名の最初の2・3文字が著者記号、下段は巻次、複本記号である。図書はまずこの分類のABC順に排架され、更に同一分類の中では著者記号の順にならべられている。なお各カードには、その図書の著（訳、編）者名、書名、発行所、発行年、ページ数、大きさ、双書名が記されている。カード上部に参考とあるのは参考図書、指定とあるのは指定図書である。

III 図書の分類

分類は、「理工学図書分類表」を、一部簡略化して次のように行なっている。

- イ) 参考図書 分類記号は、1桁（人文社会は2桁）とし、図書には参考のラベルを貼付している。
- ロ) 指定図書 分類記号は、2桁～3桁とし、図書には赤枠のラベルを貼付している。
- ハ) 一般図書

理工学図書分類表

A	理工学総類	B	数	学	C	物	理	D	化	学
E	工学基礎	F	電	気	G	資	源	H	機	械
J	経営工学	K	建	設	R	総	類	S	自	然
T	人文・社会	X	27cm~29cm	Y	30cm~37cm	Z	38cm	以上		

のものを別置してある。(Xは2桁, Y, Zは1桁)

二) 大形図書

IV 貸出用紙の書き方

「貸出用紙」には、著者及書名、原簿番号、請求記号：氏名、学科、学年、貸出日を記入する。原簿番号、請求記号は図書の表紙裏にある。図書1冊につき1組の貸出用紙を使用すること。

V 貸出冊数および期間

貸出の種類	貸出冊数	貸出期間
一般貸出	2冊	2週間(但し外国語図書は1ヵ月)
特別貸出	2冊	当日
休暇貸出	3冊以内	その都度定められた期間

1. 一般貸出は、受付に申し出れば一回に限り貸出しを更新することができる。(借用図書及び借用書を持参のこと)

VI 利用についての注意

1. 閲覧票は本人以外は使用できない。
2. 閲覧票紛失のときは、ただちに届け出ること。
3. 閲覧した図書は、必ずもとの位置に戻すこと。
4. 書庫での喫煙および私語は、他の利用者の迷惑になるので所定の場所(中庭、閲覧室)を利用すること。
5. ロッカーは、当室の利用の際に限って使用すること。また当日中に鍵をかえすこと。
6. 貸出者が図書等を紛失し、また毀損したときは、ただちに受付に届け出るとともに、現物または相当金額を、弁償しなければならない。
7. 返却期日を1週間以上過ぎても、図書の返却がないときは、違反1回とみなし、4回に及ぶときは6ヵ月の利用禁止。
8. 図書資料の無断持ち出し、切り取り、故意に破損した者は、閲覧票を保管し、6ヵ月間の利用を停止する。
9. 複写機は利用方法を読んでから使用すること。

理 工 学 図 書 室 51号館地階(座席数 224席)

図書室は理工学専門の研究図書室として設置されている。また、共同利用を目的として、

理工学研究所，システム科学研究所所蔵図書を収容している。

この図書室の性格上，蔵書構成は内外の自然科学系の雑誌を主体とし，この他図書約4万冊が排架されている。利用資格は学部4年生，大学院学生以上としている。閲覧方法は利用者が直接書架にある図書室資料を利用することができる接架方式をとっている。

受付

左側は，入室者の利用資格の確認と閲覧票の交付，複写申込（図書室資料）を，右側は退出者のチェックと図書の貸出し返却手続を行なう。

閲覧室〔新刊雑誌閲覧室〕（座席数 144席）

この室は内外の新刊雑誌（国内雑誌1200種，外国雑誌800種）の当年度分を排架している。外国雑誌は左側に誌名のABC順，国内雑誌は右側に五十音順に排架してある。国内大学関係の逐次刊行物は壁面書架に別置してある。

これら新刊雑誌は次年度，合冊されて書庫に排架される。なお，図書室でいう国内雑誌とは，欧文・和文を問わず国内で発行された雑誌のことをいう。

参考図書コーナー

索引誌，抄録誌（chemical Abstracts 1907～，他）等の2次資料，辞書，事典，便覧，ハンドブック，規格，特許公報（第2，4，6産業部門）等の参考図書が集められている。

参考カウンター

文献の所在や正式の雑誌名や図書名がわからないとき，参考図書や索引誌の利用の仕方などの参考業務を行っている。

また，図書室にない文献の所在やその利用方法，他機関への複写の依頼や，他大学の図書館を利用したい場合の紹介状の発行などを行なっている。

書庫

書庫は上，下2層にわかれ，空気調整がほどこされている。書庫の上層（B1）は左側に合冊された国内雑誌が五十音順に，右側に和洋の図書が分類順に，次に博士論文，斎藤文庫，山本文庫，システム研図書が排架されている。

書庫の下層（B2）は合冊された外国雑誌がABC順に，左側から右側へと排架されている。

このフロアにはキャレル（個席）が80席設けられ，閲覧室とあわせて自由に使用できる。

なお，システム研図書はおもに次のような主題のものが所蔵されている。オペレーションズ・リサーチ，ワーク・デザイン，システム分析，工場設計，地域開発，交通問題，産業心理，経営計画，etc。

I 利用手続

1. 入室するときは受付に閲覧票を提示する。

2. 学部4年生、大学院生は図書室登録票を、学部1～3年生、その他の利用者は、図書室利用許可願を受付に提出して閲覧票の交付を受ける。
3. 携帯品はロッカーに入れる。この際学生証を預ける。
4. 室内に持込みできるものは、参考文献、ノート類にかぎられる。
5. 図書の室外貸出しは、図書借用証に所定事項を記入して利用することができる。

貸出冊数および期間

	貸出冊数	貸出期間
本大学教員（非常勤を含む）	10冊	2カ月
本大学職員	5冊	1カ月
理工学研究科学生	5冊	1カ月
理工学部3,4年生	5冊	1カ月
その他の利用者	2冊	2週間 但し洋書は1ヵ月

6. 雑誌(合冊を含む)、参考図書および禁帯出のラベルが貼付してある図書は一切貸出しをしないので必要箇所は複写を利用すること。

II 目録の使い方

1. 図書の目録

蔵書目録として、著者、書名、分類目録、および件目録の4種類があり、書庫入口に備えてある。おおむね学生読書室と同じであるが、分類記号の省略はしていない。

件目録は、その図書の主題を統一されたコトバで表し、ABC順に並べたものである。なお、地理区分だけは、最初のカード箱に並べてある。

2. 雑誌の目録

雑誌の目録は当室で所蔵している雑誌のうち、書庫に排架された分をカード化したものである。カードの排列は、外国雑誌の場合、誌名の逐字式のABC順を簡潔に、国内雑誌の場合は、誌名の五十音順に排列してある。カードは誌名、発行所、所蔵巻、号、年月、欠号を、記載してある。

和・洋カード箱は、書庫内上下と、参考カウンターに置いてある。

III 図書の分類

理工学図書分類表によって分類されている。(学生読書室Ⅲのへの項参照)

IV 文献複写

当室は、ゼロックス複写機により、所蔵文献の複写を行なっている。なお、当室所蔵のものを優先するが、手持ちの文献の複写も行なう。ただし、ノート、レポート、語学教科書および訳本、その他図書室において不適当と認めたものは複写できない。

マイクロフィルムによる撮影や焼付、引伸等は、早稲田大学図書館で行なっているが、

当室においても外部への注文の便もあるので複写室で相談すること。

なお、著作権に関する一切の責任は、複写依頼者が負うことになるのであらかじめ承知の上、申し込むこと。

申込方法

所定の申込用紙に必要事項を記入し複写文献をそえて受付ならびに文献複写室（持込文献）に提出する。

コピーの受領は、文献複写室のカウンターで規定料金を支払って受領する。

複写時間および料金

複写時間：午前9時～午後4時（正午～午後1時は休室）

なお、当室の閉室時間の午後7時までは、申込みの受付を行なっている。

複写料金：ゼロックス 厚手1枚につき30円

〃 薄手 〃 35円

理工学図書室、学生読書室の運営は各学科から選出された教員により構成された図書委員会が行なっている。図書選択その他要望があるときは図書委員に申し出ることが望ましい。なお、図書室利用について不明の点があるときは「図書室利用内規」を参照されたい。

開室時間

学生読書室：午前9時20分～午後8時

理工学図書室：午前9時～午後7時（但し事務室・複写室は正午より午後1時迄閉室）

閉室日

日曜・祝日および本大学の定めた休日、毎月最終土曜日、その他必要のある場合。

11 語学演習室

理工学部は学生諸君の自発的な語学学習のために52号館地階に語学演習室（L.L.）を開設しています。語学演習室のLLはAudio-Active-Comparativeといて、聴取、応答、録音、比較を可能にするいわゆるフル・ラボラトリーで、その構成はマスター・コンソール（Master Console）、マスター・テーブルレコーダ、ブース（Booth）72台、ブース用テーブルレコーダからなっています。現在演習室では自由操作業学習の方式を採っています。

開室時間

原則として（月）～（金）午前9時より午後4時30分、土曜日は午後1時まで。くわしくは52号館地階語学演習掲示板の時間表により実施しています。

利用方法

- (1) カバン、袋類は、受付で学生証と引換にロッカーを使用すること。
- (2) 入室の際は、受付でLL利用書を受取り、帰りに諸事項を書込んで、受付へ提出すること。

備付テープおよび利用の手引

初級、中級、上級の会話、発音練習、聴取練習、童話、文学作品、ディクテーション、伝記、歌劇、民謡等。

▷英語 145 種類 1,160本

語学における hearing の位置 語学能力は一口に云って「読み書き聴きしゃべる」の四つに分かれると云われる。そして、このなかでもっとも必要度の高いものといえば、「読む」能力であろう。飛躍的に国際化しつつある今日といえども、外国語に接するのはやはり文字によってである。では他の諸能力は無視してよいものか？ そんなことはない。他の3能力は今後ますます必要にならう。「読む」能力の分野を侵蝕してではない。語学全体の重要性、語学の「バイ」の大きさそのものが増えつつあるのである。

ところで「読み書き聴きしゃべり」の4能力のうち hearing 能力は特別な位置をしめる。第1は「読む」能力の次に頻度数において必要としよう。飛行場のアナウンスを聴く、外国でラジオ、テレビ、芝居に接しその内容を理解する。講演を聴く。外国の研究室で指導教授の指示を聴いて理解する、など用途は無限である。自分から口を開かなくてよい場合は多いが、相手の話がわからなかったら、研究の続行はおろか生命の危険さえ生ずる。第2は4能力のうちで一番むずかしいことである。一番高度な能力である。自分の用件を口で伝えられても相手の云うことがわからない人は非常に多い。第3は hearing 能力のある人は潜在的に他の3能力をも持っている、ということである。そしてこれが一番重要な点である。FEN の英語放送をきいてわかるが、読めない、書けない、話せない、という人がいたらお目に掛りたいものである。こうした hearing 能力の象徴性はあたかも、エレクトロニクス産業、航空機、自動車産業の発達した国で他の基礎産業部門の未発達がありえないのと全く同じである。

だから hearing さえできれば諸君は安心してよいことになる。書く、話すは「なれ」の問題となる。しかしテープに吹き込まれた講演の内容を理解するためにはあらかじめ読解力がなくてはならない。しかし読んでいだけで他の3能力はよほどの才能がなければそのまま出てこない。この場合は音声的問題が入るので「なれ」以上の問題である。そしてここにこそ諸君にテープによる hearing 練習をすすめるゆえんである。

どのようにテープを聴くか まず、教室で使用されているテキストのなかで、テープに用意されているものがあれば、それを何度でも聞くのがよい。まずテープ一本か二本をすっかり自分のものにすることが必要である。聴きあきるほど聴くべきである。目標は、最

初耳をそばだてなくてはすぐわからなかったものが、最後には他のことを考えていてもちゃんと耳に入って理解されている状態をつくりあげる。たとえば諸君は数学の問題を解きながら日本語によるニュースを理解していることがある。その状態を英語でつくりあげることである。最初の一本は一月、二月かかるかもしれない。だが辛抱強く続けることである。こうして自分の repertoire を一本、二本とふやしてゆく。5、6本になったらかなり力がついているはずである。そしてたとえば卒業まで12本といった目標を作りあげる。こうした repertoire はたとえうつらうつらしていてもちゃんとわかるというものであり、機会あれば複写して寝る前などにはかならずレコーダーにかけ、ムード音楽ならぬムード外国語として自分の環境の一つにしてしまうことだ。このようにして、たとえば5インチ12本をものにしてしまえば、海外に出て外国語の海に投げ出されても、最初は生れてはじめて水に入れられた水鳥のようにあわてるだろうが、やがては一人で泳ぎ出すようになるだろう。

会話テープか朗読テープか 本当のことをいうと世間でいういわゆる「実用会話」を特に練習する必要はない。「買物英語」はその場になればどうにでもなるものである。しかし外国の大学や研究所、会社を訪問してそこの専攻を同じくする研究者と意見を交換するとすると、「どうにでもなる」というものではない。そして「実用英語」の真の目的は、そのようにやや高級な「非実用的（買物英語に対して）」面にあるのであって、そのためには講演や朗読テープを聴く必要があろう。もちろん、かなり速度のはやい買物英語を理解できることは本人の自信も高めるので、悪いことではない。語学において必要なのは自信である。

初心者はどうのようなテープを選べばよいか 諸君は大学生なのだから自分の力、好みで自主的に選べばよい。しかし、聴くことにまるっきり自信のない人は V. O. A. English study あたりからはじめればよいだろう。また I. C. E. もしくは English 900 の Elementary Course を少しやって（全部やる必要はない）Intermediate に進み、なれたら、あちこちの朗読テープを「聴きあさる」ことである。初心者はたとえば「耳なし芳一」のように、中学、高校で習ったものを選んでみる。また J. カーカップ氏の朗読テープも多いが、氏は長い間日本の学生に接したこともあって、日本人にはわかりやすい英語である。しかし最後は日本人を意識しない人の英語をきく必要がある。そして最終目標はなかなかむづかしいが、用意されている各種講演集に耳を傾けるがよい。

▷独語 44種類 275本

○ Ich spreche Deutsch

「私はドイツ語が話せます」

Schulz-Griesbach のドイツ語教科書の入門編として外国人むけに編集されている。語い、表現は日常ドイツ語の範囲からえられ、文法的説明は一切行わず、パターン練習によって学習者にドイツ語の基礎となる発音、動詞、名詞などの変化、基本的な表現に習熟させ、Deutsche Sprachlehre für Ausländer Teil 1, 2「外国人のためのドイツ文法、

第1部、第2部」への橋わたしの役割を果たしている。

○ Auf deutsch bitte!

「ドイツ語で話してください」

Schulz-Griesbach のドイツ語入門書のひとつであるが、スライドや映画と組み合わせて基本となるドイツ文を習得できるよう工夫がこらされている。またテープを聞き、本書のさし絵にたいしてドイツ語で反応することができる。

○ Deutsch als Fremdsprache I

「外国語としてドイツ語」

Goethe-Institut でも採用している教材で、日常生活の身近かな一駒をテキストにし、くわしいパターン練習が行なわれ、基本的文型に習熟できるように編集されている。

○ 語研独語 LL 用教材

早稲田大学語学教育研究所の編纂した LL 用教材で、ドイツ語をはじめて半年ないし1年ていどの学習者を対象としている。日常生活に取材した平易なドイツ語会話と、そのテキストを基礎としたパターン練習が行なわれ、文法的説明によらずにドイツ語の基本構造が習得されるよう工夫されている。

○ Deutscher Sprachunterricht nach neuester Methode

「学生のための新しいドイツ語」

慶応大学視聴覚教室の編纂した教材で、LL用としても普通教室でのテープレコーダーによる使用にも適している。やさしい会話を通じてドイツ語の基本を習得させることが目的である。そのための反覆練習、口頭作文も課されている。

○ A-LM German practice record

アメリカの A-LM 外国語視聴覚教材のドイツ語編である。学生生活などの日常生活に題材をとったドイツ語会話を中心にし、パターン練習を徹底的に行なっている。したがって相当量の時間をかけて学習すれば、十分な効果が期待される。後半はかなり長いドイツ文のききとり、大意をドイツ語で述べさせる問題などあって、程度はかなり高い。

○ その他

会話もの：「生きたドイツ語会話入門」、「会話による世界周遊」

文学もの：ゲーテ「ファウスト」、レッシング「賢者ナータン」、「グリム童話」、トーマス・マンの作品など。

▷ 仏語 41種類 284本

○ le français et la vie I

「フランス語と生活 I」

一般にはモージュ・ルージュの名でよく知られている、フランス・アジエット社の視聴覚用教材で、フランス語の入門用教科書として外国人向けに編集されています。

テキストはスライドと会話とLL用練習問題で構成されており、フランスの日常生活に、題材を取った会話を中心にして、文型練習を豊富に取扱っています。週2回の授業と共に、

週2回以上ラボに入って練習を行えば、十分な学習効果が期待できます。

○ フランス語のメカニズム

文字で書かれたフランス語を学習する前に、まず話されるフランス語を耳で聞いて口で言ってみることから始める方式の、フランス語入門用教材・1―7課で、フランス語の基本的な音と文法に習熟できるように作られています。

○ フランス文法20課

フランス語の初級文法全般を20課にまとめてあります。

○ フランス文法素描

前二者にくらべると「読むこと」に重点がおかれていて、かなり難しい文法まで含まれています。

○ 新フランス語の発音

第1部、フランス語の音の訓練、第2部、フランス語の綴字の読み方の要点。付録として、フランス語の綴字の読み方をまとめた詳細な索引が付されています。入門期にも使えますが、ある程度のフランス語を学習した人で、発音がまだわからない人は特にこの教材で練習してください。

その他

○ ドノユ・ゴデ ○ アシアシミルフランス語 ○ フランス語の会話

▷ 露語 90種類 466本

ロシア語授業は、基本的に次のようにおこなわれている。

1. パターン・プラクティスによるロシア語 運用能力の育成。この作業は、普通教室および簡易LLにて、教師と学習者との直接的対話の形でおこなわれる。
2. リーディング練習 この作業は、普通教室において、教師によりロシア語文法規則の説明がおこなわれ、それを基にプリント・テキストの読解練習がおこなわれる。
3. ヒヤリング練習 ロシア人インフォーマントの録音テープをLLに常置し、学習者各人の自習によって、ロシア語聴取能力の育成を期す。学習者のロシア語能力に応じ四段階に分け、各々のコースごとに易より難へ、簡より複へと、適当な編集をほどこした録音テープが用意されており、それらを順次聴取、発声練習を自発的にたどっていけば、ある程度の能力がおのずから賦与されるようにプログラミングされている。
4. 会話練習 ふたりのロシア人インフォーマントによる会話を録音したテープが用意されている。ソ連に生活したときに会おうであろうシチュエーションをいくつか設定し、実際会話の例を提示する（たとえば、「旅のロシア語」、「実用ロシア語会話」などがある）。
5. 演劇・映画・オペラ・講演の録音テープ たとえば、チェホフの「三人姉妹」、ゴーゴリ「検察官」、ゴーリキイ「どん底」その他、ロシア演劇の代表的作品をとりあげ、モスクワ芸術座 その他の俳優が舞台上で演技した録音テープを数本常置してある。またわが国で公開された映画、たとえばトルストイ「戦争と平和」、「アンナ・カ

レーナナ」,「復活」,ドフトエフスキー「カラマーゾフの兄弟」,「白夜」その他のサウンド・トラックや,ロシア・オペラの名曲,たとえば,チャイコフスキー「エウゲニー・オネーギン」,「スペードの女王」など,レコード,また来日したソ連有名な人の講演テープ等々が常置してあり,適宜学習者の希望によって聴取できる。その他,講話の授業で取上げたテキストの場合,作品の一部を再編集した録音テープをLLに常置しておく場合がある。

12 教室の使用について

授業外に教室を使用したい時は,事務所教務係備付けの教室使用願を提出しなければならない。教室使用願の提出については次の事項に留意すること。

- イ 使用願には責任者(教員……学生の会の会長等)の印を必要とする。
- ロ 使用願の提出は,使用日の3日前までに行なうこと。
- ハ 使用許可時間は,午前8時30分から午後8時30分までとする。
- ニ 使用許可期間は,最高1カ月とする。それ以上に直る場合は再度提出すること。
- ホ 使用中は次の注意を守ること。
 - a まわりの授業には充分注意し,その妨げにならぬようにすること。
 - b 教室内の机,椅子その他の什器は動かさぬこと。
 - c 使用許可時間を厳守すること。

13 学生の研究活動について

本大学においては,学術研究発表ならびに報道機関として20有余の学会があり,講演会を催したり,定期的に機関紙を刊行している。理工学部関係では理工学会がある。これは本学部に属する13学科でそれぞれ構成している10学会(機友会,電気工学会,資源工学会,稲門建築会,応用化学会,金属工業会,工業経営学会,稲土会,応用物理学会,数学会)および稲工会(旧早稲田高等工学校),稲友会(旧早稲田工手学校,早稲田大学工業高等学校の連合体)があつて学術団体として活動している。

14 学生の課外活動について

学生生活は講義を中心として展開されるべきだが,専門の知識を得ることのみに終始することは決して望ましいことではない。科学技術の進歩は深い知識を必要とするが,それだけに,視野が狭くなりがちである。孤立した個人的な生活,数人の仲間だけの閉鎖

的な生活は広い教養に欠けた、狭い範囲の専門的知識のみしかもたない人物をつくりがちである。

理工学部には13学科の教員、卒業生、在学生で構成されている12学会がある。この学会には学生会があって、課外活動に対して種々の便宜が与えられている。理工学部の特殊性を生かした学生会の連絡を密にし、課外活動によって学生生活の充実を計ることが望まれる。

学生の課外活動は大学という集団の中で最大限の自由が保証されねばならないことはいうまでもないが、それだけに、諸君は責任を持ち、規律を守らなければならない。課外活動はそれを通じて自己の人間形成をはかり、将来社会で活動する準備をすることが目的だから、ある特定の目的をもつ外部の団体に左右され、プロ化して行動をすることは慎むべきだろう。

4年間の学生生活で諸君は種々の困難につきあたるにちがいない。その時は学友、クラス担任などとよく相談し、諸君の個性にあふれる創意を生かして悔いのない学生生活を送るよう希望する。

大学には多くの学生の会、同攻会があり（「学年の手帖」参照）、理工学部の学生も参加しているが、理工学部内にも同攻会として、現在文化系14、スポーツ系14、音楽系7のサークルがあり、それぞれが活躍している。

15 安全管理

理工学部は、文科系の学部と異なり、授業に、各種の機械・器具・薬品類が使用される。これらの中には、危険を伴うものが少なくない。これらの使用に当っては、指導者の注意をよく守り、事故の起らないよう、取扱いに充分留意していただきたい。

なお、理工学部内における負傷・急病の場合の応急措置として、次のように救急処置用具・休養施設を用意してある。

事故発生時の処置について

○きわめて軽度の負傷・疾病の場合

下記衛生室・各実験室・各個所に救急薬品が用意してあるから利用すること。

○中軽度およびやや重傷と思われる場合

出血多量および人事不省の場合には次のいずれかの方法で至急連絡し、その指示に従うこと。

- ① 各号館各階フロアーに設置されている通報装置で近くの各実験室（安全管理者常駐）へ連絡。
- ② 通報装置または電話等により事務所（衛生管理者常駐）および衛生室（看護婦常駐）へ連絡。

○救急車の要請 事故発生にともない救急車が必要な場合は、衛生管理者・看護婦により救急車を要請する。

○急患発生時の往診 急患の場合には、大同病院〔豊島区高田3の22の8電話（981）3213～6〕より大学の要請により往診する。

○その他……身体不調の場合には下記施設を遠慮なく利用してください。

（注）救急処置について 素人による薬剤の使用および誤った手当は医師の診療を妨げるから当学部事務所・衛生室に連絡の上その処置をまってください。

救急処置用具および救護施設

	救急処置用具設置場所	ソファ・ベッド 設置場所	運搬担架架 設置場所	通報装置 設置場所
第51号館	衛生室（1階）（電）315 看護婦（衛生管理者） 事務所（1階）（電）308 衛生管理者常駐	衛生室（1階） 事務所 日本管財（1階）	衛生室（1階）	各階フロア ーに通報装 置を設置し てある
第52号館	産業技術専修学校 （電）441 P.∴.3.00～9.20		101 教室入 口	同 上
第53号館			101 教室入 口	同 上
第54号館			101 教室入 口	同 上
第56号館	共通実験室・化学基礎 （5階） 安全管理者常駐（電）212		共通実験室 化学分析実 験室わき （4階）	同 上
第57号館			ホワイエ （2階）	同 上
第58号館	共通実験室・流体管理室 （1階）安全管理者常駐 （電217）	指導室（2階）	共通実験室 流体管理室 （1階）	同 上
第59号館	共通実験室 材料管理室（1階）（電）231 工作管理室（1階）（電） 233 安全管理者常駐	指導室（2階）	共通実験室 材料管理室 （1階）	同 上

第60号館	共通実験室 材料管理室(1階)(電)251 安全管理者常駐		応化・化工 実験室 (1階)	同	上
第61号館	共通実験室 電工管理室(1階)(電)260 安全管理者常駐		共通実験室 電工管理室 (1階)	同	上
第62号館	共通実験室 教員常駐(3階)(電)451 452		共通実験室 (2階)	同	上

16 大学院への進学

学部を卒業すれば大学院に入る資格ができる。本大学大学院には6研究科が設けられているが、理工学部の卒業生が普通対象とするのは大学院理工学研究科である。

大学院には博士課程5年を前期課程2年と後期課程3年に区分し、前期課程を修士課程として取り扱う。

前期課程は、大学院に2年以上在学し、所定の単位を修得し、必要な研究指導を受けた上、修士論文の審査および最終試験に合格したものには工学修士または理学修士が授与される。

博士課程は、後期課程に3年以上在学し、本研究科の定めるところの研究指導を受けた上、博士論文の審査および最終試験に合格しなければならない。ただし、優れた研究業績を上げた者については、本研究科委員会が認めた場合に限り、この課程に1年以上在学すれば足りうるものとす。博士課程を修了したものには工学博士または理学博士、あるいは学術博士の学位が授与される。

推薦入学制度 本学部卒業生で成績の優秀な者については、入学試験によらず推薦入学の制度がある。

専攻

現在の理工学研究科には下記の専攻、専門分野が置かれている。

- (1)機械工学専攻(機械工学・工業経営学専門分野)
- (2)電気工学専攻(電気工学・電子通信専門分野)
- (3)建設工学専攻(建築学・土木工学専門分野)
- (4)資源及金属工学専攻(資源工学・金属工学専門分野)
- (5)応用化学専攻
- (6)物理学及応用物理学専攻
- (7)数学専攻

17 早稲田大学学則（抜萃）

第1章 総則

第1条 本大学は学問の独立を全うし真理の探求と学理の応用につとめ、深く専門の学芸を教授し、その普及を図るとともに、個性ゆたかにして教養高く、国家及び社会の形成者として有能な人材を育成し、もって文化の創造発展と人類の福祉に貢献することを目的とする。

第5条 本大学の修業年限は、4年とする。但し、在学年数は8年を超えることができない。

第2章 学年、学期、休業日

第7条 本大学の学年は4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

学年は次の二期に分ける。

前期・後期（大学暦参照）

第8条 定期休業日は次のとおりとする。

一 日曜日 二 国の定める祝日（但し、祝日が日曜日と重なるときは翌日を休業日とする） 三 本大学創立記念日（10月21日） 四 夏季休業 五 冬季休業

第9条 休業中でも、特別の必要があるときは、授業をすることがある。

第3章 授業科目・単位数

第10条 授業科目は、一般教育科目、外国語科目、専門教育科目および保健体育科目に分ける。

第13条 一般教育科目、外国語科目および専門教育科目は必修科目、選択科目および随意科目に分ける。

第14条 保健体育科目は、各学部とも必修とし、その単位数は講義2単位、実技2単位とする。

第15条 外国語科目は、第一外国語と第二外国語とに分ける。

第16条 必修科目及び選択科目の外に配置する科目を随意科目とし、随意科目は所定の単位数に算入しない。

第17条 他の学部属する科目を随意科目として選択することができる。

第18条 各学部の授業科目並びにその授業期間、毎週授業時間数および単位数は、別表のとおりとする。（注、学科配当参照）

第19条 教員の免許状を得ようとする者は所属学部の科目の外に教育学部に配置された教職課程の科目を履修しなければならない。

第23条 学生は毎学年の始めに当該学年に履修する科目を選定して所属の学部長の承認を得なければならない。

第6章 入学・休学・退学・転学・懲戒

第26条 入学時期は、毎学年の始めとする。

第32条 保証人は、父兄又は独立の生計を営む者で確実に保証人としての責務を果し得る者でなければならない。保証人として不適当と認めるときは、その変更を命ずることができる。

第33条 保証人は、保証する学生の在学中、その一身に関する事項について一切の責任に任じなければならない。

第34条 保証人が死亡し、又はその他の事由でその責務を尽し得ない場合には新に保証人を選定して届けでなければならない。

第35条 保証人が住所を変更した場合には、直ちにその旨を届けでなければならない。

第36条 病気その他の理由で引続き2月以上出席することができない者は、その理由を具し、保証人連署で所属の学部長に願いで、その許可を得て休学することができる。病気を理由とする休学願には医師の診断書を添えなければならない。

第37条 休学は、2学年以上に亘ることができない。但し特別の事情がある場合には、引続き休学を許可することがある。

第38条 休学期間中は、授業料の半額を納めなければならない。

第39条 休学者は、学年の始めでなければ復学することができない。

第40条 休学期間は、在学年数に算入しない。

第44条 病気その他の事故によって退学しようとする者は、理由を具し、保証人連署で願いでなければならない。

第45条 正当な理由で退学した者が再入学を志願したときは、詮衡の上これを許可することがある。この場合には、既修の科目の全部又は一部を再び履修することがある。

退学者の再入学許可期限に関する規程

第1条 正当な理由により退学を許可された者が、早稲田大学学則第45条、同大学院学則第60条または同専攻科学則第31条の規定により再入学を願いだしたときは、退学した学年の翌学年から起算して、次の学年度までの間に限り学年のはじめにおいてこれを許可することができる。

1 学 部 7年度まで

第46条 学生が本大学の規則若しくは命令に背き又は学生の本分に反する行為があったときは、懲戒処分に付することができる。懲戒は、譴責、停学、除籍の3種とする。

第47条 下記の各号の1に該当する者は、除籍処分に付する。

- 1 性行不良で改悛の見込がないと認められる者
- 2 学業を怠り成業の見込がないと認められる者
- 3 本大学に在学させることが適当でないと認められる者

第7章 試験・卒業・称号

第49条 所定の科目を履修した者に対しては、毎学年末又は毎学期末に試験を行う。

但し、教授会において平常点を以て試験に代えることを認められた科目については、この限りでない。

2 前項の定期試験の外に、当該学部の教授会の決議によって臨時に試験を行うことがある。

第50条 試験の方法は、筆記試験、口述試験及び論文考査の3種とし、各学部の教授会がこれを決定する。

第52条 本大学に4年以上在学して所定の試験に合格し、所定の単位数を取得した者を卒業とし、卒業証書を授与する。

第53条 各学部の卒業生は、下記の区別に従って学士と称することができる。

理工学部卒業生は、理学士又は工学士

第8章 入学検定料・入学金・授業料・実験実習料・体育費・学生読書室図書費・施設費等

第56条 学生は、別表にしたがい、授業料・実験実習料・体育費及び学生読書室図書費等を納めなければならない。

第57条 前条の納入期日は、次の通りとする。但し、入学または転入学を許可された者が、第55条の規定により、指定された入学手続期間中に納めなければならない金額については、この限りでない。

第1期分納期日 4月15日まで

第2期分納期日 10月1日まで

第58条 すでに納めた授業料その他の学費は、事情の如何にかかわらず、これを返還しない。

第59条 学年の途中で退学した者でも、その期の学費はこれを納めなければならない。

第60条 学費の納付を怠った者は、抹籍することができる。

学費未納による抹籍の取扱いに関する規程

第2条 学費の納入期日にその納付を怠った者は、次の納入期日の翌日から60日を経過した日に、自動的に抹籍となる。

第4条 卒業または修了の要件を具備しながら学費未納のため、卒業または修了を保留された者は、卒業または修了すべかりし期日（3月15日または9月15日）から60日を経過した日の翌日自動的に抹籍する。

18 理工学図書室利用内規

第1条 理工学図書室は主として理工学専門図書館としての機能を発揮し教育と研究活動に資することを目的とする。

第2条 本図書室を利用しうる者は次による。

- (1) 本大学教職員
- (2) 大学院理工学研究科学生
- (3) 理工学部4年生以上の学生
- (4) 本大学専任教員の承認を得、理工学部長がこれを許可した、大学院学生、学部学生、聴講生、委託学生、産業技術専修学校学生、卒業生、個人助手および本学教員との共同研究者。
- (5) その他理工学部長が特に許可した者

第3条 入室に際しては前条(2)・(3)項の学生は学生証を、職員は身分証明書を提示して入室し前条(4)・(5)項の者は図書室利用許可願を提出し閲覧票の交付をうけて入室するものとする。

第4条 第2条(4)・(5)項の利用者の利用期間は当該年度以内とし、継続して利用する場合にはあらためて更新しなければならない。

第5条 図書室利用許可願の書式は別にこれを定める。

第6条 第2閲覧室内のキャレルの使用についてはキャレル使用内規による。

第7条 本図書室は次の通り開室する。

- (1) 平日 午前9時より午後7時まで
ただし夏期・冬期など授業休止期間中の開室についてはその都度これを定め、あらかじめ告示する。

第8条 本図書室は次の通り休室する。

- (1) 毎週日曜日
- (2) 国民の祝日
- (3) 本大学創立記念日(10月21日)
- (4) 夏期・冬期など授業休止期間中その都度定められた日
- (5) 本大学または本図書室の都合により休室を必要とするとき
ただし、この場合はあらかじめ告示する。

第9条 本図書室の図書を室外に帯出する場合には所定の手続きを経なければならない。

第10条 室外に帯出することのできる図書の冊数およびその期間は次による。

	貸出冊数	貸出期間
(1) 本大学教員(非常勤を含む)	10冊以内	2カ月以内
(2) 本大学専任職員	5冊 "	1カ月 "

- | | | | | |
|---------------------|----|---|-----|--------------|
| (3) 理工学研究科学生 | 5冊 | 〃 | 1ヵ月 | 〃 |
| (4) 理工学部3・4年生 | 5冊 | 〃 | 1ヵ月 | 〃 |
| (5) 第2条(4)・(5)項の利用者 | 2冊 | 〃 | 2週間 | 〃 (但し洋書は1ヵ月) |

第11条 前条の貸出期間内であっても本図書室の都合ならびに他から貸出請求があった場合に限り返却を依頼することがある。

第12条 図書の帯出手続きについては別にこれを定める。

第13条 本図書室の図書のうち次の図書は室外に帯出することはできない。

- (1) 逐次刊行物 (合冊された雑誌を含む)
- (2) 辞書, 便覧, データ類, 規格類, 文献目録, 索引類, 地図, 法令集
- (3) その他図書室において室外帯出不許可と指定した図書

第14条 室外貸出期間が満了した図書は直ちに返却しなければならない。

第15条 返却したのち再び帯出を希望するときは他に貸出請求がない場合に限り再帯出することができる。

第16条 室外貸出期間が満了するもいちじるしく返却を怠る者は以後の帯出を制限されることがある。

第17条 帯出者が図書を紛失した場合には直ちに届出するとともに現物または相当金額を弁償しなければならない。

第18条 故意に図書資料を破損した者は, 相当金額を弁償するとともに6ヵ月間の利用を停止する。

また無断で持出した者は, 6ヵ月間の利用を停止する。

第19条 資料の複写については文献複写運用内規によるものとする。

第20条 本内規の改廃については図書委員会の協議を経て理工学部長の承認をうるものとする。

附 則 この内規は昭和43年4月1日から施行する。

附 則 この内規は昭和45年4月1日から施行する。

附 則 この内規は昭和48年4月1日から施行する。

19 理工学部学友会会則について

理工学部学友会は、昭和44年に解散したまま現在存在していないが、その会則を参考までに示すとつぎのとおりである。

理工学部学友会会則（参考）

我々は学問の自由を守り、人類の幸福に寄与する科学技術の発展を目指し、自治の精神と民主主義の原理に基づき、学生の総意を実現し、もって会員相互の理解と信頼を深め、学究生活の向上発展を期す。

第1章 総 則

第1条 本会は早稲田大学理工学部学友会と称す。

第2条 本会は早稲田大学理工学部学生の自主性を基とし、会員相互の理解と親睦を深め、もって学園生活の充実を計ることを目的とする。

第3条

(1) 本会は前条の目的を達成する為に総務部・財務部・文化部その他の部を設置し種々の活動を行なう。

(2) 前項に掲げる各部の任務は別にこれを定める。

第4条 本会の本部は早稲田大学理工学部内に置く。

第2章 役員及び委員

第5条

(1) 本会は下に掲げる役員及び委員を置く。

1. 委員長1名 1. 副委員長2名 1. 常任委員16名 1. 委員
1年各一般教養・語学クラス1名, 2・3・4年各科学年2名, 但し90名以上のクラスは1名追加

(2) 役員及び委員の選出方法は別項にてこれを規定する。

第6条

(1) 本会は下に掲げる役職を置く。

1. 顧問3名 1. 参事1名

(2) 顧問は理工学部長, 同教務主任, 同副主任がこれに当る。

(3) 顧問は本会の運営について相談にあずかり必要に応じて助言及び勧告を与える。

(4) 参事は理工学部事務長がこれに当る。参事に事故あるときは, あらかじめ参事の指名した役員がこれに当る。

(5) 参事は本会の定期監査及び臨時監査に当る。

第7条 委員長, 副委員長, 常任委員及び委員は下に掲げる方法に基づいて選出し学部長

がこれを任命する。

- (1) 委員長（副委員長）は委員会において委員の中より選出する。
- (2) 常任委員は委員による互選。
- (3) 委員はクラスを選挙単位とし、第5条第1項に基づく人数を選出する。
- (4) 委員の選挙には各選挙単位においてその所属する学生総数の%以上出席しなければならない。投票は委員数に相当する連記無記名とする。
- (5) 委員の選出は前任の委員が選挙管理委員としてこれを管理する。事故あるときは前任の委員が前もって選挙管理委員を任命する。
- (6) 委員の選挙は学年度の始業日より20日以内にこれを行なう。

第8条

- (1) 委員長は本会を代表し、本会を統轄する。又常任委員会の議長となる。
- (2) 副委員長は委員長を補佐し、通常委員会の議長となる。
- (3) 常任委員は常任委員会を通じて本会の運営に当る。
- (4) 委員は所属クラスの必要な事項の処理に当る。

第9条

- (1) 委員、委員長、副委員長、常任委員の任期はその年度限りとする。但し前任の委員は後任の委員が選出されるまでその任務を代行する。
- (2) 委員、委員長、副委員長、常任委員に欠員を生じた場合は2週間以内に補欠選挙を行なう。

第10条 学部長は次に掲げる場合、委員、委員長、副委員長、常任委員を解任する。

- (1) 委員の選挙単位に属する学生総数の過半数が委員に不信任を決議した場合。
- (2) 委員会が全委員の過半数で委員長、副委員長、常任委員に不信任を決議した場合。

第3章 組織及び機関

第11条

- (1) クラス会は本会の基礎組織であり、各クラスごとに組織し委員を選出する。
- (2) クラス会は原則として、毎月1回以上委員がこれを開き委員の報告をし、更に次の議案について討論をし、それを通じて委員会と密接なつながりをもつ。

第12条

- (1) 委員会は委員で組織し、本会の常置決議機関とする。
- (2) 委員会は原則として毎月1回委員長がこれを招集する。但し原則として開会の3日前までにここれを公示しなければならない。
- (3) 委員長は常任委員が必要と認めた場合及び全委員の $\frac{1}{4}$ 以上の要求があった場合臨時委員会を1週間以内に招集しなければならない。
- (4) 委員会の成立は全クラスの $\frac{1}{2}$ 以上のクラスからの出席を必要とする。但し $\frac{1}{3}$ 以上が出席しなければならない。
尚、委任状はこれを認めない。

- (5) 委員会の議事は出席委員の過半数を以て決する。
可否同数の場合は議長にこれを一任する。
- (6) 記録の保持は副委員長がこれに当り、書記は2名としこの選出に当っては議長に一任する。

第13条

- (1) 常任委員会は委員長、副委員長、常任委員で組織し常任委員会は会務を執行する。
- (2) 常任委員会は委員長が随時これを招集する。又常任委員の $\frac{1}{3}$ 以上の要求があった場合委員長はこれを1週間以内に招集しなければならない。
- (3) 常任委員会の議決は出席委員の過半数の出席を必要とする。
- (4) 常任委員会の議決は出席委員の過半数でこれを決定し可否同数の場合は議長がこれを採決する。
- (5) 常任委員会は教授会と密接な関連をもつため、教員学生協議会を設けることができる。これについては別に規定でこれを定める。
- (6) 緊急の場合は常任委員会の議決をもって前条に規定する委員会の議決に代えることができる。但し、
 - ① 「緊急」の判断は全常任委員の過半数をもって議決は出席委員の $\frac{2}{3}$ の賛同を必要とする。
 - ② この議決後1週間以内に委員会の承認を得なければならない。
- (7) 記録の保持は第12条第6項を準用する。

第4章 学生大会及び学生投票

第14条

- (1) 学生大会は本会の最高議決機関であり、全会員をもって構成する。
- (2) 学生大会は次の場合開かねばならない。
 - ① 本会の全会員の参加を必要とする行事の決定。但し慣例の行事はこの限りでない。
 - ② 委員会が必要と認めた場合。
 - ③ 全会員の10分の1以上の同意署名による要求があった場合。
- (3) 学生大会は学部長の承認を得て20日以内に委員長が招集する。但し、委員長は大会1週間前にこれを公示しなければならない。
- (4) 学生大会の成立は全会員の $\frac{1}{2}$ 以上の出席を必要とする。但し委任状はこれを認めない。
- (5) 学生大会の議決は出席委員の過半数の賛同を必要とする。
- (6) 学生大会の議長団は委員長が指名し出席委員の承認を得る。
- (7) 学生大会の招集に対してやむを得ない障害があると委員会において認められた場合は公示した議案に対して学生投票をなし学生大会に代えることができる。

第15条

- (1) 学生投票においては、全会員の過半数が投票し、投票の過半数で決する。投票は無

記名とする。

- (2) 学生投票による決定は委員会の議決に優先する。
- (3) 学生投票の必要事項は学部長の承認を得て委員長が投票期間の1週間前にこれを公示し、委員会が任命した管理委員会がこれを管理する。

第5章 会 計

第16条 本会の経費は会費その他の収入をもってこれに当てる。

第17条 本会の会計年度は4月1日に始まり翌3月31日を以て終るものとする。

第18条 本会の予算は、年度の始めに常任委員会において原案を作成し委員会の承認を得なければならない。

第19条 本会の決算は毎年度末に行ない委員会で報告書を作成し、参事の監査を経た上委員会に提出し且つこれを公示する。

第20条

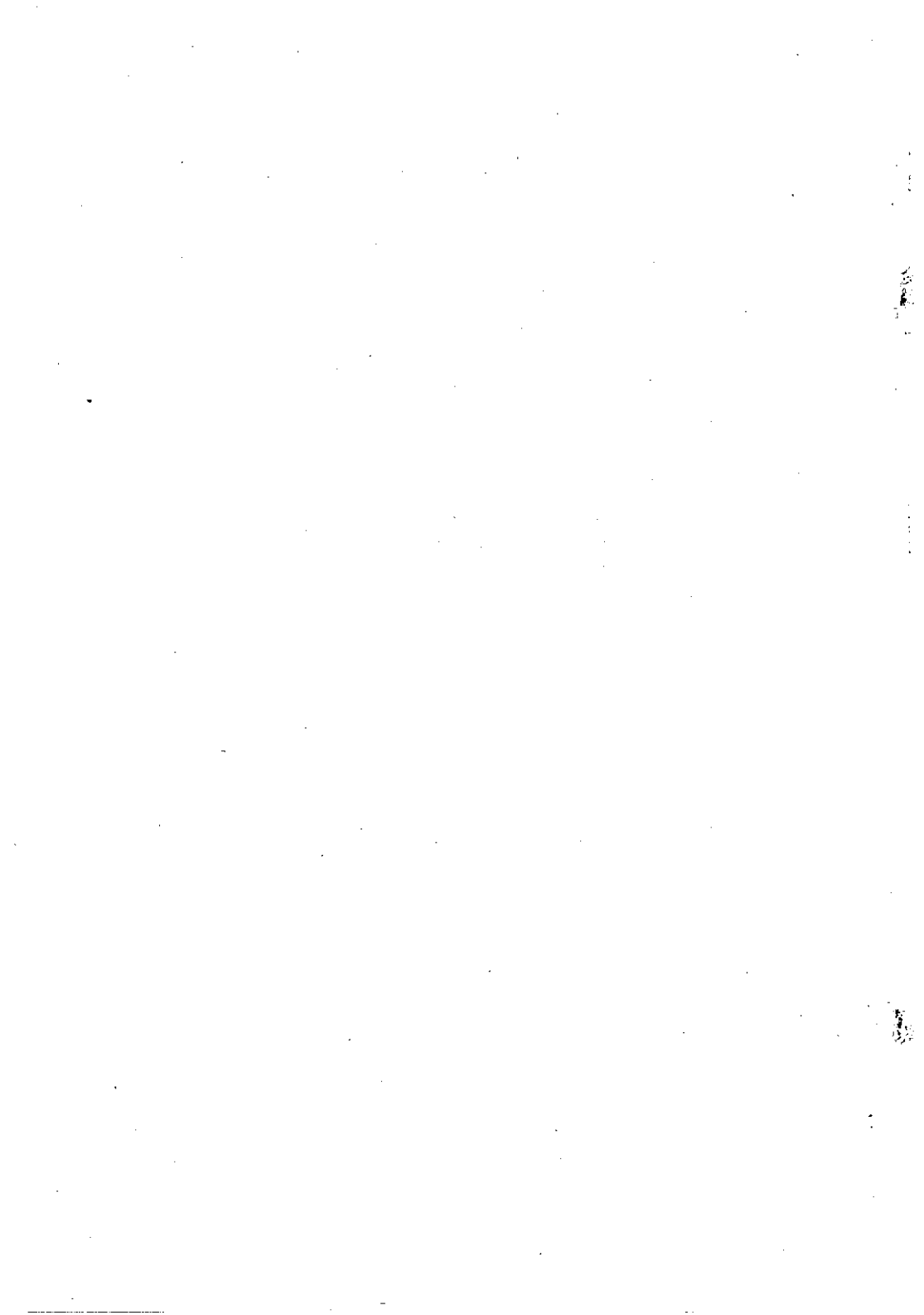
- (1) 会費は入会するとき、4年分と入学金を入学時に学費と共に納めなければならない。
- (2) 会費の額は別にこれを定める。

第6章 会則改正

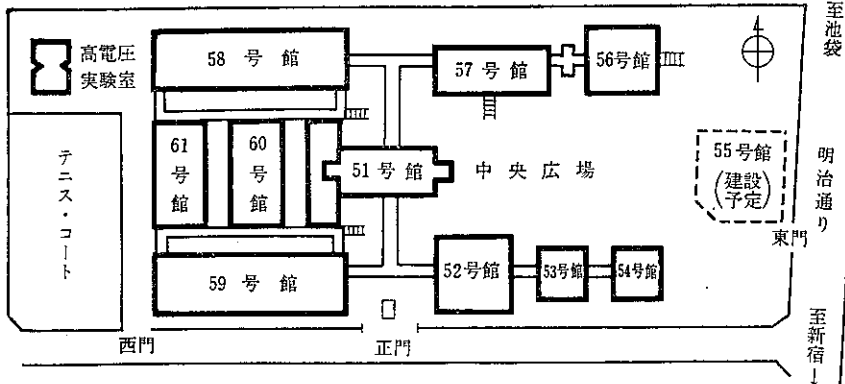
第21条 本会則の改正は委員会において全委員の $\frac{2}{3}$ 以上の賛同に基き学生大会によってこれを決する。

第7章 附 則

第22条 本会則は昭和 年 月 日からこれを施行する。



理工学部建物配置図



号館別・階別 主要用途案内

号館	階	主要用途	号館	階	主要用途	号館	階	主要用途
51	地2	実験室(理工研)	52	地	学生読書室・語学演習室	58	1	共通実験室第1課(熱工学体)
	地1	図書館・実験室		1	教室(180人)・庶務事務所		2	共通実験室第1課(熱工学体)
	1	事務所・衛生室・学生相談室・共通実験室第2課(工機)		2-3	教室(180人・240人)		3	研究室(計測・流体) 連絡事務室(機械)
	2	学部長室・機関長室・会議室・教職員ロビー	53	地	学生読書室	59	3	製図室(建・土)・デッサン室
	3	研究室(一般教育)・外国人学生相談室・ゼミ室		1-4	教室(60人・120人)		1-2	共通実験室第1課(材料)
	4	研究室・連絡事務室(一般教育)	地	サークル部室	3		共通実験室第2課(工作)	
	5	研究室・連絡事務室(数学)・ゼミ室	54	1-4	教室(60人・120人)	60	3	研究室(機械・金属) 連絡事務室(機械)
	6	研究室(応物)		55	教室(1800人…予定)		地	コントロール室・ボイラー室
	7	研究室・連絡事務室(物理・応物)	56	地	食堂	61	1	共通実験室第5課(化学工学・金属)
	8	研究室(物理・応物・応化) 理工研分室事務所		1	教室(240人)・生協売店(書籍)		2	研究実験室・連絡事務室(金属)
	9	研究室・連絡事務室(応化)		2	共通実験室第4課(物理基礎)	地	共通実験室第1課(土質)	
	10	研究室(応化)・実験室(理工研)		2	共通実験室第5課(物理化学)		共通実験室第5課(資源)	
	11	研究室(化学)・ゼミ室		3	共通実験室第4課(工学基礎)		共通実験室第4課(測量)	
	12	研究室(化学・資源)・連絡事務室(化学)		3	共通実験室第5課(物理化学)		構造実験室(土木)	
	13	研究室・連絡事務室(資源・工機)		4	共通実験室第5課(化学分析)		1	共通実験室第3課(電気工学)
	14	研究室(工機) システム研ゼミ室		4	共通実験室第5課(工業化学)	2	研究室・連絡事務室(電気)・電子計算室	
	15	システム研究所	5	共通実験室第5課(化学基礎)	3	研究室(電気)・電子計算室(事務室)		
	16	研究室・連絡事務室(土木)	57	地	食堂・理髪所・談話室・売店	4	共通実験室第3課(電子通信)	
17	研究室・連絡事務室(建築)・システム研図書室	1		共通製図室	5	研究室・連絡事務室(通信)		
18	研究室(建築) 連絡事務室(建築)	2-3		教室(450人)				

*GUIDANCE SCHOOL OF SCIENCE AND ENGINEERING,
WASEDA UNIVERSITY, 1976*